
ネット恋愛

佐藤梨緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネット恋愛

【Nコード】

N6196E

【作者名】

佐藤梨緒

【あらすじ】

チャットから始まった一つの恋心。現実だけ存在しないと思っていた人達との出会い。理想の人に出会えたり、元カレが現れたり、憧れの先輩が近づいてきたり・・・「まゆ」の人生に大きな変化が訪れた。

始めの一步はチャットから・・・(前書き)

この小説はR15指定とさせていただきます。

始めの一步はチャットから・・・

あたしは数年前からネットを利用してはいるが、その使い方は今ひとつであり、最初はチャットから始まった。最初はいろいろな地方の人が年齢も性別も分らないままに

「元気〜」とか

「待つてたよ〜」とか

そんな会話が繰り返り広げられることが新鮮でもあり不思議な空間だった。

それこそ最初は毎日といっていいほどハマッタ・・・寝不足になっても、やらなければならぬことがあってもだ。

今思うとなにがそんなに面白かったのは微妙なんだが、その当時は毎晩、みんなが集まる時間が待ち遠しかった。

けど、チャットというのは相手の顔を知らない。

中には画像を送ってくるという自分に自信のある人もいるが、ほとんどの人が躊躇する。

それは、やはり顔を知られて

「え〜・・・なんか思ってたのと違うなあ・・・」
って思われるのが怖いから。

女性同士であったとしても、

自分よりも遙か容姿が素敵な人であったとすると
自分みたいなかの中の下くらいのレベルの女を、
ネットであったとしても

友達でいてくれるだろうか？と不安になる。

それが相手が男性であったりするならば、
その不安はもつと大きくなる。たとえばそれは文字だけであっても、
この人は女性、この人は男性と思うだけで
話すニュアンスも違うものになるし、

いざワクワクしながらチャット部屋に入ったとしても、
明らかに男性のHNと二人きりでみんなが
来るのを待っていたりする時も変な緊張感があったりした。

それでも、だいたい毎日同じチャット部屋に顔を出し
そこそこ話をする事で仲間意識が芽生え、

「さん」とつけていた名前も次第に呼び捨てになったりする。

そうなれば、とてもスムーズに話ができ、
普段の生活でリアルな友人にも話せない悩みなどを、
この顔も知らないHNの友人達には言えるという状態になる。

毎日の窮屈な生活にウンザリしてきた時に
偶然知ったこのシステムを
あたしは避難場所のように利用し、
とても気に入っていた。

毎日、仕事でイライラすることがあっても

「ちくしょ〜。今日はみんなにこの上司の悪口聞いてもらおう〜!」
とかすっかりリアルな生活よりも、
このネットの生活が心地よくなり、

リアル友人と遊びに行くことよりもパソコンの前にいることのほうが楽しくなったりもしていた。

けど、そのうちこのチャット部屋も仲が良くなるにつれ怪しくなってきた。

やはりどこの世界も男性がいて、女性がいる・・・その先には恋愛感情というものが生まれてくる。

あたしはこの部屋を利用し始めてすぐに、何度か男性に「ねえ。携帯に電話していい？」などと聞かれたが、所詮文字しか知らない相手と話すのもどうかと思いのラリクラリと断っていた。

なんとなく、自分の中で電話をしてしまうとルールから外れるようなそんな勝手な思い込みをしていた。

それも次第に馴れてくると、本当に会話が弾む人達だけとはちよつとした連絡事項を携帯で話したり、少しずつだが気持ちも変化してきた。でも、それはとうてい恋愛感情には届かず、わたしの中では

「あくまでみんなは文字の人」

それ以上でもそれ以下でもなかった。

特に声を聞いたからといって、特別な感情をもつことも無く、普通の友達のように話をしていた。でも、相手の顔は知らない。

けど毎日なんらかの話題を元に会話（と言っても文字だけど）をしているので緊張するわけでもなく、

だからといって違和感があるわけでもなかった。

この部屋には男性12人と女性8人がいた。

そのうち夫婦で利用してる人が2組。

それとは別に既婚者が一人。

あとはみんな独身だった。

そう思えば、毎日同じ時間に集まり、

同じ会話を共有している間柄でなんらかの特別な感情が

起きても不思議ではないのかもしれない。

ただ、あたしの頭の中には

「文字の人達」

というだけで、他の人はそう思っていなかっただけのことだ。

レナとケイタの恋愛

部屋の中でも特別に打つスピードが速く、誰よりも会話が早い奥さんがいた。

NHを「レナ」と言った。

あたしと歳も近く、会話するうちにとても仲良しになった。彼女とはチャット以外でも、メールをするくらいの仲になりたまに彼女から来るメールには

「ねえねえ。リオは誰が好き？

うちはケイタがめっちゃ気になるねん！

ケイタだけは手ださんておいてーな（笑）」

のようなメールが来るようになり最初は冗談だと思っていた。

「（笑）」のマークとかついてるし、

その場のノリで言っているのだと完璧に思っていた。

それならあたしも空気を読むべきかな？と冗談ついでに

「そうなの？じゃああたしもケイタがいいや〜」

と、同じ流れに乗ってみた・・・

つもりだったのに・・・

返信にはやや本気、ううん、絶対マジってくらいの怒りがツラツラと書いてあり、ドンビキになった。

そんな思いでメールを見て、ちょっと彼女がどこまで本気なんだろうと心配した。そのうち、彼女のお気に入りケイタ君は、いつもは早い時間に眠いと言って平均0時には落ちていたのに、週末はいつまでも部屋にいるようになった。

だいたいみんなは1時から2時の間に解散となるが、なにやらレナとケイタはいつまでも残っていた。そうなる少しづつ周りのみんなも妙な空気を画面から感じ、彼達がほとんど周りを無視する勢いで話してる状態を微妙な気持ちで見守っているようになった。当然、あたしもその一人であり、彼と彼女が二人しか通じない会話をしていると気まづくなり

「もう寝るね」

と、落ちてしまうことも少なくなかった。中にはそんな二人を怒る人もいた。

「せっかく楽しく集まってるのにあんな二人だけの世界って迷惑だよな」

そうともとれる・・・でも迷惑だから出て行ってくれともいえない。けど、二人の会話以外、みんなの会話はいままでと同じでそんなに怒るほど迷惑でもなかった。

ただなんとなく、たま〜にでる「めっちゃ好き〜〜ケイタ〜〜」や

「俺も大好き！」

などという、微妙に手が止まってしまふ赤面ものの文字以外には無言になった。

いや、それも許せるけど・・・

たぶんみんなに見てもらいたいとか思っただけ出してるんだし。

ある日、レナから携帯に電話がきた。

「リオか？ちよつと話があるねん」

「どしたの？」

「うち、離婚しよう思うねんけど・・・」

「ええー！！どうしたの？なんかあったの？」

「うち、ケイタのこと本気になってもうてな・・・」

ちよ、ちよつと待って！！

ケイタに本気つて、

レナは大阪弁だけど福岡、ケイタは仙台だし、
実際会ったなんて聞いたことなかった・・・

「え？ケイタに実際会ったの？」

「いや、うちの離婚が決定したら

二人で旅行する予定やねん うふ」

いやいや、そんな照れたように言われても！

それはマズいっていうか、オカシイでしょ？普通！！

あたしは驚いてなんて言っただけいいか分らなくなった。

確かにチャットをしている時のケイタは
とても真面目な印象があった。

みんなが誰かを冷やかしたり冗談でバカにしたりしても
ケイタだけはそれに参加することなく
後々その人をフォローするような優しい一面があった。

結局は文字だけの世界だが、

それだけでもその人の性格が少しはわかる。

もしかして偽ってる可能性だって当然あるが、

それはその人のネット世界の性格だし

深く追求するのはダブーだと思っている。

が、しかしだ。

やはりあたしは相手の顔を見ないと真剣な恋愛には
発展しないと思っていた。

自分が同じ立場になってもしも、

ケイタに恋心が浮上したとして……

その先に進みたいと思えば、きつとケイタに

「そつちに遊びにいくから逢いたい」と伝えるであろう。

やはり逢ってみないと分らないし、

当然逢いたいという気持ちが大きくなってると思う。

空想の世界から実在の世界にリアルに感じる為には

相手はちゃんとした人間であるという

物的証拠を求めると思う。

でも、、今のレナには家族がある。側には子供と旦那がいる。

そう簡単には仙台に逢いに行くこともできないのは当然だが、
ちよつとその前に……って感じた。

「あのね。ケイタに逢ったことないのに、そんな話しちゃってさ、
もしもケイタがタイプじゃなかったりしたらどうするの?」

ちよつと悪いかなと思っただけど、本音を切り出してみた。

「ケイタがどんな容姿でも構わないねん。」

あの性格が一生ついていきたくたって思っただし!」

絶句とはこのことだ。

どうしよう!!なんかもう手におえない!

「そ、そうなんだ・・・で、話変わるけどさ、
電話とかしてるの?」

「うん。めっちゃ優しい声してるねん!」

声だけか・・・

自分もそんなに容姿はいい訳ではないが、
やはり理想つてものが絶対あるわけで。

背が高くないと嫌とかそんなのはまだ許せる範囲だけど、
どーしても譲れない範囲の容姿つてあるんじゃないかと思う訳で・・・
こんな考えは間違ってるんだろか?

あたしは恋愛に対して見た目だけで判断する嫌な女なんだろうか?

なんかもう。

自分の許容範囲をかなり外れてる異次元の話に
なっているようで自分の意見に自信が無い。

「で。あたしに何を相談?」

「いや、相談っていうか報告ってことやねん」

「そ、そうなんだ、、ありがと・・・」

そう力無く答え、報告の電話は無事終わった。終わったというか終わらせた。頼むから終わってくれという思いで。

さあ。困った。

別にあたしがどうしななければならないと言う訳ではないのだが、誰よりも早くこの異常な事実を知ってしまったからには、なにかしなければならぬのだろうか。

前にレナの結婚秘話を聞いたことがあった。

レナは学生の頃はとても真面目な優等生で、今の旦那が始めての人で、大学を卒業してそのまま結婚。いままでの人生で旦那以外の男性を知らない。それを聞いた時に

「へえ・・・そんな人もいるんだ」

とちよつと不思議な気持ちになった。

だからチャットを始めた当初、

よくいままで付き合った男性のことを聞かれた。

あたしだってそんなに大暴れをしていた訳ではないが、それなりに5〜6人の人とは付き合ってきた。

その度に「まったく男運が無いな」と思ったもんだ。

レナはその話をいつも聞いてきた。

きっと自分がいままでの人生で一人の男性しか知らないということ

まるで恥ずかしいことのように言っていたが、他の男性陣にはたいそうウケが良かった。

男というのは勝手なもので、自分が遊ぶのはいいが、自分の相手にはあまり遊んでいない子がいい！と口を揃えている。

おかげで、あたしは軽い遊び人くらいの印象だった。

そんなことはどーでもいいんだが。

きつとそんなこともあり、レナはケイタとのネット恋愛が

普通のものか異常なものか、

区別がつかなくなっていたのかもしれない。

一概に「異常」と決め付ける訳ではないが、

せめて逢うという行為の後に考えてもいいと思う。

出会いとしてはネットももはや普通になりつつある。

だから、生身の人間だからこそ向き合うことが必要だと思う。

偵察では無いが、逢った瞬間のインスピレーションも大事だ。

でもレナに今、なにを言っても無駄な気がした。

けど、誰に言うにしても今このことを人に言うのは

ただの噂をばら撒く昼下がりの主婦のようで

今ひとつ行動できなかつた。他のチャット仲間に相談と言っても、聞いた瞬間にみんなレナとケイタのことを変な目で見るであろう。

ケイタ・・・

そうだ！ケイタがいた。

ケイタ本人がどう思ってるか聞くの忘れていた。

その日、あたしは始めてケイタ宛にメールを書いた。

いつもめんどくさいので、ほとんど普通のメールを使わないのだが、この話はめんどくさいとか言ってる場合では無いような気がして、その日ばかりは真面目に書いた。多少、ウザいかもしれない内容だったが、ケイタは独身で身軽だがレナには子供だっている。

まだ3歳と5歳と言ってた。

そんな子供がいきなり母子家庭になるのか
父子家庭になるのか知らないが、

あまりに無謀なこの話を受け入れるには幼く不憫な気がしたからだ。

.....

こんばんは。 リオですー

さっきレナから電話があり、大体の事情を聞いたんだけど、
今ひとつコメントに困ってます。

レナが離婚するって言い出しているけど、
ケイタ自身はどう思ってるのかな？って。

まだお互い逢ってもいないのに、そんな話すすめてしまって、
もしもお互い求めているものが違う容姿だったとしたら、

困るのは自分達だから、ここはケイタが福岡に一回行ってみることを
あたしは勧めるんだけど、どうだろ？

ネット上での恋愛を否定はしないし、最近は多いみたいだから
軽蔑もしないけど、やはり目を見て話し合ってからじゃないと
何事も始まらないと思うし。

性格だって、文字だけの世界なだけにいくらでも偽ることできるん
だよ？

一度、ちゃんと逢ってから、それでも気持ちが変わらないのであればそれも縁だと思って、あたしも相談に乗るから。

今はバツイチとか普通だし、
長い人生やっぱり好きな人といたいってのはわかるしさ。

ちょっと今の時点ではなんとも言えないから、
あたしからはみんなには言うつもりないし、
ここはあたしの胸にだけしまっておくので、
もう一度じっくり考えてみたほうが良いと
思って、メールしました。

迷惑かもしれないけど、
聞いてしまったからにはこっちの意見も言っておこうと思って。
多少、内容がウザいけどごめんね。
じゃ。また夜にでもチャットで

リオ

.....

何回も読み直し、書き直し、やっとメールが完成した。
これで完成なのかどうかは微妙な感じがしたが、
一応自分の思ってることを書いたつもりだったので満足して送信した。

メール送信後。

1時間くらいしたPM10時すぎ携帯が鳴った。

電話の相手はケイタだった。

「もしもし……」

「あ。リオ？俺ケイタ」

「うん。番号は入力してたからわかった」

「あ。で、メールの件でさ」

「あ。うん」

なるほどレナが言う、優しい感じというのはよくわかる声だった。優しいというか爽やかというか、そんなに男臭くない声だった。

「レナがなんて言ったの？」ビクビクしているともとれる声でケイタが聞いてきた。

「えーと、旦那と離婚してケイタと……みたいなこと言ってた」「うーん。いや、そんな話はしたんだけどさ、

実際俺もかなり好きなんだけどさ、
けど、やっぱり逢ったほうがいいよね？」

「そりゃ当然じゃないかと。

いや性格重視って言っても実際逢った印象とかあるじゃない？」

「だよな。やっぱり俺が行くべきだよな？」

「でしようね。てゆうかさ、その前にお互い写真の交換とかして見たら？」

「えー！いやそうなんだろうけどさ、写真か」

お前等はアホかと。

写真か……って逢えば顔見るんだし、

先に画像とか見ておくものなんじゃないだろうか？！

そこまで盛り上がっておいて、

顔も知らないで騒いでる二人もまったくもって
どうかと思う。ってゆうか、やっぱり変だよ・・・この人達。

「写真もさ、あることはあるんだけどさ、

俺実際あんまりイケてないんだよねえ」

「イケてるイケてないってのもいまさらだが、、

やはり相手がどんな感じかってのは

かなり重要でしょ？あたしは見ないと盛り上がれないな」

「リオっばいね」

っばいとかって話なの？

あたしそんなに見た目で判断する変な人なの？

なんだが世間の常識ってのが分らなくなってきた。

すごく不安なんですけど・・・

「ケイタってさ、たしかELTの持田が好きだったよね？」

「うん」

「もしレナが持田の足の指すら似てなくて、

体重がケイタの倍くらいあってだめだこりゃ！

って容姿でもケイタは同じ気持ちで受け止めてあげられるの？」

「お前、、嫌なこと言うねえ・・・」

「いや。だってそう思うからさー」。

あたしだって福山雅治みたいな容姿の人ならちよつとは

そんな気になって憧れて暴走するかもしれないけど、

福山と毛先だけが似てるんだよねっ！

みたいな100キロあるような人とはたぶん恋愛できないなあ・・・

「・

「リオ、、毛先って！」

「いや、マジな話でさ」

「写真見せて駄目だしされるの怖いしさ、いまだ送れないんだよな」

それはさすがに二人の話だから、

もうそれ以上は言うのはやめようと意見するのを止めた。

駄目だしするもしないも、二人のことだし。

これ以上、話をして駄目な気にもなってきたのは事実だし。

話の最後にケイタは

「やっぱり逢う前に写真送ってみるわ。俺もレナの写真送ってもら
う」

そう言っただけ電話は切れた。

容姿かぁ・・・

いままで人を好きになるのって、

最初はやっぱり容姿だったような気がする。

「あ。この人結構かっこいいー」とか思って、

話をするうちに「優しいなー」とかなって

そのうち「この人が好き」ってなるもんだと思うし。

性格重視っていつても、会った瞬間に相手の性格がわかる訳でもな
いし

やはりしばらくは距離をおいて相手を観察して、、、、

そう思うと、観察期間は十分かぁ。

やっぱりわかんないや。

人を好きになるのに理由はいらないとは言っが、

ちよっとこの恋愛はあたしには

想像を越えているものに思えてならない。

だいたい今までチャットをしていても、

この人と電話で話してみたいか思ったことすら無い

あたしにはきつと理解できないんだろうなあ。

あたしのPCの画面の前には相手にも同じ画面があるとして、

そんな風に自分のことを見ていてくれる人もいなかったと思うし。

それはきつとフェロモンが足りなかったのか？

それとも女と思われていなかったのか？

いや、発言の問題か？

まあ。きつとそんな空気をあっちも感じていたんだろうけど。

なんだかなあ。考えても答えでないこの問題をぼんやりと考えながら

あたしはその場を後にし、風呂に入った。

即効な二人

その日の11時すぎ、いつものようにPCの電源をオンにしていつものチャットルームにアクセスした。

いつもとは違う空気を感じることも無く、あたしは普通に挨拶をした。

<リオ> 「こんばんわー」

<サクラ> 「こんばんは。りお」

<ヤス> 「ばんわ」

<ヒデ> 「よう」

あれ？メンバーを見たらレナもケイタもいるのに、挨拶は無かった。もしかしたら、あたしが余計なメールをしたのが気に入らないのかなあ。

あんまり雰囲気重かったら、先に落ちてしまおうかな

そんなことを考えていたら、ヒデから電話がきた。

「間が悪いところに入ってきたね」とちょっと嬉しそうにヒデが言った。

「え？なんで？なにかあったの？」

「レナとケイタが別れ話の最中なんだよ。これが！ぐふふふ」
もうかすかに笑っているような声で、
いや、笑ってるな・・・こりゃ。

うっそ！展開早くね？

さつきまであんなに離婚だ！旅行だ！って言ってたのに。

「なんで？どうしてそんな話になったの？」

「なんかさ、ケイタが部屋に入ってくるなりレナに画像を送るとか言い出してさ、お互い送りっこしたらしいんだけどさ、、、それから、、、ちよつと間が空いて別れ話になった」

ほらほらほら。だから言ったじゃない。

てゆうか、、、そんなの二人でやればいいのに、この冷えた空気とどうしたらいいんだろね。

「へえ〜。やっぱ持田ではなかったんだねえ・・・」

「持田ねえ・・・」

画面上ではお互いに相手が傷つかない程度のジャブが繰り広げられ、周りの人は硬直状態。

あたしはといえば、そのままヒデとなんとなくその場をやり過ごす会話をしていた。

「どうすんだろね。この空気。」

「いっそ今日はみんな部屋から出たほうがよくない？」

「だよねえ。このまま見てもどうしようもないもんね」

ヒデが画面に

「今日はみんな解散しようぜ。レナとケイタは話し合えばいいし」と出したがレナが

「いいからみんな気にしないで話してて」と出してきた。

「気にするなって無理だよね」
と電話でヒデとひとしきり笑い、落ちるに落ちられない状態が続き、そのまま30分が過ぎた。

「ねえ。ヒデはさ、どう思う？こんなの」

「俺？俺はやつぱは会ってからじゃないとなー」

「だよね？だよね？あたし変じゃないよね？」

「普通でしょ？だって文字だけだよ？いや声を聞いてしまうと

「ああ。やつぱ實在だな」とは思うけどさ、まあ、

話して波長が合えばあとは写真とか見て、

結構イケるっちゃーイケるかもなあ」

「んーまあ。声聞いて画像も見てって言えばね。

それが本物の画像ならね」

そう言つて二人で大笑いした。

よかった。あたしは普通らしい。

でも、この場をどうやつたら抜けられるんだろう。

このまま、あたし達は何時間こんな嘘つぽい猿芝居を

見ていなければならぬだろう。

お互い「写真見たらやつぱ無理だった」って素直に言えばいいのに。

やれ

「やつぱり家族を捨てられない私を許して」とか

「いいんだ。それはレナが優しいからさ」とか

全然捨てる気満々だったじゃん！

お互いの盛り上がりぶりを聞いてしまったあたしには、
とんだ猿芝居がおかしくて仕方なかった。

「そろそろ、あたし寝るかな」

「俺も寝る。じゃなー」

そういつてヒデとの電話を切り、画面に

「ごめん。明日仕事早いんでもう落ちるね。ゆっくり話し合って
そう出して、レナとケイタの反応を見ないうちに速攻落ちた。
引きとめられても困るし。」

しばらくネットサーフィンをし、

1時間を過ぎた頃になんとなくチャットを覗いてみた。

覗くといつても部屋に入らずに表面上で何人の人が

その部屋にいるかが見れるので

まだ二人はいるのかと思い、確認した。

すると人数は4人になっていた。

でも誰がいるのかは分らない。

さっきあんなこと言ってこともあり、

いまさら入れないのでその日はそのまま電源を落とした。

ベットの中で、二人のことを考えた。

きつと想像上で好みのタイプの相手が自分を好きだと

言ってる映像を彼達は毎日思い浮かべ、どんどん気持ちが高鳴り

歯止めがきかなくなっただらなあ・・・

でも、いきなり現実を突きつけられて、あんな話になったのかな。

けど、性格重視とか言っておきながらいきなり別れ話に

発展するほどお互いの容姿がマズかったんだろか？

子供も旦那も放るくらいの勢いだっなのに、いきなりそれかよ！

今後、またこんな気まずい雰囲気になるくらいなら、
最初からみんな画像交換とかするべきかもな。
レナも今後こんなことにはならないだろう。
それはそれでよかったな。

次の日、メールを受信するとケイタとレナからメールがきていた。
先にレナのメールを開いてみた。

.....

まいったわー -

昨日はごめんなあ。

いやーまいった。ケイタのことちょっと夢見すぎてたわ(笑)
ケイタの写真見たら、猿やってん！
ちよっと猿は勘弁やわ。まだうちの旦那のほうがマシやった(笑)

いろいろごめんなー。もう真面目に主婦するわ。
んじゃ、また夜になー

レナ

.....

失笑である。それも限りなく薄い失笑。
次にケイタのメールを見た

.....

やっぱり持田がいい

リオの言うとおり、画像交換したんだけどさ、
やっぱり見ないと駄目だな。

俺、無理かもしれないと思ってさ。

そしたらあっちもそうだったみたい。

性格重視とか言ってたけど、突然目が見えた患者の気分になってさ。

やっぱり見た目とかって大事かもな。

いやー。アドバイス聞いててよかったよ。

さんきゅ。

レナとはこれからはいい友達でいけると思うからさ。

心配かけて悪かったな。

じゃ、またチャットで

ケイタ

.....

二人が二人ともアウトだったようで・・・

レナの「(笑)」マークがなんとも脱力感をあらわしていた。

ケイタの「目の見えた患者」ってのも実際どうかと思うけど。

そして、こんな最後を飾った二人に対してあんなに

慌ててた自分もどうかと思う。

きつと、他にもいっぱいネットで相手に

夢を見て毎日ワクワクしている人がいると思うが、やはりワクワクする前に相手がどんな感じかだけはチェックしてから他人に言うべきだと思つづく思つた。

たしかに文字だけでも、優しくされれば悪い気はしない。

「好きだ」と言われればそれこそ嬉しい気分にもなるだろう。

が、その時は少し冷静になって自分の理想のタイプ像を今一度思い返してみる時間も必要だと思つた。

文字で優しく、リアルで優しく、

画像を見ても完璧タイプで声も素敵なら

もうしぶん無いが、そんなにウマくはいかないのが人生だったりする訳で。

そんな苦い思いをしながらも毎日ネットをしてる人はどのくらいいるんだろう。

そんなことを考えながら、薄い笑いを浮かべメールボックスを閉じた。

さてと。

なにもなかった顔をして、今日もチャットルームにいつてみようかな。

そうして部屋の文字をWクリックして、

何事も無かった顔をして入室した。

今後、このことは封印しておこう。

お互いがNGだったことは言うまい。

どっちにも「さあ？どうだったんだろね？」ってことにして。

自分はタイプじゃなくても、相手にはタイプであってほしいものだ

しね。

でもケイタは猿という情報はあたしの中に深くインプットされた。

オフ会をしよう！

それから数日が過ぎ、

レナとケイタはチャットルームで会っても普通に会話をしていた。違った部分といえば、前のような

<ケイタ> 「今日はなにしてた？>レナ」

<レナ> 「ケイタのこと考えたに決まってるやん！>ケイタ」

などという、二人の世界は一切無くなったことくらいだ。

それはそれで、みんな見て見ないフリをした。

当然、あたしもそうした。

でも画面の前ではたまに薄い笑いが襲ってきた。

そんな時、部屋主であるヤスが

<ヤス> 「なんかみんなで飲み会とかしたいなー」

などと無謀なことを言い出した。

それはそうだが、なかなかできないのも事実である。

遠くは福岡から北海道まで。

みんながあまりにもバラバラすぎて一ヶ所に集まるなんてことは不可能に近かった。

あたしは北海道在住で、他にも数人北海道に住んでいる人はいた。せいぜいそのメンバーで集まってくらいは、

アリだが東京まで行くか？と言われればそれはこの重い腰があら

ない。

会ってみたいが、仕事もあればお金の都合もある。

みんな「いいねー」とは言っているが、心の底からは思っていないようだった。

部屋主のヤスは毎日全国を飛び回る営業マンで、どこでも参加が可能だからと本気でみんなに話を持ちかけていた。

そうになると、各地でオフ会をして、そこにヤスが顔を出すという案が持ち上がり、みんなヤスの都合に合わせて集まるか！みたいなノリになってきた。

それくらいならいいかもな・・・
みんなそんな話題でひとしきり盛り上がり、じゃあ最初は九州地方で5人くらい集まろうみたいな話になっていた。

その後は関東、最後に北海道みたいな予定になり、
「じゃあ、ヤスの仕事の日程が決まったら、場所を決めよう！」
と話が大きくなり、オフ会の話は具体的になった。

その日から部屋の話題はその話で盛り上がり、
「じゃあ！各地で写真を撮ってこの部屋のHPを作ろうぜ！」
などとどんどん盛り上がっていった

でも、内心は

「でもなあ。。。会ったはいいけど
リオってもっと可愛いと思ってたのに残念」

とか思われたらどうしよう・・・話題にノリ気で参加はしていたがそのことが頭か離れず少しだけ遅れて会話に着いていった。

自分で自分の容姿をそれなりには知っているつもりだ。みんなが結構、綺麗だったりしたらどうしよう。写真を見た瞬間から、今まで仲良くしてくれていた人が急に冷たくなったら・・・そんなことをちよつと考えた。

その前に期待されていないだろう・・・
それならそれで安心だけだ。

少なからず、みんなそんなことを思っていたらしく、何人かはそんな話題を出していた。でも、そうは言っても見たら結構美人とかカッコいいとかあるもんだし。

ちよつと不安になりながらも、オフ会の話を見ていた。

ヤスの仕事の関係で、九州方面は来週の末になり、参加者はレナとヤスとマツク（ ）ミナ（ ）ケイ（ ）の5人だった。

いままで実在しているのか微妙な人たちが急に集まって飲み会という現実が不思議な感じもしたが、まだまだ先の北海道オフのことを思うと、先に違う地方でやってくれたほうが、安心だなとも思った。

ちよつとワクワクしながら、来週の末を待った・・・

九州オフ会の当日。

例の5人は当然チャットには不参加で、残ったみんなで「今ごろ騒いでいるんだろねー」などと話をしていた。

早く写真を見たいね〜

などと勝手なことを言い合ったりしてその日の部屋では話がどんどん盛り上がっていった。

<ケイタ> 「関東は誰がこれるの?」

<カオル> 「俺は仕事だけど、遅くまでやってるなら行ける!」

<サクラ> 「私はいけるよ〜」

<ケイタ> 「おお!楽しみにしてるぜえー サクラ!」

お前はまだ懲りてねーのかよと。

画面を見ながら薄ら笑いを浮かべてつぶやいた。

<カオル> 「今日は来てないけど、ヒデとラビも来るってさ」

<サクラ> 「結局何人?関東地方は?」

<カオル> 「えーと男が俺と、ヤス、ケイタ、ヒデ、後は夫婦で

2組

<サクラ> 「女は？」

<カオル> 「女は、夫婦の奥さん達と、サクラとラビだけじゃない？」

<サクラ> 「えー。女すくないー」

まあね。基本的に少ないからねえ・・・

それにしても、やはり関東だ。全員で10人だって・・・
軽い会社の宴会だね、こりゃ。

そう考えれば北海道地方なんて、男4人女2人だし。

また中途半端な人数なこと。

でも同じ北海道在中で札幌の女友達の

「ミライ」はそこそこの話の合う人だし、

もしも他の男性陣と話がかみ合わなくてもミライがいれば、
なんとかなるし。そんな時、携帯が鳴った。

着信画面を見ると、レナだった。

<リオ> 「ごめん。レナから電話きた。ちょっとロムるね」

そう出してから電話に出た。

携帯の向こうでは大騒ぎになっていて

酔っ払いがワーワー騒ぎ、声が聞き取りづらい。

「リオかあ〜？うちや！レナや！！ちょっと聞いてや！
ヤスがごっつい色男やねん！」

「へ？ヤスが？へえ〜」

「ちょっと変わるわ〜」レナも相当飲んでるようだった。

「よう！リオかー！ヤスだぞー！元気かー」

元気が言われてもなあ・・・

次々と参加メンバーに電話が変わり、盛り上がっていることは分かった。

が、みんな酔っ払っていて呂律が回っておらず、
なにを言いたいのかサッパリ分らない。

そこそこで電話を切り、チャットに戻った。

すると、今度は他のメンバーの所に次々と電話が入り、
みんな中断していた。

全員に電話が終わると、「よっぽど盛り上がってるんだねー」
とみんなで笑い、福岡オフのことを勝手に話し盛り上がった。

その日は、参加者のことや宴会場所のことなどみんなで悩み
これからのオフ会に、みんな期待を高めその日は解散した。

次の日、仕事から帰ると一通のメールが届いていた。

昨日、オフ会に参加したマックが、

朝からかかり簡単なHPを作成したという案内メールだった。

指定のURLに跳ぶと、なんとも昨日の福岡オフの様子の写真が

早々とアップされていた。

「はやつ！」

軽く驚きながらも、あたしは始めて見る地方の友人達をマジマジと見た。

レナはさすが子供が2人いるといわれても納得できそうな体系の奥様だった。

ちよつと大きめ。良く言えばポチャリ。悪く言えば……うん。言えない。

「こりゃ、、、持田じゃないよなあ……」

ケイはいつもシモネタを好んで発言をする人だが、写真を見る限りではそんな風には絶対見えないくらい真面目そうだった。

でも最後のほうの写真にはただの酔っ払ったおっさんのように映っていた。

「ん……なんか納得だな」

マツクはいつも不思議系な発言をする人だったが、見た感じはとても若そうで、たしか年齢は24歳と言っていたと思っただが、見た感じは20歳ちよつと手前という印象すらするくらいに若い感じだった。

彼はPCにもものすごく詳しく、困った時のマツク様なのだが、なんせ名前からしてMAC仕様でPCもアップルの為、普通のウィンドウズを使ってる人には意味不明。

それでも彼はウィンドウズにも詳しく、
なにかあつたらみんなが頼る存在だった。

「こんな若い人に聞いていたんだ……へえ」

そして一番驚いたのが、部屋主であるヤスだった。

いつもは「俺は休みになると焼酎飲んでグダグダしてる」とか

「おっさんだからよー」とか会話からして、一番年配な雰囲気もしたし、

ましてやダラシないイメージが頭にあつたので

この写真を見て驚いたのなんのって！

きつと、今日この写真を見た人全員が同じ衝撃を受けたと思う。

なんとヤスは超イケメンだったのだ。

「うっそお……」

しばらく写真の中のヤスを見て自分の目を疑った。

ヤスというHNの話をしたときも

「やつさん（ヤクザ）に似てるって言われたことあるから」

と平然と言っていたのだが、それを聞いたみんなはゲラゲラ笑い、

きつと髪型はパンチパーマだと決め付けヤスが部屋に入ってくると

「おう。おやじ！」「もう眠いんじゃない？老人だから？」

「もしかしてもう起床？」

などなど失礼なことばかりを言っていたが、

こんなに見た目がイケているとは誰も予想していなかったと思う。

ふと、ちよつと不安になった。

「レナ、、、大丈夫かなあ」

もしも、今度はヤスに惚れたただの騒ぎ出したらどうしよう。

それは、他の女性メンバーにもいえることだが。

たしかに格好いいんだが、

あたしはなんとなくいつものイメージを大きくて、

それほど騒ぐ気にもならなかった。

それ以上に

「こんなに格好いい人だから、会ったときのギャップがな……」
くらいの印象だった。

奥様の暴走止まらず・・・

その日の夜。

いつものようにチャットルーム行った。

すると、なんとなく空気が違った。明らかに違った。

すべての女性メンバーがいままで「おっさん！おっさん！」

とバカにしていたヤスにとても親切で優しいメッセージを送っていた。

「うはぁ・・・」

やっぱり思ったとおりだよ・・・

実際対面したレナやミナはもう、ファンクラブの会員のように騒ぎ、レナの先日の騒動がまた甦って心配になった。

それに引き換え、他の男性陣の冷めようといったら。

女性メンバーみんなに「素敵」と言われたヤスはかなりご満悦のようです。

<ヤス> 「そんなにかっこいくねえって」

などと言ってはいたが、まんざら悪い気はしていないようだった。

<レナ> 「リオ見たか？ヤスの写真！めっちゃかっこええやろー？」

<リオ> 「あー。見た見た。意外だったね」

<レナ> 「うちのタイプなんよー」

<リオ> 「へえ・・・そ、そうなんだ、、、、」

文字でもちよつと噛んでしまったような書き方をしてしまった。
神様。どうか彼女の悪い病気がでませんように。

たしかにヤスはイケメンではあるが、

あたしはいつものテンションとほとんど変わらず、
他の人達と普通に会話をしていた。

あまりのレナのハイテンションにこの前まで自分に同じくらい
テンションを上げていたのに

写真交換以来、いっさい話しかけてこなくなったケイタが

<ケイタ> 「俺、オフ会行くのやめようなかあ・・・」

と、コッソリ出していたのを見逃さなかった。

レナは平然とスルーしていたけど・・・

君の言いたいことはわかるぞ。猿には辛い時間かもしれないもんな
けど、そうは言ってもみんなは顔を合わせて親睦を

深めようってのが一番の目的だろうから、

そこはそんなに尻込みしなくても、いいじゃない。

そうケイタが出すと、みんな揃ってそんなようなことを言い出した。

(レナ以外は)

そもそもイケメンが混じっていると誰も思っていなかったんだし、

そんなに落ち込まなくてもって感じなんだが、その気持ちは分らなくてもないので、なんて言っているかわからず、いまひとついいコメントが出せないでいた。

たぶん一生懸命にコメントを出している男性陣はきっとケイタと同じ気持ちだろう。

実際、ケイもマツクも外見的にはカッコいいとは言えない容姿だったが、

あたしは彼達に対していまままでと、なにひとつ態度を変えていないし。

<リオ> 「あたしも全然イケてないから安心しなよ>ケイタ」

自分で自分を下げてるのもどうかと思うが、実際可愛い訳でもないので素直にコメントを試してみた。

この落差が文字付き合いの大変なところなんだろなと実感しながら。

きつといままでお互いに顔を知らないから、勝手にコメントのタイミングや言葉の出し方で

「こいつ可愛いこと言うな」とか「この人面白いな」とか思っているが

リアルな現実社会では、面白いことを言っているのに間が悪いが為に全然面白さが飛んでしまっている人も多い。

その一番の原因は容姿だったりするんじゃないかと思う。

顔のかわつこいい人がたいして面白くないことを言っても女性陣は笑う。

が、それでもない人が同じことを言っても笑わない。

ひどいようだが、それが現実ということがある。

それは女性だけではない、男性だって実際そうだ。
綺麗な女友達と一緒にいたりすると苦い経験はひとつやふたつでは
無い。

この世のチャホヤされるレベルの第一はやはり容姿なんだ。

悪い人じゃないけど、良い人でもないんだよねえって人もいる。

それがリアルでは目の前の空気を感じてしまうが、

この不思議な文字の世界では電波の機嫌ひとつでタイムログになり、
なかなか字が出なかつたりもする。

だからしばらくにも文字を出さずに見ているだけでも、

みんな気にかけないが、リアルで会っているのに

無口で黙って見つめているだけということになると、

少なからず心の中で「この人、、黙って見ていてキモいんだけど」
となる。

ちょっと機嫌を損ねた人もいたが、その日はなんとか

「オフ会は予定とおりにいきましょう」ってことで話はまとまった。

そして次は関東オフになる訳だが。

気楽なヤスとは裏腹に深く凹んだケイタとヒデが印象的だった。

たぶん週末に向けて出張を組むと言うヤスは機嫌よく

「じゃあ来週の末くらいな。予定空けといってくれよ」

と軽快に落ちていった。

ヤスがいなくなり、レナが場をしきりどれだけヤスが素敵だったかを
一生懸命語っていた。

男性陣がどんどん落ちていく中、女性陣はその話に盛り上がり、キヤキヤ言っていた。別にヤスに興味は無いし・・・
そう思うと、これ以上いてもヤスファンクラブの話しからないんだろっから意味無いな。

そう思つて、あたしは足早におちた。

なんだか正直、どーでもよかつた。

落ちてから、お気に入りHPサイトを回り、
メールのチェックなどをしていた。

そこにヤスから電話が入った。

「あれ？寝るんじゃないの？」

「おう。そう思つたけど、なかなか寝れなくてよ」

ヤスはそう言つて、なにか歯に挟まったように時間を引っ張つた。

「ふーん。そうなんだ」

「それによ、さっきからレナから電話攻撃がすごくてよ」

やっぱりそうきたか。いつたいレナの家の旦那はなんの仕事してるだろ？

こんな時間に妻が男に電話しても、問題無いような仕事なんだろうか？
プライベートなことはあまり聞かないので、よく分からない。

あたしはちょっと面白くもあつたので笑いながら

「へえ・・・騒いでいたもんねえ」とニタつきながら言った。

「今度福岡来たら二人で会おう言われてよー。まあいいんだけど、本気になられたらこっちも困るしよー。どうしたらいいと思う?」「さあ・・・大人の付き合いだろーから、精々刺されないようにね」そう言っただけで笑ったが、ヤスはしまいち笑えなかったようだ。

「いままであんなに俺のことハゲとかバカにしてたのに、顔がタイプっただけであんなに態度が変わるのってすげえよな」「うーん。まあそうだね。でもあたしも意外だったことは意外だったよ」

「リオもタイプな訳?俺のこと?」

「いや。全然・・・」

「だろうなあ。さっきの空気でそう感じた。

だからお前に電話してみたのよ」

「なんで?騒がなかったから悔しかったの?」

「いや、そうじゃなくて!顔見て騒いでる奴にこんな電話しても俺のこと美化して見るから話になんねーじゃん」

「あ。なるほどね。あたしは大丈夫。目が一重じゃないと興味無いの」

ヤスに対するレナの電話攻撃は結構すごいようだった。

昨日のオフ会の帰り、みんなが解散してすぐにレナから電話があり二人で飲みなおそうと誘われたそうだ。

ちよっと怖くなり仕事の都合と断りその場をしのいだが、朝の7時にモーニングコールがきて、

その後も2時間おきに電話とメールの嵐。

これはある意味「ストーリーカー」に近いなど。

「でもあたしからヤスに電話するのやめたら？とは言えないなあ」と言うよりも間に入るのは嫌だった。

「だよな。どうするのがいいと思う？」

「んー。彼女いるとかは？」（ほぼ適当に）

「いまさら？あんなだけ一人が寂しいとか言いまくってんのに？」

「あー。じゃあ拒否っちゃえば？」（とても他人事に）

「女って冷たいよな・・・」そう言っつてヤスはため息をついた。

まったく話がつかないまま電話は終了した。

レナは今後どうしたいんだろう。

こんなことばかりしていたら、きつとあたしも今後彼女と上手く付き合っつていけるか分からないなあ。

好きなようにやってくれるのは構わない。

けど、いつもいつも相談とかされるのは、そろそろ嫌気がさしてくる。

もともとあたしは人の相談とかが、ちょっと苦手だ。

他人は他人、自分は自分というポリシーがあるから、

あんまり人の相談を親身に聞けない所がある、

だいたい恋愛相談になると、人が一生懸命意見しても、結局は本人が思っていることをしてしまう。

せつかく考えてもその人の行動には勝てないし。

だから人の相談事はあんまり好きではない。

ヤスにもそう伝えたかったけど、言い出せなかった。

今回のことはヤスには問題の無いことだし。

だんだんレナに腹が立ってきたというのも事実だったが、それを大きな声で本人に言えないというのも、自分の小心者な所だ。相談事も嫌いだが、喧嘩も嫌いな訳で。

まあ。あたしが考えてもどーにもならないことだな。

ここはレナの旦那がガツチリ怒ってくれば問題解決なのになあ。

巡回サイトを回り終え、PCの電源を落とす

「はぁ・・・」とためいきをついてベットに入った。

前と少しチャットをする楽しみが変わったような気がした。

関東オフ

ヤスの「レナストーカ疑惑」は相変わらず続いているようだった。だんだんレナがいない時のチャットの部屋では、ヤスがみんなに愚痴をこぼすくらいにヤスを追い詰めていた。中には笑うものもいたが、大半はレナに対して非難の目で見ていた。

その半分は女性なんだが・・・非難なんだが、ヤキモチなんだが微妙だが、そこはそれ以上に追求はしなかった。

その週の週末、ヤスは東京に仕事で行くことになり関東オフが開かれることになった。

福岡オフの後に部屋に新入りで入ってきた「マサ」もギリギリ参加することになり、総勢11人の関東オフの話は多いに盛り上がっていた。

オフ会当日。

チャットルームは淋しいくらいに人が少なかった。やはり11人もいないとなると、スカスカした状態だ。レナは相変わらず、ヤスの話で一人で盛り上がり、テンションが上がりすぎたのか、あんなに騒いでいたケイタのことを話はじめた。

<レナ>「うち、この前までケイタのこと好きやってんけど写真見たら

猿みたいやってん。驚いたわー やっぱヤスが一番やね

」

この文字を見てから、部屋の雰囲気ガラリと変わった。
チャットに参加している、男性陣が一斉にレナに対して文句を言い出した。

言われても仕方ないとは思うが、てゆうか出すなよ。そんなこと。

<マツク> 「レナ、それは言いすぎだろ」

<ケイ> 「だよな。お前だってそんなに容姿に自信あんのかよ？」

<ハヤ> 「写真見る限りじゃな、人のこと言える身分じゃねーぞ？」

<タツヤ> 「そうそう。ヤスのことだってしつこくね？」

<レナ> 「なんやねん！あんたらだって人のこと言える容姿なんか？」

<マツク> 「そうじゃないかもしれないけどいない人の悪口はやめろよ」

<ガオ> 「たしかにな」

打つ手も止まり、どうしようと思いつながらも、ただただ画面を見ることしかできなかった。

他の女性陣は誰もかばうこともせず、画面を見ているようだった。

きつと「ざまーみる」「くらい思いながら見ているのかもしれない。たしかに言いすぎだとは思っけど、こんな風に吊るし上げもちよつとなど。

このままだ画面を見ているだけって訳にはいかないので、

<リオ> 「まあまあ。レナも言いすぎ。男性陣もそのくらいでいいでしょ？」

はい。この話はこれで終わり。空気悪くなりすぎ」

うわー。あたし頑張った！偉い！

よくこの淀んだ空気の中に入っていった！
すると、いきなりレナから電話がきた。

かなり出るのを躊躇したが、無視はできない。

たった今、PCの前にいることがバレている以上、出ない訳にはいかない。

「もしもし」恐る恐る電話に出た。

「ちょっと！なんやねん！こいつらー！腹たつわー」
相当腹がたったのかレナの声はいつもより大きかった。

「いや、やっぱさ人の容姿の悪口はマズいよ。いくら猿でもさー」
宥めるように言っってはみたが、全然効果は無かった。

「だって猿は猿やで？今日の写真見たらリオだって納得するわ！絶

対！」

「納得しようがしまいが、いいの。ヤスがイケメンでだけで男性陣が凹んでる空気がわからないの？駄目だって、そんなこと言ったら」

「そんなん知るか！うちは不細工嫌いやねん！」興奮したようにレナはそう言い放つとブツブツと画面を見ながらまだ文句を言いたいだけ言っていた。

お前はどうなんだと。

お世辞でもお前も綺麗ではないんだぞと。

だから言われているんだぞと。

さすがにそれはレナに言えなかった。

なんとかレナをなだめ、空気の悪いチャットルームに戻った。

ちょうどマツクに関東オフから電話がきていて、

少しだけ場が盛り上がっていたが、

自分の容姿のことを言われたレナはそそくさと落ちていった。

きつとヤスがいないからもあるだろうけど。

その後、みんなに電話が来たが、

いまひとつさっきのことがあり前ほど盛り上がらなかった。

あたしの所に電話が来た時、ちょうどヤスに電話を変わり、少しだけさっきのことを伝えた。

「飲み会終わったら電話する」とヤスが言ったのを周りが聞きつけ、違う意味で大騒ぎになっていたが、面倒臭いのでそれ以上は説明をしないで電話を切った。

その後、チャットルームでは

レナの態度について男性陣が意見をしていた。

みんなレナの写真を見て、それほどの美人ではないのに文句が多すぎるとか

あいつ結婚してるのにどうかしてる！など好き勝手に言っていた。

中には女性メンバーも同意している人もいたが、

なんとなくその話に入る気分では無く、適当に話を交わし先に落ちた。

やはり前とはなにかが変わってきた。

いっそのことオフ会なんかしないほうが、

みんなの均整がとれていたんじゃないだろうか？

あたしは文字以上のことはなにも期待していなかったし、

それ以上の関係を求めることはリアルな付き合いになると思った。

リアルで人に言葉を伝えコメントをもらうのであれば、

わざわざネットなんかしなくても

そこらの友達で十分事が足りるのではないか？

実際会うということとは、良いことでもアリ悪いことでもアル。

写真というのも、それはそれで問題を起こすものなんだと思った。

その日の1時を過ぎた頃、ヤスから電話がきた。

チャット部屋の話こそそこに。

今日の飲み会ではケイタがレナとの恋の行方を語り、

写真交換をしてからの自分の気持ちをみんなに面白おかしく話たそ
うだ。

みんなワイワイと盛り上がり、その話を聞き好き勝手に意見を交わし、たいそう楽しいオフ会だったとのことだった。けど、確実にみんなの頭の中にレナという問題人物がインプットされたと思う。

これでレナが美人であつたらならば、またこの話も変わってくるであらう。

けど、そうじゃなかった為に笑いの話のネタにされて、場を盛り上げるのに役に立つたらしい。

なんだか、イジメのような気がしてきた。

あたしは心から素直にその話を聞いても笑えなかった。

確かに、あたしが見たレナの写真は、想像していたより遥かに違つた。

けど、それを笑いのネタにする気にはなれない。

今ひとつノレていないあたしを感じたヤスに、

「レナが可哀想とか思ってる？」

と聞かれた。可哀想とはちよつと違うが、

でも人の悪口はあまり好きではない。良い子ぶる訳では無いが

昔から人の悪口をみんなで言い合うというのは好きではなかった。

特に自分がそれほど嫌っていない人物であればなおさらだ。

確かに腹は立つたが、嫌いまではいかない。

そうヤスに伝えると、そうだよな・・・みたいなことを返してきた。

そんなに思つてもいなさだったが、

なんとなくそれ以上は会話が続かなくなっていた。

話の最後にヤスはポツリと

「リオ、一重好きって言ってたよな？」

HPに写真アップするまで3日くらい

かかるけどカオル・・・たぶんタイプだと思うぞ」

そう言っただけ電話は終わった。

なんだかどうでもいいと感じた。

カオルだったって東京在住だし。遠距離なんてできないから。

とかいいながら、ちよつとだけ楽しみにしてたりもした。

一重って言ってもいろいろあるんだけどなあ・・・

そんなことを思いながらも、なにげに写真のアップが楽しみだった。

ちよつとだけ元気が出てきたので、そのままの状態でご寝ることにした。

そして、この後予定されている北海道オフが元で、

あたしのチャット生活に異変が起きるとは

この時点では思いもしなかった。

3日後、予定とおりにHPには関東オフの写真がアップされた。

なるほど・・・カオルはタイプの外見だった。

目が一重というか、目が細い人がタイプなので、なかなか素敵に見えた。

目が細い上に体の線まで細い。

あたしは弱々しいタイプが大好きなので、

きつと関東に住んでいたならば

個人的にカオルになんらかの行動をしたかもしれないな・・・と、うつすらレナ感覚になった。

けど、その行動はなにもしないけど。ま、目の保養程度で感覚で収めた。

ヒデは自分で言っていたように体が大きく、筋肉質だった。筋肉を見せ付けるにいいだけ見せつけた服を着ていて、ちよつと笑ってしまった。

「体で勝負って感じだなあ・・・」

サクラはチャットで会話している雰囲気よりも派手に見えた。たぶん気合を入れて化粧をしすぎたのかもしれないけど、十分可愛いという範囲に入る感じだった。

ラビはとても背が小さく、それだけで可愛い感じがした。どの写真にもピースをして、ニコニコしている。

ラビの名前とおりに前歯がヒョコと覗いて、子供っぽくて可愛い。

夫婦で参加したジイとバア。ムウとノンは思っていた感じの落ち着いた人たちだった。

まだ歳は30歳だったが、やはり結婚してると思うだけで落ち着いた雰囲気がある。

そして、いまいち馴染みが薄い「マサ」はイメージをするしないの前に

あたしは一度しか彼と話をしたことが無かったので、軽くスルーした。

「ふーん。こんな感じの人ね。
でも部屋に入ってすぐにオフ会に参加なんて
そうとうチャットに馴れてる人なんだな」

それくらいの印象しか無かった。

その日の夜は、またみんなでワイワイとチャット部屋は賑わっていた。
た。

残るは北海道オフの話でみんな盛り上がり、

あたしとミライの容姿についていろいろと憶測が飛び交っていた。

そんなに期待されると、どんどん行きたくなくなる。

レベルで言えば中の中だ！と何回言っても、「またまた〜」と
軽くかわされて、言葉に困ってきた。

<レナ> 「リオは関東オフの中にカッコいい〜って人いた？」

そう聞かれれば、いない訳でもない。

ダントツにカオルはタイプだが、そうやってしまうと他の人たちに
悪い気がして

<リオ> 「あ〜。でもみんな結構いいね」

と、無難なことを言っておいた。

すると余計なことを言う奴は必ずいるもので・・・

<ヤス> 「嘘言っなって。カオルのことタイプだろ？>リオ」

この言葉を見て、軽く動揺した。

この場合「違っって」と言えば、カオルに悪い。

「そっだね」と言えば、他の人に悪い気がする。

「（笑）」とだけだした。

なんとも好都合にとれる文字だ。

その後もヤスにいろいろ突っ込まれたが、シレッと話を聞かないふりをして受け流した。

最後の北海道オフは2週間後の土曜の夜。すすきのということが決まった。

あたしの住んでいる場所からは車で3時間くらい。

その日は週末なので、朝早くに家を出てミライを迎えにいき先に二人で買い物しようということになった。

ミライとは歳も近いことと同じ地域ということと、部屋の中でも仲良しのほうだった。

オフ会の前日。

ミライから電話がきた。

「明日だね。なんかドキドキするねー」

嬉しそっくにミライが言った。

「そっだねー。なんか関東の女性陣が可愛いから

変に期待されると困るよね」あたしは正直な気持ちと言った。

「だよー。私なんか全然太ってるし、いやだな。」

「リオ私のこと見てデブだと思っててもいきなりシカトとかしないでねー」

「そんな訳ないじゃん！」

そんな明日のことをダラダラと話、時間と場所を決めて電話を切った。

ミライ・・・そんなに太ってるんだ。

頭の中にレナが浮かんだが、たとえどんな容姿であっても友達でいれる自信があった。ミライはいつも控えめで良い子だったし。

なんとなく、普段の友達作りもちよつとは見た目で決めている所があったかもしれない。

個人的にはあまりにも太っている人は意思が弱いイメージがあるのと、

暗いイメージがあり勝手に太った人を避けていたかもしれない。

自分ももう大人だし、そんな理由でせつかくの友達を失うことはしないでおう。

まだ見ていないミライを恐ろしく太った人と勝手に想像しながら自分にそう言い聞かせていた。

明日は、朝早く家を出る予定だったので、その日のチャットは参加しなかった。

前日だから参加するべきかもしれないが、なんとなくそんな気持ちにはなれなかった。

時間が近づくにつれ自分の容姿を仲間に見られるのが不安になっているのもあった。たいしたことでは無いと思いつつも、今までとみんなの対応が変わったらと小心者の自分がでて、足踏みをしてしまう。

夜も11時をまわったくらいにヤスから電話があった。

「なんで今日はチャットしないの？」

「いや、明日オフ会の前にミライと先に会って買い物する予定だから早いなだね」

「そうなんだ？何時？」

「えーと。1時くらいかな？で、昼食べて買い物して……って予定」

「何時にこっちに着く？」

「12時前後？」

「もっと早くこいよ。先に俺に会えないか？」

「えー。いいよ。だってそんなことしたら朝の6時とかにでないと駄目じゃん」

「いいじゃん。そうしてくれよ。相談あるし」
ちよっと弱い声を出してヤスが継るように言った。

きっと相談とはレナのことだろうけど・・・
まあみんなの前では言えないだろうし、
あたしはオフ会が終わったらその足で帰る訳で。

仕方無いので、朝の6時には家を出て、先にヤスに会うことになった。

「前もって言うておくけど。あたしは全然綺麗じゃないからね。
期待しないでよ」そう念を押した。

「最初から全然してないから・・・」
トーンを上げもせず、下げもせずヤスが言った。

「だよね・・・」

「俺の中では生意気なヤンキーにしか思っていないから大丈夫」
いくらなんでもそこにいかれるとは憤慨だ。

「ヤンキーって」

「なんとなくそんなイメージ。」

「それも綺麗なヤンキーじゃなく不細工なヤンキーね」
と笑いながら言われた。悔しいけど反撃できない。

「不細工ってハッキリ言う？普通？」

「そう思ったほうが、ちょっとでも良かったら儲けもんかなと」

「あつそ・・・じゃ着いたら電話するから」

「おっけー。明日な。」

夜中は携帯の電源切ってるから朝の7時以降なら繋がるから」

「切ってるんだ・・・」

「俺もさすがに寝たいからな。あいつ夜中でもガンガンだから」

「わかった。じゃね」

そういって電話を切った。

不細工なヤンキーって。

そこまでではないと思っではいるが、

こればかりは好みだからそう思われても仕方ないか。

別にヤスにどう思われてもいいや。

時計を見ると0時すぎている。

全然眠くないが無理をして布団をかぶった。

北海道オフ

次の日、朝の5時に起きた。

こんな早く起きて帰りの車で居眠りを起こさないかと、心配ではあったが、そんなことを言ってる場合ではない。急いで着替え、支度をするともまだ時間は5時50分だった。

そのまま車を飛ばし、札幌に着いたのは8時前だったが、考えてみればこんな早い時間に高速が渋滞する訳がない。が、街中に入るとかなりのラッシュで

ヤスのホテルに着くまでに軽く1時間かかった。思っていた通りの時間になり、ホテルの前で電話をした。

「着いたよ」今になってちよつと緊張してきた。

「ふあゝ。寝てた。部屋にあがってきて」「寝ぼけた声でヤスが電話に出た。

「えー。待つてるから用意して降りてきてよ」

「だってかなり時間かかるし、それに俺、別に用事ないからお前が帰った後また寝るし」

どう考えても急いで用意をするようには思えない気だるさだった。仕方ないので、ホテルの駐車場に車を止めフロントでヤスの部屋番号を聞きエレベーターに乗った。

ヤスにどう思われてもいいとは言ったが、やはりちよつとは不安だった。

でも所詮「不細工なヤンキー」と思われているなら、
そんなに不安になる必要もないか！
そう自分を説得して、ヤスの部屋のドアのノックした。

中からは180cm以上のスラリとしたヤスが出てきた。

上から下までジロ〜と見た後にヤスは、

「うわぁ。なんかイメージと全然違った・・・ オネイ系だったとは！」

そう言つて部屋に入れてくれた。

「なにそれ？てゆうか、部屋汚い・・・」

服は脱ぎっぱなしだし、部屋中に煙草の臭いが充満していた。
服を踏まないように部屋に入り、ソファーに座ろうとすると

「へえ〜。リオ背でかいな。何センチ？」と人の頭の上に
手をかざして自分との背を比べた。

「え？165だけど？そんなにでかい？」

「うん。いままでの女のメンバーの中では一番だな」

「ふーん。ま、いいやどーも、不細工なヤンキーです。はじめまして」

「いや。まあまあってとこだな」

ニッコリと笑いながら、それでいてさほど褒めないところがやっぱり
ヤスだと思った。

まあまあって。

お前は何様だ。

「あんまり自分のこと卑下するから、こりゃよっぽど酷いと思ったのに、」

普通っていうか、どっちかと言えば色っぽいほづじゃん」

とりあえずは安心した。

目があった瞬間に部屋の戸でも閉められたらとか、ちよつと考えなかった訳でも無かった。

そんなに酷い容姿だとは言わないが、でもそれには過去にちよつとした出来事がありそれ以来、あたしは自分の容姿には自信が無いだけで、人からすればきつと普通なんだろうとはなんとなく思っていた。

いきなりヤスは携帯を取り出しカシャツ！と写メールであたしを撮影した。

「ちよつと！なにしてんの？」

「え？ちよつと頼まれて。へへ」

「誰に？つてゆつか削除してよ！どこに送る気なのよ！..」

「え？カオルに」

それがなにか？と言わんばかりの顔で言われた。

「はあ？なにそれ？勝手にそんなことしないでよー」
その態度にちよつとムカついた。

「いいじゃん。やっぱカオルはタイプだったろ？」
完璧にタイプだと信じて疑わない風だった。

あたしはその問いに答えなくてヤスの隣に行き、
携帯を奪って撮影された写真を見た。目が半目になっていた。
よかった・・・事前に止めることができて。
どーせ送るならもつとあるだろ？半目はないだろ。半目は！
ボタンを押して削除した。

「あーあ。俺カオルに送るって言っちゃったのになー」
残念そうに、でも申し訳無いなんて顔は一切無しでヤスが言った。

「なんでそんなにカオルがタイプって思うわけ？
違うかもしれないじゃない！」強気で言ってみた。

「いや。リオの好きな芸能人とかのタイプからして
カオルは間違い無いと思ったんだよなー
でさ、カオルにそのこと伝えて「絶対リオはお前に惚れてる！」
とか言ったらあいつスツカリノリ気でさ。

で、、俺がホテルで先に逢うって言ったら携帯で写真送れって
言われてさ」

きつと昨日の電話の後にもわざわざカオルに電話したのだろう。
こっそり写真を要求するカオルにもちよつと腹がたつた。

「で。相談って？」無然とした顔で煙草に火をつけヤスに聞いた。

「いや、例の話なんだけどさ。だんだんキツイ展開になっててさ」
「どんな？」

「レナが俺の家に来るっていいだしてさ」

「まじで？」

「ああ。家はバラしたくねーじゃん。

「所詮人妻だぜ？遊ぶならいいけど普通来るか？福岡から」

「こない・・・かな？」

「だろ？あいつヤバいよ。絶対」

「うーん。どうしようねえ」

「で、思いついたんだけどよ。

「この札幌オフでなにげに俺とリオが付き合ったことにしたら
うまく回避できんじゃないかと思ってよ」

「えー。あたしー？それは嫌」

「どーせ嘘なんだからいいじゃん」

「だってあたし小芝居できないもん。

「部屋でもそんな風なニュアンスとかしなきゃならないんでしょ？
それは無理。絶対無理」

「いや、きつとそうならアイツはこないと思ってるんだけど」

「あまい。あまいよ君」

「やっぱそうか？」

「ん。ヤスが駄目ならきつとカオルに行くね。

「次のターゲットはカオルだよ」

「まじかよ」

「うん。カオルのこともかっこいいって言ってたもん。

「ヤスが被害にあうのはいいけど個人的にカオルは可哀想」

「なんだよソレ！」

「それは冗談としても、そんなことでレナはおとなしくはならないだ
ろっ。」

「彼女の頭の中では誰かしらに「好き」と言ってほしい気持ちで

いっばいだから次々と犠牲者はでてくる。
いっそのこと誰かが直接本人に言わないと、
これはレナがチャットをしている間はずーと続くだろう。

「ここは部屋主なんだからヤスが言えば？」

「うーん。俺か？」

「それかみんなの前でレナに言うか？」

「それも俺の役目？」

「うん。だって今のターゲットはヤスだし」

「はあ……」

元気の無い声でそう答えるとヤスは放心状態のような顔をして
煙草に火をつけた。

その後もヤンヤと議論したが、結局はヤスが直接レナに
俺はそんな気は無い！今後部屋でのそんな行為は禁止！
嫌なら自分で部屋を出せ！！ただし相思相愛ならよし！

と、いうこと決まった。

ちよつと可哀想な気もするが、
彼女の妄想に付き合わされるのはほとほと疲れたようで、
ここらで開放されたいとのことだった。

時間はまだ10時すぎだったので、
ルームサービスで軽く朝食をオゴってもらい
今日のオフ会の話などをし、12時ちよつと前に部屋をでた。

初めて文字の人に実際会った訳だが、会話に困ることもなく
普通の友人に久しぶりに会ったくらいの気持ちしか無かった。

こんなもんなんだ・・・ちよつと意外だったな。
一緒にロビーまで降りていき、

「じゃあ、あたしミライと約束してるから、また夜にね」

「おお。分った。悪かったな朝早くに」

「ううん。どんだけイケメンなのか見たかったしねー」

「お！会って印象変わった？」

「いや、思ってた通りにグータラな人だった」

「なんだそれ・・・」

タイプうんぬんよりも、ヤスとはいい友達になれる気がした。
だいたい初めて逢う人の泊まっているホテルに気軽に行くのも
普通ではありえない。

ましてやいきなり部屋に行くなんて身の危険を
感じてもおかしくない行動だが

なんとなくヤスの人柄からして絶対安心だと思っていた。

その通りになにひとつ怪しい雰囲気にもならず

昔からの知り合いのように会話もスムーズに進み、

「そんじゃ。またあとで」みたいな流れで別れた。

ヤスの泊まるホテルに車を止め、ミライとの待ち合わせ場所に向か
った。

まるまる一日停めるとなると駐車場の料金がかかりかかるだろ？
ということだヤスがホテルの人にうまく話しをしてくれた。

1時少し前になり、待ち合わせ場所で座っていると後ろから

「あの・・・リオ？」と声をかけられた。

振り返って見ると、とても可愛い女の人がかつちを見ていた。

「もしかしてミライ？」

「そう！わー！リオだー！はじめましてー」

全然太ってねーじゃん！やっぱ女の

「私太ってるのは」は嘘だなと実感した。

太ってるどころか、きつと部屋で一番可愛いかもしれない。

ここでもやはり昔からの友人に会ったような感覚で普通に会話は弾みそのまま食事をして買い物に行った。

「何時に着いた？」

「ん。7時。ここに来る前にヤスに会ったから」

「えー？なんで？」

「ほら。例のレナの件でさ。相談されたから」

「へえ~~~~~ そんな長い時間？ふっふっふ」

「絶対ありえない。ヤスはタイプじゃないから」

「そうなの？ヤスカッコいいのに」

「んー。あたしってイケメン苦手だから」

「そうなんだー。もったいない」

もったいないとかの以前に、お互いタイプじゃないんだつてば。あつちこつちを見てまわり、時間はすっかり夕方になっていた。そろそろ指定の場所に向かったほうがいいねということになり二人でみんなとの待ち合わせ場所に行った。

わかりやすいようにファーストフード店での待ち合わせだったが、朝に見ているのでヤスの姿ですぐにどの集まりがそうなのか分かった。

「おまたせー」二人で並んで挨拶をした。

「お。リオと、ミライ？」ヤスがミライを見て言った。
明らかに目の輝きが違う。あたしの時とはえらい違いだ。

「そっか！そっか！よし札幌オフは気合が入ってきたぞあー！」
無駄に大きな声を出し、ヤスのテンションが上がった。

ヤスの他に二人男の人がいた。

「あ。こんばんは」はじめましてリオです。

いつもお世話になってまあーす」

一応、可愛いふりして挨拶を。あまり可愛くなかったが。

「あ。どもども。ハヤです。こっちはタツヤ」愛想良く、ハヤが
笑顔で挨拶をした。

「ども」と人見知りな感じのタツヤも頭を下げた。

「あと一人・・・ガオがまだなんだね」空いている椅子を見て
ミライが言った。

「そっだねえ・・・もう少し待ってみようか」
そう言っただけであたし達も席についた。

そのままガオ待ちで5人でコーヒーを飲み雑談をした。

なんとなく、札幌オフの面子はレベルが高い。かなり高い！

いままでの福岡オフや関東オフと違って、モデルっぽい男の子が多いのに驚き。

ミライが耳打ちしてきて

「ちよつと・・・ハヤもタツヤもかつこいいね。もつとこうなんていうの、ヲタクっぽいかと」

「だよねえ・・・ネットとする男の人ってそんなのが多いと思ってたけど北は違うのかな？」

「こりゃ、、またレナが騒ぐね」

「まっただね」

そう言いながら二人で笑った。

いくら待ってもガオがこないなのでヤスが電話した所、仕事長引き遅れてくるようだった。

「んじゃ、みんなで先に行ってるから終わったら

居酒屋にまつすくなー」

そう言って、ヤスがガオとの電話を終え、みんなは目的の場所に向かって出発した。

5月だというのに札幌の夜は寒く、

凍えそうな寒さの中なんとか居酒屋に着いた。

ガオを待つにしても、いつたい何時にくるのか分からないので先に軽く

乾杯をしどんと食事をすすめ、その場は盛り上がっていった。

タツヤもハヤも今風なかつこいい子だった。
話をするととても面白くミライが不思議そうに、

「ねえねえ。なんでタツヤもハヤもそんなにかつこいいのに、
ネットとかしてんの？」

と二人に聞いていた。

そんなこと言ったら、世の中のネットしている男性陣を
敵に回す勢いな質問だなと思った……

「えー？そうかな。でも俺の友達なんか、
俺なんかよりもっといい男ばっかだぜ」

ハヤがなんで？という顔をして言った。

「そうそう。俺なんか全然モテないしネットとかばっかやってる」
少し馴れてきたタツヤも当たり前な顔をして言った。

そう言われれば、うちの部屋の男の子達は
みんなPCにはあまり詳しくない人が多く、
大体がネットゲをやりたいが為にPCを買った人が多かったみたいだ
し。

ネットゲだけでは無いのであろうが、

そこはあまり聞かないでおいてあげよう。

みんなゲームの延長みたいな感覚でPCを始めた人が多いから
思ったよりも普通っぽい人が多いのかもしれない。
ゲームをしない男の子のほうは今では珍しいほうだし。

ここのメンバーならばヤスも普通に見えるくらいのレベルだった。

「でさ。ヤス最近はどうよ？まだ攻撃されてんの？」
タツヤが興味深げに聞いてきた。

「ああ・・・でも一応さ、はっきり言おうと思ってさ。
さすがに迷惑の域も越えてきたしさ」
ヤスがまいったよという顔をしながら言った。

「大変だよな」ハヤとタツヤが大笑いした。

ミライと二人でクスクス笑いながら、
「呑気なこと言ってる場合じゃないかもよ」と話の間に入っていた。

「ハヤもタツヤもヤスに負けないくらいかつこいいし、
ヤスが駄目ならどっちに矛先が向く可能性は十分ありだと思う
よ」

そう言うと二人で顔を見合わせて「どぞ。お任せします」
「いえいえそちらに」などと譲り合いをしていた。
きつとケイタ事件が明るみにでなければ、
レナもそれほど敬遠されることもなかったのに。
実際あの日、レナに噛み付いたメンバーがここにいる訳で。

今だにレナはあの日、「お前はどーなんだよ！」
と言われたことを根にもっている。
あれ以来、ハヤ、タツヤ、ガオの北海道メンバーの男性陣には挨拶も
かなり微妙な感じだし。
でももしこれで、このイケメンメンバーをみて態度がコロリと
変わったらきつとあたしはレナを尊敬するかもしれない。

「あんだ・・・すごいね」と違う意味で・・・

間がいいところにガオが来た。

仕事疲れでできたクマが目の下にがっちりつき、挨拶もそこそこに「あ~~~~」。疲れた~~~~」と座りこみ、普通の顔をして飲み始めた。

男性陣はそれなりに個人的に連絡をとっているようで、初めて会ったにもかかわらず話題がスイスイと流れ、普通の友達のように盛り上がっていた。

オフ会ってこんな感じなんだ・・・

もつと緊張してみんな無口でとか思ったけど、なんか会社の忘年会のような感じだった。

滅多に会わない部署の人と合同で飲む時のようなノリがあった。

居酒屋でお腹いっぱい食べ、二次会と称し次はカラオケに行くことになった。

男性陣はかなり飲みまくっていたので、

どんな歌が入ろうともテンションが高く静かな歌でも踊りだし、4人全員が尾崎豊が好きだとい

延々と尾崎メドレーを聞かされるはめになった。

ミライとちよつとひき気味にビールを飲みながら観察をしていた。しばらくしてみんなバイクを盗んで走りすぎたのかグツタリと大人しくなった頃に

あたしとミライはマイクを占領して二人で歌っていた。

そのうちタツヤの酔いが醒めてきたのか、こっちのグループに入り

そこからは3人でマイクをまわし順番に「自分の18番を歌おう！」
みたいなノリになった。

それから1時間後、寝ていた人達も少しずつ動きだし、
酔いも醒めた人がチラホラと出てきてそろそろおひらきの空気が漂
った。

最後まで寝ていたヤスを起こし、

カラオケ屋を後にして解散をしようとしたら

「せっかくだからラーメン食おう！」ということになり、

あんなに食べたにもかかわらずまたラーメンを食べ、

ついでにラーメン屋のオジさんに全員の記念写真をお願いして
無事に札幌オフは終わった。

みんなそれぞれ「またねー」と挨拶をかわし、

ヤスとミライの三人でホテルまでタクシーで移動し、私の車に
ミライを乗せてヤスにお別れを言い車を発進した。

「結構楽しかったね」とても楽しそうにミライが言った。

「ねー。またリオが札幌きた時にこっちのメンバーだけでも

いいから集まるうか？」

「いいねー。一回会ってしまえば、もう怖いもんじゃないもんねー」

そうしてミライを家に送り、あたしはまた長い時間をかけ自宅に帰
った。

時間は夜中の3時を過ぎていた。

今度こんな飲み会があるならば、ミライの家に泊めてもらおう。
毎回3時はきつすぎる。

化粧を落とすのも適当に、眠りに負けそのままベットに入った。

そういえば他の地方のメンバーに電話するの忘れてたなあ・・・
ま、いつか。

3回目にもなれば、そんなに盛り上がるテンションでもないしね。

今日の報告は明日の夜にでもすればいいや。

眠くて頭の中の思考回路がまわらない・・・

たぶんベットに入って3分かからずに眠りについた。

そんな感じで北海道オフは終わった。

二人きりのチャット

次の日の夜。部屋にいくと昨日の札幌メンバーは全員顔を揃えていた。

<タツヤ>「よう！昨日は面白かったなー 無事に帰れたみたいだな」

<ハヤ>「お。リオ！またこっち来たら飲みに行くぞ！」

<リオ>「こんばんは〜。またいこうね〜」

<ミライ>「ねー。今度いつにする？」

<ガオ>「今度は残業ないときにしてね〜」

札幌メンバーのノリは前と変わらずテンションが高かくたぶん会う前よりもフレンドリーな感じになってた。こっちのオフの親睦を深めるといふ目標は完璧だった。しばらくは昨日の話で盛り上がり他の地方の人達もみな昨日のオフ会の様子に興味を示していた。

<マツク>「で。どうだった？みんな見た感じは？」

<サクラ>「そうそう！それ聞きたい〜」

<ジイ>「だよなー。女性陣は美人いた？」

などと次々質問をしていた。

内心、男性陣がだす自分の印象をドキドキしてみているが、意外にもウケはよかったようだ。

というのは、以前女子メンバーがいない時に男性陣でイメージの話をしそこであたしのイメージはヤスが言っていたように「不細工なヤンキー」で定着していたらしい。

それを頭に置いて昨日対面をしたので、

思ったよりも普通の女性だったということでも好印象だったようだ。最初に悪く言うておくといいことがあるもんだ。

別にナイスバディでもなく、美人でもないあたしが

「結構イケてるお姉さん」になれるとは。

ま。お世辞かもしれないから、ここはお礼でも言っておこう。

<リオ>「ま。本心かわかんないけどありがとう。

でも男性陣はみんなイケてたよ」

<ミライ>「そうそう！ヤスが普通に見えたよね〜」

<リオ>「だねー。昨日はホストクラブ気分だったね」

などと出した途端。レナが食いついてきた。

やっぱすごいよアンタ。あんなに文句言われて攻撃されたのにそんなこと綺麗サツパリ過去のことなんだねえ……

<レナ>「なにー！そんなにイケメンばっかなん？

うわー写真楽しみやわー」

あまりこの話題で長く引つ張るつもりも無かったので、

キレイのいいところで終わろうとしたのだが、レナが必要以上に食いつき思ったより長くなった。

他の男性陣もあまり面白くない話だろうし。

実際、北海道メンバーがイケメンだと言ってから、明らかに他の地方の男性陣の

テンションが下がったし、ヤスでさえ下がっていた。

ここは話の終わり所だな。

<リオ>「まあまあ・・・写真がアップされたらわかるって」

それで話を終わりにした。

まだレナは話足りないようだったが、それ以上はこっちが無理って感じた。

<ヤス>「とりあえずこれで全員と会ったけど、

ここの雰囲気そのまんまだな」

確かにそれはそうだなと感じた。

会ったからといって部屋での雰囲気が変わることは無かった。

ただ会う前よりは会った人同士はなにかしら近くなった印象があった。

ちょっと変わったといえればあたしはカオルが

いると少しだけ意識するくらいで・・・

とはいっても特別になにをする訳でも無く、ただなんとなく・・・

「ああ・・・カオルってタイプだったよな」程度のものだ。

電話もしたことがないし、部屋でもそれほど二人の共通の話題も無

い。

カオルは車とサッカーが好きであたしは車は動けばいいや程度の考えしかないので話が續かない。

だからといって車のことを勉強しようとも思わない。

普通であれば、あたしは相手のことが気になるよ

相手の興味のあることを一生懸命勉強するタイプなのだが、今回はそんな気にはならなかった。

それは北海道と関東という距離もさながら、

写真は見たけど動いてる実物を見た訳でも無く、

それ以上の感情が盛り上がることもなさそうだし・・・

北海道メンバーの男性陣もたしかに格好よかったが、

あたしのタイプとはちよつと違い動いてるのを見てても、やっぱり違う部署の人達くらいに感覚だった。

そう思えばネットの世界の人も実際会ってしまえば

普通の滅多に会わない友人よりももつと濃い存在なのかもしれない。

年に1回それも道で偶然遭う程度の顔見知りの人よりも、

毎日なにかしらの話題について話、

相手の意見を文字だけでも感じ取りたまに会うほうが

現実社会の人よりも友達っぽい。

ほんの少しだけネットの文字だけの人が近くなった。

きつとカオルが北海道のメンバーならば、

あたしが札幌に遊びに行く回数は今よりもかなり増えるかもしれないが、

けどそれはカオルもあたしに興味を持ってくれればの話で、

今のままであればきつとなにも変わらない。

あたしは異常なくらい小心者なので、自分から行動とかできない性質だし、

ここで暴走でもしたら、レナ2号に成り下がる。

それだけは勘弁だ。

「結局タイプだとしてもなにも変わらないな〜」

そう思いながらカオルの出した文字をぼんやりと見ていた。

北海道オフの話を終え話題はみんなの仕事のことや

日常生活の普通の会話に戻っていた。

時間は0時少し前だった。

ポツポツと落ちる人もいたが、それでも部屋の人数は10人はいた。

ちょうど煙草が切れたので

<リオ>「ちょっとコンビニ行ってくる。まだ誰がいる?」

<ヤス>「おお。いつてら。俺は明日遅いから2時くらまでいる」

<カオル>「気をつけてなー 痴漢すんなよー」

<レナ>「まだいるでー。遅いから気つけるやでー」

<リオ>「OK。いってきまーす」

そう出して画面をそのままにしてコンビニに行った。

15分後・・・

コンビニから帰り、画面に戻るとメンバーは変わらず10人だった。戻ったことを知らせる前に過去ログを確認した。

ちょっと驚くようなことが書いてあった。

ヤスがカオルに

<ヤス> 「絶対リオはカオルのことタイプだぞ。

いっとけ！大丈夫だって！」

<カオル> 「まじで？けどヤスの意見だけじゃん

リオはなんとも思っていないかも」

<ヤス> 「俺なにげに聞いたけどニヤリとしてたから大丈夫だって
！」

<カオル> 「うーん。ヤスの送ってくれた写真見た感じ

俺も結構好きなタイプ」

<ヤス> 「わ。字にすんなって。リオにバレたら殺される。

隠し撮りなんだから！」

<カオル> 「やべえ。消せないじゃん。

ガンガン文字打って上に隠しちゃえ」

その後、「あいうえお」とか無駄な文字を打ち、

無理やり画面上にこのやり取りが見えないように上げられていた。

なんとなく気まずくなるようなモノを見てしまった。

おまけに隠し撮りされてたとは……

口とか開いてたら死にたくなるな、、その写真。

実際、カオルに「俺も結構タイプ」と言われれば悪い気はしない。
それどころか最高！！と腕を高くあげてもいいくらいだ。

けど、なんとなくどーにもならないよな・・・
という気持ちは変わらなかった。

この腰の重いあたしが東京に行く訳も無いだろーし。
それにレナの事件で部屋はなにげにピリピリしているのに、
ここであたしまで色恋沙汰をおこせば間違い無く
部屋は無くなりそうだと思った。

これは見なかったことにして、そのままにしよう。

<リオ>「ただいま。寒かった」

<ヤス>「おかえりー」

<カオル>「痴漢しなかったかー」

<レナ>「おっかー」

<ミライ>「今日はこっち寒いよねー」

<マツク>「こっちは暖かいぞー」

などなど・・・

みんな普通の会話をしていた。

なんとなく複雑な気分ではあったが、そのまま会話に戻った。

時間も1時をすぎ、一人二人と落ちていき、残ったメンバーは
カオルとヤスとミライとあたしになった。

ヤスとミライはこの前の北海道オフの話をし、
二人でカラオケの話で盛り上がっていた。
散々最後まで寝ていたくせに、

シレッとカラオケの話をするヤスが可笑しくてミライとからかって
いた。

2時近くなりそろそろ寝ようという話になりミライが先に落ち、

ヤスが落ちた。

「じゃねー」とか挨拶を打っている間にどんどん先に落ちられて、カオルと二人になってしまった。

<リオ>「せつかく打ったのに、もういないし……」

<カオル>「だね」

<リオ>「じゃ。あたし達ももう寝ようか」

<カオル>「眠いの？」

<リオ>「眠いっていうか、みんないないしね」

<カオル>「そういや二人で話したこと無かった気しない？」

<リオ>「あー。話題がかみ合わないしね。あたし達（笑）」

なんとなくすつごい気まずい。

面白おかしい話も振れないし。

<カオル>「まだ眠くないならもう少し付き合ってよ」

<リオ>「いいけど」

<カオル>「またそっけないねえ（笑）」

<リオ>「そんな訳でもないけどね」

<カオル>「北海道オフはイケメンが多かったみたいだけど、

好みのタイプはいなかったの？」

<リオ>「そうだね」 いなかった（笑）」

<カオル>「どんなのがタイプ？」

<リオ>「んー。痩せ型で目の細い人かな」

<カオル>「俺？（笑）」

「そうだね」と出せばレナ2号になってしまふ。

「違う」と言えば嘘になる。

<リオ>「どうだろ？（笑）」
<カオル>「なんだそれ〜」（笑）」

二人が（笑）マークをつけているが笑っているのかと聞かれれば少なくともあたしは笑ってる場合では無い。
ちよっとテンパってる状態だったので、その話をそこで止め違う話を振った。

その話に上手くカオルが乗ってくれたので、それ以上は気まずい雰囲気にはならなかった。
時間も2時を過ぎ、そろそろ眠くなってきたので解散することにした。

<リオ>「じゃ。今度こそおやすみ〜」
<カオル>「今度電話していいかな？」
<リオ>「へ？」

<カオル>「いや、電話したこと無いから、たまにいいかなって」
<リオ>「あー。うん・・・そうだね」
<カオル>「結構ヤスとかと電話してるじゃんリオって」

<リオ>「あたしからはかけないけどね（笑）」
<カオル>「そっか（笑） じゃ、今度あんまり遅くならない
時間に電話するよ」

<リオ>「わかった。じゃ、今度ね。おやすみー」
<カオル>「またなー」

急いで部屋を出た。

なんとなく嬉しい気持ちもあったが
突然がつついてるようなカオルに戸惑っているのもあった。
カオルと電話と言われても、とくに共通の会話がある訳でもないし、
確実に沈黙になりそうなので、ちよつと困った。
部屋の話と言っても、とくに無い。

あんなことをヤスが言い出したから、こんな展開になったんだ。
つたく、アイツはいつも碌な事をしない。
文句の電話でもしてやろうかと思っただが、
2時すぎにわざわざ電話して文句を言う話題かと
言われればそうでもなさそうなので、その日はやめた。

その次の日、なんとなく部屋にいきづらい気分になりチャットをしなかった。
またカオルと二人きりになったら何を話していいか
分からないのもあったし、変に意識してしまう自分もなんだかな・
・
という感じがしたからだ。

11時をまわり今日は早く寝よう。
そのまま電気を消しPCのメールチェックすらしないで寝た。

チャララ〜ラララ〜

突然、携帯の音で目が醒めた。
寝ぼけているので、どこに携帯があるのか分らない。
ゴソゴソとベットの頭のあたりを触り、やっと携帯をみつけた。
画面を見ると、いままで寝ていたのもあり眩しくて目を細めた。

画面には<カオル>と書いていた。

「わ!!!!カオルだー!」

そう驚いて、電話をでないまま画面を眩しい顔をして見ていた。でるのを躊躇したが無視するのも悪いのでエヘンエヘン!と咳払いをして声を整えてから出た。

「もしもし・・・」ちよつとビクビクしながら電話にでた。

「あ。リオ?カオルだけど・・・もしかして寝てた?」
初めて聞くカオルの声は思ったより低音だった。でもそれは聞きやすくもあり、とても男らしくもあった。写真のイメージではもつとヨワヨワしい感じをイメージしていたが、まったく外れた。それもいい方向に。

「ううん。寝て・・・なかったよ。大丈夫」

「そっか、今日チャットしてなかったから、

もしかしたら寝てるかとも思ったんだけどさ」

「あー。うん、TV見てたの」

嘘八百だ。ぐっすり寝てたくせに大嘘をつくあたり、カオルを意識している意外のなにものでもない。

「なに見てたの?」

そついわれても「夢見てました」とも言えず、適当に「ニュースを見ていた」と誤魔化した。

「あのさ。今度北海道に遊びに行く予定があるんだけどさ。

その時会えるか聞いてみようと思って」

突然の話にビックリして覚めきっていなかった目がハッキリと覚めた。

「いつ？」声がうわずっていたかもしれない。

「うーん。まだはつきりは決めていないんだけど、有給が溜まってるし

北海道って行ったこと無いから一度行きたいなって思ってたんだよね」

「あ。そうなんだ・うん。いいけど。

「じゃあミライ達にも連絡しておくね」

突然ミライとか他の人の名前を出してしまった。慌てていてどうしていいかわからず、思わず出てしまった。

「あ。そうだね。みんなにも会いたいし」

それ以降はなんとなく「初夏の北海道はどこに行くべきか？」や

「おすすめ観光スポット」などダラダラと話、

気がつくともう1時間は話をしていた。

「もう今日はチャットしないの？」

「もう誰もいないかもよ？」

「リオがやるなら付き合っけど」

「どうしよっかなあ」

時計を見ると1時少し前になっていたが、途中で寝たのもあり眠気

は無かった。

でもここで「今日はしない」と言うと電話を切るタイミングを失いそうだったし、これ以上電話をしていても、いつ話が詰まるかと思うとヒヤヒヤした。

「じゃあ。今から少しだけしようかな」

「うん。わかった。じゃあ俺も今から繋ぐよ」

「うん。じゃあまた後でね。あ・電話ありがと」

「え？なんでありがと？」

「え、いや、いままでカオルとは電話したことなかったし

電話をくれてありがとって意味。あんまり深い意味は無いけど？」

「あ。そうなんだ。また電話するよ。じゃ、後はPCで・・・」

そう言っただけで電話は切れた。

なぜ急にありがとなんて言ってしまったんだろう。

いままで誰が電話をくれてもありがとなんて

言ったことなど無かったのに。

ちよつと胸がどきどきした。

回線を繋ぐ間、ちよつと自分に「冷静になれ！」と説教をした。

たしかに写真のカオルは格好よかった・・・

でも逢ったことも見たことも無いのに・・・

なにを期待してるんだ！

変な期待をして浮かれるとレナと同じ道を歩むことになるんだぞ！

たかだか電話でちよつと話をしたくらいで好きとか

嫌いとかって感情がでるほうが変なんだ。

もつと冷静に普通の感情でいかないとダメだ！

そう自分に言い聞かした頃には回線はとっくにログインしていた。

チャット部屋に入るのを少し躊躇した。

なんとなくこのまま自分がカオルに対して好意的なことを
言われ続けたらきつと今よりもっとカオルのことが気になる存在に
なる。

そうなった時に自分で自分をコントロールできるものだろうか？
もしかしたらどっかの誰かさんのように暴走しないだろうか？

自分の中でカオルという存在はいままでと違う一段上にあがった
存在になってしまったような気がした。

そう思えばレナの心境もちょっと理解できそうな気がしてきた。

ただ漠然とモヤのような相手では無く、

あたしはカオルの容姿を知った上でなんとなく気になっているが、
でも世間の人から見るときつとこれはちょっと異色な
感情なのかもしれないな……

やはり恋愛というのは相手の目を見て、

相手の感情を受けながら「これは恋愛だ」と感じるもの
なんじゃないかと思う。

だから今こうしてドキドキしたり、
慌てたりしているのは恋愛感情とは違うものだ。

そう自分に言い聞かせ、自分で納得してから深呼吸をして部屋に入
った。

カオルとヤスとミライがいた。

二人つきりじゃないことに少しホツとした。

あたしが部屋に入るとカオルが「遅かったねー」と言ってきた。

その文字を見て「わ！二人にバレちゃう！電話していたこと！」と慌てた。

が、あたしが入室する前にカオルが二人に

「いままで電話をしていた」と話をしていたようだった。

<ヤス>「リオいつの間にカオルとそんな仲に？（笑）」

その文字を見てちよつと動揺した。

ヤスは冗談で言っているのに過剰に反応してしまう自分がいた。

<ミライ>「本当だよー いつの間に！ヒューヒュー」

ミライにまで冷やかされスツカリ慌てて必死に弁解をする為に、いままでに無いくらいのスピードでキーボードを打つ自分がいた。

「そんな仲じゃない！ただ今度北海道に来る予定が

あるからみんなで会おうって話をしただけ！」

「そんな気は無い！」

「逢つてもいない人に特別な感情なんか持てないよ」
などと連発している自分がいた。

そこまで真剣にならなくてもいいほどに・・・

あまりの過剰なスピードに3人は

「いや、、、冗談だから・・・」と素で冷めていた。

しまった。墓穴を掘ってしまった。
どうも調子が狂う。

レナのように思われたくない自分とカオルになんとなく特別扱いしてもらったと勘違いする自分とでテンパッっていた。

<ヤス>「大丈夫だって。俺はリオがそんな簡単に

落ちる女だとは思ってないって」

<ミライ>「もう冗談だつてばー（笑）」

<カオル>「そんなに嫌わなくてもいいじゃん！」

そう出されて冷静になった。

一人で熱くなっていたようで恥ずかしくなった。

誰も本気で言っていないのに、バカみたいにムキになってアホみただ。

<リオ>「なーんてね。あたしだって冗談だつてくらい分ってるよ」

と、慌ててフォローした。

そのフォローが成功したのか失敗したのかはわからないが、ひとまず空気は和やかに元の普通の空気になった。

カオルが近いうちに北海道に来るということで、

ミライも一緒に食事できることを喜んだ。

ヤスも自分の出張に合わせてくれるなら一緒に参加したいと言った。

一瞬、ミライに会ってカオルがミライに興味を持ってしまつかもな
・
・
と思ったが、それはそれで仕方が無いことだよなと自分に言い聞かせた。

別にカオルは誰の所有物でもなければ、
あたしと恋愛関係にある訳でもない。

男ならミライのようなほんわかした可愛さに
引かれるのは当たり前だと思った。

見るからに優しい雰囲気とおっとりした話し方。
理想の女性のように思えた。

あたしが男ならミライのような子を好きになると思う。

そんなことを考えながら1時間ほど4人でチャットをし、
ヤスが退室しミライが退室した。

また変なことを考えそうだったので、
慌ててあたしも「おやすみ」と出した。

そのまま急いで部屋を出ようとすると、カオルが話し掛けてきた。

<カオル>「なんか電話迷惑だった？」

<リオ>「そんなこと無いよ」

<カオル>「そっか。なら安心した。いやさ、、、」

俺ヤスにいろいろ吹き込まれてっっていうか

ちよつと実際リオのこと意識したって言っても

間違いじゃないんだよね

黙ってそのまま文字を見ていた。

<カオル>「でき。なんかノリで写真とか送ってもらったりしたんだけど、

もしも本当にリオが俺のことタイプっていうなら、ちよっと嬉しいかなって」

<リオ>「あー。うん」

どっちともつかない返事をした。

ここで「うん。タイプです」と言ったところで、どうしようというんだらう？

相手もどんな写真を見てタイプとか言ってるのかサッパリ分らないが、少なくともあたしはそんなに可愛い訳では無い。

困っていると、カオルが、

<カオル>「リオはレナみたいになるの嫌なんだよね？」

<リオ>「レナみたいって？」

<カオル>「逢ってもいないうちに盛り上がれないって

ヤスに言ったんだろ？」

<リオ>「それ変？たしかに写真のカオルは格好いいなーって思った。

けど、あたしは文字のカオルと写真のカオルしか知らない。

実際逢った雰囲気とかそんなの分らないのに
好きとか嫌いとかって感情は考え付かないんだよね」

<カオル>「それはわかるよ。俺もただ漠然としか思ってたんだ。」

けどさ、最近俺達って毎日チャットしてるだろ？

そうなるって普通の世界の人よりこっちの人のほうがいつも話しているだけあって自分のこと分ってくれそうなのがしてさ」

<リオ>「うん。なんとなくわかる」

<カオル>「けど、俺もレナみたいに一人で盛り上がるのも

格好悪いなって思うし一方的って好きじゃないんだ。だからちよつと俺に会ってみる気ない？」

<リオ>「それは今度北海道に来るってことでしょ？」

<カオル>「うん。それもあってさ。北海道言ってみようかなー」

<リオ>「そっか。でもさ、カオルってミライの写真見てないでしょ？

ミライも可愛いよ。そんなあたし中心に考えないほうがいいよ」(笑)

笑いのマークをだして本音を言った方がいいが、とても惨めな気持ちになった。

でも実際、みんなで逢うまでの間カオルのことを少なくとも特別な気持ちで見えしまう。

が、ミライに逢った瞬間にそっちに気持ちを持っていかれるカオルを目の当たりにするのは辛すぎる。

期待しないと言っても、それはちよつと無理な気がした。

こんな告白という言葉にカスリそうな発言をされて、それでも「貴方のことなんか全然気になりません」なんて言えないなと思った。

<カオル>「俺、ミライの写真も見たよ?」

<リオ>「え!どうやって?」

<カオル>「そこは男の連携プレー(笑)」

女性陣がない時に男ばっかで誰がいいとかそんな話したときがあっけさ。ハヤがデジカメ持っていくからその日のうちに速攻男性陣に写真送ることになってたんだよ

そんなことになってたなんて……

HPにアップされていないだけで、あたしとミライの写真は遙か海を越え

すっかり全国に飛んでいたようだ。

<カオル>「あのオフの日にハヤ帰ってすぐにチャット参加したんだよ」

<リオ>「嘘!だって結構遅かったんだよ?」

<カオル>「男の連携プレー(笑)」

<カオル>「それでミライの写真も見たよ。まあ可愛いね」

<リオ>「うん。可愛いなって思った」

<カオル>「男というのは、「タイプなの」と言われた女の
ほうが良く見えるもんさ(笑)」

<リオ>「はぁ……」

<カオル>「そんなんで、俺は結構リオのこと気に入ったからさ。
一度会ってみてよ。で、それからのことは会ってから
つてことで」

<リオ>「うん」

<カオル>「あれ？あんまり乗り気じゃないねえ(笑)」

<リオ>「あー いやそうじゃなくて。

なんかこーゆーのって不思議だなって」

<カオル>「なにが？」

<リオ>「逢ってもいない人に「俺も君のこと気に入った」
なんていわれるの」

<カオル>「確かにね(笑)」

<リオ>「なんか変な感じ(笑)」

<カオル>「俺もすごい変な感じ。でもなんとなく毎日頭に浮かぶ
んだよな。」

笑)
」

俺自分で「大丈夫か？」って思ったときもあったよ)

<リオ>「それわかるー！ あたしもそう思ったもん」

<カオル>「そうしたらヤスが会ってしまえばなにも変わらないってさ」

<リオ>「確かにそうかもね」

<カオル>「俺も自分で自分が大丈夫か確かめるのもあって会いに行く(笑)」

<リオ>「うん。わかった。楽しみにしてるよ」

<カオル>「もし逢ってみてなにかが違うと感じたらハッキリ言ってくれよ。」

勘違い野郎になるのキツイから」

<リオ>「うん。そっちも言ってるね。」

あたし写真で見るほど優しくないから(笑)」

<カオル>「OK!じゃあさ、俺みんなに会うより先にリオのところ行っていい?」

<リオ>「え?どうゆうこと?」

<カオル>「いや、みんなに会う前の日に北海道に入るから、二人で先に会わない?」

それは考えてもない展開だった。
いきなり二人きりと言ってもヤスと会うのとはまた違う。

<リオ>「うーん……」

<カオル>「俺って信用無いのな（笑）」

<リオ>「いやそうじゃないけど、、、なんとなくー」

<カオル>「なんとなくになに？」

<リオ>「わかんない。でもなんとなく会うのが怖いっていうか・
」

<カオル>「なんで？お互い顔知ってるんだし。あ、もしかして身の危険感じてる？」

<リオ>「いや、そうじゃないけど」

<カオル>「大丈夫だって。もし不安なら俺のスペック全部送るか
らさ。」

住所から職場からなんなら実家の電話番号も住所も。

で、俺に会う前に第三者にそれ渡しなよ。なら大丈夫
でしょ？」

<リオ>「なにもそこまでしなくても……（笑）」

<カオル>「俺、なにげに普通に言ってそうだけど、毎日このこと
ばかり頭にあってさ、

俺どっかおかしくなっちゃったんじゃないかと思うく

らい。

だから早くこの件は解決したいんだよ」

<リオ>「解決って・・・」

<カオル>「ヤスの野郎が変に吹き込むからすっかり調子狂ったよ
(笑)」

<リオ>「わかった。じゃあ先にカオルに会うよ」

<カオル>「よかった。じゃあ明日ヤスと休みの調節するよ」

<リオ>「うん。わかった」

<カオル>「リオ」

<リオ>「ん？」

<カオル>「なんか俺の都合ばかりでごめんな」

<リオ>「そんなことないよ。ちょっと戸惑ってるだけ」

<カオル>「やっぱちょっと変かもな(笑) ニーユーのって」

<リオ>「そうかもね(笑)」

そしてその日のチャットは終了した。

カオルはあたしのことが好きと言うより、

今自分がどうすればいいのか分らないからもがいているようにもあ

った。

その感覚があたしにも分る。実際会った人でもないのに気になるなんて

TVで見た芸能人を好きだという感覚に少し似ている。

そしてその芸能人が「俺もちよつと気になる」と手紙をくれたような感じがする。

その芸能人のことは好きだが、

それが本当に好きかわからない・・・そんなやり取りのような気がする。

それはとつても不思議でそれでいて手を伸ばせば触れるくらい近いような気がした。

そこは芸能人と一般人の違いでもあった。

これでカオルに会えば、このモヤモヤは解決するのだろうか・・・口では言えない不安な気持ちのまま、モニターを黙って見ていた。友人にこんなことを言っても変な顔をされるだけだろうし。

「インターネットの人と会うの？怖くない？」ってきつと言われる。ネットをしていない人にはこのことは未知の話だろうから絶対相談はできない。

しても気持ち悪いと言われるだけだろうし・・・

それから3週間後。

カオルから電話がきた。

「もしもし。あ、俺だけど」ちよつと照れたように電話をしてきた。

「うん」今ひとつ緊張して話の続きが出てこなかった

「あ。今週末に休みとれたんだ。金曜から日曜まで。

で、木曜の夜に飛行機で行こうと思うんだ」
カオルも緊張しているようだった。

「うん。わかった。時間空けて迎えに行くね」

「おう。わかった。じゃあ木曜な！詳しい時間はメールする」

短い用件で電話は切れた。

その日、ドキドキしすぎるのとウツカリ墓穴を掘りそうなのでチャットをするのをやめた。

飛行場にて

水曜日の夜。

ヤスから電話がきた。

「あ……俺。金曜なんだけど何時にどこにする？」

「ヤスはその日何時ならいいの？それに合わせてそっちに行くからヤスが決めていいよ」

カオルが木曜に遊びに来ると聞いて、あたしは金曜に休みをとった。まだ詳しい予定は決めていないが、有給がたまっているのも事実だったし、のんびりと札幌の街を買い物したいのもあり、金曜日は早い時間に出発しようと思っていた。

カオルと一緒にいくのかどうかは、まだ未定のままになっていた。とりあえず明日来ることは確認したが、到着後どうするのか、どこに泊まるのか、次の日どうするのか、なにも聞けずにいた。なぜか分らないが聞けなかった。

「カオルどうすんのかな？」そう言われて心臓がドキリとした。

「さ、さあ？ヤス聞いてないの？」

「さつき電話したんだけど、金曜の時間と場所を覚えてくれたらなんとか行くよ……って言った。だから早く決めたほうがいいかなーって」

ヤスもやっぱり知らないんだ・・・

ペラペラ言う人は信用ならない。けど、こんな密会のようなのもそれはそれで気になる。

ヤスも木曜から北海道に来ているらしい。
相変わらず飛び回っているんだなあ。

「リオ木曜は何時に仕事終わる？俺、結構近くにいるから飯でも食うか？」

よりによって木曜日って。

「木曜はちよつと無理かな・・・仕事遅いからできるだけ自然な感じで嘘を言った。

「あ。そうなんだ？じゃあダメだな」

「うん。ごめんね」

別に嘘をつくことは無い。

けど、言うものちよつと後ろめたい。

ただ、レナのことがあったから同じように思われるのも嫌だった。

木曜までにヤスの仕事の都合によって時間を決め、連絡をくれるということで話は終わり、あたしはなんだかヨソヨソしい感じで電話

を切った。

その日、夜チャット部屋に入ると結構な人数がいた。

札幌のメンバーはまた週末に会えることに盛り上がり、関東や関西も「俺達もまた飲もうぜ」のような話をしていた。

そんな中、カオルとヤスは金曜日の打ち合わせを二人でしていた。

みんなの話よりもあたしの目は自然にカオルの出す文字を見ていた。ヤスにカオルは「金曜の昼くらいには着くよ」と言つと「ならリオに拾ってもらえばいいんじゃないか？」と言つてた。

<ヤス> 「なありオ！時間合わせてカオルを空港まで迎えに行つてからこつち来てやれよ」

<カオル> 「リオがいいならお願いしようかな」

<リオ> 「あ、うん。いいよ。時間教えて」

<ヤス> 「金曜はそのままこいつ等来ないかもなあ」

<カオル> 「行くから!!」

<リオ> 「行くから!!」

<ヤス> 「そんなに同時に同じ言葉ださなくても・・・」

<カオル> 「じゃあ空港で拾ってもらってまっすぐ行くよ」

<ヤス> 「そうだな。合流したら俺の携帯に連絡くれよ」

その流れを見て、部屋のみんなも「いいな」北海道いきでえ」などの話になり、場は和やかに進んだ。

どんなにみんなが盛り上がるうとも、あたしは明日のことを考えるとなんともいえない気分になり、ドキドキした。

その日はいまいち気分がノレず、AM1時前には落ちた。

木曜日当日。

仕事が終わると、急いで空港に向かった。

到着は8時20分。

早く来すぎて7時40分には空港に到着していた。

なにもすることが無く、おみやげ売り場をウロウロしたり到着ロビーの辺りで時間を潰した。

どんどん到着する飛行機の案内板を見ていたが、一向にカオルの乗った飛行機は到着しなかった。

しばらくして案内板はカオルの乗った便が到着したことを表示した。途端に落ち着かない気分になり時計を見たり、前髪が変じゃないか？化粧は大丈夫か？などと慌ててチェックした。

5分くらいしてパラパラと同じ飛行機に乗っていたであろう乗員が

降りてくる度に
出口の自動ドアが開き、次第に心臓が痛くなった。

羽田から千歳という短い距離もあり、大きな荷物を持った人は少なく、ラフな格好の人もしばしばスーツの人もいた。
家族連れやカップルの姿もあった。

だんだん出てくる数も少なくなり、いくら待ってもカオルの姿は見えなかった。

「もしかしたら、、乗らなかったのかも」

しばらく待つてみたが、ほとんどの人が降りきってしまったのか自動ドアも開かなくなった。

でも不思議と腹が立つということは無く逆に少しだけホッ・・としている自分がいた。

来ないなら来なくてもいいか……

そんなことを考えていた。

出口の横に大きな水槽があった。

たくさんの魚がクルクルと泳いでいた。

ガラスを触り軽く指でコンコンとガラスを叩き寄ってこない魚を見ている。

ふとガラス越しに人の影が見え、振り返るとそこには本物のカオル

が立っていた。

「遅くなってごめん。荷物が出てこなくてさ」

そう言ってニッコリと笑った。

「もういないかと思ったけど、一人だけポツンといたからすぐわかったよ」

「あ……うん。乗ってないのかなーって思ってた……もう帰ろうと思ってたんだ」

目の前に本物を見て、自分で何を言ってるのかわからなかった。

「えーと、矢吹薫です。て、自己紹介なんかいらさないか」

「あ、、吉本まゆです。あたし本名言ってなかったよね」

「え？リオって本名じゃねーの？まゆって全然違うじゃん」

「あ。子供が女の子ならつきたい名前で、、本名はまゆって、そんな話はいつか！」

こんな時、ハンドルネームは恥ずかしい。

中にはちゃんと自分の名前を使ってる人もいるんだろうけど、「まゆ」なんて平凡な名前は自分でもあまり好きじゃない。

「リオって呼ぶ？まゆって呼ぶ？どっちがいい？」

いきなり本名を呼び捨てにされ、一瞬にして汗が出た。

「ど、どっちでも呼びやすいほうでいいよ」

「うーん・・・で、ここで立ち話もなんだから、飯でも食う？腹減っちゃったよ。行こうか！」そう言っただけでカオルは歩き出した。

駐車場に着くまでの間、緊張して言葉がうまく出なかった。

カオルはそんな素振りも無く普通な感じペラペラと話をしていた。

間近で見たカオルは思ったよりも背が低い感じがした。

低いといっても175前後なんだろうけど、あたしがヒールを履いていたからかもしれない。

トランクに荷物を乗せ、とりあえず空港を出た。

「なにが食べたいの？あたしこの辺はあまり知らないんだけど
実際、この地域でのお店なんかどこも知らなかった。」

「あー。なんでもいいよ。道路際のレストランかどっかで
そう言っただけのファミレスを指差した。」

「いいの？せっかく北海道来てファミレスで？」

「いいよ。俺ファミレス好きだし。それに明日の夜はヤスがきつ
と海の幸を予約してんだろ。それまで待つさ。」

そのままファミレスに車を停めた。

玄関に向かう道でカオルは

「今日はありがとな。結構遠いんだろ？」とちょっと申し訳なさそうに言い出した。

「ううん。いいの！いいの！たまに空港も楽しかったよ」
嘘では無かった。夜の空港は来たことがなかったしなかなか綺麗だった。

店内に入り、一番端の席に座り、いざ向き合おうとちょっと緊張した。

「あの、、逢った感じなんか違う？」心配そうな顔をしてカオルが聞いてきた。

「ううん。そんなことないよ、写真通りだった」
そう言っただけで笑った。それは本当のことだった。
優しいような笑顔も線の細い体もそのままだった。

「そっか。俺も同じ感想。思ってた通りの感じ」

そう言っただけで二人で笑った。

「あー。疲れた・・・仕事が大引いて飛行機ギリギリでさ、乗り遅れるところだったよ」そう言いながらカオルはメニューを見た。

「そうなんだ？じゃあ明日の朝のほうがゆっくりできたね」

「いや。明日じゃゆっくり話できないじゃん。もうすっげえスピードで仕事片付けたよ。ヤレばデキル子なんだ。俺」

「いつもヤラない子なんだ？」

「そんなことないから！」

お互い笑って話はしているが、どことなく緊張していた。少なくともあたしは。

カオルは「ビールを注文していいか？」と聞いてきた。あたしはあまり飲めないほうだし、飲むと眠くなるからどーぞ飲んでと言った。

「それともどっか泊まるとこ決めてから二人で飲む？」いきなりそう言われて驚いた。

その驚いた顔を見て、慌ててカオルは「いや！一緒に泊まるんじゃないかってリオも今日はどっかホテルに泊まるんだと思ったからさ、家遠いんだろ？」と慌てて一気に話した。

「カオルどこ泊まるか決めてるの？」

「いや。こつち着いてから決めようと思ったんだけど・・・」

「こんな時間から泊まるとこある？」

「あるだろ？野宿ってことは無いだろ」

たしかにそうだとは思っけど。

空港の近くとあってビジネスホテルはそれなりにあった。

「じゃあ、チエックインくらいは早くしないとね」

「うん。そうだな・・・」

ビールを一杯だけ飲んで、あとは軽く食事をしてファミレスを出た。

そこそこ大きそうなビジネスホテルの外観を見て隣で同じようにホテルを見上げるカオルに声をかけた。

「ここは？結構綺麗かもよ？」

「そうだな。リオも泊まるだろ？俺金払うからさ」

「いいよ。自分の分は自分で出すから。ビジネスなんだからそんなに高くないだろうし。気使わないでよ」

「いいってば！俺が無理言っただから俺が出すって！」

「いいよ！自分で出すから！」

かなり長い時間車の中でワイワイともめたが、いつまでたっても話が終わらないので、とりあえずフロントに行った。

そこでシングルを二つと頼むと時間が遅かったのもあり、ダブルの部屋が、ツインしか残っていないといわれた。

もめた意味が無くなったような気がした……

「どうする？他行く？」と聞くカオルの向こうに不思議そうなフロントマンの顔が目に入り、なんだか気間ずくなくなった。

「あ。じゃあツインをお願いします！」フロントマンの目に耐え切れずについ口から出てしまった。

驚いたカオルの顔をよそにキーを受け取り、エレベーターに向かった。

「え？え？いいの？ツインで？他のホテルでもいいよ？」とオロオロしたカオルを見てフロントマンの話をする

「別にいいじゃん。どーせもう会わないんだしー」と言って
ゲラゲラ笑った。

ホテルの部屋に入るとコジンマリとした部屋だった。

経費を浮かす二人連れの出張マン用という感じがした。

「とりあえず・・・コンビニでも行こうか?」そう言って
振り返るとベットをジッと見るカオルが慌ててこっちを向き

「うっ、うん!行こう!コンビニ行こう!」と言った。

「あかさ、、ナイから・・・」

「わかってるよ!」

コンビニでお菓子やビールを買い込み、アレもコレもと必要以上に
買い込んだ。

コンビニを出てからカオルが「あ!歯ブラシ忘れた!」とまた
コンビニに走りこんで行き、その姿を見ながら外で待っていた。

そこに携帯が鳴った。

着信を見るとヤスだった。

「もしもし?ヤス?」

「あ。俺。明日カオル何時だつて？」

「んー。昼かな？1時に空港に行くことになったよ」「そう言つと

「そつか。俺5時には仕事終わるから待ち合わせしようぜ」

「うん。5時にどこ？」

「いやーお待たせ！よくよく考えたら歯ブラシなんかホテルにあるよな。仕方ないからビール買った！」

カオルが後ろから突然話し掛けてきた。

「あれ？今の声・・・カオル？」

なんて耳のいいヤツなんだ、、、ヤス。

「そんな訳ないじゃん。通りすがりの人だよ」慌てて言った。

「そつか。じゃあ、明日5時に駅前でいい？カオルもリオも俺と同じホテルでいいか？いいなら予約しとくぞ？」

「うん。いいと思う。お願い！じゃあ明日ー」
大慌てで電話を切った。

そんなに急いで電話を切ること自体怪しいとも思ったが、切った後、カバンの中に携帯を押し込んだ。

「ヤスだったの？わりいゝ俺の声バレた？」

「うーん・・・大丈夫だとは思っけど、」

そう言った矢先、今度はカオルの携帯が鳴った。

「うわ！ヤスだ！どうしよう」

「やっぱりバレたかなあ・・・」

「もしもし？あ。ヤス？」目を泳がせながらカオルが電話に出た。

「いや。違っつて！あーいや、、、そうじゃなくて」

向こうの内容はわからないが、確実に疑っているようだった。

すると今度はあたしの携帯が鳴った。

着信を見ると知らない番号だった。

するとカオルがこっちを見て「もうダメだ・・・」と言うように首を振った。

「え？なに？」という顔でカオルを見ると電話口を押さえて

「それヤスがホテルの電話からしてるんだってさ・・・」

あたしの着信音はカオルの携帯を通じてヤスに聞こえているらしかった。

「あー。そうだよ。今リオと一緒にいる。うん、うん、うん。
わかったってえ……んじゃ明日な。おう」

そう言っただけカオルはヤスの電話を切った。

「バレちゃったね……」

「だな……」

「ま。仕方ないね。バレたもんは」

「だよな。仕方ねーな」

そう言っただけと笑って帰り道を歩いた。

隠し事をしているといふ後ろめたい気持ちがちよつと軽くなった反面、

明日ヤスに会った時の言い訳をお互い歩きながら考えていた。

暗闇恐怖症

ホテルの部屋に入り、シーンとした空気の中とりあえずソファーに座った。

空調が悪いのか部屋の温度が妙に暑く感じた。

「あー。俺、着替えようかな。仕事からまっすぐ来たしさ、汗もかいたし、シャワー入っていいかな？」

「あ、どーぞ。TVでも見てるからものすごくお互い変な間で会話をしていた。

「あ！それともお湯溜めておく？その後入るなら？」

「いやいや！シャワーでいいから気にしないで！」

「そ、そうだよね！じゃ、じゃあ、、、お先に」

カオルはバタバタと鞆から着替えを出し、トイレとシャワールームが一緒になった洗面所に消えていった。

しばらくするとかすかにシャワーの音がしてきた。

ドツと疲れた。

念のため、今日のうちに札幌に行くかもと考えてある程度の荷物を用意してきてよかった。

それよりも、本当は明日ミライの家に泊めてもらおうと

思っていて、ミライにはそう伝えたのに
ヤスの電話に慌ててホテルを予約してもらってしまった。

いまさらヤスに電話しづらいなあ。
ミライにも断りづらいし。

ソファーに倒れこむように横になり
「あ〜〜疲れた〜」と体を伸ばした。

伸ばした手にさっきコンビニで買った袋があたり
中の冷たいビールの缶が触った。

「あ・・・冷蔵庫に入れなきゃ」

ガサガサと袋の中身を出し、ビールやお茶を冷蔵庫に入れようとし
た。

もう一つの小さな袋を見つけ

「あ。さっきカオルが歯ブラシって行った時のだ」
歯ブラシは不要だと思い、またビールを買ったというのを
思い出し一緒に冷蔵庫に入れようと中身を出した。

その作業が終わるとなにもすることが無くなり、
TVをつけた。

時間も時間だし、さほど面白そうなものも入っていないかった。
ニュースをボケーと見ていたらカオルがシャワーから
出てきた。

「狭いから暑い！暑い！」そう言って頭からタオルをかぶり
Tシャツと短パンの姿でベットの腰掛けた。

さつきまでのスーツ姿と違い、途端に若いお兄ちゃんのようなカオルを見て

やっぱり歳相応なんだなと思った。

「あ。シャワー入るならいいよ。でもまだ中が暑いかも」

「うん。もうちょっと後でいいよ」そう答えたが、本音はいきなりスツピンでうるつく勇気が無かった。

さほど化粧を落としても変わりはないと思っていても、なんとなく抵抗があった。

どーせならカオルが寝てしまった後に入ろうと思った。

「じゃ。とりあえず乾杯しようか」そう言って冷蔵庫からビールを2缶だして手渡してくれた。

でもあたしはお酒が飲めない。

ここで断るのも悪いかと思い、一口だけと思ってプルをあけた。薄いアルミ缶がぶつかる音で乾杯をし、飲んだ。

「うわ。につが〜」

顔をしかめてマズそうな顔をした。

「マジで飲めないんだ？飲めそうに見えるのにな」
そう言ってカオルは美味しそうにビールを飲んだ。

それからいろんな話をした。

カオルの仕事のこと、いつもヤスと電話してること、他にもチャットでは分らない裏の話。

そんな話をしているうちに、飲めないと言いながらもあたしはなんとか1缶ビールをあけた。

なんとなく見つめられると何をしていいか分らずとりあえずビールをチビチビと飲んでいるうちに空けてしまった。

今でこそお酒は飲まないが、昔は飲めるのが格好いいと思いマズイと感じながらもお酒を飲んでいた頃、アルコールが入ると頭が痛くなるか眠くなるかのどっちかだった。

どちらにしてもこの後、そうなってしまおうとシャワーに入るのが無理な状態になるので、こころでシャワーに入ると伝えた。

なんとなく酔っていると感じていた。

もうスッピンでもいいや！そう思う所に酔いを感じた。

「おう。俺はTV見てるからごゆっくり」とすでにビールを3缶あけながらカオルはニコリと言った。

着替えを出そうと思いバツクを開けても動きが遅い・・・ヤバイ・・・絶対酔ってる。

なんとか用意をしてシャワールームに入った。もうすでに眠くなっていた。

簡単に化粧を落とし、髪を洗い、体を洗った。だんだん立っているのが辛くなり、バスタブに座り込み酔いをさまそうとした。

しばらくして、、、

「大丈夫か？倒れてないよな？」

その声に目が覚めた。

気がつかないうちに寝てしまったようだった。

シャワーカーテンごしにカオルの声が聞こえた。

その声にすっかり酔いは覚め、というかたぶん少し寝たから酔いが覚めたんだと思う。

「あ、大丈夫。大丈夫だからカーテン開けないで！！！！」
バスタオルもカーテンの向こうだし、こっちにはタオル一枚しか無い事実にかなり慌てた。

「いや。開けないって！1時間も出てこないから倒れてるかと思っただけで、大丈夫ならいいよ。悪かったな」
そう言っただけで、カオルがドアを閉める音がした。

そうか、、、1時間も経ってたのか。

そりゃ「大丈夫？」とも言いたくなるよな。

お湯が温かったとは言っても、かなり逆上させた状態でシャワールームを出た。

「ごめん。実は寝てた」

そう言っただけでカオルを見ると「やっぱりな」と笑われた。

冷蔵庫からお茶を出して、

「やっぱりこっちのほうが美味しいや」

そう言つて、ペットボトルの半分くらいを一気に飲んだ。

酔いが覚めたおかげでお風呂上りに眉毛を書く余裕もできた。

少し寝たので眠気も飛びさつきより元気になった。

1時間も経っているならカオルはどれだけのビールを飲んだのだらう？

そう思つて空き缶を見た。

カオルは4缶目を飲んでいた。

「あれ？あたしがシャワーに入る前つて3缶飲んでたよね？

全然あれから飲んでいなかったの？」そう聞くと

「実は俺も疲れて寝てたんだ」そう言つて笑つた。

「で・・・起きたはいいけど時計見たら1時間経ってるし

リオは出てこないし・・・で、声かけたつて訳」

お互い眠気も酔いも覚め、ゆっくりTVを見ながら
いろんな話をした。

そのうちTVも放送が終わるチャンネルがでてきて
カオルがリモコンで他のチャンネルを入れていた。

あたしはコピーしたTV欄を見てまだ放送しているチャンネルを
探していた。

途端にTVから変な声が聞こえてきた。

パツと顔をあげるとそこにはAVビデオが入っていた。

慌ててリモコンで違うボタンを押そうとしてアブアブする

カオルは慌てすぎてリモコンを落とし、延々と部屋の中には

「ああ〜ん」とAV女優のあえぎ声が響いた。

結局気まずくなり、そのままTVを消してしまった。

気まずい上に静かすぎる空間が可笑しすぎて笑いを隠すのが大変だった。

「そんなに慌てなくても……」

「あ……でも変な空気になったら困るだろうと思って……」

時計を見るともう3時を過ぎていた。

「ここってチェックアウト何時なんだろう？」

そう言いながら案内の紙を見た。

チェックアウトは10時。朝食は6時から9時と書いていた。

「そろそろ寝ようか。たぶん昼には札幌に着くから

どこが見たい所あったら案内してあげるよ」

「そうだな。そろそろ寝ないと明日起きれないな」

そう言ってお互いベットに入った。

どっちにしろまだ眠くはなかったし、こんな状態ですぐには眠りにはつけそうもなかった。

薄暗い部屋の中で物音ひとつしないシーンとした空間が更に緊張した。

お互いの息遣いすら聞こえるほど静かだった。

そのままどちらも話をせず、30分ほど過ぎた。

「明日さあ……」

てつきり寝たと思ったカオルがいきなりしゃべったので驚いた。

「わ。まだ起きていたんだ？静かだから寝たかと思った」

そう言いながらカオルのほうを向いた。

カオルは天井を見たままの姿勢だった。

真っ暗は怖かったのでドアの入り口の所の

スポットをつけておいてもらったので、かろうじて微かに

カオルの顔かたちが浮かんで見えた。

「明日ヤスに会ったらなんて言おうか？」

すっかりヤスのことを忘れていた。

「うーん……とりあえず別々の部屋に泊まったっていうことに

しておこうか。多分同じ部屋に泊まってなにもなかったって

言っても信じないだろうしね」

「だよなあ……信じないよなあ……」

そう言いながらカオルは体の向きをこっちに向けた。

お互い微かに見える程度の中で相手の目を見ていた。

ハッキリは見えていないと分かっていてもなんとなく見られているだけで緊張した。

「あの、、おやすみなさい！」

そう慌てていい後ろを向いた。

これ以上、見つめているのも見つめられているのにも耐えられなかった。

「うん。おやすみ」

カオルもそう言った。

窓の外ではたまに車が通る音が聞こえた。

その音をしばらく聞いていた。

それ以外の音はなにも聞こえなかった。
しばらくして、

「もう寝た？」後ろからカオルの声がした。

ドキツとしたが、何も答えずそのまま寝たフリをした。

パチンツ！

とたんに部屋が真っ暗になり驚いた。

寝る時は部屋が真っ暗だと怖くて眠れない。

寝たふりをした以上、我慢して目をギョツと瞑った。

けど、いざ真つ暗になると頭の中は怖い映像ばかりが浮かび背筋がゾワゾワした。

幽霊とか見たことは無いけど真つ暗だとでるような気がしてならぬい。

おまけにここは自分の部屋ではないホテルの一室。よくTVで見る幽霊体験談はこんな部屋で起こる。

そんなマイナスなことばかり考え怖くてドンドン目が冴えていった。

「カオル……起きてる？」

そう聞いてみたが返事は無かった。

体の向きをカオルのほうに向け、目をこらして見たが見えるのは暗闇だけだった。

「ねえ……もう寝た？ねえってばー」

全然返事が無い。

高所恐怖症や閉所恐怖症があるように、あたしはきつと暗闇恐怖症なんだと思う。

どンドン怖い気持ちが大きくなり、ベットから起き上がった。

でもジーと一点を見つめると見てはいけないモノが見えてしまいそうで怖くて見れない。

手探りでベットを抜け出しスイッチを探した。

けどどこを触ってもスイッチらしいものは無かった。

あまりに怖くなって静か々にカオルのベットに近づきソッとカオルのいるであろう場所に手をやった。

布団の盛り上がりを感じ、やっと落ち着いた。

そのままベットの空いた所に座った。
目が暗闇に慣れるようにと目を瞑ったが、あまりに真っ暗すぎていつまで経っても見えるのは暗闇だけだった。

「え？なにやってんの？」

カオルの声が聞こえた。

「あの、、、真っ暗だと怖くて寝れない、、、の、、」

そうは言ったが、実際とても怪しい自分の行動に誤解されそうで慌てた。

カオルはあくびをして「ほら。いいよ」と布団を捲くった。

「え？」一瞬なんのことかわからず黙っていた。

「怖いんですよ。いいよ隣で寝ても」

そう言っただけで自分は壁のほうに体を動かさず、あたしが一人入れるくらいに

スペースを空けてくれた・・・ような気がした。
暗くて見えないが体を動かす音でそう思った。

「いや！いいよ！そんなつもり無いから！」

そう言っただけで自分のベットに戻ろうとした。

「大丈夫だって。ただ寝るだけだから」

そう言っただけで腕を引っ張られそのまま空いたスペースにコロリと寝かされてしまった。

犬でも布団に入れたようにパサッと布団をかけ

その布団の上に手を置きポンポンと寝かしつけられた。ドキドキしたが、カオルはそれ以上はなにもしないでスースーと横で寝息をたてた。

「わー どうしよう〜」と思いながらも隣でこつもあっけなく寝られてしまつと出るに出不れなくなった。

ここで布団から出て自分の布団に戻ったところでさっきのように暗くてドキドキするなら、このままここで眠ってしまおうか？

いや。でももしも……

いきなりなにかされたとしても、こんな状態じゃ抵抗することもできない！むしろ合意だと思われてるかもしれないし……

身動きひとつしないで体を硬直させそのままジツとしていた。

最初こそ緊張していたが、こっちの緊張をよそにカオルはしばらくすると寝返りを軽くして本気で寝ているようだった。

拍子抜けでは無いが、本当になにも起こらないと感じにソロ〜と顔を横に向けカオルのほうを見たが聞こえるのは気持ちの良さそうな寝息だけだった。

「本当に寝たんだ……」

そう感じるとドキドキしてるのがバカらしくなった。

シートを通して伝わる人の体温が温かくそのうち眠気が襲ってきた。

そして知らない間に眠ってしまったようだった。

目が覚めた時に隣にカオルはいなかった。

時計を見ると7時半だった。

ベットから起き上がるとソファで煙草を吸いながら新聞を見ているカオルがいた。

「おはよ。まだ寝ていいいよ」

そう言ってニッコリ笑った。

「あ。ごめん、、あたし寝相悪かった？」

「いや。ぜんぜん！なんか目が覚めちゃっただけ。

それとも起きて飯でも食いにいく？」

「あ。うん。用意するね」

そう言って洗面所に行った。

あれは夢だったんだろうか？

いや、確かに起きたのはカオルのベットだったし……

簡単に用意をして朝食を食べに部屋を出た。

初めての夜に・・・

無事にチェックアウトを終え、車は出発した。

北海道の道を運転してみたいとカオルが言ったので
運転はカオルに任せた。

高速に乗らずに国道を思いのんびりと車を走らせ、
いつもなら車が混んでいてイライラするはずの道も
今日はなんだか楽しい気分ですに乗っていた。

ヤスとの待ち合わせにはまだかなり時間があり、
ミライは仕事が終わるまでなので直接待ち合わせ場所に行くとい
カオルが入っていた。

「どこか行きたい所ある？まだ時間あるし」
そう聞くとカオルは

「そうだなあ・・・ホテルに車停めて街に出ようか？
チェックインには早いけど荷物とかもあるし、
そのほうがゆっくりできるよな。ヤスに電話してみよう」

ヤスに電話するのはちょっと気まずい感じだったが、
ホテルの場所も名前もわからないので、仕方なく連絡を試みた。

「もしもし。ヤス？今大丈夫？あのお、思ったより早く着くから
ホテルに車停めたいんだけど、住所教えてくれる？」

なにをツツこまれるかドキドキしながらいつもより優しい口調で聞いた。

「えーと。住所は……あ。ごめん、今営業先でさ、折り返し連絡するよ。ごめん」

そう言っただけで電話は切れた。

よかった……

ニヤニヤと話をアレコレ聞かれると思ったので仕事ですぐ切ってくれたことがありがたかった。

「今、仕事でさ。折り返し連絡くれるって」

そう言っただけでカオルは「そっか」と言い煙草を吸った。

「で。どうする？」

煙草の煙を少し開けた窓のほうに吐きながらカオルが言った。

「ん？」

「俺達のこと。どうする？」

「どうするって？なにが？あ！ヤスの言い訳ね。えーと……」

「いや違う。俺と付き合ってみる？それともやめとく？」

いきなりそんな話題を振られると思っていなかったのが驚いた。

「付き合ってみる？……って……カオルは？」

「いや。俺はOKだよ。でもリオはなんとなく昨日とかも」

俺のこと警戒してるからさ。だから嫌ならしつこくはしない」

警戒と言われても、、、
先に寝たのは自分のくせに。

「そんなに警戒してるように見えた？だって先に寝たのは自分のほうじゃない。あたしなんか、、、どうしていいかわからなくてしばらく寝付けなかったのに、、、いや、寝たけど、」

まともにカオルの顔を見ることができないまま、何も無い外の景色を見ながら言った。

「俺。昨日寝てないよ、、、」

「え？嘘ばかり！すぐ寝てたじゃない！」

「寝れるかよ、、、あの状態で。お前は男を分かってないなあ」

そう言われてカオルの顔を見たら、確かに目が充血してるようにも見えた。

「運転交わろうか？少し寝たほうがいいんじゃない？」

「いや。結構大丈夫だからいいよ」

「どうして寝てないの？狭かったとか？」

てつきり熟睡してると思っていたので、途端に心配になった。

「あのさ、、、普通隣に女が寝ていて熟睡できるかよ、、、

普通は寝ないだろさ、、、あんな状態で！」

「だって、、、寝るだけ」って言ってたし。

寝息も聞こえたからってつきり、、、

「ここに寝てください。襲いますからつて言える状態だった？
ったく、、、あれからコソソリ起きてベッドの頭の電気を
つけたら安心したような顔してスースー寝てる顔見て襲えるかっ
て」

「あ・・ごめん。でも、、、カオルはそんなことするようには
見えなかったから、、、なんとなく・・・」

「俺がいい人でよかったですね。悪い男なら大変だったぞ。
写真撮られて金まで強請られるぞ。まったく」

敬語がちよつと皮肉っぽかった。

「ほら。やっぱりそんなことする人じゃないでしょ？」

「ったく、、、もしも襲つてたらどうすんだよ！」

「そうだなあ・・・あの場では断れなかったかなあ？」

「マジで？もしかして待ってた？」

「待つてはいない！けど、、、ん、、、わかんないや」

「なんだそれ」

そう言いながらクスクス笑った。

けど実際は、なにかあると思っていた。

でもあっけなく何も無かったことで、あたしはカオルのことをちよつと信用した。

すぐヤリたがる男ではないのだと。

もしかしたら間が悪いだけの人かもしれないけど……

「カオルがいいなら、付き合ってみようかな」

まだそれほどカオルのことを知っている訳じゃないけど、見た目も雰囲気も悪く無い。

実際、逢ってしまえばもう普通の出会いだ。

知り合ってから期間を考えれば、もう1年以上になる。

そして一番にこんな遠くまで逢いに来てくれたことに内心感動してる自分もいた。

飛行機で1時間半も離れた所にいる人が、あたしなんかの為に来てくれた。。。

そのことに実は物凄く感動していた。

「ん。じゃ彼氏ってことでよろしく」

カオルのポツポツと話す話し方が好きだ。

必要なことしか言わないこの言い方が。

いつもニコニコしている目も好きだ。

きつとこれからもつと良いところが見つかるんだと思う。

こんな付き合い方は初めてだけど、これもまあいいか。

ヤスからホテルの住所の件でメールが入った。
まだ取引先にいるみたいで、電話ができなかったようだった。
その住所を頼りにホテルを探して車を走らせた。

街中が少し渋滞していることもあり、ホテルに到着したのは
1時少し過ぎていた。

「まだチェックインには早すぎるよね？どうしよう・・・」

そう言いながら、車だけでも停めさせてもらえないか聞くこと
ということになりフロントに行った。

受付の人は名前を言うと手早く予約の紙を見て

「田中様からお伺いしております。チェックインも少し早いですが
よろしいですよ。こちらの宿泊カードにお記入ください」と言い
部屋の鍵の用意を始めた。

後ろで見ていたが、自分の分も書こうとカウンターに行くと

「いらっしやいませ」とだけ言われ、あとはニコニコしているだけで
あたしにはなにもアクションを起こしてくれなかった。

「あの、、あたしの分のカードは？」

そう聞くと受付の人は「あ。お一人様の記入で結構です」とだけ言
い鍵を渡してくれた。

「では。お部屋は708号室になります。お荷物は係の者が」

そう言つと愛想の良い係の人が荷物を持って来て部屋に案内してくれようとしていた。

「えっ？あの、、あたしの部屋の鍵は？」

「え？田中様からは一室だけと聞いておりますが……」

もう一室必要でしょうか？ダブルと聞いておりましたが？」

また不思議な顔をされた。。。

横からカオルが

「あ。いえ。いいんです。一室でいいです。すみません」

そう言つと手を引いてエレベーターに係の人と一緒に乗った。

部屋に着き「何かありましたら。フロントにご連絡ください」と係の人は荷物を置き帰っていった。

パタンとドアが閉まった。

あたしは何も言わずに黙っていた。

「マズかった？」

そう言つてカオルがこっちを見た。

「もしかして、、昨日の時点でヤスと話をしたとか？」

「いや、、その、、なんていうか、、ヤスが勝手に

「ダブルで予約しとくからよ！」って言われてさ、、

あの場で断る時間もなくて、、うんって言っちゃって

「そうなんだ……最初からそのつもりだったんだ」

なんだか二人にハメられた感じがしてちよつと腹が立った。

黙ったままのあたしを見てカオルは慌てて
「もし嫌なら俺ヤスの部屋に泊まるからさ。そんなに怒るなよ」
と言い、バツの悪そうな顔をした。

ちよつとした怒りもあつたが、それよりも現実的に
「今夜ね！」という感じに内心動揺していた。
さつき付き合つてもいいよとOKしてしまつた以上、断ることがで
きないとも思つた。

「じゃあ俺、ヤスの部屋に泊まるからさ。な？ならいいだろ？
最初から喧嘩とかしたくないから機嫌直してくれよ」

別にカオルが悪い訳では無いのでこれ以上怒るのも可哀相になり
腑に落ちないが「うん」と頷いた。

荷物を置き、二人で街に出た。
お昼がまだだったので食事をし、その後カオルが好きなブランドの
洋服を見たり、雑貨を見たりとさつきの嫌な雰囲気も無くなるほど
楽しく買い物を楽しんだ。

携帯が鳴り画面を見るとミライからだつた。

「もしもし？」

「あ。リオ？あたしー。今終わったから〜 どこにいるの？」

「えーと。西武デパートにいる。どこまで行けばいい？」

「あ。ヤスと落ち合うから、まだ買い物してていいよ。」

カオルも一緒でしょ？じゃあ1時間後に大通りで待ち合わせする？」

「うん。わかった。じゃあ駅前通りの噴水の辺りにいるね。気をつけて来てね。じゃ、後で〜」

電話を切り電話の内容をカオルに伝え、デパートを出て

10分も歩くと待ち合わせの場所についた。

「まだ時間早かったね。もうちょっとどっか見て来る？」

「ううん。天気もいいし。ちょっと疲れたからゆっくり待つのもいいんじゃない？ここなら芝生の上でも座っていんだろ？」

そう言ってカオルは芝生の上に倒れこみ眠そうに目をこすった。

「昨日、、、寝てないんだもんね。ごめんね」

「ん？いって。俺が勝手に寝なかつただけなんだしさ」

そう言って目を瞑った。

「カオル、、、膝枕で寝ていいよ」

「へ？どうしたの？なに言っちゃってんの？」

「嫌ならいいんだけど・・・そのままじゃ寝づらいかなって。

睡眠不足もあたしのせいだし・・・」

「じゃ。遠慮なく〜」

そう言って伸ばして座っていたあたしの足に

コロンと頭を乗せ「あ〜、、、寝ちゃいそう」と言って目を瞑った。

何分もしないでカオルは寝てしまった。
周りを見るとカップルや親子連れが楽しそうにしていた。
後ろの木に寄りかかりながら、そんな景色を見ていると
こっちまで眠くなってきた。

結局昨日は寝たのは4時頃だと思う、そして起きたのが7時半。
眠くない訳ないよなあ・・・

一人で外で居眠りなんかできないけど、こうして二人でいると
そんなことも簡単にできてしまうんだなと思った。
カオルの寝顔を見ながら目を閉じた。

「お二人さん！お疲れだね！」と突然肩を揺すられ目が覚めた。

横にはミライと目の前にはヤスがニヤつきながら立っていた。

慌てて立とうとして膝枕をしているカオルの頭が芝生に落ちた。

「いってえ・・・」

「あ。ごめん・・・」

「あ。ヤス、、あ。ミライ？ ども！」

そう言っただけでカオルは目を擦りながら笑って挨拶をした。

ヤスとミライは明らかに二人の居眠りを勘違いしたように
ニヤニヤとあたし達を見た。

用意した言い訳をしたが「あっそ」と取り合ってくれなかった。

と、いうよりそんなこと信じるか！というような顔をしてこっちが言えは言うほど疑いの目は増していった。

「じゃ、行こうか！」そう言ってヤスが歩き始めた。

「あ。待ってよ〜」とミライが続き、ヤスのほうに走っていった。

その後ろ姿を追うようにあたしとカオルは歩きだした。

「寝ちゃったね」と二人で笑い前を見ると、ミライとヤスは腕を組んで

歩いていた。それもかなり親しげに……

お互い目を合わせ「え？え？」と言いながらその光景を見ていた。ヤスが振り返りニヤリと笑った。

そのズルそうな笑顔で二人の関係がわかった気がした。

他のメンバーと待ち合わせをした場所に着いた。

今日は先にハヤとタツヤが到着していた。

ヤスとカオルは二人と合流し、スツカリ意気投合し騒いでいた。

ミライの横に座り小声で

「もしかして、、、ヤスと？」と聞くとニコニコ笑いながら

「だってヤス押しが強くて〜でも見た目も性格もいいし、

いいかな〜って……でもリオもカオルと付き合ってるんでし

よ？」

と痛い所を突かれて、何もいえなかった。

「いつからヤスと付き合ってるの？全然知らなかった」

「えーと、、、オフの2週間後にまた北海道に仕事で来てたのね。で、電話きて食事して、、、で。それからかな？」

まったくそんなこと思ってもいなかった。

ヤスがミライを気に入ってたのは知っていたが、影でコソコソとそんなことになってるなんて。

さすがヤス、、、抜け目がない。

飲み会はとても楽しく盛り上がり、2件目にお洒落な洋風居酒屋に場所を移した所でヤスがみんなに

「俺、実はミライと付き合ってたんだ。だからチヨクチヨクこつちに来るから、またそんな時は飲もうな！」と自らネタバレをした。

ハヤマトツヤも驚いていたが、

「そうなんだ〜 よかったな〜」と言って祝福した。

カオルと目が合ったが、あたしはなにも言わなかった。

なんとなくみんなに公表することが、いいことなのか悪いことなのかちよつと考えた。

カオルは声に出さないが口の動きで「言う？」と聞いていた。

みんなに気づかれないうちに「ううん」と首を振った。

隣でその仕草をコソソリ見ていたヤスはなにも言わなかった。

しばらくしてヤスが隣に座ってきて

「お前等付き合ってるの？」と聞いてきた。

「え？付き合っていないよ」と嘘を言った。

「なんで？カオルとコツソリ会ってたじゃん！」と言うヤスの口を大慌てで塞ぎ、「その話はまた今度。ここでは内緒に」というと

「ふうん。まあカオルもあんまり自分から話すほうじゃないしな。

まあ気が合ったなら付き合ってみるのもいいと思うぞ」と言っ
てポンと肩を叩いた。

別に隠すつもりがあつた訳じゃないが、

ここでヤスもカオルもとなると、その後のチャットがやりにくいものになるような気もした。

やはり部屋の中に何組もカップルがいるのは他の人にとって気を使
うものだと思うし。

言ったからなんだということもないし……

自然とバレるまでわざわざ言うことでも無いなと思った。

二件目でかなりの時間飲んでいたせいで、時間はすでに2時を
過ぎていた。そろそろ解散だなということになり、みんなで外に出
た。

タツヤとハヤは家の方向が一緒だとタクシーに乗り、残った4人で
2人を送った。

ホテルまで歩いて帰ろうとすると、ヤスがまたタクシーを止め

「じゃ。俺今日はミライの家に泊まるから。また明日連絡するわ」と
言っ
てこっ
ちが何
も言
えな
い
う
ち
に
ド
ア
が
閉
ま
り
、
二
人
で
手
を
振
っ
て
消
え
て
い
っ
た。

カオルと二人で夜の街に残された。

「じゃ、俺達も帰ろうか・・・」

「うん。そうだね、」

そう言って二人で歩き出した。

お互い言い出だせない何かを抱えながら無言で歩いた。

途中でコンビニに寄り、軽く買い物をしてホテルまで歩いた。

部屋に入り、カオルがバスルームに入った。

しばらくしてバスルームから呼ぶ声が出てドア越しに中を覗くと
広いバスルームには泡がいっぱい、よくある映画の中のお風呂になっていた。

「うわー すごい。どうしたの？これ？」

「ここにバスエッセンスって書いてたのあったから入れてみると空になった入れ物を見ながらカオルが答えた。」

「先に入っていいよ」と言いカオルは外に出ていった。

普段、家では入れないようなお風呂に気分があがった。

横にはガラス張りの綺麗なシャワールームがついていて小物の一つ一つがお洒落で格好よかった。

お風呂をあがり着替えを持たずに入ってしまったので、備え付けのバスローブを着て出た。

内心はバスローブに抵抗があつたが、着替えが無いから仕方ない。

その格好を見て、カオルは「似合うじゃん」と言い自分もバスルームに入つていった。

一人部屋に残り、なるようになれ！とビールを飲んだ。

どうしても付き合った人と最初の時は緊張する。

ここはいつそ少し酔つたほうが勢いがつくと思ひ、苦いのを我慢して一気に半分ほど飲んだ。

また先に寝てしまうのも手だな……とちよつと思つた。

でもそうすると、カオルは二日も寝不足になるかもしれないし……

そんなことを思いながらベットに座りながら飲んでいたら

カオルは腰にタオルを巻いただけで出てきた。

服を着ている時には想像できないくらい鍛えられた体だった。

その姿にちよつとだけ酔いが覚めた。

「また飲めないくせに飲んでるな？」

と笑い自分も冷蔵庫からビールを出して飲みながら隣に座つた。

「なんだかビックリしたな。ヤスとミライ」

「そうだねえ〜でもお似合いかもね」

「うん。そうだな」

話がそれ以上続かないで終わった。

二人で黙ってビールを飲み、沈黙になった。

「もしも、嫌ならなにもしないから・・・」

とポツリとカオルが言った。

腰にタオルしか巻いていない人の台詞じゃないな・・・と思いながら黙っていた。

「また寝ない気？」と言うと「さすがに死ぬな・・・」と言い残りのビールを飲み干した。

きつとイヤ！と言えばカオルはなにもしないと思った。

でもお酒を飲んでいたのもあり、断る気は無かった。

そのまま何も言わずにベットに入り、

「電気消してね。眠る時は怖いけど見られるのは嫌なの」

そう言うとカオルは持っていたビールの缶をテーブルに置き電気を消してベットに入ってきた。

「いいの？」と小さな声で聞かれた。

そう聞かれてもどう答えていいのかわからず黙って頷いた。

軽いキスを何度かし、そのうち激しいキスになり、お互いにも纏われない状態で抱き合った。

筋肉質なカオルの腕が印象的だった。

耳から首筋にゆっくりとなぞるようにキスをされ、

胸を優しく揉まれた。

「胸、あんまり大きくないの、、」胸を触ったカオルの手に自分の手を重ね退かそうとした。自分の中で少しコンプレックスだった。

それ以上なにも言えないように唇を塞がれた。

そのまま胸にキスをし、下腹を舌でなぞりカオルの体がどんどん足元に下がっていった。

スルリと足の間隙に体を滑りこませるカオルの動きに途端に恥ずかしくなり足に力が入った。

「ごめん、ちょっと待って、、」と逃げるように腰を引いたがカオルはなにも言わずに力強く引いた腰を掴みそのまま顔を埋めた。

恥ずかしさで何度も腰を引き逃げようとする度に引き戻された。

「もつと力抜いて・・・」優しい声で言われたが、恥ずかしくて堅く目を瞑ることしかできなかつた。

「恥ずかしいから、ダメ。上に上がってきて」と言っても言えば言うほどカオルは激しく責めてきた。

まるであたしの体の感じる部分を全部知っているようなカオルの舌の動きにいつの間にか声が出ていた。息が荒くなり、頭が白くなるのを感じた。

「もう、、やめて、、、、」

途切れ途切れな声で言っても、カオルはやめてくれない・・・

そのうち感じたことが無いような大きな波がきて
体に力が入り、もうなにも考えられなくなった。

頭の中に少しの恥ずかしさが残ってはいたが、それを表に出すことができないままカオルの動きに体が従っていた。

スツと体を上に戻し、そのままカオルが中に入ってきた。

いままでこんなに体に汗をかいたことがないほど
胸にも背中にも汗をかき、カオルの背中に手を回すと、同じくらいの汗を感じた。

奥まで入った状態で優しく額にキスをしながらカオルが聞いてきた。

「もしかして、口でされたの初めて？」

「うん、、、、なんだか恥ずかしくて、、、、」

「あんなに感じてたのに？」

そう言われてまた恥ずかしくなり、両手で顔を挟んで叩いた。

「もうやめる！」

「もっとよくしてあげるから・・・」

上半身をあげ激しく腰を動かしているカオルの息を感じた。
背中にまわした手に力がいり、強く肩を掴んだ。

こんなに声を出したことが無いくらい感じていた。
耳元でなにか言われたけど、それを頭が理解しない。
セックスでこんな感覚になったことは初めてだった。

「もう、、、ダメ、、、」

そう言っただけカオルの体にしがみついた。

「まだダメ」カオルはそう言い動きを止め焦らしながら反応を見ていた。

そうされればされるほど、感覚が鋭くなるような気がした。

動きを止めたカオルにねだるように抱きつくとカオルも息を弾ませている。
胸にカオルの汗がポツポツと落ちた。

「もうイきたい？」悪戯っぽく耳元で聞くカオルに顔をくっ付け声に出すのが恥ずかしいので何度が頷いた。

「ちゃんとと言わないとヤメちゃうよ？」

ここまで頭が白くなっているにも、それに答えることに対しての羞恥心はあった。

「意地悪しないで、、、」

「どうしてほしい？恥ずかしくて言えない？」

「なんか、、、カオル、、、エロオヤジ、、、」

「そういうこと言うかなあ、、、まったく、、、」

ちよつとシラケタ間を激しいキスで埋めた。

普段は舌が入るキスもあまり好きじゃなかったのに、カオルのキスは自然と口が開く。息が苦しくなるほど舌を絡め同時に腰を大きく動かされ自然と唇が離れた。

だんだん動きが激しくなり、その瞬間もう頭の中が空っぽになっていた・・・

こんなに夢中になったセックスは初めてだった。

自分の額を触ると汗が滲み、カオルの髪を撫でるように触ると汗で髪が張り付いていた。

「あたし、、、こんなに汗かいたの始めて、、、」
「俺も、、、こんなにイジメ甲斐のある子初めて」

気持ちのいい脱力感に二人とも酔いしれていた。

カオルが寝たのを見計らって腕を外し、後ろから抱きかかえられるように

手をまわし背中に温もりを感じながら目を瞑った。

5分もしないうちに深い眠りに入った。

その日は知らないホテルなのに部屋が真っ暗でもなにも怖くなかった。

元の生活に

次の日、なかなか目が覚めなかった。

薄く目を開け隣を見るとカオルはまだ熟睡していた。

その顔を見ながら少しずつ眠った頭を起こした。

普段のカオルとセックスしている時のカオルの違いを思い出しながら・・・

そして昨日の夜の自分を思い出し恥ずかしくなった。

いままで経験はあったが昨日ほど感じたことが無かった。

そのうちカオルが目を覚まし。

「おはよ・・・」と言いながら優しく髪を指に絡めながらニヤついた。

「ベットのの中のまゆは可愛いよな。普段と全然違う」と言いながらたぶん昨日のことを思い返しているような顔をした。

「ベットの中のカオルはイヤらしいよね。普段と全然違う」と言い返した。

「男はみんなそんなもんだって。でも性格の相性があるように体の相性もあるんだなーって思ったよ。昨日すっごくよかった」と言い抱き寄せて髪を撫でた。

「うん・・・あたしもあんなに良かったの始めて」

「お世辞じゃなくて？」

「うん・・・」

またそんな雰囲気になりそうだったがチェックアウトの時間が迫っていたので、ベットから出た。

ホテルを出て車からヤスに電話をしたが、寝ているのか電話は繋がらず、いつまでも呼び出し音が響いていた。

「今日はどうしようか？」

「うん・・・明日帰るんだよね？」

「うん。明日の最終にな」

「じゃあ、今日はうちに泊まる？」

「え？いいの？」

「うん。いいよ。じゃ行こうか！」

結局、あたし達は観光なんかそっちのけで、そのまま家に向かって車を出発した。

明日帰ってしまったら、今度はいつ会えるか分らない。

そう遠くはないだろうが、普通のカップルのようには会えないと思うと、

この短い時間で自分のことをできるだけ知って欲しかった。

カオルは部屋に入り落ち着かない様子で辺りをキョロキョロして見た。

まだ時間は早かったので、
せつかくだからそこらを散歩でもする？と言つと
そうしようか！と言つて二人で外に出た。

普段は来たことが無い近くの公園や、車でしか通つたことの無い道
を二人で歩いた。

きつとカオルが帰つた後、あたしはこの道を通る度に思い出すだろ
う。

そんなことを思いながら隣にいるカオルの横顔を見ながら歩いた。

「夏休みつてどれくらいあるの？」

カオルがジュースを買いながら聞いてきた。

「うーん・・・だいたいみんなお盆前後に有給を使って1週間くらい
かな？ どうして？」

「いや、今度会えるならその休みかなつてさ・・・」

「そつかあ・・・ちよつと遠い話だね」

まだ1ヶ月とちよつとあつた。

それまで会えないのか・・・

遠距離つてこんなもんなんだなと思つた。

自分には縁の無いことだと思つていたが、実際そうなることも寂
しいものなんだと感じた。

「それまではまた字でしか会えないんだな・・・」

「いままでそうだったのに、会つてしまつと物足りないね」

そう言つて二人で笑つた。

その夜、ベットに入って朝まで延々と話をした。いくら話しても話は尽きないような気がした。体を重ね、また話をし、まだ何度となく求め合った。眠りについた頃にはもう空は明るかった。

昼過ぎまで眠り、夕方まで家で過ごし重い足取りで空港に向かった。空港の道を示す標識が見えるとお互い無口になった。

何か言葉にすると先に涙が出そうになるのを我慢しながらカウンタ―に向かうカオルを見ていた。

いざ別れが近づくとこんなにも悲しくなる自分に驚いた。

カウンターから戻ったカオルは覗き込むようにあたしの顔を見て

「泣いちゃいそう？」と悪戯っぽく聞いた。

「うっん・・・大丈夫」と頑張って笑顔で答えた。

「ここで映画のようにキスの一つもしたいとこだけど、

俺、そんなとこ硬派だから人前ではできないな」と笑わせようとしていた。

カオルが時計を見て搭乗時間を確認した姿に、自然と涙が出た。見られないようにサツと隠したがシツカリと見られてしまった。

「泣かないでよ。そんな泣いた子置いて行くの辛いじゃん・・・」寂しそうな顔で言うカオルの顔を見たら、我慢していた涙がどんどん出てきた。

「また・・・会えるよね？」

「何言つてんだよ・・・会えるに決まってるだろ？なに心配してんだよ」

「そうだけど・・・」

いつも彼氏という存在は会いたい時にいつでも会えるという経験しか無いあたしにはこれから遠くに行ってしまうカオルにどんな顔をしていいのかわからなかった。

搭乗手続きの入り口には他にも別れを惜しむカップルの姿が何組かあり、その中に偶然にもヤスとミライの姿を見つけた。

「あ。。。ヤス達だ！」そう言つとカオルも振り向き

「同じ飛行機なら連絡くらいすれよな、、アイツ」と言いながら二人を見ていた。

周りの人の目などまったく気にせずヤス達はベツタリと寄り添い何度もキスをしながら手を繋いでいた。

「わ・・・」

二人で同時にその言葉を言いながら、ヤス達を見ていた。

だんだん人が少なくなり、もう乗り込まなければならぬ時間になり泣くのも忘れてヤス達を見ていた。

「じゃ。着いたら電話する。帰り道気をつけるよ？」

そう言つて一瞬だけ素早く頬にキスをしてカオルは搭乗手続きの

入り口に走って行き途中、鞆でヤスの頭を叩いた。

カオルに気がつきヤスがこっちを見て手を振った。

その姿でミライもあたしに気がつき、ヤスに別れをいうとこっちに歩いてきた。

ミライの目は真っ赤だった。

あたしの顔を見た瞬間、ミライは大泣きした。

その姿を見て、こっちが泣くどころじゃ無くなり、手続きを終え扉の向こうに消えるカオルに手を振るのが精一杯だった。

その姿を見てカオルはニコリと笑い、ヤスは

「後はよろしく」と言う顔をして手を振りながら消えていった。

その後、ミライと屋上に出て飛行機を見送った。

その間じゅうミライは泣きっぱなしだった。

どう慰めればいいのか困りながらレスカツプルのように抱き合ってることが

他の人に変な目で映らないか心配だった・・・

「毎回、空港に来てこの瞬間が一番イヤ！」そう言ってミライはいつまでも泣いた。

飛行機が飛び立ってしまった後に、ミライが落ち着くまで

喫茶店に入り珈琲を飲んだ。1時間くらい経った辺りで

やっと涙が止まったミライに「大丈夫？」と聞くと

「うん・・・」とまだ目に涙を浮かべながら小さく答えた。

「リオは平気だったの？」グズグズと鼻をすすりながら聞くミライに

「そんなことないよ。さっきまでちょっと泣いてたもん」

「そうなんだ、、カオルも笑顔だったしそうでも無かったのかと思っちゃった」

十分、ヤスも笑顔だったけどね……

ミライが普通に戻り、お互い明日の仕事もあるからそろそろ帰ろうか？と話をしていたら電話が鳴った。着信画面を見たらカオルだった。

「もしもし？」

「あ。まゆ？俺。今着いたんだけど……もう家？」

「ううん……まだ空港……」

「えっ！なにしてんの？」

「だって、、ミライが、、、、」

その時、ミライの携帯にも着信があった。隣で電話に出ながらまた泣いていた。

「やばい、、ヤスの電話でまた泣き出したよ……」
そう聞いて電話の向こうでカオルは大笑いをしていた。

こっちとしては笑い事では無かった。
もう帰りたいんだけど。。

そのままミライをその場に置いて帰りたかったが、さすがに可哀相に思い、一旦電話を切りカオルに折り返し連絡をすると伝え、

ミライを車まで送った。

なんとかミライを車に乗せ、別れをいい帰路についた。

30分も走った頃、ヤスから電話がきた。

車を停め、電話に出ると

「いやゝ悪かったなゝ。でも助かったよ。いつも大変なんだ」とそれほど悪そうでも無い感じでヘラヘラ笑っていた。

「うん。大変だったよゝ」とヤスが消えた後のことを教えた。

「毎回、大変だから今日は家にいろって言ったんだけどなあ」

「それもまた悲しいじゃない。いいんじゃない？」

「そういや。お前達もウマくいったんだってな。よかったな」

「ん。でも部屋のみんなには言わないでおこうってことにしたんだ。下手に気を使われたら嫌だしね。だからバレるまで内緒にね」

「そうなんだ？そんなに気を使うことねーじゃん。ま。二人がそうしたいならいいけどよ。じゃ、気をつけてな」

そう言って電話を切った。

家に帰り、電気の消えた部屋に入るとさっきの寂しさが一気に戻ってきた。

木曜の朝までは誰もいなくてもなにも感じなかった部屋なのに、今は一人であるのが悲しかった。

着替えをしてお風呂に入り、髪を乾かしていたら電話が鳴った。カオルからだった。

「ごめん。先にお風呂入ってた」

「うん。そうかと思っただけど心配だったから」

「なんだか長い4日間だったね」

「本当だな・・・今日一人で寝るのがなんか寂しいよ」

「あたしも・・・」

「ここ数日、ネットのみんなに会ってないし今日は行ってみるかな」
「うん。そうだね。じゃ、また後で」

そう言って、いつもの生活に戻った。
たった4日間のことだったが、そうとは思えないほど長い時間だった。

そしていつものようにチャットをした。

さっきまで泣いていたミライも、ヘラヘラしていたヤスもいた。

そして昨日は側にいたカオルもそこにはいた。
カオルの出す文字を見る度にそこには前のような字だけでは無く、薄っすらとその言葉を言うカオルの顔が浮かんだ。

代打チャット

カオルが帰った日から一ヶ月が経過しようとしていた。

それほど生活に変化は無く、

あったとすればお互いの時間が空いた時には携帯にメールをいれ、それを見て時間があれば返信。

たまに夜は電話・・・そんな感じの毎日だった。

会えない間、携帯の文字を見て少しだけ近くに感じる事ができた。

会いたいと駄々をこねて通用する距離じゃないのを、

お互い分っているから無理に「会いたいね」とは言葉にも文字にもしなかった。

言えば言うだけ後から寂しくなるのを分かっていたから・・・

8月の初めの日曜日、昼間に珍しくカオルから電話がきた。

「どうしたの？こんな時間に珍しいね」

「たまにはいいかなくて。今日サッカーの試合あったから朝が

早かったんだ。勝ったから嬉しいのもあってさ」

機嫌のいい声が電話を通して聞こえた。

カオルはいまの会社の仲間達と草野球ならぬ

草サッカーチームを組んでいる。

昔、中学、高校とサッカーをしていたのもあり、
ほぼ無理矢理チームに入れられたと前に話していた。

「今度さ、お盆の休みに近場の会社のチームとトーナメント戦で
試合すんだよ。こんなことしてる奴等なんか独身ばっか
だからお盆とかも関係無いしさ。休みとれるなら見に来ない？」

お盆の休みはサッカーの試合の時の3日間だけ休み、
あとはみんなが休みを取り終わった後に、
ゆっくり取るうと思っているとカオルは言った。

だからあたしの休みを東京で過ごし、自分の休みはこっちに来る。
そうすれば一緒にの休みよりも倍に会えると思わない？とのことだっ
た。

なるほど・・・それもそうだなと思いきその話に乗った。

お盆が近づき、連休は9日間とれた。

祝日がうまく重なり、結構な大型連休になり想像以上に空港は混み、
人がザワついていた。

（早朝と最終は案外空いてるから大丈夫！）

カオルに言われたとおり、その時間帯のチケットを買った。

満席まではいかない程度の混みようだったが、いままで実家にも車で
移動できる範囲だったので、この時期に飛行機に乗ることなど無か
った

あたしには十分すぎるほどの混みようだった。

冷蔵庫の中かと思うくらいの冷房の中、飛行機は羽田に向かった。

到着が9時すぎだったので、空港にカオルが迎えに来てくれることになっていた。

ガヤガヤとした到着ロビーを過ぎると、すぐにカオルが目に入った。

お互いに「久しぶり！」と軽くハイタッチをして笑った。

一週間分の荷物は思ったより多く、海外旅行に行く人のようなトランクだった。

「お前、ハワイでも行くの？ すごい荷物だな」

荷物の多さを見てカオルは笑いながらトランクを引いてくれた。

その日は真つ直ぐカオルの家に行った。

余計なものが一切飾っていないサッパリとした車内は見るからに

（カオルらしいな・・・）と思う感じでスピーカーからカオルの好きはアーティストの歌が流れていた。

「俺の部屋。すっげえ汚いから。先に言っておくから」

「東京つてゴキブリでるんでしょ？ 見たこと無いんだよね」

「じゃあ見れると思うよ？ よかったね初体験できて」

「え・・・本当に？ それは、、、ちよっと、、、」

そんな話をしながら車を走らせカオルのアパートに着いた。ゴキブリの話はされ完璧にボロアパートを想像していたが、全然違って外見は綺麗なアパートだった。

中も綺麗に片付いていてリビングが3F寝室が4Fのロフトだった。

「うわ・・・かっこいい。もっと凄い汚い所に住んでると思った・・・」

「ここ会社契約だからね。だから普通に借りるよりは格安だと思うんだ。」

「そうじゃなきゃこんなところは入れないよ」

車と同じようにサッパリとした室内だった。

正直に言えば生活観が無い部屋だった。

「明日、俺普通に仕事なんだよね。でも部屋の中自由に使っているから。」

「この近くにはなんでもあるから明日歩いてみたらいいよ」

「うん。そうする。帰りは遅くなる？」

「いや。そうでも無いとは思うけど」 7時前後かな？」

「そっか・・・」

二人の関係はまだチャット部屋の人にはバレてはいなかった。

ヤスとミライに口止めをしたので、バレる要素はかなり少なく、カオルもあたしも人前でイチャつくというのが苦手だったのでそれは好都合だった。

その日。近くのスーパーに買い物に行き簡単な食事を作った。

一週間あたしはチャットをしないのに、カオルまでしないのは怪しいから、暇ならしてみれば？と言うと。

「別にしてもいいけど？」とカオルは回線を繋いだ。

それを後ろから見るのは新鮮だった。

部屋に入るとヤスとヒデとマックしかいなかった。

その面子を見てカオルは一言ポツリと・・・

「うわ。これはキツイのばっかだな・・・。」と言った。

「なにがキツイの？」と聞くと「見てればわかるよ」と笑った。

男ばかりの会話は結構面白いことばかりを話していた。
いわゆる下ネタばかり・・・

「あのAVはすごいわかったぞ」

「まじで？そんなに？」

「そりやもう！！最高！」

延々とそんな話が続けていた。

殆ど呆れてその会話を見ていた。

「いつもそんな感じなんだ？男ばっかだと？」

「面子によるな。でもこいつらは王道。女の子入ってきたら止まるけどな」

一緒になってバカなコメントをカオルも打ち込んでいた。

他の面子に「カオル今日は大人しいな。いつものキレが無い」などと

言われていた。

「いつもどんなキレのある下ネタ言ってるの？」
というと笑って誤魔化した。

しばらくしてカオルは「俺、風呂入ってくるから替わってよ」と席を立ってしまった。

「えー。こんな下ネタばかりの中でコメントすんの？嫌だよー」
「いいじゃん。男のことよく分かるぞ」

勝手なことを言っただけで浴室に消えるカオルを見ながら、取り合えず席に座り、どう話に入っただけでいこうか考えていた。

相変わらずみんなはあたしを本物のカオルと思い込んでコメントをしてきた。

ヒデはヤスに

「で。ミライはどんな感じよ？胸デカい？」と聞いていた。

「体のわりにデカいかな？」と書き込むと

「かー！いいな〜俺もそんな出会いねーかなー」とレスが続いていた。

それからしばらくミライの話になり、どんどんヤスが調子に乗っていることを暴露していた。

あたしもカオルとのかつことをみんなに知られたらきつと男ばかりの時にいろんなことを言われてしまうかもと頭を過ぎった。

<マツク> 「結局、今この部屋の女でフリーって誰いたっけ？」

<ヤス> 「ラビとサクラくらいじゃね？」

<ヒデ> 「あれ？リオもじゃね？彼氏いるって言ってたっけ？」

<ヤス> 「いるんじゃないの？なあ、カオル」

いきなり話を振られて驚いた。

それもあたしの話を……くっそ、、ヤスの野郎。

<カオル> 「さあ？わかんないなあ」

<ヤス> 「本当に？（笑）」

あー！！本人だっけ言いたい！

画面の向こうにいるニヤついたヤスの顔が目に見えた。

<ヒデ> 「言わないだけで実はいるかもな」

<マツク> 「そうだな、いそうな感じはするよな」

そこにマサが入ってきた。
みんながひとしきり挨拶をした。

<マサ> 「なになに？なんの話してるの？」

そしてまたみんなは勝手に誰がいいという話になっていった。
これ以上見ていて自分の批判を目の当たりにするのは内心怖かった。
けど、みんなにはカオルと思われるので出るに出不らなかつた。

そのうちマサは彼女が欲しいと言い出し、
みんながそれに対してのレスをし始めた。
マサは仕事場では出会いが無いから、それならヤスを見習ってここで
見つけられたらいいなーなどと言っていた。

<ヒデ> 「マサはこの前の写真見て誰がいいと思った？」

その中から選んでアタックしてみりゃいいじゃん」

<マツク> 「そうだよ。先に相手の顔見て選べるじゃん。

HP見たろ？まあ彼氏がいるのも結構いるけどな」

<マサ> 「そうだな」 ミライがよかつたけどヤスと

付き合ってるんだっけ？そっだな〜じゃあ
リオなんかいいかな？」

ビックリした。

ほとんどマサとは話をしたことが無いのに。

<カオル> 「リオはやめたほうがいいと思うなあ〜」

思わず打ってしまった。

が、カオルのままの発言にヤスがカオル本人の発言と思い

<ヤス> 「なんでカオルがそんなこと言うのぉ〜？ねえねえ？」

などと話に食いついてきた。
ほんとコイツ殺す。

<ヒデ> 「あれ？そっだったのカオル？前によくヤスが言った
よな」

<ヒデ> 「もん！て（笑） リオみたいな言い方だな。カオル」

<ヤス> 「そのうちハヤとかタツヤあたりとウマくいったりしてな」

<マツク> 「そうだな」 近いしな」

<カオル> 「それはナイんじゃないかなあ？」

<ヤス> 「そんなことわかんねーぞ？どうする？」

<マツク> 「だよな」 ハヤなんか手早そうだもんな」

<カオル> 「そんな訳ないってば！すぐそっちの話ばかりして」

<ヤス> 「そんな話大好きなくせに」 いや～んカオルちゃん」

<ヒデ> 「カオルは見た目爽やかそうに見えるから得だよな。中はエロいのに」

<ヤス> 「そうだよな」 去年、俺たち海いった時なんか
一番張り切ってナンパしてたじゃん！
それも高確率で引っかかってたしな」

<マツク> 「そうだよな」 爽やかエロは得だよな」

海でナンパ？そんなことしてたんだ・・・
知らなくてもいいことを、こんなことで知ってしまった。
確かに女馴れしてるよなとは感じてたけど・・・

<ヤス> 「今年も行く？なんならタツヤとかハヤも誘ったら
かなりの確率で成功だと思わね？
あいつ等に連絡しておこうか？」

<ヒデ> 「ミライにバレたらやばいだろ？
ヤスは彼女ができたんだから引退な」

<ヤス> 「仲間に入れてくれよ」 なんでもするから」

<マツク> 「でももう時期が遅いだろ？8月中だぞ？」

去年の夏はそんなことをしていたんだ・・・
みんなで海に行ったとは聞いていたけど、ナンパ目当てかよ・・・

でも昔のことをとやかく言うのもちよつと格好が悪いような気がしてそのことはカオルに聞きたいけど聞けないなと思った。

<ヤス> 「そついや、レナにミライと付き合ってること言ったんだよな」

<マツク> 「で。レナなんだって?」

<ヤス> 「よくわかんねーけど怒ってた。

怒られる筋合いじゃねーのにな」

<ヒデ> 「まーそつだよな。今度は誰のところに流れていくんだろな?」

<ヤス> 「カオルじゃねーの?前にそんなこと聞いたことあるぞ」

<マサ> 「じゃあカオルはレナで。

俺はリオってことでいいんじゃない?」

<ヤス> 「女いるなら前もって言うっておかないとヤバイぞ>カオル」

<マツク> 「ちょっと！カオルも彼女できたのかよ？」

<ヒデ> 「そうなのか？」

内緒にしてって言ってるのに！！

なんでそっちに話を振るかなあ、ヤス！

もう言いたくて仕方無いという感じのヤスにイライラしていた。

そこにお風呂からあがったカオルが来た。

ブツブツ怒っているあたしを見て、

「なに？なに怒ってるの？」と笑い、席を替わって過去ログを見始めた。

そしてナンパの話を見て、「うっ！」と一言いって、こっちを見た。

「これは、、、その、、ただ楽しく話をしただけだって。全然そんなんじゃないから」

「別になにも言っていないよ？そんなのってなに？」

「あ。いや、、、で。マサってヤツと仲いいの？俺ほとんど知らないけどコイツ」

それ以上ナンパの話はしないで話を変えてきた。

「うっん。あたしも数回チャットでしか話したこと無いよ？」

「でも悪い気はしないだろ？ふん……マサねえ。あ、風呂お湯溜めたから」

そう言いながら、カオルは会話に参加した。

カオルがパチパチと打ち込みを始めたのを見て、あたしはお風呂に入った。

別に悪い気はしないけど、それほど嬉しい気もしなかった。

全然知らないマサになんと言われても興味が無かつたし……

浴室を見るとシャンプーもリンスも2本づつあり一種類はあたしが使っているブランドのだった。

中身もほとんど使っていないのを見て、カオルがわざわざ用意してくれた物だと思った。

洗面所の上には新しい歯ブラシとタオルが置いてあるのを見てちょっと嬉しくなった。

いない間に自分のことを考えて買い揃えてくれたことが。

お風呂からあがるとカオルはまだチャットをしていた。

「ありがと。シャンプーとか買っておいでくれたんだ？」

「ん？ああ、まあね」

「すっかりそんなの忘れてた」

「まゆの匂いだなくと思ったからさ」

そんな小さい気遣いが嬉しくてチャットをしている後ろから抱きつき、

久しぶりにキスをした。

目の前の画面の中では、そんなことをしているとは思っていない面
子が

相変わらずカオルに下ネタを振っていた・・・

髪を乾かし、TVを見ているとカオルに呼ばれた。

「なあ。このマサつてヤツ大丈夫かな？」

お前に電話するとか言ってるけど？」

「えっ、そんなことされても困るなあ・・・

それに番号知らないと思うよ？」

「あ。そうなんだ。じゃあ大丈夫か。

けどよく話もしたこと無いのに電話なんかしようと思うよな。」

「イツ」

「話もしたことないのに、電話してきた人いたよね。ちょっと前に」

「え？誰？・・・俺？」

「でもあの時とコレは違うじゃん。

話はしたこと無くて俺達はかなり前から知ってたじゃん。

コイツはただかだか3〜4ヶ月前からだろ？」

「あー。わかった・・・ヤキモチ妬いてんだ？」

「違うっつーの。変なヤツだなーと思ってるさ」

「ふ〜ん……」

「なにニヤニヤしてんだよ。違うって。そんなんじゃないってば」

「ふ〜ん……」

「もう寝ようか！久しぶりに会ったんだしさ！」

そう言つてカオルは挨拶もそこそこにチャットを退室して電源を切つてしまった。

別にマサという人にどんなことを言われても興味は沸かないと思つた。

それ以前にまつたくカオルの時のように気にもならなかった。

寝室に続く階段をあげると、ステレオとセミダブルのベッドがあった。

それ以外はなにも無くとても広く感じるベットルームだった。携帯の目覚ましをかけ電気を消して、二人でベットに入った。

そこにあたしの携帯が鳴つた。

画面を見ると知らない番号の携帯からで、不思議そうな顔をしてカオルを見つめた。

それを見てカオルは

「マサってヤツじゃないの？誰かに番号聞いたとか？」

「それは無いと思うなあ、」

恐る恐る電話に出ると聞覚えの無い男の声だった。

他になにも音のしない部屋の中その声は響いてカオルにも相手が男

だと分ったようだった。

「もしもし？どちら様？」

「あ。わからないよね。俺マサです。チャットでたまに逢う」

本当にかけてきたんだ！驚いてカオルを見ると「ほらな」という顔をした。

「あの、それでマサさんがあたしになにか？」

「いや特別に用事ってことも無いんだけど、最近会わないからどうしたのかなって」

「あー。今旅行にきてるので一週間くらいはチャットしないとダメです」

「旅行中なんだ？どこに？」

「えーと。東京に……」

そこまで言つてパツと口を押さえた。

横でカオルが『言っちゃった……』という顔をした。

「え??東京に?ならいつか一緒に食事でもできませんか?俺、時間作りますから」

「あ。。。それはちょっと無理かも。。。ごめんなさい」

「いや、いつでもいいですよ。連絡してくれたら俺すぐ行きますから。」

「そっかー東京にきてるんだー どこに泊まってるんですか?」

次から次へと質問をされ、なかなか電話を切るタイミングが掴めなかった。

横にいるカオルがなんとなく不機嫌に見えた。

「あの。ごめんなさい今、一人じゃないの。じゃ、また
そう言っただけじゃわかんないだろうし。」

煙草を吸っているカオルと目があつた。

「あの、東京って言っちゃった……」

「ま。それだけじゃわかんないだろうし。」

「それより番号知ってたじゃんアイツ」

「そうみたいだね……」

別にあたしが教えた訳でもないのに……

すると今度はカオルの携帯が鳴った。

画面を見るとヤスだった。

カオルは携帯を見て「なんだろ？」と言いながらでた。

「もしもし？どした？」

「もしもしても、どした？でもなくてよお。リオ来てんのか？そこ
に？」

「え？なんで？」

「マサってやつがリオに電話したら東京にいるって言ってたって」

「うん。ここにいるよ」

「やっぱりな。カオルに逢いに来たんだとは思ってたけどよ。そっか
・
・

もしかしてさっきのナンパの話見られた？」

「ああ。思いっきりな。それも俺は風呂入ってて、あの時打ってた

の本人だし」

「げえー 怒ってる？」

「それはもう……」

それからヤスはせっつかく東京に来ているなら、

他のメンバーにも会っていけば？と言っていた。

マサが電話の後にチャットで東京にいることを言ったので

そこにいたメンバーが「なら飲み会しようか？」と言っていたらしい。

カオルはヤスに自分の都合を伝え、日曜の夜なら行けると伝えた。

ヤスも関東のメンバーに連絡して折り返し連絡くれると言って電話は終わった。

「でも個人的にマサってやつに電話攻撃されるよりも

一度みんなで会ったほうがそれ以上の攻撃されなくていいかもな」

「そうだね。ヒデにもヤスにも今年は海にカオルを

誘っちゃダメって言うておかないとね。」

「いや、、、それは、、、ほらノリってやつ？夏は開放的になるしさ」

「ふん・・・開放的になるから？で、その後は？」

「あ、、、えと、、、今年はナンパなんかしないってば」

目をあまり合わせないように、困った顔をしてカオルが言い訳をしていた。

本当のところはそんな去年の話はどーでもよかった。

好きな人の過去は聞きたいけれど、聞くといつまでも頭の中に残りなにかあるとすぐそのことを思い出して嫉妬してしまう。だからこれ以上は聞かないことにしようと思った。ちよつとスッキリしないけど……

「逢いたかった……」

そう言ってニツコリ笑うとカオルは安心したような顔で笑った。

「俺もだよ」

その日。久しぶりにカオルの胸で眠った。

やっと一ヶ月の空間が埋まったような気がした。

インシデント

カオルの家に来て3日目。

朝はご飯を作って仕事に行くカオルを送り出し、

簡単に掃除や洗濯をして夫婦ゴツコのような日を楽しんでいた。

きつと新婚てこんな感じなんだろうな・・・

仕事から帰ってくるカオルはいつも急いで階段を駆け上がり、

息を弾ませて中に駆け込み

「ただいまあー！」と笑顔で微笑む顔を見て小さいことだけど
(幸せだな・・・)って感じた。

その日も部屋の中でDVDを見ながらカオルの帰りを待っていると
携帯が鳴った。

また数字ばかりが画面に並び、なんとなくマサのような気がした。

「もしもし・・・」

「あ。マサだけど。今いい？」

「あ・・・うん。なにか？」

「いや、東京のどこにいるのかなと思って」

「友達の家に泊まってるの。週末その友達と予定があるし」

「そうなんだ？週末以外は用事無いの？」

「そんなことないけど。でもみんなとは日曜の夜になってことになっ
たの聞いた？」

「聞いたけど、二人で食事でもいかない？」

「それはちよつと・・・」

「考えておいてよ。また電話するから」

考えるも考えないも・・・
困ったなあ。そんなつもりまったく無いのに。

7時半を過ぎた頃にカオルが帰ってきた。

ご飯を食べながらその話をすると、「で、どうすんの?」と言った。

「会っわけないじゃない!今度電話きたらハッキリ言っよ」

「そっか・・・」

カオルはそれ以上、その話はしなかった。

その日の夜。

カオルがチャットをしているのを後ろから見ている。

レナはあのお話を聞いてからほとんどヤスに話し掛けていなく、それとは逆にカオルに集中して会話を振っていた。

懲りない人だなあ・・・と思いつながらレナの文字を見ていた。

<レナ> 「カオルは今好きな子とかおるん?」

<カオル> 「ああ。いるよ」

<レナ> 「ほんま?付き合ってるの?」

<カオル> 「うん。付き合ってる。今も部屋にいる」

それを見て「いいの?」と聞くと

「いいんじゃない?」と普通の顔で言った。

他のメンバーも

「えー。そうなの?どんな子?」とか

「いつのまにー」などとワイワイと騒いでいた。

そこにはマサもいた。

<マサ> 「なーんだ。彼女いるならリオのことは関係無いんだ?」

<カオル> 「別にそうとは言ってないけど」

<マサ> 「だって彼女が今、部屋にいるんだろ?ならいいじゃん」

<カオル> 「その彼女が本人だったら?」

<マサ> 「え?もしかしてリオが彼女ってこと?」

その文字のやり取りを見て、みんなが大騒ぎになった。

<ラビ> 「そこにリオいるのー？」

<レナ> 「嘘やろ？本当に？」

<ヒデ> 「まじで？そこにいるの？」

「あらら・・・大騒ぎになっちゃった」

それほど驚きもしない顔で画面を見つめながらカオルが呟いていた。あたしはそんな部屋の騒ぎに動揺しながらも、目の前で平然な顔をしている

カオルを見て、何も言えずに黙っていた。

こっちではさっそく携帯にレナから電話が入った。

「もしもし？」

「リオ、今どこにおるん？」

「あー。東京に・・・」

「それは知ってる！隣にカオルおるん？」

「えーと、、、うん。ごめん言わなくて」

「そうなんや？まあ、前から気にいってたもんな」

そんな会話をしばらくして電話を切った。
画面を見るとレナが電話をしたらやっぱりカオルのところにいる！
と文字を打っていた。

みんなは

「いつから？」

「やっぱり先月の札幌で？」

「いつから来てるの？」とどンドン質問を打ってきた。

それにカオルは返信する言葉を声に出しながら、

「一ヶ月くらい前から」

「そうそう」

「木曜の夜から来てるよ」などと返信した。

本当にバラしちゃってよかったのかな？

みんな気ままずくならないかな？そう心配をしながら画面を見ていた。

すると急にマサがみんなに

<マサ>「僕も彼女欲しいから、誰か紹介してくださいね。ヤスとカオルもアドバイスしてくれな。」

と平然と出していた。

それを見てカオルが

「俺。こいつやっぱり気にいらねえ」と呟いていた。

「でもこれで問題無いんじゃない？あたしもレナが暴走する心配無

いし」

「それでも俺はヤスみたいに優しく電話には付き合わないけどね」

なんとなく・・・カオルはそんな感じがする。

普段無口な分、本当にノリ気じゃないとまったく口を開かない人だから・・・

カオルがチャットを終わろうとすると、他のメンバーが

<ヒデ> 「おい！一人だけいいおもいはさせないぞ！まだ落ちるな！」

<ラビ> 「きゃ〜 エッチ〜」

<ヤス> 「いや、昨日もうとっくにヤッてるだろよ」

などと妄想全開で話が進んでいた。

「だから昨日はヤッてねえって」とブツブツ言いながらカオルは返信していた。

さすがにそれは書き込んではいなかったけど。

<カオル> 「いや。俺、明日は仕事なんだよ。だからもう寝ようと思って」

<ジイ> 「そうなのか？休みじゃないの？」

<カオル> 「うん。お盆の休み以外は後回しになったから」

<ラビ> 「じゃありオは昼間一人なの？」

<カオル> 「そう。楽しくやってるらしいよ」

<ラビ> 「えー。じゃあ私明日休みだから会いたいなー」

「ラビが会いたいわって。どうする？」

「場所がよくわかんないなー」

カオルはラビにそのことを伝えるとラビが迎えに来てくれることになった。

それを見てヒデが「俺もー！」と言い出し、明日ラビとヒデが家に来ることになった。

「いい暇つぶしになるんじゃない？俺明日は8時くらいになるし」

「うん。どこか行くならそれまでには帰ってくるね」

突然に明日の予定が入った。

詳しい住所はカオルがチャットを終えた後、ラビにメールを送った。

「じゃ。もう1時だし寝ようか」
「うん。そうだね」

「これでマサってやつ諦めたみたいだね」
カオルが布団に入ってから言った。

「そうみたいだね。でもどっちにしる行かなかったけどね」

「あいつどっかの有名スポーツクラブのインストラクターだって言
ってた。体が自慢でとか言ってたし・・・見るからにそんな感じだ
ったし」

「ふーん」

「そういうのって女の子は好きだったりするんじゃないの？」

「そういうのって？筋肉ムキムキってこと？」

「うん。格好いいじゃん。インストラクターなんて？」

「そう？」

「そうでもない？」

「別に興味無いかなあ？」

「そっか・・・」

「どうしたの？あたしがあの人のこと好きになるかもとか思ってる
？」

「いや？そんなこと無いけど・・・」

「変なの・・・」

そう言つて布団をかぶつて目を瞑つた。
しばらくお互いなにも言わずに黙っていた。

「ねえ？明日何時に起きるんだっけ？」

「え？いつも通りに7時半だよ？」

「今が・・・1時半かあ。6時間しか寝れないね」

「うん？まあ、、そうだな」

「5時間でも大丈夫？」

「4時間でも大丈夫！」

そう言つてカオルはあたしが言つた言葉の意味を理解した。
仲直りにはこれが一番と聞いたことがある。
確かにそうだと思つた。

結局、その日の睡眠時間は4時間半になり、
思つていたより朝はすんなり起きた。
カオルはギリギリまで寝ていたけれど・・・

「今日は早く寝ようね」そう言つて笑うと

「うん・・・そうしようね」と言つて眠そうな顔をして出ていっ
た。

10時くらいにラビから携帯に連絡が入り、
もう近くまで来ているようだった。
しばらくすると、チャイムが鳴り、
小さい窓から覗くと手を振っているラビがそこにいた。

ドアを開けると

「りオー！会いたかった」と抱きついてきた。ちよつと驚いたけど、ラビの印象からしてそれも許されると思った。

「入る？カオルいないけど・・・お茶でも飲んでから出かけようか？」

「うん！カオルの部屋も見てみたい！ほら、ヒデ早く！」

後ろから体格のガツチリした男の人が入ってきた。

ラビとの身長差が軽く30センチ以上あった。

「あ。ヒデ？初めまして」

「こんにちは」

ちよつと緊張した顔でヒデが挨拶をした。

二人を部屋に入れ、珈琲をおとしていた。

それを見てラビが「なんかりオの家みたい」と笑った。

「だつて昼間、黙つて家にいるんだもん、、だいたいの物の場所とか分つちやつたよ・・・」

「いいなあ・・・なんかこーゆーの」

ヒデがそう言いながら部屋の中を見ていた。

それから3人で珈琲を飲みながら話をした。

ほとんどがあたしとカオルのことだったけど、前日に逢いに来たこと

最初から同じ部屋に泊まったことなどは言わなかった。

なんとなく、、ひかれてしまっうんじやないかと思う、あの日の自分の行動に

さすがに言えないと思い自然と隠してしまった。

「でもさりオ。遠距離って淋しくない？」

「うん・・・ちよっとはね。でも最初から分かっていたし」

「そうだけど・・・でもまだ付き合っただばかりなら、一緒にいたいじゃない」

「でも、その分久しぶりに逢えた時はとっても嬉しいよ！」

ニツコリと微笑むあたしの顔を見て二人は同時に、

「ごちそうさまでした」と冷やかしたように笑っていた。

「でも意外だったなー カオルとリオなんて俺、全然想像してなかったよ」

「そうだよー 前のオフ会でもカオルって静かだったしね」

「でも、夏の海では大活躍だったんでしょ？カオルは」

「あ・・・もしかしてこの前のチャットの時・・・居ただよね？」

「うん。すっかりね。それもあたしが画面の前で打ってたの」

「うわ・・・だってそうとは思わないじゃん・・・」

そのことについてカオルはなにか言ってた？と聞かれたが、

別に？と言つとなるほど……という顔をしてヒデは黙って珈琲を飲んでいた。

この意味深な顔に対して質問をしようか迷ったが、また知らなくてもいいことを知ってしまいそうなのでなにも言わなかった。

そこにお昼休みのカオルから電話がきた。

「みんな無事ついた？」

「うん。今、うちでお茶飲んでるよ」

その言葉を後ろで聞きラビとヒデは（お邪魔してまゝす）と電話のほうに向かって言った。

「俺、今日は7時くらいまでには帰れると思うんだ」

「あ。そうなの？じゃあご飯用意しておくね。なに食べたい？」

「うーん。簡単なものでいいよ。あーなんならラビもヒデも一緒に食っていけば？」

そう言われてラビとヒデに言つと（いいの？わーい！）と喜んでいった。

「じゃ、みんなで待つてるね。気をつけて帰ってきてね」

そう言って電話を切ると二人はニヤニヤしながらこつちを見ていた。

「新婚さんみたい〜〜〜」

「俺もきいてもらいてえー」なに食べたい？」「って」「ヒデ、なに食べたい？なんでもいいよ？」

そう言うと真剣に時間をかけ献立を考えていた。

その姿を見てラビが小さい声で

「普段そんなこと言われないから必死だ・・・」と言って笑った。

それから3人で近くのスーパーに買い物に行った。

カートを押しながらヒデは（いいな〜・・・こんなの。

俺も彼女とこんな風に関物したい）と遠くを見ながら呟いていた。それを見てラビとゲラゲラ笑った。

ヒデのリクエストに答えながらラビと二人でキッチンに立ち夕食の支度にとりかかり、

ヒデはTVを見ながらビールを飲んでいた。

7時ちょっと過ぎた頃にカオルが帰ってきた。

「あ〜ん。旦那様お帰りなさ〜い」とヒデがカオルに抱きつき「気持ち悪いから・・・」とカオルが突き飛ばして笑った。

そして4人で楽しく食事をした。

カオルとラビとヒデは以前会ったこともあるし、とても仲良く話していた。

元々、関東の男性達は気の合う人同士、ちょっと遊んだりもしていたようだし。

あたしも昼間からずーと一緒にいたので違和感無く過ごした。

そんな時、ラビが

「私ね。マサって人から食事に行こうって誘われたの。でも怖くて断ったけどね」

「え？ラビも？」とカオルが言った。

「え．．．カオルも？．．．」とヒデがカオルを見ていった。
「そんな訳ねーだろ．．．まゆだよ。昨日の夜に電話きたんだよ」

電話が来たことよりもカオルが「まゆ」と呼んだことのほうに衝撃を受けたヒデが、

「まゆって呼んでるんだ．．．．．なんか、生々しい」

「お前、真面目に話す気あるか？」とカオルはヒデの頭を叩いた。

「やっぱりさ、ネットの中っているんな人がいるよな。レナのことにしてもそのマサって人に関してもさ。怖いよな」
「やっ」とマトモな意見をヒデが言った。

「そうだよな。不思議なもんだよなあ．．．」とカオルが言うと
「ねえ？カオルに会う時怖かった？」とラビが聞いてきた。

「うーん？そうでもなかったかな？電話とかもしていたし」

「そうなんだー なんかドキドキした？」と更に目をキラキラさせた。
「それは、うん」

目の前に本人がいるのにそんなことを聞かれるとは思っていなかった。

「で？で？」ラビとヒデは身を乗り出して聞いていた。

「俺は「ああ。この子と俺は付き合っただけ」と思った」

カオルが真面目な顔をして言うと横でラビが「キヤァ」と声をだし、それを見てみんなで笑った。

「なんか二人とも幸せそうだな」ラビが羨ましそうに言った。

そんな風に言われるのはくすぐったいような気がした。

「あーあ。今年は海でカオルのナンパ術が見れないのは残念だな」ヒデが言うとカオルは慌ててヒデの口を押さえた。

「そんなにカオルはナンパが上手なの？」ラビが聞くとカオルは慌てて

「そんなこと無いよ。全然」と作り笑顔で答えた。

「こいつさ、手馴れたもんだぜ？「あれ？この前スタバで会ったよね？俺の隣に座ってたでしょ？」とか言っちゃってさ。そんな古い手引つかかる奴いないと思ったら、

これがまた！相手も「え？そうだった？」とかつて話に乗る訳よ。

で、そこにヤスが言ってくだらない話で盛り上げて、仲良くなったら俺達が合流。

そんなんで結構、去年はいい思いしたよな？カオル？」

ヒデが一気に暴露し、カオルはこっちを見ながら

「まずい……」という顔をしていた。

「ふーん。でもそんな自然な感じのほうの話やすいかもね」とラビが言った。

「もっと凄い話したいけど、もうやめとく。後からカオルに殺されるから」

そう言っただけで、カオルに頭を叩かれていた。

10時を過ぎた頃、「じゃ。日曜ね」「と言ってラビとヒデは帰っていった。

二人で食器を洗っていると……

「あの。さっきの話さ。そんなに気にしてないよね？」
探った目でカオルがこっちを見た。

「なんの話？ナンパの話？」

「そう……」

「そうだなあ。これ以上聞くと一人の時に心配になるからもう聞かない」

「いや。心配させるようなことはしないって。ほんと！

俺、浮気とかしたことはないんだって。だって去年は彼女いなかったしさ」

「なら。信じる。だって離れてるから信じるくらいしかできないもん。」

でも、、、、、、、もしも浮気したら・・・それが一度でも絶対ダメ。」

その時はどんなに謝っても許さない。二度とカオルとは会わない
「！」

そう言っただけでまた食器を洗った。

「そんなこと言つなよ・・・ いや、浮気なんかする気ないけどわ。」

「二度と会わない」なんて言つなよ。今っすっげえ落ち込んだ」

そう言っただけで後ろから抱き付いて髪に顔を埋めた。
その姿がとても可愛いと感じた。

大人っぽい所があったり、子供っぽい所があったり。
一緒にいればいるほどカオルのことが好きになった。

「今日は早く寝るって言ってたじゃない。明日試合でしょ。早くお風呂入つたら？」

「そうだな。一緒に入らない？」

「いや！早く入っちゃいなさい！」と言つた

「はーい」とカオルは一人で浴室に消えていった。

勝利の報酬

試合は10時からだったので、ゆっくりと8時まで眠っていられた。

一緒に試合をするグラウンドに行き、観客席で座って始まるのを待っている。

カオルの同僚という人が数人挨拶に来た。

少し緊張をしながらも、愛想良く笑顔で無難に挨拶をし、やっと一人になり

ホッとしながらグラウンドを見つめていた。

沢山いるカオルの会社の人の中にさつきから黙ってあたしのことを見ている女の人の

視線を感じた。それも刺すくらい痛い視線……

挨拶をする訳でもなく、ただ黙って……

(なんか怖いな……この人……)

そこにグラウンドからカオルが走ってきて「ジャージ持ってて」と手を振った。

するとその女の子がカオルの前で手を出していた。

行きそびれたあたしは、その光景を黙って見ているしか無く、

その人は一言、二言カオルと言葉を交わし、クルリと背を向けどこかに歩いていってしまった。

カオルは手招きをしてあたしを呼び、ジャージを渡すと駆けていった。

それを見て、同僚と言う祐子さんが

「あの子ね。矢吹君のこと好きみたいなの。今日彼女が来るって聞いて昨日から機嫌が悪くて、でも気にしないでいいわよ。矢吹君はその気無いみたいだから」
と気にかけてくれるように説明してくれた。

「そうなんですか・・・」そう言ってその子のほうを見た。
その子は黙ってカオルの姿を目で追っていた。

「矢吹君とはどこで出会ったの？」いきなり祐子さんが聞いてきた。
すぐに答えることはできなかった。「インターネットで」と言う勇氣が無かったし、
言つと変な目で見られそうだったから。

「あ。あたしの友達の紹介で」
「そうなんだ」と人の良さそうな祐子さんはそれを信じた。
「矢吹君て無口なほうだけど優しいから、結構モテるのよ？あ、試合始まるわよ！」

試合が始まり何度かカオルがシュートを決めようとするシーンがあったが
なかなか点数が入らず0-0で前半が終わった。

後半までのハーフタイムにカオルが側に来て「ゴール決めたらどうする？」と聞いていた。

「そうだなあ・・・なんでもいうこと聞いてあげる」
「忘れるなよ！」カオルは人差し指であたしを指しグラウンドに消えていった。

後半が始まりどっちもなかなかゴールが決まらないままロスタイムになり

祐子さんが隣で「うちのチーム弱いよねえ・・・」とため息をついた。

たしかに見ていて抜群にうまい人がいなかった。

カオルも下手ではないが、何度となくボールをとられていた。

このまま引き分けてPKつとこかな、と思っていた時、
このチームでは最高のパスがカオルに渡り、そのままゴールが決まった。

祐子さんが隣で「やったー！」とあたしの背中を叩き、ガッツポーズをした。

カオルはこつちを見て親指を立てていた。

「まゆちゃんもしかしたら勝利の女神かもね〜！明日の試合も来るんでしょ？」

「はい。明日も勝てますかね？」

「矢吹君が張り切ってるから勝てるかもね？いつもはバテバテだから・・・」

試合の後は明日に備えて早めにみんな解散した。

すれ違う人達はみんなカオルに

「10試合ぶりくらいじゃね？お前のゴール？」とからかっていた。
「彼女が見に来てると動きが違うな！」と冷やかす人もいた。

また遠くからさっきの女の人がかつちを見ていた。

そんなに睨まれてもなあ……

そう思いながらそつちを見ないようにして帰った。

家について「絶対ゴールできないと思ってた」と笑うと、

「報酬があると俺デキる子なの！」と言ってさっきの話を蒸し返した。

「あ……報酬であの「なんでも」ってやつ？」

「当たり前じゃん。忘れたとは言わせない！」

「忘れてないけどさ、で。なにがいいの？」

「それは今は言えない……ふっふっふ」

意味ありげな言い方をして浴室に消えていった。

シャワーから出たカオルにさっきの女の人のお話をすると、平気な顔をして

「あゝ前からね。でも全然タイプでもなければ興味も無いし」と言い顔色ひとつ変えずにTVを見ていた。

「でも、悪い気はしない……てヤツ？」

「マサに思われて悪い気しない？」

「悪い気する……」

「それと同じ」

なんとなくあの人が可哀相になった。

別になんの取柄がある訳でもないあたしがカオルの隣にいて、彼女はただ見ているだけしかできないことが気の毒にもなった。

食事を終え、なんとなくTVを見て過ごした。

時計を見ると9時少し過ぎになろうとしている時間だった。

「今日はネットしないよ」

カオルはそう言い二階にあがって行き、とくに見たいTVがある訳でもないので一緒に二階にあがりCDを聞きながら話をしていた。

「さてと！じゃあ報酬もらおうかな！」

そう言っただけで部屋の電気を消してベットの横にあるスタンドをつけた。不思議そうにカオルを見てみると、サッとTシャツを脱ぎベットに座った。

そして座っている隣のスペースをポンポン！と叩き座るように目で合図した。

「もしかして、、、やっぱりこつち関係のことなんだ・・・」

「それ以外になにかー??」

外人並みにオーバーアクションをしながら驚いた芝居をしているカオルを

少しだけ引いた目をして見ていた。

「なんでもって言うから〜SMとかしちやおうかな〜」

そんな趣味あるんだ!!!

悪いけどさすがにそれはちよつと困る。

あれはかなりそつちに興味が無いとできないでしょ??

かなり引いた顔をしてカオルを見ていると、

「それは嘘」とニヤリと笑った。

「取り合えず横になりなさい。話はそれから」

ちよつと偉そうに言うカオルに不審な顔をしながらもベットに横になりカオルの行動を見ていた。

静かに横になり、小さく耳元で、

「今日は、なんでも言うこと聞くんだよな?」と再度確認をしてきた。

「ど、どんなこと?痛いのか、嫌なんだけど」

「痛くは無いよ。気持ちいい〜こと」

そう言つて静かに服を脱がせようとするカオルに慌てて、

「ちょ、電気!」とベットの横のスタンドを見ながら言った。

「なんでも言うこときくんたる?」

「いや、だから、まずは電気消して!」

「だ〜め。今日はこのまま・・・」

それ以上、何も言えないように口を塞がれ、スルスルと服を脱がさ

れた。

「明るい嫌あー！」

「どうして嫌なの？」

「見えちゃうもん……」

「見たいんだけど……」

困った顔をしてカオルを見つめると、

「いつも電気消してって言うだろ？俺さ、こっちに帰ってからまゆを思い出そうとしても

いつも何かが足りないなって思ってたんだよ。その原因がアレ」

そう言ってスタンドを親指で指差した。

「見えないから思い出せないんだ。腕の中のまゆを見ていたんだ。いいだろ？」

「でも……」

「どうして嫌？」

「だって、変な顔するかもしれないもん」

「変なっ……」

笑いだすカオルに「だって、頭の中が真っ白な時に気にしてられないもん！」と膨れた顔をした。

「大丈夫。変な顔なんかしないよ。きつと、もっと好きになると思う」

そう言って優しく唇を重ねた。

(もっと好きになると思う・・・)

その言葉を聞いて、それ以上電気を消してとは言わなかった。

薄暗い明かりの中で真面目な顔しているカオルを見るのはいつもと違った感じがした。

感じている顔を見られるのが嫌で横に顔をそらせても、すぐ顔を正面に戻される。

ボンヤリ見えるカオルの上半身を薄っすら開けた目で見ると、割れた腹筋も見た目よりも厚い胸板も格好よく見えた。

アゴをつたう汗も、胸の汗も・・・

いつもより何倍も感じたような気がした。

そして、自分の中でもそんな時のカオルを見て、

(もっと好きになるって・・・本当かも)と頭の中で思った。

恥ずかしい気持ちは十分あったけれど、ありのままの自分を見て欲しいという

いままでに無かった気持ちは生まれた。

いまいち開放的になれなかった自分が変わったキツカケになった夜だった。

終わった後に

「ねえ。知ってた？」と言ってカオルは背中を見せた。

小さくミミズ腫れができていた。

「ごめん……知らなかった……」

「だと思った……」と言ってシャツを着た。

「無意識に爪たてられるくらい俺って凄い？」

「エロオヤジ発言するカオルはあまり好きじゃない！」

そういつて背中を向けて寝た。

「どっちも好きなくせに」と言いながら、いつものように背中越しにくっついて眠った。

突然の訪問者

今日の試合に勝てば、明日は準決勝と決勝だとカオルは張り切っていた。

「でも。100%無理だけど・・・」とも。

昨日と同じように会社の人と一緒に観客席に座っているとすぐ近くに例の女の人が座っていた。

たまにこっちを見ているようだったが、話すことも無いしたぶんあたしのは嫌ってるだろうから見て見ないフリをした。

祐子さんが隣に座り

「お！勝利の女神がきたから今日も勝っちゃうかな？」と張り切っていた。

祐子さんの格好を見ると選手と同じユニフォームを着ているのが目に入り、

「それ同じなんですか？作ったんですか？」と聞くと

「あら。2枚あるのよコレ。私の彼氏も出てるの。キーパーで」

背中には<MOTHIIZUKI>と書いてあった。

「望月さんていうんですか？」

「そう。日本代表を見てサッカーファンになった超ニワカね」

周りには同じようなユニフォームを着た人達が沢山いてすぐにカオ

ルの会社の
応援だと分かる固まりになったいた。

「結構みんな着てるんですね？みんななにか関係あるんですか？」

「そうねえ。うちの会社、社内恋愛OKだからね」

（結構・・・オープンな会社なんだ。うちの会社もだけど・・・）

しばらくしてアップしていたカオルが隣に座り

「さて。今日の報酬はどうすっかな」とニコニコしていた。

「今日は昨日より条件厳しく勝つの前提でハットトリック決めたら
ね」

「それは、、無理だろ？俺昨日は10試合ぶりのゴールよ？」

「じゃあ、、今日は報酬無しだね。残念〜！」

すっごいイイの考えてたんだけどな〜 あゝ残念！

「なに？それだけ教えて！」

「だーめ。後の楽しみ・・・ふっふっふ・・・」

そのやり取りを見て祐子さんが

「矢吹君てそんなに話す人だったのね？全然知らなかったわ」

カオルを見ながら不思議そうに言った。

「え？そうですか？いつもこうだよな？」

「うん。こんな感じですよ」

「じゃあ！俺今日はハットトリック決めますよあ！」

そしたら水曜日は早退させてくださいねえー！」と意気込んでいた。

「そんなことできたら水曜は休んでいいわよ？」とアッサリ言われていた。

それも（絶対無理！）と言わんばかりの速さで。

それからグラウンドに戻る時にユニフォームを手渡し、

「これ着て応援よろしく！」と元気に走っていった。

「あんな矢吹君・・・初めて見た・・・」

「あんな感じですよ・・・いつも・・・」

そう言いながら走り去るカオルを二人で見ている。

ユニフォームを広げると<KAORU>と書いていた。

それを着て前を向くと、やはりあの人がこっちを見ていた。

（こわっ・・・）

「祐子さん。あの人、、、すっごい見てるんですけど・・・」

「ああ。気にしなくていいわよ。矢吹君にふられる前は不倫とかしていて会社では男癖が悪くて有名なの。」

まあ、、、ちよつとしたことあったんだけどね・・・

あ！でも変なことじゃないのよ？まあ、、変なこととも言うか・・・でも二人の間に恋愛がどーこーなんて無いと思うわよ？」

そう言って彼女のほうをチラッと見た。

祐子さんの視線を感じてその人は慌てて前を向いた。

そんな祐子さんの言葉がちょっと気になった。

「ちよつとしたこと」ってなんだろう？

けどそれを聞くほど祐子さんとは親しくないし、
また聞かなければよかったと思うことなら嫌なので黙っていた。

試合が開始して15分。

相手が弱いのかカオルの調子がいいのか、あっさりとゴールが決まった。

祐子さんは喜びすぎて持っていたジュースを勢いよく振り上げ、周囲の人に迷惑をかけていた。

案の定、隣にいたあたしもその被害にあった・・・

そして前半終了間際に相手のファールでPKをもらいそこでも一点決めた。

こんなに優位な展開はそう無いらしく、
応援席は大騒ぎになり、知らない人までカオルのユニフォームを着ているあたしに握手をもとめに来る人がいたくらいだった。

ハーフタイムにタオルで汗を拭きながらカオルが隣にきて

「俺、、今日すっげえカッコイイ」と言いながら座った。

「ほんと！今日いいわよ！矢吹君！」と祐子さんは絶賛してカオルの上でタオルを振り扇いであげた。

「まゆ！ユニフォーム交換してもらっていい？

「こっちは汗かいてるから着なくていいからさ」

そう言つてユニフォームを脱いだ。

途端に後ろに座っていた人達の視線がカオルの背中に集中した。

「え？なに？」とカオルが言つとみんな目をそらし

「いや、なんでもない、後半も頑張れよ」と言つて違う方向を見た。

「なんだろ？」と言つたカオルを見て思い出した。

まだ背中にはシツカリと爪の痕が残っていた。

慌ててユニフォームを脱いでカオルの頭に被せた。

祐子さんは

「軽くなつたぶん動きがいいのね！よしもう一点だ！」とカオルの背中を思い切り叩いた。

「了解！」と言いながら背中 of 痛さに悶えていた。

カオルは意味が分かつていないのか笑顔でそう答え、あたしに向かつて

「あと一点だぞ？忘れるなよお！」と言つてグラウンドに消えていった。

消えたいのはこっちだと心底思った……

「見えないけど、、まゆちゃん激しいのね……」

祐子さんは横目でニヤついた。

ほんとに消えたい……

後半戦が始まり、前半にはない苦戦が繰り広げられ、いつの間にか同点に追い上げられた。

「やっぱりうちのチームはこんなもんなのねえ……」
祐子さんは諦めかけていた。なるほど見ていてそう思った。

半分以上の人はもう足がついていっていなかったし、中には足をツル人まで出ていた。

相手チームも同じような感じで両方のチームがへろへろになって走っていた。

足がもつれて転ぶ人もいて、ウマイ具合にそれが原因でボールがコーナーをわりフリーキックになった。

「こんなのありえないわよね……」
呆れて祐子さんが言った。

まったく期待しないで見ていると、ありえないことにカオルのヘッドでゴールが決まった。

「本当にハットトリックしちゃった……矢吹君……」祐子さんが放心状態で呟いた。

また応援席が盛り上がりそのまま試合は終了した。
それはもう大騒ぎになり、まだ2回戦目なのに胴上げまでしていた。

今回の相手が優勝候補だったこともあり、
「これは優勝しちゃうんじゃない??」とみんな口々に盛り上がっていた。

カオルが席に来ると祐子さんは

「もう凄いじゃない！矢吹君！！明日も頼むわよ！

水曜なんか休んじゃっていいから！優勝したら10連休あげる！」
と興奮していた。

「祐子さんてそんなに力あるの？連休くれちゃうくらい？」

「ある・・・かな？俺の上司だから・・・部長だし」

「ええー！部長なの？」

そしてあたしの手を握り

「まゆちゃん！貴女絶対勝利の女神よ！明日も絶対きてね！」
と言
い最後に抱きついて頼まれた。

「あ・・・はい・・・わかりました」と弱く愛想笑いをした。

「矢吹君！今日は明日に支障が無い程度にしとくのかな？」

腰砕けなら許さないから！」

と言ってカオルの腰を叩き気分良く去っていった。

さすがに疲れたのか、カオルは家に着くと足が痛いといって床に横になり

「俺も若くねえなあ・・・」と言ってグッタリした。

あれだけ二日続けて走りまわれば確かに疲れるよね・・・

「カオル、お風呂入ってきて。出てきたらマッサージしてあげる」「え？どこを？」

「・・・疲れていても、そつちのことか・・・」

「あ？違つもの？でも足痛いからそうしてもらつ・・・」

そう言つて足を引きずりながら浴室に入った。

出てきたカオルはよつぽど疲れたのか、ベットに横になるとすぐに眠ってしまった。

触った足はパンパンになっていた。

カオルの足を張りが取れるまで時間をかけてマッサージしながら寝顔を見ていると

満足そうな顔で少し笑っているようにも見えた。

（よかつたね・・・勝てて）

その間もカオルは死んだように寝ていた。

1時間ほどして、少し足の張りが和らいだあたりで一旦止め、食事を作ってカオルが起きるのを待った。

起こすのは可哀相だと思って、下でTVを見ているとインターホンが鳴った。

玄関に行くとドアの向こうに例の彼女が立っていた。

その姿を見て開けるべきか迷ったが、電気がついているのに居留守は使えないと思いドアを開けた。

「あ……こんばんわ」

そう言っても彼女は挨拶もしないで

「矢吹君いる？」とだけ言った。

「いま、疲れて寝てますが？」

「起こしてきてくれる？」

その態度にムカツときた。

人が下手にでて挨拶したのに、その言い方かい！と思った。

「疲れてるみたいだから寝かせてあげたいんですけど？」

「ちよつと用事があるの個人的な！」

その声にかオルが目を覚まして降りてきた。

そして玄関の彼女を見て驚いていた。

「池田さん……なんでここにいるの？なにしてるの？」

驚いたようにカオルは彼女にそう聞いた。

「ちよつと外で話せない？」

そう言つてカオルのことを睨んだ。

「いや、外つて。この場で外なんか行ったら誤解を招くでしょ？なにかあるならここで言ってくれない？」

「私、貴方が別れるって言つから彼と別れたのよ？
なのにこの人なんなの？」

「いや、別れるって言つたのは池田さん不倫してるからでしょ？それに「別れたほうがいいんじゃないですか？」って言っただけで俺は「別れる」とは言つてないよ？
別に池田さんのことどうしようと思つてないし？」

「なにそれ？この前と言うことが違うじゃない！」

なんだか彼女の迫力とは逆なポケエ〜としたカオルの反応にただただ驚いてその光景を見ていた。
真ん中に挟まれて、動くに動けないポジションだった。
カオルを見るとまだ寝ぼけたように目を擦っているし、彼女を見ると物凄い目つきでカオルを睨んでいるし。

「あのさ。誤解してたら困るからハッキリ言うけど、俺は池田さんには興味無いから。彼女の前でおかないとさ。それに誤解されたら俺、捨てられちゃうの」

「酷い！矢吹君最低ね！！」

そう言っつて池田さんは思い切りドアを閉め帰っていった。

「変な女だなあ……」とポツリとカオルは呟き部屋に入った。

なんとなく心配になった。

いくら祐子さんが池田さんのことを悪くいったとしても、本当に彼女の誤解なんだろうか？

誤解であそこまで乗り込んで怒るだろうか？

それとも本当にカオルがなにかしたとか？

それにしてもカオルが冷たすぎる。

本当は冷たい人なんだろうか？

そんなことを考えて玄関に立っていたら

「まゆまでなにしてんの？」と普通の顔で言われた。

「あ……うん……」

「あ。もうこんな時間か。飯待っててくれたの？起こしてくれたらよかったのに。ごめんな」

と言いご飯をよそってくれた。

「ビックリした？」TVを見ながらカオルが言った。

「うん……」

「でも俺が言ったこと本当だから」そう言っつて目はTVから動か

なかった。

なにも言わずに黙ってご飯を食べた。
その姿を見てカオルは、

「もしかして疑ってる？」と聞いた。

「いや、、あんなに怒ってるから、、なにかあったのかなって」「
なにかって？」

「よくわからないけど・・・」

「俺って信用無いんだな・・・」

そう言っただけカオルは食事を終え二階にあがっていった。

信用してるとかしてないじゃなくて、あんな場面をいきなり
見せられたら驚くだろう！と思ったがなにも言えなかった。

食事の後片付けをして二階にあがるとカオルは寝ていた。

そのまま隣に入って寝る気になれずに下に降りて

パソコンのスイッチをつけて、部屋にいつてみた。

HNはちゃんとRioにして・・・

部屋に入ると人が沢山いた。

みんなが気軽に挨拶をしてくれたのを見てポロツと涙が出た。

この涙がなぜ出たのかわからなかった。

<ヤス> 「お？今日はリオで来たな？カオルは？」

<ハヤ> 「聞いたぞ？カオルのどこにいるんだって？」

<ミライ> 「言ってくれたら一緒に行つたのにー」

次々に出される文字に答えることができずにただ黙って涙を拭いていた。

しばらくすると二階からカオルが降りてきた。

「足、かなり楽になつたよ・・・ありがとう」

そう言つて隣に座つた。

そして泣いているのを見て慌てていた。

「な、なんで泣いてるの？俺、本当になにもしてないんだよ？ちよつと、、泣くなよ？な？俺の言い方が悪かつた？」

そう言つてアワアワしているカオルに何も言えなくて黙つていた。
画面のにはみんなが

<レナ> 「リオどうしたん？」

<ゴデ> 「まさかなにかしてるとか？」

<ヤス> 「実はカオルとか？」

そんな文字が出ていた。

「俺のこと信用できなくて泣いてるの？」

そう言ったカオルに「ううん・・・」と首を振り涙を拭いた。

「違うの、、、ちょっと驚いただけ。でも、あんなに怒ってるからもしかしたらカオルがなにかしたのかなって・・・
違うって言うてるのに、、、あたし疑ってたの、、、
祐子さんも、、、気にするなって言ったのに、、、
ごめ、、、ん、、、信じてない訳じゃないの、、、」

そう言い終わる前にまた涙が出て話せなくなった。

「ごめん。そうだよな。驚くよな。

あの人いつもそうなんだ。一人で勘違いして怒るんだよ。

俺、もう慣れたけど、、まゆはそうだよな。ビックリするよな」

そう言って頭を撫でた。

「大丈夫だから。ごめんね・・・」

そう言って涙を拭いていた。

「あのさ、これ一回中断したほうがいいよ」

そう言いながらカオルは画面を見ていた。

そう言われて画面を見ると（喧嘩してるんじゃないか？）とか

（いや！ヤッってんだよ！）とかワーワーと文字が早送りのように流れていた。

<リオ> 「ごめん。なんでもないので。ちょっと買い物してくる」

と出し、電源を落とした。

「やっぱりナンパの話なんか聞かなきゃよかった・・・」

いきなりそんな話を振られるとは思っていなかったのかカオルは

「ええー！そこまで話戻すのお？」と驚いた顔をした。

「戻す訳じゃないけど、そんなの聞いちゃって、ちょっと

この人軽いんだなって思ったとこにさっきのアレで・・・

で、どっちが本当なのかわからなくなって」

「俺、本当になにも隠してないからさ。そりゃ、前に会社の人達で遊んだ時、みんなで家に来て、その中に池田さんもいたりしたけど、それくらいだよ？個人的に家に呼んだこともないし。これからも絶対無い」

なんて答えていいかわからず黙っていた。
確かにもしも少しでもあの人に気があるなら、
きつと今回もあたしを誘うことは無かったと思った。
会社の人にも紹介してくれるなんてことも無いだろうし。

「うん。わかった・・・ごめんね」

「もう誤解してない？大丈夫？」

「うん・・・」

そう言ってもすぐには元通りのテンションにはなれず、
どことなくお互い無口だった。

「足・・・どう？少しはよくなった？」

「え？うん。すごく軽くなったよ。ありがとな」

「ううん。まだ痛いならもう少しする？」

「いいの？」

「うん。いいよ。明日も試合あるんだし、頑張ってもらわないと」

そう言つて二人で二階にあがった。

本当のところはまだちよつと引つかかっていた。

あたしの知らないカオルがいるような気がしてならなかった。
好きになればなるほどだんだん欲がでてきている。

最初は逢えたことだけで嬉しかったのに、それに満足してくると
もっと自分だけを見て、もっと大事にしてほしいとも思った。

今、大事にしてもらっていることは十分わかっているつもりだけど、ほんの少しでも心配なことがでてくると、
どどん悪いほうに考えてカオルのすべてを知りたくなった。

きつと今カオルはあたしに本当のことを

すべて言っているのかもしれないのに

それでも心の底ではほんの少しだけカオルのことを疑っていた。

うつ伏せに寝たカオルの足をマッサージしながら

（もつと信じてあげないと・・・）そう思いながらカオルの背中を見た。

「まゆ・・・」

「ん？・・・」

「本当に大丈夫？」

「・・・」

「俺もさ・・・」

そう言っただけカオルは顔を伏せたまま話始めた。

「いつも不安なんだ。なにかあってもすぐには側に行けないだろ？
休みの日とかなにしているのかなあ・・・とか思うと、
そのうちどどん変なこと考えて

（もしかしたら今ごろ誰かと一緒だったりして）とかさ、
その、誰かに抱かれているまゆとか想像したりとかさ、
それもたつたあの4日しか過ごしてない、

この一ヶ月の間、そんなことばかり考えてさ。かつこ悪いよな。俺」

きつと二人はお互いのことを同じように想っていたんだと感じた。
あたしもそんなこと考えたことがあった。

何度となく一人の時に初めての夜のカオルを思い浮かべた。

(他の人にもアノ時と同じようにスルのかな・・・) そんなことを考えた。

「好きになればなるほど、心配になっちゃうの。ごめんね」

そう言つとカオルも起き上がり

「本当だな。でも、今のところはそんな心配いらなからさ。な？」

そう言つて優しく抱きしめてくれた。

人の気持ちや考えは覗くことができない。

だから相手のことを信じることでしか、

それはクリアできないものだったりする。

もしもカオルに裏の顔があつても、今はわからない。

きつとカオルもそう思っているかもしれない。

その日、カオルはあたしが眠るまで黙つて髪を撫でていた。

あたしは子供のようカオルの胸に蹲つて眠つた。

この瞬間が永遠になればいいのに・・・

そつおもいながら眠った。

間の悪すぎる男

カーテンを開けると射すような日差しが部屋に広がり眩しさに目を細めた。

「あ……もう時間？」

そう言いながら寝ていたカオルは眩しそうに窓に背を向け布団の中に潜っていった。

「もう起きないと遅れちゃうよ？今日は試合早いんでしょ」

「うーん……俺、何時間寝たらスッキリ起きれるんだろ……毎日眠いんだけど……一生夜でもいいな……」

そう言いながら寝癖だらけの頭を触り起きた。

朝ごはんを食べながら「朝、味噌汁なんて何年ぶりだろ」と嬉しそうに食べた。

「和食が好きなの？なら言ってくれたらよかったのに」

「いや、なんでも食うよ俺。朝からカツ丼だってイケるし」

「げえ……それは重いな……」

そんなくだらない話をしながら、昨日のことはお互いにも話さ

なかった。

(カオルのこと、、、信じよう)

「そついえばさ……」

「え？」

「昨日、俺報酬もらってなかった……」

「もう。そんなこと朝から言わないでよ」

「ほら。一生夜のほうがいいだろ？」

「カオルの頭の中はそんなことでイッパイだね。まったく……」

「で。なんだったの？報酬って？」

「こんな朝から言えないよ」

「いいじゃん。教えてよ」

「だーめ。今日帰ってきてからね」

おかわりをよそうのにキッチンに行くと後ろからカオルが着いてきてヒョイとキッチンの上にあたしを持ち上げた。

「ちよつと、、、ビックリするじゃない！」

「俺、こうゆーのしたかったんだよな」

「え？」

「まだ時間あるよ……」

そう言つてキッチンの上に乗ったままの、あたしの唇に微かに触れるくらいのキスをした。

軽いキスだけのつもりだったのに、何度も小さくキスをしているうちに

自然とお互いの舌が絡み合い体が熱くなっていた。

目が虚ろになったあたしを見ながらカオルは不敵な笑みを浮かべていた。

「ダメだ！このままじゃ試合放棄しちゃうかもしれない・・・」

耳元でそう囁きながら、カオルの手はシツカリと服のボタンを外し肌蹴たブラウスの中に手が伸びていた。

少しだけ体を浮かさせ下着だけを脱がされカオルが入ってきた。

突き上げられる度に側にあつた食器が揺れる音がした。

狭いスペースに不自由な形で座らされていることが不安定でカオルにしがみつくとしくしくなく、

そんなあたしの行動が更にカオルを興奮させていた。

「まゆ見るとヤリたくなってダメなんだよなあ、、、」

しがみついたカオルの首元に薄っすらと汗が滲んでいるのが分かった。

暑い部屋で朝からそんなことをしたので二人とも汗だらけだった。

「一緒にシャワー入ろうか」

「え！いいの？一緒に入るの嫌だって言ってたじゃん」

「これが昨日の報酬だったの。だってシャワー浴びないと気持ち悪

くて行けないでしょ？」

そう言つて二人で狭いバスタブに立ちながらシャワーに入った。何度となくまたしようとするカオルを「もう遅刻するからダメ！」とかわしシャワーを出た。

「軽くなったから今日も勝てそんな気がする！」と言つカオルに「バカ！」と言つてグラランドに向かった。

グラランドに着くともうみんなが待ちくたびれるように集まっていた。

「遅い！こないかと思つたぞ！」

そう先輩らしき人に言われてカオルが頭を下げながら輪の中に入つていった。

観客席にはお盆だと言つのに人がたくさん来ていて、祐子さんの姿を見つげ近くに歩いていく途中、少し離れたベンチに池田さんが座りこつちを見ていた。

そのまま通り過ぎてもよかつただけど、彼女の視線を感じて隣に座った。

「昨日はごーも」

そう言つと彼女は無視をして前を見た。

「もうカオルに変なこと言わないでほしいの」

「変なこと？」

「カオルのこと好きなの？」

「そんなこと貴女に関係無いでしょ！あっちに行ってくれない？」

「ここで見るつもりは無いけど。でも、これ以上カオルにかまわな
いで。迷惑なの」

そう言うって池田さんの隣を立ち、祐子さんの隣に座った。

「まゆちゃんあの子となにかあったの？」

池田さんの隣に座って話をしていたのを見た祐子さんが聞いてきた。

「え？ああ・・・まあ・・・ちょっと。でももういいんです。なん
でもないです」

「そう・・・？でももしもなにかあったなら言うてね。」

でもできるだけあの子には近づかないほうがいいわ。

矢吹君もわかってると思うんだけどなあ・・・」

「そうなんですか？」

「矢吹君言うてなかった？彼女のこと？」

「え？ただ不倫のことで相談を受けたとか・・・そんなことは」

「それ以外にもあるのよ。いろいろね」

「そうですか・・・」

「矢吹君も被害者みたいなものなのよ。可哀相にね」

「え？どうゆう意味ですか？」

「あの子ね。嘘ばかりつくの。たぶんちょっと病気なのかもしれな
いわね」

でも若いし、それなりに可愛いからちょっと甘えると騙される訳
よ、

男どもは……

あ！でも矢吹君は大丈夫よ？そんなのには目もくれてなかったか
ら。

でもそれが返ってあの子の気に障ったみたいだね」

「はあ……」

「残業をしなきゃならない時期があつてね。

他の暇な部署から人借りたことあつたの。

その時にあの子がうちの部に手伝いに来てね。

うちの課長とデキちゃったのよ。

その課長っていう男もなんだろな？って感じの男なんだけど、

それと平行に矢吹君にちよつかいだしてね。

矢吹君は全然興味が無かったみたいで相手にしてなかったんだけ
ど、

それが気に障って他の人に矢吹君にセクハラされたって言いまわ
ってね。

私は彼がそんなことする人とは思わないから、

真っ向から否定したし、彼も否定したわよ。

ね？まゆちゃんだってそんなこと信じないでしょ？」

そう言われても……

(ナイとは言い切れないかもなあ、、、あの性欲じゃ、、、)

「あ。はい。そうですね」

「で、彼女を問い詰めたら結局は嘘ですって言ったんだけど、それでも一旦広がった噂はなかなか消えないものじゃない？
矢吹君いつの間にかセクハラ大魔王決定よ。」

本人は笑って (ま、そのうち消えますから) って言ってたんだけど、

それもあって今年の昇格無かったの、彼なら十分昇格もあったのよ？ 」

そんなことがあったんだ・・・
別に教えてくれてもいいのに・・・

「その話が消えかけてきた頃、例の課長の奥さんともめてたみたいでね。」

相談できた義理でもないのに矢吹君に相談したらしの。

でもそれを受けちゃうのが矢吹君なのよ・・・

人がいいっていうか、なんていうか。それでまた彼のこと好きになって

いろいろ誘ったりしたみたいなんだけど、アツサリ振られたって聞いたわ。それを根に持つてるのかもね？

最近じゃ彼女の素行の悪さをみんなが気がついて矢吹君のこと誤解してたって思う人達も多くなってきたからもう大丈夫だと思っけど」

「それ、いつぐらいのことですか？」

「そうねえ……今年の2月くらいかしら？」

「そうなんですか……」

その時期のカオルを思い出してみた。

でもあまり大きな印象は無かった。その頃はカオルのことなんか
なんとも思っていなかったし、部屋で会ったとしても特別カオルと
はあまり会話をしたこともなかったし……

「あ。もう始まるわよ！今日は調子どう？カオルちゃんは！」
期待をした顔で祐子さんは聞いてきた。

「えーと。大丈夫だと思いますよ？朝から元気だったから」

（違う意味だけど）

「そう。もう今日優勝なんかしたら連休いっぱいあげちゃうね」

そう言っつて祐子さんはメガホン越しにカオルを応援した。

前半1-1で結構いい試合だった。

まだカオルはシュートを決めてはいなかった。2本外したけど……

ハーフタイムに汗だくで横になっつてるカオルに祐子さんは

「こら！あんたが決めないとダメでしょ！連休あげないわよ！」とポカんとメガホンで頭を叩いた。

「は〜い……」タオルで顔を覆いながら弱い声でカオルが返事をした。

グツタリしていたカオルは起き上がり、みんなに聞こえないくらい小さい声で内緒話をしてきた。

「なんか、朝から張り切りすぎたせいかわか腰がガクガクしちゃって……
ヤバい……」

「だから言ったじゃない！もう！」
あたしも同じくペットボトルで頭をポカッと叩いた。

「部長〜 今日はあんまり期待しないでくださ〜い……
俺バテバテなんすよ、この二日走りっぱなしだし、……
もう体力限界ですよ〜」

祐子さんを見ながらカオルは情けない声で言った。

横で涼しい顔をした望月さんが

「だらしがないなあ。俺なんかこんなに元気だぞ？」と言ってカオルを見た。

「だって望月さんキーパーじゃないっすか！
俺FWですよ？走る量が違うじゃないですかー」

「いや。気の持ちようだ！俺も気分は走ってる！」
「気分じゃないっすか……」

望月さんがあたしを見て

「こりやまゆちゃんがなにかしてあげるって約束したら
後半違うんじゃないの〜」とイヤらしい顔をして言い、
その話に祐子さんが乗っかり話を大きくした。

「そうよ！この際なんでもしてあげるって言ってあげなさいよ！ま
ゆちゃん！」

この二人、、、他人事だと思って……

「俺なら、、、そうだな、、、裸エプロンがいいなあ〜 一度見た
い！
古臭いかもしれないがあれは男のロマンだな〜
まゆちゃん背高いし、スラッとしてるから似合いそうだし」

そう言っって人の体を下から上にジロジロ見た。
ちよっとその視線が気持ち悪かった……

「望月さんは祐子さんにしてもらえばいいじゃないですか」とカオルが言うと

「えっ、、、それはちよつと、、、、」
と祐子さんを見ながら望月さんは黙った。

「なによ？その目つき？あたしだって結構スタイルいいのよ？」
と言って祐子さんは怒りながら自分のボディラインを見せつけていた。

「ほら！矢吹君！シャンとしなさいよ！まゆちゃんのエプロンは私が買うから後半きっちり決めなさいよ！」

いつの間に決まってるのよ？裸エプロンで………

「俺。もっといいこと思いついた！」

そう言って耳元に口を近づけコソコソと言うと

「それOKしてくれたら決めれそう！」と言ってウインクした。

それを見て祐子さんが

「もうなんだっていいわよ！やつちゃいなさいよまゆちゃん！

よし！OK！それを目標に絶対勝つよ！矢吹君！」とカオルに吹っかけた。

「よし！頑張ります！」

あまり疲れていない望月さんとヨロヨロのカオルがグラウンドに走っていった。

それを見送り

「で。矢吹君なんだって？」と祐子さんが聞いてきた。

「いや……なんでしょ……」と気の抜けた返事をした。

「なによ　教えてよ　いいじゃない！あーいいなあ。

まだセックスを餌に男を操れるなんて！羨ましいな

私もあと20歳若かったらな」と言って笑った。

別にセックス関係って言っていないんですけど……

それにたかだかサッカーの一点では決めきれないことを
言われてちよつと困惑していた。

「まだ早いかもしれないけど、一緒に暮らさない？」

そうカオルは言った。

それはそう簡単に決断できるものではなかった。

さすがにちよつと早すぎる。

確かにカオルのことは好きだが、

まだ数ヶ月なのにそこまでは考えられない。

こんな時、女のほうが冷静かもしれない。

今はただ一緒にいることが楽しいと感じる時期だ。

体のことにしても、どれほど相手を求めても満たしきれないくらいに欲しい気にもなった。

けれどこれが今後ずーと続くかと言えばきっとそうではないと思う。いつか飽きてくる。

そして相手の悪い所が見えてくる。

その時に地元から遠く離れた場所に一人で悩みをかかえた状態で相談できる相手もいなく解決できるかも心配だった。

仕事だって簡単にはみつからないだろうし。

まだそれはできない相談だな……そう思った。

試合が始まり、ヨロヨロながらもカオルは頑張っていた。でも最後の最後には逆転されて負けてしまった。

祐子さんは気絶しそうなくらいショックを受けていたが、

あたしは（これで約束は無効だ……）とちよつと安心した。

戻ってきたカオルは

「あーあ。残念……勝てる試合だったのにな」
と頂垂れていた。

「うん。残念だったね……もうちよつとだったのにな」と慰めた。

祐子さんは

「でも昨日はあんなに頑張ったんだし、このチームにしては最高成績だわ！」

連休の件は安心して。約束は守るから！」とカオルに言っていた。

軽い打ち上げをして1時間ほどで解散した。

この後の関東メンバーとの食事会の時間には少し早く時計を見ながらカオルと相談をしていた。

「どうする？どこが見たいところもある？」

そう聞かれたが疲れていそうなカオルを振り回すのも悪い……

「ううん。今日はいい。また今度こっちに来た時に
ゆっくり案内してくれればいいよ」

「それもそうだな。ちよつと今日は疲れたな。

俺も歳だな　体力無くなったよ」

そう言つて車のシートを倒し横になつた。

明日、カオルはまた仕事なので今日の食事はちよつと時間を早めた。

でも試合がアッサリと負けてしまったので、その時間にはまだ4時間以上あつた。

「一回、家に帰る？そのほうがゆっくり寝れるんじゃない？」

「また出るのがめんどろになつちゃうな・・・でも時間ありすぎるなあ」

目を瞑つたままカオルは考えているのか、もう眠りに入っているのか分からなくくらいグツタリとしていた。

「映画館いかない？」

「え。なにか見たいの？あたしは別にいいけど・・・」

「暗くて寝れるじゃん。クーラーもきいてるし。」

俺は寝れるしまゆも映画見れるし」

「うん。いいよ。じゃあそつしようか？」

そのまま街に出て車を止め映画館に入った。

休みのわりに人は少なく、カオルが言ったようにクーラーは適温で昼寝には

最高の場所に見えた。

あまり見たい映画もなかったが、適当に空いていそうな映画を選び入った。

上映中カオルはグッスリ眠り、あたしは思ったよりも面白かった映画を満喫した。

食事会の場所に行きのれんを潜ると3〜4人のメンバーはもう来ていた。

ラビとヒデが一緒の席に座りワイワイとしている姿が見えた。その向かえにケイタとサクラが座っていた。

「こんばんは〜」と挨拶するとラビが飛んできて抱きついた。サクラも感じのいい人ですぐに打ち解けた。

ラビの行動を見てヒデが同じようにカオルに抱きつき、すぐさま頭を叩かれて突き放されていた。

所持持ちの4人はさすがにお盆ということもあり、お墓参りの為に欠席。

やはり独身のように気軽な休みは過ごせないんだね・・・とみんなで会えなかったことに残念だねと口ぐちに言っていた。

そこにヤスが来た。

「よ！噂のラブラブカップルじゃん！どう？東京は？」
とニヤつきあたしの隣に座った。

それを見てカオルが

「ヤス、お前余計なこと言いそうだからこっちに座れよ」と言ったがヤスは「いいから！いいから！」とその場を離れなかった。

「今日はみんなわざわざごめんね。忙しいんでしょ？」

「暇なのわかって嫌味？」とヒデが言った。

それを聞いてみんなで笑い、それほどみんな連休だからってどこかに行く訳じゃないと言っていた。

ヤスがみんなを見渡して

「あれ？マサはまだ来てないのか？」と言った。

「マサってヤツ来るのか？」とカオルが怪訝そうな顔をした。

それを見てヒデが

「まあまあ。いくらマサでももうリオにちょっとかい出さないだろうか
ら、」

そんなに怒るなよ、もう、」と言ってカオルに甘えた。

「だから気持ち悪いってー」とヒデを引き離しカオルが笑った。

チラツとラビと目が合った。

お互い「来るらしいよ……」と言う顔をしてるのがわかった。

マサが来る予定だと聞いてカオルはおもしろく無い顔をしていたが、別にみんながいる中で変なことも言わないでしょ？と宥めてやつと機嫌が治った。

いつ来るか分らない人を待つよりも先に乾杯しちゃおう！とヒデが言い、みんなで乾杯をした。

斜め前のケイタを見て、

「わざわざ仙台から呼んだみたいでごめんね」と言うと、

「ううん。どーせこっちに遊びにこようと思ってたから」と温厚そうな顔で言った。

写真でも見るよりもケイタは優しそうない人だった。

ラビとヒデがこの前のカオルの家でのことをみんなに教え散々冷やかされた。

ヤスが

「結局、一番ウマくいってるのはお前達だな」と言った。

その言葉が引つかかってヤスに

「ミライとなにかあったの？」と聞くと

「一緒に住みたいって言うんだよ、、、」と面倒くさそうに言った。

「俺、月に2回は北海道に行ってるんだぜ？それも長期で。

それでいいと思わないか？毎回空港で大泣きするしよ。

ちよつと最近めんどくさいっていうか、、、なんかな」

「逢いたくないの？」

「そんなこと無いけどさ。ちょっと真っ直ぐすぎるっていうか、
重荷になってきた。いちいちどこに居るとかチェックするし、
お前等そんなこと無いだろ？」

「うーん。そうだなあ・・・でもヤスの仕事ならどこに居るって
確認してもおかしくないでしょ？一ヶ所にいつもいないし？」

「確かにそうだけだよ。なんか疲れてきたんだよな」

そう言っただけでヤスはトイレに行った。

逢う回数が多ければ多いほど、飽きがくるのが早いもんだな・・・と
思いながら隣のラビと

「難しいね・・・いろいろ」と笑った。

ちょうどそこにマサが来た。

「どうも。こんばんわ」と言いながら、なにくわぬ顔であたしの
隣に座った。

ヤスが座っていた時よりもラビのほうに自然と体を詰めた。

「あ。リオさん？どうも」と握手を求められ、断ることもできず
に握手した。

「写真で見るよりも可愛いな」カオルうまくやったな」とカオル
のほうを見てニヤついた。

それを見てカオルは特に笑いもしないで「おう」とだけ言いビール

を飲んでいた。

なんとなく場の空気を読めない人だなと感じた。

そして今度はラビにむかって

「あ。ラビちゃん！今度また電話するから〜」と笑顔で言った。

ラビは引きつった顔をしながら笑顔でかえした。

ヤスが戻ってきて自分の場所が無くなったのに気がつき

カオルの隣に座り、なにやら二人で話をしていた。

そのうちみんなが少し酔ってきたのもあり、

適当に席を移りいろんな人の隣に座り話をしていた。

あたしはラビとサクラと三人でワイワイと楽しく話をしていた。

ちょうどラビとサクラが秋になったら北海道に遊びに来るといっ話で

「じゃあ、うちに泊まりなよ！」と言い、盛り上がっていた。

その話をマサが聞きつけ……

「じゃあ、俺が北海道に行った時も泊めてくれない？」と話に割って入ってきた。

「さすがにそれは、、、ちよつと、、、」

「だっていいじゃない？カオルだって泊めてもらっただんではない？
逢ってすぐなのにな？」

嫌味っぽくマサは平然と言った。

向かえの席で聞いていたヤスが

「おい。そんな言い方はちょっとどうかと思うぞ?」とそれでも笑
いながらやんわりと
マサに注意を促した。

ヒデも話に入ってきて

「そうだよ。リオとカオルはその前から仲が良かったんだし、
それもあって会いにいったんだから、そんな言い方するなよ」と
ヒデにしては真面目な顔で言った。

ちよつと場の空気が悪くなった。

マサはそれでも悪びれもせずに

「だって本当のことじゃん。逢つて1日2日でヤツたんだろ?
うまいことやったよな」カオルは。それ知ってたら
俺が先に行ったよ。そうしたら今頃は俺と付き合ってるかもよ?」

(.....プチッ!)

目の前で大きな声でそんなことを言ったマサに瞬間的に手が動いて

しまった。

パシンッ！

マサは驚いた顔をしながら叩かれた頬に手を当て、無言であたしを見ていた。

その場のみんなも。

「確かにそうかもしれないけど、なにも知らないくせに、、、
そんな軽い言い方しないで！あんたが先に来たってあたしは
絶対会ったりしなかった！カオルだから会ったの。勘違いしないで！」

そう言ってマサから離れた。

とてつもなく場の雰囲気が悪くなり、シーンとした。

なにげにカオルの顔が目に入った。

下を向いていたが、前髪の間隙から笑いを堪えているのが見えた。

「俺。今日はもう帰るわ。じゃ」とマサはそのまま帰っていった。

しばらくしてヒデがポツリと。

「マサの顔・・・手のひらの跡がついてたな。
俺もリオを怒らすの気をつけるよ。カオルも気をつけるよ」

その言葉にラビが大笑いをし、他の面子も「プツ！」と吹き出し
つの間にか

場は大笑いになっていた。

その後、ラビが

「あの人、私にもサクラにも食事行こうって電話してきてるの。
リオにもしたんだよ？なんだろね？変な人！」と怒っていた。

「なんとなく女を捜すのに必死な感じだもんな、、あいつ。
ちよつとヤバそうだな。自分のこと何も話さないしな」とヤスが
言った。

「部屋に入ってきてても女が少ないとすぐ落ちるしな。
でも、もう来ないんじゃない？あの（パチーン！）で」とケイタ
が言った。

「もう来なくていいよ」
カオルは爽快な顔をしてタバコの煙を上大きく吐き出していた。

「そうだな。結果的には俺達の部屋って今はこうして色恋沙汰が充
満しているけど、
当初はそんなこと考えてもいなかったもんな。それ目的で来られる

のは困るしな。

これで良かったんじゃない？目も覚めただろ、あのヒントで・・・」
ヤスがニヤリとしてあたしを見ながら笑った。

それからマサの話は誰もしないで、その場を楽しく過ごした。
ちよつと可哀相だったかなとも思ったが、もういまさら
そんなことを言っても遅いので黙っていた。

あそこまで力いっぱい叩いた人が言う台詞では無いな・・・と。

オレンジの花束

マサを叩いた件は一日にして今回の飲み会に参加していない部屋のみんなに知れ渡ったようだった。

月曜の夜、

お風呂からあがると、カオルがニヤニヤと電話をしている最中だった。

（「ダレ？」）

（「ヤス」）

唇の形で相手がヤスだと分ると、話の内容は聞かなくてもわかった。それからしばらく話をしていたようだったが二階で帰りの荷物の整理をしていた。

電話が終わり、カオルが上がってきた。

「ヤスが（その後どう？）って聞いてたよ？」

「どう？って言われてもなあ・・・」

「今、ネットしたらマサがいるってさ」

「あたし帰るまでしな〜い」

「じゃあ俺しちやおつかな〜」

「すれば？」

そう言うと、カオルは隣に座り人の顔を下から覗きこんだ。

「やっぱり付き合ってるって言わないほうがよかったかな？」

「いまさら……」

「そう怒るなって」

「カオルはさ。正直どう思った？」

「マサのこと？」

「ううん。あたしのこと」

「どっつて？なにが？」

「あの場で、会って二日目……ってこと」

「そうだなあ……」

そう言っただけしばらく考えていた。

正直、一日経ってちょっとマサに悪かったと思った。

たしかに腹はたったが、みんなの前であんなことすることは無かったなと反省した。

それもお酒が入っていたし、結構酔っていたようだったし。

本当は自分でも心の底で思っていたことを、みんなの前で言われたことで

あんなにカッとしてしまったんだと思う。

きっと他のみんなもそう思っていたかもしれない。

誰もがカオルが北海道に行くことは知っていたが、

あたしの家に泊まったと聞いて、きっとその日のことを想像したと思う。

結果として今、こうして付き合ったから問題は無かったかもしれないが、

これでその場だけの関係で終わったなら、きっとあたしはもうチャットはしていなかったと思う。

「俺は、この前言ったように会った時に」「この子と付き合う」と思ったよ？ そりゃ、一晩だけってことをしたことが無いと言えば嘘になるけど、まゆとはそんなつもりじゃなかったし。もしあの場で

嫌だと言われればなにもしなかった……かな？」

最後の「かな？」はかなり自信無さげだったがそう言った。

「軽いとか思わなかった？」

「うん……でも実際かなり恥ずかしがってたし、それ見たら思ったより遊んでないのになって。ほら、足とか力はいつて……」

「それ以上言わなくていい!!」と頭を叩いた。

「いいじゃん。他の人がどう思おうと。俺がどう思ってるかでよくない？俺は軽いなんて思ってないよ」

「うん……」

「まあ、きつとマサもヤスのこと見て、自分もまゆと……って思ってたとこにフタを開けたら俺と付き合ってた……て知ってつい言っちゃったんじゃない？」

「うん……」

「そんなに気にするなって。だってそんなこと言ったらヤスとミライも

同じじゃん。それにみんな大人だもの、そんな成り行きくらいわか
ってるよ」

「うん……」

「じゃ、俺ちよつとだけ顔だしておくよ。終わったたら降りてきて」

そう言つてカオルは下に降りていった。

まだ一日あるから完璧には荷物をしまいきれなく適当な所で荷造り
を終わりにした。

その後、下に降りて行くとカオルはPCの画面を見ていた。

「終わったの？」

「うん。まだ明日の分があるから全部は用意できないから」

「そつかあ……もう1日しかないんだな」

「そうだね。思ったより早かったね」

「昼間一緒にいないしな。やっぱり暇だった？」

そう言つて画面をそのままにしてソファーに座った。

煙草に火をつけながら、こっちを見て

「で。この前の話なんだけどさ」と話を切り出した。

「この前って？」

「あの、一緒に住まない？」ってやつ」

「ああ……あのことね」

「どう？考えてみない？すぐには言わないから。まゆが落ち着いてから」

「でいいからさ。ほら、仕事とかもあるし」

「でも、もうちょっと考えさせてもらっていい？」

「やっぱ嫌？」

「嫌っていうか・・・ちよつとまだ早いかなくて」

「早いかあ・・・そう言われてしまつと返す言葉が無いけど」

そして椅子に戻っていった。

軽く会話をして、カオルは電源を切った。

冷蔵庫からビールを出して一口飲み、ドサツと隣に座った。

「こーゆーのつてさ、いつがいい時期なんだろうな？」

「うーん。よくわかんないな」

「じゃあもういいかかって思ったら教えてよ。それまで待つから」

「うん・・・そうする」

「まゆさ・・・いままで付き合つた男と最高どれくらい長く続いた？誰かと同棲とかしたことある？」

「同棲は無いよ。でもまあ、泊まりにとかつてのはあるけど・・・最高かあ、2年くらいかな？」

「2年かあ・・・結構長いよな？それって？」

「うーん。そうかな？カオルは？」

「俺？俺は、、、半年くらい？いつも自然と終わつちやうんだよな？」

「自然にって・・・自分から連絡しないの？放つとくの？」

「うーん。そんなことないけど、ほら、今でも俺ってあんまり連絡とか

しないほうじゃない？そーゆーのって女の子は嫌がるじゃん」

「そっかもね……」

「あ。やっぱりそこは引つかかった？」

「ううん。ほら、あたし達って今は結構暇ならネットしてるからそこで会うし……だからあんまり気にしてなかった」

「それに休日とかどこか出かけたたりすると、いろいろ聞くじゃん。どこに居たの？とか何してたの？とか……」

そーゆーのが面倒くさくなるんだよねあ」

「それはカオルが信用無いことしてたんじゃないの？
そう言って笑うと、「してないよ！」と反論していた。

「もつそろそろ寝ようか？1時になっちゃうよ」

「そっだな。寝ようか」

そう言って二階に上がった。

部屋の隅にある荷物を見てカオルが言った。

「荷物、少し置いていってもいいよ。また持ってくるのめんどろっだろ？」

「でも、今度は冬でしょ？今とは服が違っじゃない？」

「あ。そっか……じゃあ下着とか置いていく？」

「いや、……、そんなことしたらジロジロ見られるからやめとく」

「そこまで変態じゃない！」

ベットに入り目覚ましをかけ電気を消した。
こうして一緒に眠れるのも明日までなんだなと思った。
今度はいつ逢えるんだろう・・・
そんなことを考えながら眠りについた。

次の日のお昼。

きつと帰ってしまったら、またカオルはなにも家で食事を作ったりしなくなるだろうと思ひ、簡単に作れそうなものを買ひ物に行った。

その帰り道、お昼休みのカオルが電話をかけてきた。

今日は外で食事をしない？と言われた。

今回こつちに来てほとんど外出をしなかつたから

最後の夜くらいどこかに行こうと考へてくれたようだった。

「じゃあ、7時に用意して待つてるね」

そう言つて電話を切つた。

買ひ物ついでに寝具を買ひ、家に戻つてからベットメイクをした。

暗い色のカバーやシーツを薄い色に変えた。

「なにか置いていけば？」という言葉を出して

パジャマを2枚買つた。それくらいなら置いていつてもいいかなと。

7時ちよつと過ぎになり、支度を終え待つているとカオルが帰つてきた。

「どこ行くの？」

「あんまり堅苦しいところはダメなんだ・・・でも結構ウマいとこ」

そう言つて、いつも会社の人達と来るといふちよつと洒落たレストランに連れていかれた。

堅苦しい所は嫌と言つていたわりに、そこは思つていたよりも綺麗なところだった。

席につくと近くのテーブルの人と目が合った。

目が合った人は軽く会釈をしてニコリと笑つた。

つられてこつちも笑顔で会釈した。

それを見てカオルがそつちを見るとどうやら同僚らしく、軽く手をあげ、頭を下げた。

「やっぱり会社に近すぎたかなあ・・・」

「会社の人なの？そんなに近いの？会社って？」

「うん。アレ」

そう指を指した先のビルは本当に目と鼻の先で、

（いくらなんでも・・・近すぎるだろ・・・）と思う距離だった。

「へえ、ここでいつもお昼とか食べてるんだ？」

「たま〜にな。俺、あんまりグルメじゃないし腹が膨れれば問題無いから、なんでもいいんだけどな。付き合いでね」

「そんなこと言われたら作り甲斐もあつたもんじゃないんだけど・・・」

「いや、そうじゃなくて！まゆの料理はウマいよ。本当に」

オーダーをカオルに任せ、外の景色を見ていた。しばらくすると、自動ドアから祐子さんが入ってきた。

「あ。祐子さんだ！」

カオルが振り返ると、祐子さんはこっちに気がつき手を振った。テーブルの側に来て

「まゆちゃん。この前はどーも」と笑顔で挨拶してくれた。

「こちらこそお世話になりました。今仕事終わっただんですか？」

「そう。たまには彼と食事でもって思ったけど、時間が時間だから予約とれなくてね。こんなところになっちゃった。て……矢吹君も？」

「あ。俺は、、あんまり店知らないし、ここでいいかなって」「ほんとダメね。もつと素敵なとこに連れて行ってあげないと！」

「よかつたら一緒にどうですか？あ、もし祐子さんがよければですけど……」「そう言うと祐子さんは

「え？いいの？やっぱり食事は大勢のほうが楽しいのよね。矢吹君いい？もし二人つきりで甘い言葉を交わしたいならお邪魔はしないけど」とカオルを見て笑った。

「それほど甘い言葉を言えるキャパもないですし。これから一緒に帰るんだし、俺はいいですよ。部長がよければ」

「じゃ。お邪魔しちゃおうかな」と祐子さんは笑顔で座った。

ボーイに「私も料理は同じもので」と告げ、ちょっと高そうなシャンパンを頼み、

「これ、私から二人に」と言って自分が一番先に乾杯〜と言って飲んだ。

「まゆちゃん明日帰るんでしょ？矢吹君寂しくなるわね」

「まあ、そうですね。でもこればかりは仕方ないですから」とカオルはシャンパンを飲みながら言った。

「まゆちゃん。結婚しちゃえばいいのに」

いきなりそんなことを言われて驚いて吹き出す所だった。

「まだ早いですよ！そんなこと」

「でも結婚してタイミングよ？まだ早いなんて言ったらいつの間にかお互い言い出せなくなつてダラダラしちゃうわよ？」

「部長のように？」とニヤついてカオルが言った。

「本当にそうなのよ！でも今が楽と言えば楽なんだけどねー
たまくにしか逢わないから新鮮でもあるし、

これで同じ所に住んだら、きつと飽きちゃうわね。

仕事でイライラしてたら当たってしまうし……」

「そんなこと言わないでくださいよ。今、一緒に住まない？って
言ってるのに……」

「あ。そうだったの？ごめんなさ〜い」と一気にグラスを飲み干し
笑った。

「あ。そう言えば矢吹君、昼間にあそこの店にいなかった？
えーと、ほら、なんて言っただけ？そこの角の……」

「あー！いいです！それ以上言わなくて！て、もう酔ってます？
と会話を途中で切った。

祐子さんはニヤニヤしながら、カオルのほうを見て

「へ〜」と言って笑った。

そこに望月さんが来て3人を見て驚いた顔をした。

「なんでここにみんないるの？」

「あ。偶然、祐子さんをお見かけしたんでよかったですら一緒に……
・
やっぱり〜迷惑でしたか？」

「いいえ！いいえ！どーせ二人で食事してもこの人が先に酔って
担いで帰るだけだから、他人がいたほうがセーブするだろうし」

そう言って席についた。

料理が運ばれみんな楽しく会話をしながら食事が進んだ。なるほどカオルの言うとおりにどれも美味しかった。祐子さんはあまり食べずにガンガンと飲んでいた。それを見て望月さんは

「誰が居ても……同じか……」と言いながら呆れた顔をしていた。

小声で「祐子さんと結婚しないんですか？」と聞くと

「もう5回断られてるんだよ……」と言った。

マズいことを聞いてしまったようで、申し訳なくなった。

「けど。将来はこの人にとって思ってるんだ。俺がいないとダメかなって。」

強いように見えて、そうでもないんだよ……」と子供を見るような目で祐子さんを見て言った。

「まゆちゃんはドレスが似合う年齢に結婚するんだよ。」

30歳過ぎてからは見えていても痛い時あるし……」

「はぁ……」

「矢吹はおすすめだよ？俺も祐子も太鼓判だから……ちよっと無口だけど、いい奴だし」

そう言ってカオルのほうをチラリと見た。

そう言われてカオルは

「そうそう。早めに手を打たないと売れちゃうよ。俺」と言い

望月さんに「よく言った!」と言わんばかりにシャンパンを注いだ。

食事を終え、精算する時になると祐子さんが

「ここで割り勘なんてできないでしょ?今日はオゴリよ。ね?矢吹君!」と肩を叩いた。

素直にお礼を言い、祐子さんに

「今度来る時はお土産期待してください」と言って別れた。

帰りの運転は結構飲んだカオルに代わり乾杯の一舐めしかしていないあたしが変わった。

車の量にちよつとドキドキしながらも無事に家に着いた。

家に入ると

「あ。ちよつと待って!」と言いカオルは車に忘れ物を取りに言った。

無事に家に着いたことに満足して

(結構走れるじゃん・・・東京も・・・)と優越感に浸っていた。

玄関に入ってきたカオルは綺麗なオレンジのバラの花束を持ってきた。

「わあ・・・どうしたの?これくれるの?わー。ありがとうー」

「あの、、、それで、、、これ」

小さな箱を出した。

それはどう見ても指輪が入っていきそうな箱だった。

一瞬、言葉が出なかった。

「昨日、「早い」って言われて確かにそうだと思ったつもりもしたんだ。俺いままでちゃんとしたプレゼントとかもしてないし、

いつも身に付けられる物がいいかって。

サイズとかも合ってるかどうか微妙なだけだし、

この前見たＴＶで言ってたんだ。

「運命の人なら男の小指の大きさが彼女の左の薬指と同じサイズ」
だって。まあ、、もしサイズ違ったら変更してもらえるし・・」

「変更したら運命じゃないじゃん……」

「いや、たぶん大丈夫かなって」

箱を開け中を見ると、とても可愛い指輪だった。

それを取り出し指にはめてみた。

サイズはちょうどよかった。

「ぴったりだった。ありがとう」

「よかった。そんなに重い意味はナイから心配しないで」

「てつきりプロポーズかと思ってビックリした」

「したって断るくせに……」

「じゃあこれ、あたしから」

思えばカオルに特別にプレゼントとかしたことが無かった。

カオルの趣味がいまいちわかっていないのもあったけど。

「これ。インドで古くから言われているお守りみたいな物なの。

一応シルバーなんだよ。元々男性用だから違和感は無いと思うんだ。

カオルに似合うと思う」

そういつて自分の首にしていたチョーカーを外しカオルの首にかけた。

「前からかっこいいな・・・て思ってた。本当に貰っていいの？」

「うん。カオルのほうが似合うよ」

「サンキユ」

「あたしもありがと。大事にするね」

「俺達、こーゆー普通の恋人みたいなことしたことなかったな。

アッチのほうはかなり進んでいると思うんだけどな」

「そんなことは言わなくていい！」と頬を強くつねった。

きつとこんな普通のことを飛ばして、

すぐ体の関係にばかり流れたことが、不安だったのかもしれない。

なにかというとすぐ体ばかり求められてることで、

そのことだけにカオルは夢中になっているんじゃないかと

思ったことがあったのも事実だった。

馴れてきたら飽きられる・・・

そんなことが怖くて、本当は（一緒に暮らそう）と言われたことが嬉しかったのに、あんな返事しかできなかったのかもしれない。

カオルに新しいパジャマを持ってきて渡した。

「これカオルに。あたしの分も買ったの。それは置いていっていい？」

「もちろん！」

その夜。

とても幸せな気分でカオルに抱かれた。

せつかく買ったパジャマもベットに入った瞬間に脱いでしまいあまり意味の無いものになってしまった。

新しいシートも肌にあたる感触がとても良かったが、

シートが冷たいと感じたのはほんの一瞬だった。

すぐに体が熱くなり、汗ばんできた。

カオルの指、唇、手をまわした背中、すべてを今度逢えるまで忘れないようにと思った。

「カオル……あたしの体にキスマークつけてくれない？」

「へ？キスマークって……そんな高校生みたいなことするの？」

「うん。だって3〜4日は消えないでしょ？」

帰ってからそれ見たらカオルのこと思い出せるから……

でも目立たないところにね」

「変なこと言うよな……」

そう言っただけ笑いながら首筋や胸の横などを「ここ？このへん？」

と聞きながらどこにつけようかと考えていた。

「明日……空港まで送ってくれなくていいから」

「どうして？俺休みじゃん。そのためにもらった休みなのに」

「ゲートの前で別れるの寂しいから。家からなら着くまで

道間違えないか必死でそれどころじゃないでしょ？ね？」

「それは俺が寂しいなあ。独りだけ部屋に残るのはちょっとなあ……」

「」

「そつかあ。じゃあやつぱり送つて。帰る時つてなんだか寂しいね」
「またすぐ逢いに行くよ。休み決めたらすぐ連絡する」
「うん……」

そう言つて数ヶ所あまり目立たない所に薄つすらとキスマークをつけてくれた。

そして寝る時にいつもあたしがカオルにしてもらつように後ろから抱きしめて欲しいと言われいつもとは逆のカタチで眠つた。

次の日。

寝ているカオルの鎖骨のあたりにコツソリとキスマークをつけた。

それでも全然起きる気配の無いカオルを見て、

(後から見てビクツリするだろうな)とキシシ笑つた。

昼過ぎにカオルが荷物を持っておりてきた。

最終便の飛行機なので、そう慌てることは無く、

午後を二人でゆっくり過ごした。まるで今日も泊まるかのように買い物に行き近くを散歩した。

だんだんと暗くなるにつれ、気分もだんだんと暗くなった。

6時になり、

「そろそろ行こうか？」と言つとカオルは

「そうだなあ、もうそんな時間かあ」と時計を恨めしそうに見た。

ガラガラと大きな荷物を車まで運びトランクに押し込みカオルが言った。

「忘れものは無いか？もしあつたら後から送るけど」
「うん。無い・・・？あ！花！お風呂場に忘れた！」
「あんな大きなもの邪魔になるんじゃない？
花なんかどーせ枯れるし。いいよ」
「だって初めて貰ったものだもん。持っていく」

鍵を預かり部屋に入り浴室の洗面器に入れておいた花束を抱いた。
綺麗なオレンジのバラが20本ほどのその花束を持って急いで玄関
に行った。
ふと思いついて、その中の2本をカーテンの側に吊るした。
後から独りで帰ってきたカオルが少しでも寂しくないように。

玄関から部屋の中を見渡し、誰もいない部屋にむかって

「じゃ。また来るね。さよなら」

と言ってドアを閉めた。

空港までの道のりは思っていたより短く、
なんだかすぐに着いてしまったような気がした。
荷物を預けて空港内を歩き、屋上で飛び立つ飛行機を見ていた。

「あたしがゲートに入ったらここには来ないでね」

「なんで？」

「窓からここにいるカオルが見えたら泣いちゃうじゃない」

時間が迫りいつまでも繋いだ手を離すのが惜しかった。

「じゃ。着いたら電話するね」

「うん。帰り車気をつけるよ？飛ばすなよ？」

「わかってるって。カオルこそ泣きながら運転しないよーにね」

そう言ってお互い笑顔で別れた。

一度だけ振り返って手を振った、それ以上は振り返ると泣きそうなので

後ろを見ないで手を振りゲートの向こうに消えた。

座席に座りなにげなく外を見た。

さっきの屋上がすぐ近くに見え、そこに数人の人が見送りをしていた。

けれど暗くてそれが男なのか女なのかも区別がつかなかった。

隣に座った初老の女の人が持っていた花束を見て

「珍しい色のバラですね。とても綺麗」とニッコリと微笑みかけた。

ニッコリと笑い、花束を見つめた。

この花束を貰った時間に今すぐにも戻りたい・・・

涙が出そうになり外を見た。

外はもう真っ暗で見送りの人にどんな人がいるのかすら分らなかった。

でもなんとなく、その中にカオルがいるような気がして見つめていた。

飛行機が飛び立ち、来た時とは逆に重い気持ちで空を飛んだ。千歳に着き、駐車場の車に荷物を載せてからカオルに電話をした。カオルはもう家に着いていた。

「今、こっちの空港に着いた。これから家に帰るね」

「そっか。気をつけるよ。ゆっくりだぞ？」

「うん。わかつてる。カオルも今日は疲れたでしょ？早く寝てね」

「ああ。わかった。あ、部屋に入ったら花の匂いがしてたよ」

「そのままにするとドライフラワーになるからいいじゃない」

「ちよっと女の子の部屋っぽくない？それ？」

「いいんじゃない？女の子連れ込んで彼女いるって思うだろうし？」

「作戦か……」

「まあ、そんなとこ。じゃ、もう行くね」

「うん。またな」

そう言っただけで家に向かって車を走らせた。

次の日には朝から仕事が残っている。

長かったようで短かったような休みがもう終わる。

きつと家に着いたら暗い部屋に電気をつける瞬間寂しくなる。

「一緒に住んじゃおうかな〜」

そう言いながら高速を走り家に帰った。

聞かなければ良かった話

カオルの家から戻って2ヶ月近く経った。
家に戻れば戻ったで、それなりに気持ちは切り替わり
寂しくて仕方無いという気持ちにはそれほどならなかった。

相変わらずカオルは頻繁には連絡をしてこなかった。
けどそれがカオルのスタイルだと思えば、腹も立たなかった。
あたしもそれほど連絡をするほうでは無いので、ごくたまに・・・
週に1度くらいどちらからとも無く電話をするような感じだった。

9月には休みを取ると言っていたカオルだったが、
同じ部署で急に退職した人が出たので、なかなか休みがとれなくな
っていた。

やはり逢っていないとなんとなく気持ちのテンションが下がるのか
な・・・
そんなことを思っていた。

それでも「おはよう」「や」「おやすみ」のメールは毎日届いた。
(カオルにしては頑張ってるな・・・) そう思った。

ある日の夕方。

仕事を終え家に帰ろうとして着替えをしていると、携帯が鳴った。
画面を見るとヤスからだった。

「もしもし。なんか久しぶりだね。なにかあった？」

「おう。元気か？俺今、こっち来てるんだ。
車で1時間くらいのとこに居るから暇なら飯でも食わないか？」

「そうなんだ？札幌行かないの？」

「ああ。明日もここで仕事だからな。じゃあ俺もそっち向かっていくから

リオもこっち向かって来てくれよ。なら30分後には落ち合えるだろ？」

「わかった。そうするね。じゃあ途中で電話する」

そう言っつてヤスの言われた方向に車を走らせた。

ちようど40分ほど車で走らせたあたりで電話が来て、落ち合う場所を決めた。

指定された店に行くとヤスが手を振っていた。

「久しぶり。東京以来だね？どうミライも元気？」

「ん？ああ・・・まーな。カオルは？」

「うん。元気らしいよ？あたし達それほど連絡しないから。」

朝と夜のメールくらいかな？後はカオルも今仕事が遅いみたいだし」

「そうなんだ。ウマくいってんだな。お前等」

「まーね。カオルも影でなにしてるかわかんないけどね」

そう言っつて笑ったが、ヤスはなんとなく浮かない顔をしていた。

アルバイトの女の子が注文をとりにきて、各自注文をした。

その子をチラチラと見ながら、実に愛想良くヤスが注文した。

鼻の下を伸ばすってこのことだな・・・という顔で。

「ねえ？なにかあったの？最近二人ともネットしてないし」

「ん？ああ・・・俺、ミライに「別れないか？」って言ったんだ。

けど、大泣きされてよ。結局はうやむやで帰ってきたんだけど、

それから電話とかしてもいつも同じこと言われるし、

俺からは電話しなくなったんだ。

まあ、放つといってもミライからはくるんだけど。

なーんか噛みあわないっていうか、疲れるっていうか、もうダメか
なってるさ」

そう一気に言っつてヤスは煙草に火をつけた。

「なにを言われるの？」

「結婚したいって・・・俺こんな仕事じゃん。

結婚したからってアイツが望むようなのは無理だと思っただよな。

それに、まだ結婚とか考えられないっていうか、なーんかな」

「そうなんだあ。でもミライは本気なんですよ？

ヤスだっつて遊びじゃないんでしょ？」

「うーん・・・遊びっていうか、なんかもつと軽い感じで・・・

っつて思っつてたんだよな。

ほら札幌の彼女はミライ、仙台はアノ子、大阪は・・・みたいな感
じだ」

「ええー！そんなにいるの？」

「いや、いねえけどよお。そのくらいの軽い気持ちだったんだよ。

ほら、最初はミライって見た目可愛いしさ、
こんな子とやれたらなって思ったし。
こんなに本気になれるとは思ってもいなかったんだよ」

「やれたらつて…… 本当に歩く下半身だよ。まったく」

「リオもそんなところあるんじゃないの？カオルと」

「え？あたしが？失礼な！」

「いや、それだけとは言わないけどさ。結構お前等相性いいんだろ？
ほら。アッチの？」

「カオル…… そんなことまで言ってるの？」

「いやハッキリは言わないけどさ。」

でもまあ、、なんとなくそんなことも言ってたかなって」

「そんなことつて？どんなこと？どんな風に言ってるの？なんて？」

「そ、そんなに質問攻めすんなよ。」

別にどんな体位でとかリオがどうしたとか

そんなことまで言っていないって！ただ俺がこの前ミライとのこと言
ったら

「体の相性は大切だぞ！」って言ってたからさ。そうなのかなって
て」

「そうなんだ……」

そう言われて、前に男ばかりのチャットのことを思い出した。

知らないふりをしてそうだけど、きつとまた男ばかりの時に調子に
乗ったカオルが一言、二言言ってるような気がしてならなかった。

「で。どんなことしてんの？」

イヤラシイ顔をして聞いてきたヤスに呆れた顔をして目をそらした。

「ヤスはミライと一緒に住むこと考えたことないの？」

早々に話題を切り替えた。

「俺？俺はいまのとこ無いかなあ。だっているいろとめんどろじやね？」

「めんどろじあぁ…… そんな風に思われてるってミライが知ったらシヨックだね」

「うーん。けどミライには言ったんだよ。

「まだそんな気になれない」って。でも「どうして？」とか

「私のこと嫌いなのか」とか……さぁ……
「どーも分ってくれないんだよなぁ」俺のこと

「めんどろさいという気持ちを分れてほづが難しいと思うよ……
普通は」

「お待たせいたしました」学生風の可愛い子が愛想よくヤスの頼んだ

五目チャーハンと回鍋肉を運んできた。

チャーハンをテーブルに置く際にお皿がコップにぶつかり、少しだけ水がこぼれた。

「きゃー！」めんなさい

女の子は慌ててお皿を引いてどこに置こうか迷っていると、すかさずヤスは

サツとお皿を受け取り、その子に

「いいよ！いいよ！全然大丈夫！それより君にかかってない？」
と優しく気遣ってあげていた。

彼女はそんなヤスを見て、ちよつと恥ずかしそうに頷き、頭を下げ去っていった。

「かわいいな〜」

彼女の後姿を見ながらニヤニヤというヤスを見て、なんだかな〜と思つた。

「あたし、間違つてヤスと付き合わなくてよかった〜」そう言うと、「その間違つてってなんだよ？」と横目で見ながらモグモグと口を動かした。

さっきの彼女が今度はあたしが注文したあんかけ焼きそばを運んできて、

注意深く静かに皿を置いた。

そしてチラッとヤスのほうを見て、ヤスと目が合つとまた恥ずかしそうに

俯いて頭を下げ急いで去っていった。

「いまなら秒刹でアノ子落とせそうだね・・・」

「やっぱそう思う？俺もそう思う」と言い、遠くから見ている彼女に笑いかけた。

彼女はヤスの笑顔に嬉しそうな顔をしていた。

「ヤスつてさあ……いつつもその調子なの？
真面目に付き合ったりしないの？」
ちよつと呆れた顔して言った。

「俺だけじゃねーよ。カオルだつて似たようなもんじゃん昔は？
まあ今でこそちよつと真面目になったのかもしれないけどよー」
人のやきそばを勝手に食べながら言った。

「カオルが？」

「あれ？去年の話聞いたろ？ナンパして何人が食つたつて？
リオともそんなかな〜つてちよつと思つたけど、
今回はそうじゃないみたいだつたけどな。

あのカオルがこつも変わるとはな〜
リオはいいもの持つてるんだろな〜
俺もあの時ホテルでちよつとお願いしときゃよかつたかな〜」

そう言つて笑つた。

でも、その冗談にうまく反応できなかった。

「食つたつて……カオル……話しただけ」つて……

「あまりにも軽く衝撃的なことを言われて、言葉が片言になつた。

「え？まじで？知らなかつたの？」バシてなんか言われた？」

つて言つたら、「そりゃもう〜」つて言つてたから、てつきり……

「・

ちよつとあたしの表情が変わつたのを見て、
ヤスはそれ以上にも言わなかつた。

「あ・・・いや。いいの。昔のことだし。
いまになって怒っても仕方ないし」そう言ってなんとか笑った。

結構シヨックだった・・・いや・・・相当・・・

食事が終わり、お皿を下げてもらい珈琲を注文した。

なんとなくさっきの話以降、あたしの話し方が変わったのかヤスは

「そんなに気にするなって！カオルもその場だけって思ってるから
相手の

連絡先とかいっさい聞いていなかったし、教えてもいなかったしよ
お。

俺はすっかりその後も遊んだけど、あいつは俺の遊んだ子通じてカ
オルの

連絡先聞いてきても「絶対教えるなよ！」って言ってたし」

「ふーん・・・」

「お前等今はウマくいってんだろ？なら気にするなって。

男だもの目の前で食べそうな女いたら食うじゃん？

でも、本気じゃないから　その後は連絡しなかったんだろうし」

そう言ってまったく悪びれもせず珈琲を飲んでいた。

ほんとこいつは言わなくていいことを言う・・・

せつかく忘れかけていたのに、蒸し返すもいいとこだ。

それも2倍3倍にして・・・

去年のことだとわかっていても「あら。そうなんだ？」

と軽く流すことができずちょっと気分が下がった。
ヤスもそんなあたしを見てさすがに悪いことを言ったのかな・
という感じだった。

食事を終え

「どっか行く？カラオケとか？」とヤスが聞いてきた。

「うん。そんな気分じゃない」と答えた。

「じゃあ俺とホテルでも行ってみる？嫌なこと忘れるかもよ？」
と笑いながら冗談を言った。

「そうしようかな・・・」

「えっ！まじで？リオ口堅い？カオルやミライに内緒にしてくれる
？」

と、ちよつと慌てながら言うヤスに

「行く訳ないじゃん・・・」と真顔で返すと

「だよな〜 ビックリした」と言いヤスはサツサと歩いていった。

こいつ、うん。絶対内緒ね！」とか言ったらヤル気だったな・

・

駐車場につき

「じゃ。またね」と言い別れた。

ヤスはあたしの運手席の窓を叩き、

「今のカオルは遊んでないんだから、そう気を落とすなよ」

と言い手を振った。

発進した車の中で

「お前が余計なこと言わなければ気を落とすことも無かったんだよ！」と

ブツブツ文句を言い車を走らせた。

帰る車の中で延々とそのことを考えた。

カオルが知らない子にキスをする映像が頭の中に浮かんだ。

それ以上のことも・・・

そう考えれば考えるほど気分が落ち込んだ。

そんなことをヤスから聞いたとカオルにいまさら言った所でどうしようも

無いことだと分りきっていた。

けれど独りでそのことを考えるのは辛かった。

そんなことをカオルに言っても困らせるだけだと思っし、

いくら謝ってくれても、聞いてしまった記憶は消せないし。

去年の夏にカオルがなにをしようとも、あたしにはアレコレいうことはできないとも思った。

そんなことを聞いてしまった今、池田さんのセクハラ疑惑ですら

「実は、なにかあったのかも？」と思っってしまう。

重い気分で家に帰った。

化粧を落とし、シャワーを浴び、何もする気になれずにボーとしていた。

「考えてもなにも変わらないのになあ・・・」

そう思いながら窓を見上げると大きな月が出ていた。

きつと毎日でているのだろうけど、なんだか久しぶりに見た。

「満月かぁ・・・どーりで明るいんだなあ」

部屋の電気を消すと月明かりで床に自分の影が伸びた。

（キツネ・・・）指で影絵を試してみた。

（あとなにがあつたかな？・・・）

そんなことを考えていたら携帯が鳴った。

画面を見るとカオルからのメールだった。

<今、仕事終わって帰ってきた。もう寝た？

俺はいまから風呂入って寝るかな。早く暇にならねーかなー>

（今まで仕事だったんだ・・・）そう思った裏に

（本当に仕事だったのかな？）という思いが込み上げた。

返信にくそつち晴れてる？今日は満月みたいですよ！と
打ち送った。

なにか他のことを書くと、さっき聞いたことをなにげなく書いてし
まいそうだった。

すぐに返信がきた。

<晴れてるよ。こつちも見える。月なんかジツクリ見たことなかつ
たけど

綺麗なもんだな>

その返信を見て、また月を見た。

（カオルも同じもの見ているんだな・・・）

そう思ったら急に寂しくなった。

同じものを見ているのに、すぐには逢えない距離が悲しくなった。

<あいたい>

その4文字だけを打って送った。

いままでそれを言うとカオルが困ると思えば絶対電話でもメールでも言ったことがなかったのに・・・

送って間もなく電話が鳴った。

「もしもし？どうした？なにかあったのか？」

心配そうな声を聞いて涙が止まらなかった。

黙ったままのあたしにカオルは

「ごめんな。すぐ逢いに行くっていったのに、なかなか休めなくてもうちょっと、来週にはなんとか目途がつくから。そしたら休めるから」

「ごめん・・・忙しいのに。なんでもないから。大丈夫だから」

泣いているのをバレないように必死で隠して言った。

「まゆ、もしかして泣いてない？なんか声が変わだぞ？」

「風邪ひいたみたい。なんでもない」そういって鼻をすすった。

「やっと新しい人に簡単な引継ぎ終わったし、遅くても再来週には

行けるから。もう少しだけ待って。ほんとにごめん！」
そう言って謝るカオルの声を聞き、気持ちを落ち着けて答えた。

「うん。待ってる。ごめんね、疲れて帰ってきたのに、
ゆっくり休んで。おやすみなさい」

そう言って電話を切ろうとすると、

「俺も逢いたいよ。」

じゃ、おやすみ。風邪早く治せよ。また電話するから。じゃーな」

そう言って電話は切れた。

切れた電話を握りながら窓を背に床に座った。

独りであるのがどうにも悲しかった。

そのまましばらく何もしないで暗い部屋でボーと座っていた。

1時間ほど経った頃、なんだかかなにもしないで座っていることが

バカらしくなって立ち上がり、そのままベットに倒れこんだ。

いくら考えても終わってしまったことは仕方が無い。

過去のことについてまでも怒っているのもバカらしい。

けど……

消そうと思っても消えないカオルへの不安な気持ちで

いつまでも胸がムカムカして胃のあたりがギュツとした。

この気持ちはいったいいつになっただらスッキリするんだろう。

離れている間は延々とそんな気持ちなんだろうか……

一緒にいても、帰りが遅くなるカオルにきつとそんな気持ちに
なるんだろうか……

不安と悲しさが入り混じってその日はなかなか眠れなかった。

ウトウトしていた・・・

携帯の音で目が覚めた。

画面を見たらカオルからで、電話にでながらベットの時計を見ると2時少し前を指していた。

「まゆ？寝てた？」

「あ・・・うん。ウトウトしてた。まだ寝てないの？どうしたの？少し頭がボンヤリしていた。」

ウトウトしていたせいで、さっきのムカムカは消えていた。

「ちょっと前にヤスから電話がきてさ」

ヤスという言葉にさっきのことを思い出しました胃がギュツとした。

「あ。うん、さっき言うの忘れてたけど、今日ヤスとご飯食べたの。1時間くらいで帰ってきたけど。行く前に一言メールすればよかったね。ごめんね」

ヤスとは絶対誤解されないとは思っていたけど、もしものことを思ってそう言った。

「いや、いいんだ。そんなことは。ただ・・・ヤスが余計なこと言ったんだろ？それでさっき泣いてたんだろ？」

その言葉を聞いて、きっとヤスがそのことでカオルに電話をしたんだと思った。

「あ……でももういいの。いまさらそんなこと言っても仕方ないでしょ？過ぎたことなんだし……」

本当はいろいろ聞きたい。それもちよつと怒って。

けれどももし自分が同じことをして、それをいまさらカオルに責められても（お互い好きになる前じゃない）と言うと思った。開き直る訳じゃないけど、もうどうしようもないことだ。

カオルも慌てて電話をしたものの、あたしが言った言葉にそれ以上なにも言えないで黙っていた。

<過ぎたことなんだし>

そう言われてしまえば、なにも言えないんだろうなと思った。

気まずそうに黙るカオルにすぐにでも

（気にしないで）

（今が真面目ならいいの）

（全然気にしてないから！）

そう言えたらどれほどカオルは楽になるだろうと頭では分つていても言葉が出なかった。

まだそこまで吹っ切れることはできなかった。

「ごめん。どうにもならないことなのに、すぐに笑えないよ……カオルが優しい分、そんなことする人だって信じられなくて……」

「もう俺のこと信用できないってこと？」

「そうじゃないの。昔のことだって分ってるし、あたしと関係無い時のことだって分ってるのに、聞いてからズーと胸がモヤモヤして、胃が痛くて、頭の中で他の子と仲良くするカオルが浮かんで、」

そこまで言っ言葉がつまり話せなくなった。

「今の俺にはくもうそんなことしない>しか言えない」
静かにカオルがポツリと言った。

そんなこと分っている。

それくらいしか言えないのも分っている。

「ごめん。今日はもう寝て。疲れてると思うから・・・」
「でも、このまま切ったら・・・」

そう言っカオルは黙った。

「そんなに騒ぐことじゃないのに、ごめんね。
女の噂のひとつやふたつあるに決まってるのに。
面倒くさい女でごめん・・・」

そう言っカオルの返事を聞かないで電話を切った。

せつかく心配して電話をしてくれたのに、こんな切り方をした自分が嫌になった。

あんな切られ方したら、今頃カオルが気にしているかもしれない。

自分の器の小ささにほとほと嫌気がさした。

今ならあの時のヒデの「カオルはなにが言ってた？」と言った意味がわかった。

きつとこのことを聞いたの？と言いたかったんだと思う。

アノ場で聞いても、今日聞いても落ち込むのは一緒だったろうけど。

できることなら今日ヤスとの食事を断ればよかったな・・・

そんなことを考えながらベットに入った。

少し眠ったので、今度こそなかなか眠れなかった。

さっきまであんなに大きかった月は小さく西の空に小さく見えた。

黙っていつまでもその月を見ていた。

カオルも見てるかなあ・・・

そんなことを思いながら・・・

偽名チャットで見たもの

次の日。

いつも7時頃に届くカオルからの「おはよう」メールは無かった。当然といえば当然だと思いつつ、顔を洗っては携帯を見、髪を乾かしては携帯を見た。

7時40分になり

「もうカオルは仕事に行っちゃったな・・・」そう思った。

きつとこんな昔のことにウジウジする女なんか嫌いになっちゃったのかも・・・

気分はどこまでも落ち込んだ。

カオルが言っていたままでの彼女との別れ方を思い出し、あたしも自然と連絡をとらないで、きつと忘れられちゃうんだと思っただ。

薬指にした指輪を見て

「アノ時はあんなに幸せだったのに・・・」

そう思うと朝から泣きそうだった。

重い足取りで仕事に行き、デスクについた。

その日は朝から忙しく、いつまでもカオルのことでグズグズしている暇が無いくらいだった。

一息ついたのはちょうど昼休みの5分前だった。

あまり食欲が無かったので、販売機で珈琲を買い外に出た。会社の前の公園のベンチに座り、テレビと珈琲を飲んでいた。

後ろから誰かの呼ぶ声がした。
振り向くと同期の健吾がいた。

「まゆどうした？暗い顔しちゃってよ」

そう言っ隣に座った。

健吾とは2年前まで恋人同士の関係だった。

お互い隠していたので、今でも会社で二人のことは知る人はいない。2年間付き合っていて、お互い将来も考えていたが、なんとなくすれ違ってしまい、その後健吾は道外に転勤になり音信不通になった。

それが突然今年の4月に戻ってきた。

最初は少し動揺したが、部署が違うので顔をあわせることは滅多に無く、ましてや話をするのも2年ぶりだった。

「会社で「まゆ」って呼ばないでよ。誤解されるから誰か聞いていないかキョロキョロしながら言った。

「いないよ。ちゃんと確かめてから言ったし」
そう言って人の珈琲を一口飲み（にがっ！）と言って置いた。

「彼氏と喧嘩でもしたのか？お前喧嘩するとすぐ沈むからな言いたいこと言わないで我慢するじゃん。」

あれ、結構効くんだよな」そう言って笑った。

久しぶりに見る健吾は昔より大人の男になったと思つた。そりゃ2年経つてるから当たり前前なんだけど。

「喧嘩にもならない話。あたしが悪いんだ・・・」

そう言つて残りの珈琲を飲み干し、健吾のほうを見て笑つた。

「相談に乗つて欲しい？元彼に？」

「ううん。相談してもどーにもならないの。自分でなんとかしないとどーにもならないから。大丈夫！」

「まゆの「大丈夫」って懐かしいな。変わらないな、お前。でも大丈夫つて言う時は大丈夫じゃないのな。」

ま、俺が聞いても解決しないか！

もし話したくなつたら電話すれよ。携帯変わつてないからさ。」

そう言つて健吾はベンチを立ち会社に向かって歩いていった。その後姿を見ながら、

「あんなに好きだつたはずなのに、なんで健吾と別れたんだっけ？」

そんなことを考えていた。

でも思つたよりアツサリと話ができて安心した。

思えばどんな喧嘩をしても健吾は数日経てばケロッツとして許してくれた。

自分が悪くてもケロッツと忘れるところもあつただけど。

(あたしの大丈夫は大丈夫じゃないかあ……)
健吾の言葉を思い出しながら会社に戻った。

「おはよう」のメールも「おやすみ」のメールがこなくなり3日が過ぎた。

いつまでも胸のムカムカがとれず、なにかの拍子にカオルのことを思い出すとまた胃がギュツとした。

その感覚にどうすることもできずに、ただ毎日過ぎていった。

(このまま終わってしまうのかな……)

そんなことを考えながら眠れぬ夜が続く、

カオルが送ってくれた最後のメールをいつまでも見ていた。

素直に「この前はごめんね」と言えればなんにもかも元通りになるんだろうか。

それとも、あんな昔のことをいつまでも許せないあたしのことなんかカオルはもう嫌いになってしまったのだろうか。

きつとカオルが近くににいるのならば、

カオルの家の前で帰ってくるのを待ち、

そのまま胸に飛び込んで「ごめんね」と言えるのに。

電話じゃ伝わらない……そんな気がしていつまでも考えるだけだった。

そんなに不安なら逢いに行けばいいのに……
けれど追い返されるかも。

そんなことを思うとなかなか行動に移せなかった。
車で2時間かけて空港に行き、飛行機で1時間半かけて羽田に着いて、

そこから電車かタクシーで1時間弱。

その長さが行動しようという気持ちを押さえていた。

金曜の夜。

特に次の日の予定も無いまま家にいた。

なんとなくこの週末は一人でいたくないと感じていた。

しばらくぶりに友達に電話をしたが、突然すぎて誰もつかまらなかった。

(休みの前だもんなあ……)

携帯を閉じテーブルの上に置き、珈琲を入れた。

CDを入れてみたが、知らない間に終わっていた。

(あゝあ。なんかつまんないな)

ソファーに横になり黙って天井を見ていた。

テーブルの携帯が鳴った。

一瞬カオルかと思ったが画面にはヤスの名前が表示されていた。

(なーんだ……ヤスカ。あまり話したくないなあ)

そう思いながらしばらく携帯を見ていた。

あの日以来、チャットもしていなかったので、ヤスが仙台に戻ったのかも知らなかった。

一度切れた携帯がまたかかってきた。

(出ないと何度もきそうだな・・・)

渋々電話にでた。

「もしもし・・・」

「お！やっとでた。なにしてた？」
相変わらず能天気な声だった。

「どうしたの？なにかあった？」
その声を聞いてちよつとムカついた。ヤスさえあんなこと言わなければ

こんな気分にはならなかったのに。

「いや、あの日落ち込んでたからその後どうかなって」

「別に・・・」

「ずいぶんと冷たいな　なに？俺が余計なこと言ったから怒ってるの？」

どの口がそんなこと言ってるんだ！と思い切りツネってやりたくなつた。

「あの日、カオルに電話したら「お前そんな余計なこと言うなよ！」って

ちよつと怒られちゃったよ。その後電話きたんだろ？カオルなんて？」

「知らない・・・」

「知らないってなんだよ」

「別に・・・じゃ、またね。今日はヤスと冗談言う気分じゃないんだ」

「ちよ、ちよっとまてよ。おい！」

そのまま携帯を切り、電源を落とした。

どーせカオルから電話がくることは無いだろうし。

これ以上ヤスの能天気な電話をまた受ける気しなかった。

そのままにもする気になれなくて寝転んでいた。

目を瞑っているうちに少し寝てしまい、気がついて時計を見ると2時だった。

(こんな半端な時間に目が覚めるなら、朝まで眠っていられたらよかったのに)

そう思いながら冷蔵庫を開けてジュースを飲んだ。

こんなにも何もする気になれないなんて、、、

カオルの存在が思っていたよりも今の自分にとって大きかったと
いまさらながら感じた。

目が冴えてしまったので、PCの前に座り電源を入れた。

こんな時は誰でもいいからなにか人の存在を感じたかった。

けれどチャットをしようにも、部屋にカオルやヤスがいたらと思うと
それもできないと思った。

誰も知らない所に入って自己紹介から始めるのもめんどつくさかった。

ふと（HN変えて入っちゃおうかな・・・）そんなことを思いついた。

もしもカオルがいてもあたしだとバレない。

文字でもいいからカオルに逢いたいと思った。

適当にHNを変えていつもの部屋があるか一覧を見た。

休みの前日はみんな結構、朝までチャットをしていることが多いので見つけるのは簡単だった。

HNを（マオ）にした。我ながら安易だと感じた。

まゆの（マ）にリオの（オ） けれどバレなければなんでもいいと。

クリックして入室すると、5人がまだ話をしていた。

カオル、ヤス、ヒデ、マツク、タツヤ

みんな男ばかりだった。

入るとすぐにみんなは簡単に挨拶をしてくれた。

あたしも同じように簡単に挨拶をした。

話が途中だったのか、挨拶の間に少しの会話が挟まっていた。

<ヒデ> 「こんばんは>マオ」

<ヤス> 「だから電話してみればいいじゃん>カオル」

<タツヤ> 「おはつー>マオ」

<マオ> 「こんばんは>a111」

<カオル> 「電源切れてた。まだ怒ってるんだよ>ヤス ども>マオ」

その文字を見て、カオルがあたしに電話をしてくれていたのがわかった。

<ヤス> 「マオは男？女？」

その文字を見て少し迷ったが、男ばかりの中に「女です」と言っとそれもお初」だし気を使うだろうと思

<マオ> 「男です>ヤス」

と男のフリをした。こんな時ネットって便利だなとつくづく思った。

<ヤス> 「そっか、なら気楽に下ネタ話もいいな。安心した>マオ」

<マオ> 「はい。どーぞ気にしないでいくらでも>ヤス」

少しは気を使ってほしいとこだが、王道が4人もいるので無理だろなど

思いながらもそうレスをした。

どこに住んでいるの？とか歳は？とか軽い質問を適当に答え、少し馴れてきたあたりで、話がカオルのことに戻った。

<ヒデ> 「俺もこの前、家で逢った時にそれ知ってるのかな？

って思ったけど知らないとマズイと思って

言わなかったのにー」

<ヤス> 「だってそんなこと気にするよつな感じじゃねーだろ？
リオは」

<カオル> 「人一倍気にするんだよ。ったく、、
余計なこと言ってくれたよな」

<タツヤ> 「でもショックだと思うなー 俺ならショック」

<ヤス> 「そうか？俺は平気」

<ヒデ> 「ヤスならな。でも普通はショックだよ。
俺だって彼女がそんなことしてたって聞いたたら、
なんつーか やっぱ嫌だもんなー」

<カオル> 「今になって後悔……
あん時はそんなこと思わなかったけど」

<タツヤ> 「そりゃな。そんな美味しい場面でそんなこと考えら
れないよな」

<ヒデ> 「あ。ごめんマオ 意味わかんないよな。カオルの話な
んだ」

そう言つて話の流れを簡単に説明してくれた。

(いや、知ってるから。本人だし……) そう思いながらヒデの説
明を見ていた。

<カオル> 「お初にそんな話すんなよ。印象悪くなるじゃん」

<ヤス> 「まーいいじゃん。男ならわかってくれるって！な？>
マオ」

<マオ> 「あ。うん。そうだね」

「全然わかりません！！」
そう言いながら反対の言葉を打ち込んでいた。

<タツヤ> 「俺がリオのところ行ってやるうか？明日暇だし>カオ
ル」

<ヤス> 「いま弱ってるから抱いてやってくれよ>タツヤ」

<タツヤ> 「必要ならばいつでも >ヤス」

<カオル> 「いや、いいよ>タツヤ」

<ヒデ> 「抱くは嘘だとしても電話でてくれないならタツヤに
様子見にいつてもらおうのも手かもよ？

他人の口からのほうが聞いてくれるかもしれないし」

<タツヤ> 「俺いいよ？明日暇だし。ちゃんとカオルが反省して
るって

伝えてきてやるうか？弱ってたら抱きしめとくし？」

<カオル> 「いいって。本当になんかしそうだし。俺がなんとか
するから」

<マツク> 「なんとかってどうすんだよ?」

<カオル> 「まだ考えてない」

そんなみんなの会話を見て、少しだけ安心した。

カオルは怒っていなかった。それよりもこの後のことを考えているようだった。

不安だった気持ちが少し軽くなった。

<ヤス> 「でも別に今、浮気してる訳じゃねーんだから大丈夫だろ」

<ヒデ> 「問題作ったお前が言っな!」

<タツヤ> 「お前が言っな!」

<マツク> 「お前が言っな!」

<カオル> 「お前が言っな!」

<マオ> 「お前が言っな!」

みんなが同時に同じ言葉を出した。真似をしたわけでは無く自然と打ち込んでしまったのだ。なにげに「!」がひとつ多いところが本心を表していた。

<ヤス> 「わ。マオにまで言われちゃった(笑)」

<マオ> 「ヤスさんはあまり二人の間に入っちゃダメですよ。せっかく仲よさそうなのに」

他人の皮をかぶって言いたいことをヤスに言ってやった。なんならもつと言ってやりたいところだったが、それ以上言うとバレちゃいそうなのでやめた。

<カオル> 「ありがとう>マオ」

カオルの「ありがとう」の言葉に胸がドキツとした。

<マオ> 「いーえ。許してくれるといいですね彼女>カオル」

<カオル> 「許してくれるかなあ〜」

<マオ> 「大丈夫ですよ。きっと彼女も連絡待ってますよ」

<ヒデ> 「そつだよ。きっと待ってるよ。明日にでもしてみたらいいよ」

<カオル> 「そつだな。そつする」

<タツヤ> 「なんなら俺行ってもいいからな。遠慮するなよ>カオル」

<カオル> 「うん。さんきゅ。どっちにしても来週行くからそれまでには

仲直りしないとな。」

その言葉を見て驚いた。

本当に休みをとってくれたんだ。

不覚にも、、、目がジワツ・・としてしまった。

勝手にもう終わりかもしれないとどん底に落ちていた気持ちは、
ジェットコースター並みに浮上し、カオルの出す文字を愛おしい目
で見っていた。

明日、電話がきたらもうアノことは言わないでおこう。

カオルもいろいろ考えてみたいだし、それよりもやっぱりカオルと
このまま別れることは嫌だから、素直に謝ろうと思った。

<ヤス> 「だよな。せつかく北海道まで行ってやれないのはキツ
イもんな」

こいつ、、、どこまでもそれかよ！

人が今、、、猛烈に感動しているっていうのに！！

<ヒデ> 「まあ、一晩頑張れば許してくれるって！

いつもより優しくな>カオル」

<タツヤ> 「そうそう。ネットリと時間かけてな」

<マツク> 「3回もイカせれば許してくれるって！がんばれ」

<ヤス> 「3回は無理だろ。さすがに」

<カオル> 「いや？大丈夫じゃね？リオはそのくらいイクよ？毎回」

その文字を見て倒れそうになった。

やっぱりみんなの前でそんなこと言いやがっていたか！！

でもマオのままでは文句を言うこともできず、黙って見ているしか無かった。

<ヤス> 「まじで？そんなに感度いいんだ」

<ヒデ> 「うわ、やべえ。二人のヤツてるとこ想像した・・・」

<マツク> 「毎回って！！毎回どんなことしてんのよ？」

<カオル> 「極めて普通だけど？」

<タツヤ> 「だから普通ってどんなのよ？」

<ヤス> 「さあ！盛り上がってきました！全部バラしちゃえよカオル」

<カオル> 「バラすって別にそんなにたいしたことしてねーよ」

<マツク> 「カオルも3回？お前若いな」

<カオル> 「いや、俺は一回。そんなには無理」

<ヒデ> 「てことは、その間にリオが3回？うわー今度逢った時、

そんな目で見てしまいそうだあ

<ヤス> 「リオってイキやすいってこと?」

<カオル> 「うーん。きつと俺達体の相性抜群にいいと思うんだよな。」

すつげえシックリくるっていうか、そんな感じだからな?」

<マツク> 「羨ましい……」

リオもカオルの体に馴れたら他でも満足しないかもな」

<ヒデ> 「相性ってわかるもんなのか?俺いままでさっぱりわかんねー」

<カオル> 「ヒデも合う女に会ったらわかるって。いままでのSEXなんか

自分でしているのも同じってくらい天と地の差あるぜ。マジで!」

<ヤス> 「なんか余裕の発言がムカつくな。このまま別れちまえ(笑)」

<タツヤ> 「もしかしてマオついてきてない?きつかった?話題が?」

もはや頭が白くなりつつある中でタツヤの発言を見て慌ててレスをした。

<マオ> 「ううん。大丈夫。問題ないよ」

背中にジットリと変な汗をかいていた・・・

やはり男同士の会話は見ないほうがよかったなと思った。
でもまだ内容を詳しくぶちまけられていないのが救いだっただ。

<ヤス> 「で？この前とかも毎日ヤツてたんだろ？やっぱ」

<カオル> 「そんなに毎日なんかしねーよ。それ目的だと思われるだろ」

<タツヤ> 「でもそんなにイイならリオだっけしたいんじゃない？」

<ヒデ> 「でもなんとなくリオは自分からは言わない感じだな」

<カオル> 「そっちなあ〜自分からは言わないかもな」

<マツク> 「たまにあっちらってのもいいよな〜 いひひ」

<ヤス> 「ミライなんか言っぞ？自分から」

<ヒデ> 「まじかよ。あんなに可愛い顔してか？」

<ヤス> 「ああ。平然と。寝ている時でも自分から啜えてきたり」

<ヒデ> 「うああああー」

なんだかもっ見てられなかった。

どこまで突き進むのか、これ以上見ていたら今度まともにミライの顔を

見れなくなりそうな話題になっていた。

カオルの話がこの前のキッチンでの話になり、みんなが興奮して聞いているのを見て、顔が真っ赤になった。

<ヤス> 「普通っていいながらお前等激しくね？」

<カオル> 「そう？いいじゃん二人がいいなら」

<ヒデ> 「あのキッチンで・・・もうだめだ。リオ見たらそれ思いつく」

<タツヤ> 「カオル、やっぱり明日俺いこうか？（笑）」

<カオル> 「だからいつの！>タツヤ」

<マツク> 「そんなの聞いたら寝れねーよ。ちきしょう！」

<カオル> 「俺さ、リオの意地悪された時の反応がすっげえ好きです」

<ヒデ> 「意地悪ってなによ？あの最中のこと？」

<カオル> 「わざと焦らしてやったりすると、しがみついたりするんだけど

恥ずかしくて言えないとか可愛いくてさ」

<ヤス> 「お前……Sだな」

<マツク> 「言えないってそれからリオどうすんの？」

<カオル> 「泣きそうな声だすんだけど、その声がすげえ興奮する」

<ヤス> 「あんなに勝気なのに実際そんなことされたらそりゃ興奮するわな」

<ヒデ> 「それ以上言われたらリオの字見てもドキドキする……」

<カオル> 「泣きそうな声で「カオル……」って言われてみるよ！俺、もう

他の女に興味ねーもん。最近「

確実に熱がでそうだった。

「いやああー！」と言いながら画面を見ていたがもう、それ以上は見られなくなり真っ赤な顔をして文字を打った。

<マオ> 「話の途中でごめんね。もう落ちるねー またー」

といてみんなの反応を見る前に急いで退室した。

どうして男って自慢したがるんだろう。

別に二人のことなのに、他人にバラさなくたっていいのに。きつと今度みんなに会ったら変な目で見られる……
けれど今日ここで見たことはいえないし。

もう朝の4時になっていた。

4時まであんな話で盛り上がってるみんなもどうなんだろう。
そしてベットに入り、目を瞑った。

まだネット上ではアレ以上の話になっているかと思うと、頭が痛く
なってきた。

もうすっかり始める前の不安な気持ちが消え、
それよりもどうやったら今後ネットでバラされないかを考えた。

(無理か………)

そう思ってその日は眠った。

なんとなくこの4日間のスッキリ眠れない感じが消え、スーと気分
よく眠りについた。

(もう他の女に興味ねーもん……) そう打ったカオルの文字に顔
がニヤけていた。

次の日の夕方。

カオルから電話がきた。

あたしは昨日チャットでカオルの気持ちを見てしまったので、
とても軽く電話にでることができた。

「もしもし？まゆ。今いい？」

かなり心配そうに電話をかけてきたカオルとは対照的に

「うん！いいよー」

つい元気な声を出してしまった。

「あの、もう怒ってない？この前のその、ヤスの言ったこと」「うん。もういいよ。ごめんね、いまさらなことなのに」

あまりにアツサリな態度にカオルは不思議そうに思っているようだった。

「あの、なにかあった？俺と連絡してない間に？」

「ううん。別になにも？」

「あ。そうなんだ・・・あのさ、俺来週そっち行けるから。予定とか大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ。何時に迎えに行けばいい？」

「あれ？驚かないの？」

カオルはもつとビククリする反応を期待しているようだった。ヤバイ！と思い、慌てて驚いた芝居をした。

「あ、いや、だってこの前言ってたから。遅くても再来週で」

「あ。そっか。そんなこと言ったな。そっいゃ」

「時間決まったら教えて。あと、あまり荷物持ってこないでもいいよ。」

簡単な着替えとか用意してるから。普段着程度だけど」

「うん。わかった。そっいゃ・・・最近なにしてた？ネットもしてないんだろ？」

ドキッとした。

一瞬バレたかと思い、危なく次の言葉を囁む所だった。

「うーん。別に？友達と遊んだりしてた。夜も早く寝てたし」

「そっか。俺、昨日は結構遅くまでチャットしてたんだ。」

「なんか寝つけなくてさ。ほら、喧嘩みたいになってたし」

寝付けないと人とのセックスの話をみんなにバラすんだ？

沸々と怒りが湧いた。

「ふーん。そんなに遅くまでなんの話してたの？誰がいたの？」

シレッと聞いてみた。

「いや、たいした話はしてないよ。みんな男ばっかだったな。」

ヤスとかヒデとかマツクとかタツヤとか、あとお初もいたけど

話についてけなくて落ちちゃったけどね」

そう言っただけで軽く笑うカオルに文句のひとつも言っただけでやりたかったが、さすがにあそこまで赤裸々に言われてしまって、見てましたとも言えず黙っていた。

「お初を落とす会話ってなに？」

「あー。ちよつとした下ネタとか？」

「ちよつとしたってどんな話？」

「いや、えーと。その、ヤスとミライの話とか・・・」

嘘を言うとカオルはいつも口ごもる。

「あたし達の話とか？」

そう軽く付け足して言ってみた。

「えっ、、、誰か電話でもしたの？」

「誰からもきてないよ？ やっぱりなんか言ったんだ？」

「いや、、そんなことは、、無いけど、、、、」

「怒らないから正直に言っただらん？」

「ちよっと………だけ………ごめん」

あれのどこが「ちよっと」「なんだ！」と叱りつけたかったが、それ以上言つとバレそうなので、やめた。

「そのことは来週来た時にゆっくり聞くよ」

「はい。わかりました………」

そう言つてお互い笑つて電話を続けた。

やっと少しだけ気持ちが軽くなつた。

そして来週のことを話し、電話を切つた。

まだ時間は6時だった。

手帳にカオルが来る日につけパタンと閉じた。

来週には会えると思うと、寂しい気持ちも消えていた。

元カレ現る！

月曜日になり、また一週間が始まった。

けれど今週はカオルが来てくれる。それだけでいつも憂鬱なはずの月曜日もまったく気にならなかった。

昨日の休みは部屋の掃除をし、カオルが来た時の為に必要な物を街に買い物にいった。

Tシャツ、下着、シャンプー、洗顔料に整髪料。

すっかり頭の中は水曜のことばかりを考えていた。

今回の連休も4日間しかとれなかったらしい。

きつと忙しい中、なんとか頼んでとってくれたと思うと

文句なんか言える訳も無く、ただ会えることに上機嫌だった。

「先週の暗い気分は嘘みたいだな」

忙しい月曜日も気になることは無く、サクサクと仕事をこなしていた。

昼休み、いつものように社食でなにを食べようか考えていると、後ろからポンツ！と肩を叩かれた。

「まゆ！一緒に食べよう！」

人事課の直子が声をかけてきた。

「ああ・・・うん。もう何にするか決めた？」

数量限定の日替わりランチをギリギリでゲットし、いつもと同じ窓際の席に座り食事を始めた。

「ね。まゆつてさ、商品課希望してなかったっけ？そっいゃ」

「え？・・・うん。でも今の所、人が足りてるみたいだしね。はい、醤油」

「あ。さんきゅ！でね、まだ内緒なんだけど来月の末に佐島さんが退職するの。」

小さい声でヒソヒソと教えてくれた。

「え？そっなの？じゃあ空きがでるんだ・・・でもな」 あたしが異動

つてことは無いだろうな」 コネもないしさ・・・」

商品課の仕事内容はいわゆるバイヤー（商品買い付け）で、メーカーとの
単価交渉などをしながら、各店舗に商品を入れたり、
買い付けにいろんな所に出張にいたり、とても忙しい部署だった。

今のあたしは、同じ商品課でも「商品課2課」でその仕入れた物の在庫管理などをする所でいつも「在庫が無い！」「早く入れる！」などと

現場（店舗）の担当に文句を言われる損な役柄だった。

「コネならあるじゃない！松永君で同期でしょ？」

彼、商品課に配属になったし、佐島さんのポジションで松永君の下だよ？

まゆ仲良かったじゃない。彼なら推薦してくれるかもよ？

ほら、どっちにしるうちの会社って男しか出世しないようになってるし

サポート役くらいしか考えてないんだから、上が使いやすい人のほうが

いいって思ってるみたいだしさー 聞いてみたら？」

「でも、健吾にそんな力あるのお？ 人事だよ！ ただの主任でしょ」

「あるわよ。だって出世コースに乗ってる人だもん。」

松永君が「まゆも希望してるし自分も古い付き合いだから気兼ね無く仕事ができると思います」って言えば上も「はい。そうですね！」ってなるわよ。所詮私達なんてそのくらいの扱いなのよ」

そう言って残りのお茶を飲んだ。

「うーん……もうちょっと考えてみる」

そう言って冷めた味噌汁を飲んだ。

食事を終え、直子は「一服してくるわ！」と喫煙室に行った。

あたしは最近、禁煙を考えていたので一緒に行くことを断り、天気がいいので残りの時間、また会社前の公園で時間を潰した。

（どうしようかなあ……バイヤーは魅力だけど健吾の下かあ……）

今の仕事はただの在庫管理のようなことなので、なにも自分の頑張った成果などは見えてこなかった。

ただあるものの数字を書きとめ、売れたら減らす。

それだけの仕事に何度嫌気がさしたか分らない。

その度に業務予定を書く黒板のバイヤー達の欄に、

<東京出張>< 会社と打ち合わせ>などの文字を見ては、

「いいな」と思ってきた。

ただそんなことが羨ましいだけではなかった。

バイヤーが選んだ商品を一覧表にして各店に配るのもあたしの部署の仕事だ。

写真で見る新しい商品のセンスの無さにも、

「あたしならもつといい物買い付けするのにな」と思ってもいた。

難しい顔をして、まだ入れるか分らない商品課のことを考えていた。

「お〜い。まだ喧嘩続行中？もう別れたほうがいいんじゃない？」

その声のする方を見ると健吾がいた。

「よく会うね。あたしのことつけてる？」

「まさか？自惚れんなよ。俺はいつも天気いいならここにいるんだよ」

そう言っ隣に座り、珈琲の缶を手渡してくれた。

「さんきゅ。あたしの分用意してたじゃん。やっぱつけてたんだ」
そう言っ缶を開け一口ゴクリと飲むと、ものすごく甘くてビックリした。

「相変わらず珈琲甘い飲むね・・・」

「で。まだ喧嘩してんのか？その彼氏と？」

珈琲を飲み干して、あたしの分も飲みながら言った。

「ううん。それはもう仲直りしたよ」

「なーんだ。つまんね」

「それよりさ！商品課ってどう？面白い？」

「自分の時間はほとんど無いぞ？毎日残業だしなあ。

休みだつて無くなる時あるし。

でもまあ、面白いっちゃー面白いかな。で・・・なんで？」

「あ・・・ううん。どうなのかな～つてさ。ちょっと思っただけ」

そう言つて誤魔化した。

まだ発表になつていない人事を知つてるとなると、出所は直子だとバレてしまう。

「なに？俺のスケジュールをチェックしてんの？」

「いや。そんなんじゃないつてば。ただどんな仕事かな～つて興味あつたの」

「そついや、前にもそんなこと言つてたよな」

それつきり会話が止まつてしまった。

ここで（もし、空きがあつたら推薦してくれる？）と言つのはちよつと

公私混同な気がして言えなかつた。

時計を見ると、もう昼休みは残り5分になつていた。

（今日はいいや・・・ まだハッキリ決めた訳じゃないし・・・）

そう思い「もう行くね」と言おうとした時、

「今度、仕事が早く終わった時に飯でも行かない？久しぶりに・・・

」

そう言われて、内心健吾との食事よりも仕事のことを言うチャンスだと思った。

「あ。うん。いいよ・・・じゃあ時間あったら電話して。

あたしも番号変わって無いから。それじゃ、またね」

そう言って会社に戻った。

その日の夜。

ラビからこの前言っていた「秋にこっちに遊びに来る」と言う件で電話がきた。

もう秋も終わりだけど、サクラとの休みが合わなかったらしい。

結局、3週間後の土日で遊びに来るということになった。

「で。カオルは？逢ってる？」

「うん。あれからなかなか時間取れなかったんだけど、今週の水曜の夜に来るよ。」

久しぶりなんだけどね」

普通に言っただつもりだったのに、かなり声が浮かっていたようだった。

「そっか〜 仲いいね。羨ましいな」そう言っただつてラビは笑った。

ラビはこの前の一件を知らないようだったので、それ以上はなにも言わなかった。

「ラビだってヒデがいるじゃない。いいと思うよ〜」
ちよつと冗談を言ったつもりだった。

「でも・・・ヒデそんな気無いみたいだし・・・断られたら恥ずかしいじゃない」

意外な答えが返ってきて驚いた。

「え？実はそうなの？今、冗談で言ったのに・・・」

「うーん。たまに遊んでたりするんだけどね。」

でも全然カオルとリオみたいなお困り感じゃないし。男友達みたいな接し方だよ」

そう言っただけは少し声のトーンを落としたりした。

「でもヒデならそんな感じするね。でもアノ人結構優しいと思うよ。ヤスみたいにズケズケといわないし、相手のこと気遣うっていか・・・」

「うん。それはわかる。とっても優しいよ。だから、断られたらもう友達としても逢えないかなって。そう思うとちよつとね・・・」

そんな臆病に心配するラビが可愛いと思った。

誰でも好きな相手に告白して断られるのは死にたいくらい嫌なことだし。

「あたしも応援するよ。なんならお正月、またヒデとカオルの家に来れば良いし。」

4人でどこか行くの？それなら自然にいい雰囲気になるかもよ？」

そう言ってお正月の予定を話した。

「うん！じゃあそっち行った時に打ち合わせしようね。
あ・カオルに言つとヒデにバレちゃうかな？」

「うーん。男ばかりのチャットだとなに話してるかわからないからなあ。

でも面白おかしく人に言つとは思えないんだけど、ちょっと様子見てみるね。

でも味方は多いほうがいいでしょ？」

「そうだね。じゃありオに任せるよ。じゃ、また電話するー おやすみ」

(ラビとヒデか・・・)

ラビもあの王道達の中で赤裸々に語られるのか・・・)

そんなことを思ったけれど、ラビもヒデも大好きだし、その二人がくっ付いてくれるというのは、ちよつと嬉しくもあった。

ヒデは断るとは思えないけど、確実にそうは言い切れなかったので、カオルに言つのも慎重にしなきゃ！

カレンダーを見ながら

(明後日の夜か・・・)

昼間の仕事のことでもスッキリ頭から抜けてカオルが来ることだけで気分が浮かれた。

水曜の朝。

カオルからの「おはようメール」には、

<おはよう やつと今日だな。もう支度は完璧！あと14時間！>

そう書いたメールが届いた。

いつもの私服よりちょっとだけお洒落をして会社に出勤した。

その日もいつもと同じく、慌しく午前中が過ぎた。

直子と一緒に昼食をとっていると、この前の仕事の話をしてきた。

「まゆ、松永君に例の件聞いた？

来週には佐島さんのこと正式に発表されるみたいだよ」

「へえ・・・そりやまた急だね」

「デキちゃったらしいんだけど、悪阻が酷くてもう仕事できないみたい」

「そうなんだ〜 相手はうちの会社の人？」

ちよつとだけ相手が健吾じゃないかとドキツとした。

「うちと取引してるメーカーさんだっさ。最近格好いいメーカーさんが

多いからね〜 ウマいことやったな〜佐島さん」

「そうなんだ・・・」

そう言いながら少しホツとしている自分がいた。

別にもう好きでもなんでもないので・・・

「だから本当に商品課を希望するなら早めに松永君に一言言ってお

けば？

なにも言わなくてもチャンスが無い訳じゃないけど、一言あるのと無いのでは大違いだよ？」

そう言われて「うん」と返事をしてはみたもの・・・

本当のところは、自分にできるか分らない部署に憧れだけで異動してなにもできなくて失望するんじゃないかという不安もあった。ましてや健吾の下というのも引つかかっていた。

今から新しい所に入り苦労しても、もしかして1年もしないうちにカオルの元に行くかもしれない。

きっとあたしにはさほど仕事というものは大きなものではないのかもしれない。

ご飯の後に直子と別れ、なんとなくまた公園に向かった。遠くから見てもいつものベンチに健吾がいるのがわかった。

疲れているのか目を閉じ、背もたれに体を寄りかけ上を向いていた。

「お疲れですね！旦那！」

そう言っ隣に座った。

「ああ。ペアの人が急に病欠でな・・・二人分の仕事だから終わらねーの。」

毎日残業で、それも最近は一時間前には帰ったことないぞ？俺・・・」

「大変だね〜」

そう言うしかなかった。

「肩のひとつも揉む？」くらい言ってくれないのかよ？」

そう言つて目を開けて自分で肩をポンポンと叩いた。

「そんなの彼女にしてもらえばいいじゃん」

「今はいいよ。まあ、いても振られるな・・・こんなに仕事漬けなら」

そう言つて首をコキコキと鳴らした。

「まゆ。商品課に興味あるつて言つてたよな？それ本気？」

「えっ・・・まあ・・・ちよつとね。でも、あたしには無理かもな
ーつて」

自分を売り込むなら今がチャンスだと思つた。

けれど、本当に自分ができるのか心配にもなつた。

「お前ならできると思つけどな。でも出張ばかりでなかなかこつちには

いられないぞ？彼氏と喧嘩になるかもなあ」

そう言つてまた肩を叩いていた。

「出張つて・・・どんなところ行くの？道内？」

「そりゃその時の担当の商品によるさ。道内もあれば道外もあるし、海外とかもあるかもな。来年には。だいたいは札幌と東京がメインかな」

<東京>と聞いて、不謹慎だがカオルに逢えると思つた。

けれどそれを言つと絶対ダメだと言われそうだったので黙っていた。

「健吾推薦してくれるの？あたしのこと？」

「嫌々異動になるヤツより、最初からヤル気のあるヤツのほうがいいじゃん。」

まゆがやりたいなら一応上に言ってみるけど。あまり期待すんなよ？それに、元彼だって仕事になれば甘くないぞ？俺は「

「う・うん。あまり期待しないでおくよ」

そう言って笑うと「少しは期待すれよ！」と健吾も笑った。

「彼氏、あまりいい顔しないんじゃないのか？毎日遅くなるぞ？」

そう言われて、やっぱり隠し通せないと思い、カオルのことを言った。

「実はね・・・遠距離なの。彼、東京なの。だから平日は問題無し・・・それに・・・」

「出張の時逢えるって思ったんだろ？」
そう言って笑った。

「う・うん。ごめん。やっぱりそんな理由じゃダメだよね。バイヤーには興味あったんだけど、やっぱりいいや」

「そんなの黙ってればいいのに・・・本当に相変わらず嘘つけないな。」

ま、そんなところが好きだったんだけどな」
そう言われてドキッとした。

「いいんじゃない？どーせ出張中なんてそんなに遅くならないし、ペ
アだから行くなら

俺とだし、俺はいいよ。ちゃんと仕事さえしてくれれば。

一応、上には話してみるよ。平日になにも無いなら問題ないしさ」

「ペアって健吾と行くんだ・・・出張って」

「別に同じ部屋な訳でもあるまいし、だいたい飯なんかあつちの人
と一緒に

食うんだし、飛行機とか移動くらいだぞ？二人きりなのは」

「そうなんだあ」

「なに？それでも嫌なの？」

「あ。いや、全然。そんな意味じゃなくて。

もっと大勢で行くのかな？ってそう思ったから。あたし出張とか無
いし

そこらへん知らなかったから・・・」

いつも商品課の出張は半分がいなかったので、てっきりそう思っ
ていた。

「多い時もあるけどな。出店のオープニングとかなら。でも買い付
けはだいたい

二人かな？まあ、もしも決まったらその辺もわかるさ」

「そうだね・・・」

「それよりさ。彼氏ってなにしてる人？なんで東京の人なの？」

やはりここでも「ネットで知り合った」とは言いづらかった。

「普通のサラリーマンだよ。コンピューター関係の。友達の紹介で・
・
それで付き合ったの」

自分で目が泳いでいないか心配だった。

「へ〜。歳は？いくつの人なの？」

「うーん。あたしの2つ上だから26歳かな。誕生日もうすぐだから27歳か」

「俺と同じなんだ。ふ〜ん・・・・どんな感じの人？」

「えーと、、、目が細くてね、体もヒョロとしてて、うーんと・・・・

すっごく優しいよ。ちょっと天然だけど」

「目が細くて、体がヒョロっとねえ・・・・俺に似てんの？」

そう言われてマジマジと健吾を見た。

似てないこともない・・・・

「うーん。ちょっとね。でも性格は全然似てないよ」

確かに性格は全然似てない。

健吾は「俺についてこい！」と言うようなタイプだし、

カオルは「一緒に歩こうか！」と言うようなタイプだと思った。

「そっか。まあいいや。じゃあ仕事のこと決まったら電話するかも」
そう言っただけ健吾はベンチを立ち体を伸ばし「じゃーな」と行って会社に戻っていった。

健吾が決める訳でもないし、まだどうなるか分らないことだ。

そんなに深刻に考えることもないなと思ひ、あたしも会社に戻った。

定時ぴつたり仕事を終え、急いで空港に向かった。

またちよつと早く着いてしまった。

時間もあつたし、喫茶店に入り珈琲を飲みながら時間を潰し、30分前に到着ロビーの前の椅子に座って待っていた。

椅子の前に初めて逢った時の水槽があつた。

相変わらず何匹もの魚が泳いでいたのを見て、

水槽の前に立ち、あの日のことを想いだしていた。

周囲は出迎えの人で溢れていた。

家族で迎えに来ている人。お父さんらしき人。お母さんらしき人。みんな少しワクワクしたように見えた。

椅子に座り、携帯で暇つぶしをしていると目の前に高校生くらいの男の子が二人座っていた。

ミニスカートを履いたあたしの足をジロジロと見ていた。

(ガキのくせに……)

そう思い視線を無視して携帯を見ていた。

「お姉さん誰待ってるの？」一人の子が話かけてきた。

チラリと男の子を見たが、ニヤニヤとしているその子にわざわざ答えられることも

無いな……と思い無視して携帯に目を戻した。

飛行機が着いたのか到着ロビーが騒がしくなった。

（今日は荷物が少ないからきつと出てくるの早いな・・・）

そう思つて出口に向かつて歩いた。

（ちえっ、無視かよ）と男の子の声が聞こえた。

次々と出てくる人の中にカオルはいなかった。

最終ということもあり、すぐに出てくる人の波は少なくなった。

どんどん周りの人がいなくなり、最後にはあたしだけになった。

携帯に（乗り遅れた！）とも入つていなかったし、

途端に事故にでもあつたんじゃないかと不安になった。

カオルに電話をしてみようと思つてみると、さっきの高校生が近くに来て

「来なかつたんじゃないですか？時間あるなら・・・」

最後まで言い終わらないうちに自動ドアが開き、カオルが出てきた。

顔を見てホッとした。夏に逢つた時より髪をバツサリ切っていた。

目が合うとニコリとして手を振りこつちに歩いてきた。

手をスツと上げたのでハイタッチでもするのかと思い、手をあげようと思つた時、

その手をあたしの頭に回しグツと引き寄せキスをした。

「ごめん。飛び立つてすぐに寝ちゃつてさ。起こされたんだけどまた寝てた」

少しだけ唇にグロスがついてた。

「お疲れ様。疲れたでしょ？」カオルの唇を軽く拭きながらいった。

「いや？ほとんど寝てたから、かえって元気になった」

手荷物を一つ持ってあげて歩きだすと、

横ではさっきの学生が

「他人の生キス初めて見た……」と言いつつ合っていた。

カオルがそつちを向き

「なんなら舌入ったのも見せようか？」と笑った。

「いいから！もう行くよ！」そう言いつつカオルの手を引っ張り歩き出した。

「人前でキスとか硬派だから苦手って言いつてなかった？」

「だって、あいつ等しか人いなかったじゃん。あのくらいの歳はそーゆーの見たいかな〜て」

そう言いつつケロリとした顔をした。

「髪、切つたんだね。なんか違う人みたい」

髪を切つたせいで細い顔の線がもつと細く感じた。

「ああ。まゆが帰ってからすぐに切つたんだ。結構評判いいんだけどなあ」

「うん。前よりいいと思うよ」

本当にそう思った。目が合った瞬間にドキツとしたくらい……

「あら。惚れ直しちゃった？」そう言いつつ頭を触りながら笑った。

「ぜんぜん？」

そう言っただけに先に歩き出したが、本当は言葉と反対のことを思っていた。

(超惚れ直しちゃった)

家に着くまでの時間、会っていなかった間のことをお互い話しているうちに

すぐに着いてしまったような気がした。

荷物は少しでいいよと言ったわりに、前と変わらないくらいの大きな荷物を

見て「なに持ってきたの？」と聞くと「大事なもの」と言い荷物を開け、壁にスーツをかけた。

「スーツって・・・どこ行くの？仕事？」

「まゆの実家行かない？挨拶くらいしておこうと思ってさ」と涼しい顔をしてスーツのしわを伸ばした。

「は？なんでうちに？」

「親から電話きてさ、正月帰ってくるのかって・・・で、まゆが来るから帰らないって

言ったら、結婚前の娘さんを泊めるなんてあっちの親知ってるのかって。

もううるさい！うるさい！でもそう言われたら印象悪くなるのもなって・・・

ならいつそ挨拶しなきゃ気兼ねないだろ？」

「まあ・・・それはそうだけど・・・スーツまで着なくてもいい

いかと・・・」

親に紹介なんて考えてもいなかった。

「でも、いきなりはどうだろう？」

「え？なんか問題ある？」

「あー　あるか・・・も・・・」

3人姉妹の一番末っ子ということもあり、いつまでも子供扱いをし、一人暮らしをすることを了承してもらうのも、かなり時間がかかった。

もう結婚をした一番上の姉と来年の春に結婚する二番目の姉が協力してくれて、なんとかOKをだしてくれたが軽く1年はかかった。

別に大きな問題を起こしたことは一度も無いのに、なぜかあたしだけには

いつまでも実家から出してくれなくて大変だった。

「悪い男がいっぱいいるからダメだ！」とか「一人暮らしは物騒だ！」とか

上の姉二人はアッサリ出してくれたのに、あたしだけはいつもダメ出しされて

大学の時だって門限10時とか言われてかなり苦労した。

お母さんはそうでもないが、お父さんはカオルに会うのを嫌がりそうだと思った。

そんな感じなので、いままで親には彼氏を見せたことが無かった。たぶん見せると絶対、実家に連れ戻されるんじゃないかと心配だったから。

そう言つと

「マジで……」とちょっと最初の勢いが消えてきた。

「ま、まあ。ほら、あたしももう25歳になるし、もうそんなに怒らないか……も……」

「お父さんて怖い？」かなりビビった感じで聞いた。

「うーん。そうでも無いけど。ただ怒るとあまり口きかない。それがちよつと……」

「それ……困るな。お母さんは？」

母に一路の望みをかけ心配そうな顔で言った。

「お母さんは大丈夫だと思う。あたしと好きなタイプが似てるから結構カオルのことは好きだと思う」

それを聞いて「そんな理由ってどうなのよ？でもまあ……仕方ないか。ここは」

そう言つて浴室に消えていった。

親に紹介かあ……

真面目に考えてくれて嬉しい反面、ちょっと重たい気分にもなった。とりあえず親には明日電話をしておかなくちゃ……
そう思うとなんとも言えない気分になった。

「カオル、明日どうする？車使うならバスで行こうか？」
お風呂上りにビールを飲んでいたカオルにそう聞くと、

「いや、明日はゆっくり寝てるからいいよ。休みもサッカーしてたし、
ここしばらくゆっくり寝てないんだ。夕方まで寝るつもり」
そう言っただけとしていた。

「そっか・・・じゃあ帰りは6時前くらいだと思っから」
「うん。わかった」
「じゃ、あたしもう寝るね。明日も仕事だし」
そう言っただけで寝ようとする。

「ちょっと」 久しぶりに逢ってそれは無いでしょ。それは!」と
手早くTVと電気を消し、ベットに滑りこんできた。

自然と頭の下に回した手もちょっと癖のあるキスもなにもかもが
シックリとし、ただスーと体を触られるだけでも背筋が痺れるよう
に感じた。

ただいつもと違うのは首にしがみついた時に顔にかかる髪が無かつたことくらいだった。

その日、眠るまでカオルはあたしの髪を指にクルクルと巻きつけたり、
耳にかけたりと、寝かすつけてるのか起こしているのか
わからないようなことをしていた。

その触れられているという動きは邪魔なような安心できるような不思議な感じだった。

ウトウトしては目が覚め隣にいるカオルを感じ、また安心して目を閉じた。

朝、いつもより少し早く起きて2つお弁当を作り1つをテーブルの上に置いて寝ているカオルを起こさないように家を出た。かなり疲れていたのかドライヤーの音にもキッチンの雑音にもなにも反応しないで死んだように眠っていた。

その日の昼にお弁当を持って公園に行った。天気がとてもよかった。

そして案の定、まるで待ち合わせをしているかのように、ベンチには健吾がいた。

「なんで今日は弁当なの？珍しい〜」

そう言っただけ中身を覗いておかずをつまんで食べた。

「卵だけは俺、しょっぱい派だな、やっぱ」

そう言っただけ甘い卵焼きをモグモグと食べた。

「卵だけは譲れない。甘いじゃないと卵焼きじゃないよ」
そう言っただけお弁当を食べた。

「よくみんなにバレないようにお弁当とか作って持ってきてくれたよな」

「あつたね〜 でもいつも卵焼き残してたよね」

「俺達食い物の趣味はあわなかったからなあ・・・」

「カレーでもあたしは辛いのが好きだけど、健吾はお子様並みに甘いしね。」

あたしは肉派だけど、健吾魚派だし・・・あとは〜
目玉焼きにあたしは醤油だけど健吾はソースだったね・・・」

(まだあつたなあ・・・) そう思つて考えていた。

「なあ・・・俺達なんで別れたんだっけ？」

そう健吾が言つたようだったが、あたしはまだ食べ物の好みの違いを考えていた。

「スイカだ！あたし塩かけるの大嫌い！いつも全部にかけられて喧嘩に

なつたよね。水で洗い流したこともあつたよねー」

そう言つて晴々と健吾を見ると、

「お前・・・人の話聞いてた？」と呆れた顔をされた。

「え？なに？なにか言つた？」

「いや、いい。なんでもない」

そう言つて煙草を吸つた。

「そういやさ、昨日あれからうちの部長にまゆのこと言つたんだ」
煙をフウーと吐きながら言つた。

「あ。仕事の件？なにか言つてた？」

「うん。たぶんOKだと思う。」お前がやりやすいならいいぞ」
つてさ。

決まったら来週には話あると思つ」

「そうなんだ」

「本当にいいのか？結構キツイぞ？言った俺が言うのもなんだけど」
そう言いながら空き缶に煙草を捨てた。

「うーん・・・でも辞める前になにかしら残したいじゃない。
ちよつと頑張っちゃおうかなあ。もし決まったらよろしくね」
そう言つて笑いかけた。

「お前、辞める予定あんの？」

「すぐにじゃないよ。男と違って出世もないしなあ・・・でもただの
サポート役じゃ

つまらないから、ちゃんと仕事はするよ？男並みに！」

「そつか。わかった」

そう言つて空いたコンビニの袋に空き缶を入れた。

「でも、健吾と働くならそのこと彼氏に言うべきかな？」

しばらく考え

「いや、言わないほうがいいと思う。俺なら知らないほうがいいな。
昔の彼氏と一緒に仕事しますなんて」

そう言つてコンビニの袋を見ていた。

「やっぱりそうかあ・・・でも言わないのも隠してるみたいでア
レかな〜て」

「知らないほうがいいってこともあるさ」
そう言つて時計を見て「もう時間だぞ」と言つて健吾は会社に戻つ
ていった。

なんとなく嘘をついているような気がしながらも、
まだハツキリ決まった訳ではないのでカオルには内緒にしておこう
と思った。

決まってから驚かせてやろう！

空のお弁当箱を揺らしながら会社に戻った。

長い一日

その日、いつもより急いで家に戻った。
玄関を開けると、いい匂いがした。

「ただいまぁ……」

ソロソとドアを開けて中を覗くとカオルがキッチンに立っていた。

「おかえり〜弁当さんきゅ！ウマかった」

そう言ってこつちを見ないで頭をタオルでしばり鍋を真剣に交ぜていた。

匂いからしてたぶん・・・カレーだと思っただけど・・・
なんだか本格的な匂いがしていた。それもちょっと微妙な・・・

「カオル・・・料理なんかできたんだ？」

鍋を覗くとそれなりに美味しそうに見えた。

「カレーだけはちょっと自信ある。俺たぶん前世インド人と関係あると思うんだ」

そう言いながら皿にご飯をよそっていた。

「着替えちゃえば？すぐ食べれるよ？」

そう言われて急いで着替え、

手を洗ってなにか手伝おうとしたが、「いいから座ってて〜」と言われ

コップにお茶を入れて椅子に座りカオルを見ていた。

「よし！食べてみて。たぶんウマイ！」
「じゃあ・・・いただきます」

一口食べてみた。

確かに美味しい・・・けど辛い・・・
急いでお茶を飲みながら「辛いけど美味しいよ」というと、

「だろ？この辛さは癖になるんだって。明日もカレーな。
分量間違った・・・すっげえ残ってる・・・おかわりノルマ2杯
な」

そう言いながら自画自賛して食べていた。

コンロの上の鍋を見ると一番大きな鍋にいっぱいルーが見えた。

(「こりゃ、、下手したら明後日くらいまでありそうだな・・・」)

「カオル、カレーは辛いほうが好きなの？」

「辛くないとカレーじゃないだろ？」

「じゃあ、、目玉焼きには？」

「え？醤油。他になにかけるの？」

「じゃあ、、スイカに塩かける？」

「あれは邪道。なにもかけないほうがウマイじゃん」

その答えが可笑しくて一人でいつまでも笑っていた。

(食の好みがピッタリって楽でいいな)

食事を終え「今日なにしてたの？」と聞くと起きたのは昼すぎで
ご飯を食べまた寝て、また起きて・・・の繰り返しだったらしい。
夕方近くに買い物に行き、土曜日のお土産を買ってきたと言われ、

「あ！土曜日うちに行くんだった！」と思い出した。

電話をしておかないといけないと思いつつ、なんて言えばいいか迷
った。

深呼吸をしてから家の番号を押した。

「もしもし？お母さん？まゆだけど、久しぶり」

かなり久しぶりだった。何度か留守電は入っていたが、別にたいした
用事でもなさそうだったのでかけ直しをしていなかった。
声を聞いたのは3ヶ月ぶりくらいかもしれない。

「元気だった？もう何度電話しても出ないんだからー。で、なにか
あったの？」

あんたから電話してくるなんて珍しいわね」

「あー。今度の土曜・・・って明後日さ、お父さんも家にいる？」

「休みだからいるわよ。ちょうど奈々子も子供連れて帰ってきてる
し、

なーに？家に帰ってくるの？」

うわ・・・お姉ちゃんもいるんだ・・・ それはちょっとどうなん
だろう・・・

「あー・・・そうなんだあ・・・ あははは・・・はあ・・・」

隣でカオルが「なに？なに？」と声を出さずに聞いていた。その仕草にウマく答えることができずに、変な動きをしていた。

「あのね。ちょっと逢って欲しい人がいるんだけど、いいかな？って」

その言い方にピンときたのか母は急に小声で

「男の人？ちょっと、待ってよ。貴女もしかして、デキちゃったとか言わないわよね？」

そんなのお父さん許さないわよ？」

「デキてないし・・・」

「あ。そうなの？ならいいけど。えーどうしよう。お母さん髪力ツトしてないわよ？」

別にお母さんの髪型を見に行く訳でもないのに、慌てていた。

「ちょっと挨拶程度だから、そんなに緊張しなくていいよ。

遊びに行く感覚だから。じゃ、土曜ね。お父さんに言っておいてね。そう言って電話を切ろうとすると、母は慌てて

「ちょ、ちょっと！嫌よ！あんたから言いなさいよ！」
と言って電話をお父さんに無理矢理変わった。

「なんだ？」

たぶん隣で聞いていて、話の内容を理解しているくせにまた同じことを言われた。

「わかった。じゃあ土曜日な」

なにも反撃されずに電話は終わった。

「「わかった」って。そんだけ・・・」

電話を切ってカオルにそう言った。

「ええ、なんか怒ってたりしないよな？軽くヤバくない？」

「うーん・・・ いままで特別挨拶してたこと無いしなあ」

「まあ。いいか。大丈夫さ、きっと」

そう言いながらも確実にカオルは緊張していた・・・

うちに行く当日、いつまでも鏡の前で

「真面目に見える？大丈夫？」とカオルは何度も髪をいじっていた。

「うん。大丈夫。真面目に見えるかはわかんないけど・・・」

「あーなんか吐きそうだ。カレーがすぐそこまできてる・・・」

そう言いながらうがいをしていた。

「別に今じゃなくてもいいんだよ？すぐにどつってこと無いんだし。」

やめておく？あたしは別にいいけど」

せつかくの休日に家に行って時間を無駄にするくらいなら、どこかに遊びに行きたかった。けど、スーツまで持ち込んだカオルにそんなことは言えなかった。

「いや。一度言ってしまったし、ここで行かないと次はもっと行きづらい！」

そう言っではみたもの……

「なんか顔、青いよ？大丈夫？」

「うん。たぶん……」

かなりギリギリな状態だった。

家から実家までは車で20分程度だった。

「すごく近くない？家借りる意味あんの？」

思っていたよりすぐ着いてしまったのでカオルが緊張しながら聞いてきた。

「だって一度くらいは独り暮らししてみたいじゃない」

「いや、そうだけど……」

「じゃ、行こうか？」

車を降り、玄関に向かうと慌ててカオルが着いてきた。

玄関を開け「おじゃましまーす」と声をかけると奥からお姉ちゃん

が走ってきた。

「ひっさしぶりい〜！ちょうどいいタイミングで家にいた！うふふ」
嬉しそうに笑い、カオルを見てペコツと頭を下げた。

「さ、どーぞ！古い家だけどあがって」

家にあがりリビングに行くとき母はソワソワしながら座っていた。
チラツとカオルを見た後にあたしを見てニヤリとした。

（ほら、やっぱりタイプだったんだ・・・）

お父さんは挨拶をするカオルにどう答えていいかわからないようで
小さく「どうも・・・」と言い部屋中がシーンとした。

なんて気まずい・・・なんだこりゃ。

「あ、あの、そんなにあらたまった事でもないの。ただ挨拶して
おきたいなーって

彼が言うから、ほら、なんていうの？大人として、ねえ？お姉
ちゃん」

訳がわからないがお姉ちゃんに話を振った。

「あ、まあね。お父さんもほら、なにか話だよ。ねーお母さん」

急に話を振られたお母さんは

「ねー。本当にまゆの趣味ってお母さんとピッタリね」

場違いな母の言葉にみんなの視線が集中し、お母さんは一人で慌てていた。

しばらくすると、お父さんは「ちょっと煙草買って来る」とサツサと席を外してしまい、

お母さんがそれを止めに玄関に走っていった。

お姉ちゃんが小声で

「娘さんをくださいって言葉を聞きたくなくて、逃げたか……」
と言った。

「別にそこまでは！いや、今日は本当に挨拶で」

姉の言葉にカオルが慌てて否定した。

「いいのよ。そう思っていたら良かったほうが、次にいざって時はもう逃げられないから」

そう言って笑った。

お母さんが玄関から戻ってきて、

「もうお父さんはダメねえ。ごめんなさいね。えーと矢吹さんでしたっけ？」

そう言いながら笑顔でカオルに話し掛けた。

「あ。いえ、いいんです。突然来た僕も悪いので……すみません」
そう言って母に謝った。

「じゃ、そろそろ行くところか？」

そう言って立ち上がると「ええー！もう帰るのー！」とお母さんは

一人で
ブツブツと文句を言っていた。

「いいの？お父さん帰ってくるまで待たなくて？」

と言うカオルに姉が

「外に車があつたら、何時間でも帰ってこないわよ」とケラケラと笑った。

一応用意してしてくれたケーキを食べて、1時間程度で家を後にした。

そのままの格好じゃどこに行くのも不便だからと、一度家に戻り、着替えを済ませ、一息つきながらカオルが心配そうに言った。

「あんな挨拶でよかったのかな？夜にでも電話きてダメだ！とか言わない？」

父の行動がかなり不安だったようで、カオルはいつまでも気にしていた。

「よかつたんじゃない？お母さんは気に入ってたみたいだし？」

「え？そうなの？」

「うん。タイプって言ってたじゃない？」

「タイプって言われてもなあ・・・」

なんとも言えない困った顔をしていた。

「でも、今日はありがと。きつと問題無いと思うよ」

カオルも朝からの緊張がやっと抜けて、気分が軽くなったように見えた。

せっかく来てくれたのに、たいした所にも遊びにいけなく、

気がつけばもう明日帰らなければならぬと思うと、楽しみは実現する

ギリギリ前までが一番楽しいものなんだな・・・と思った。

「どこ行きたい？どこがある？」まだ時間はお昼になったばかりだった。

「うん。そうだなあ、どこがいいかなあ」
延々と考えていたようだが、どこも思いつかなかったようだった。

あたしもこれと言って浮かばなかった。
カオルがいない時はどこに行っても

「今度ここに一緒に来たいな・・・」と思う所はいっぱいあったのに、いざとなるとなかなか思い浮かばない。

二人でしばらく考えて「とりあえず家を出ようか！」と車を走らせた。

特になにを見る訳でもなく、夜になるまであちこちと車を走らせドライブをした。

海に行ったり、買い物をしたり、そんな休日を過ごした。

いつも一緒にいられたら、こんなこと普通のことなのに、ひとつひとつが新鮮だった。

手を繋いで歩くことにも嬉しくて子供のようニコニコしながら歩いていた。

横を見るとカオルがいる。

その当たり前の光景が嬉しくて仕方無かった。

「なんだかアツという間だったね。今回の休みも」

「仕事の一日は長いのかな。また仕事か〜」

繋いだ手を大きく振りながらカオルが言った。

「本当だね・・・」

「今度は2ヶ月後かあ・・・ またちよつと長いな」

「うん。そうだね。長いな〜」

ふと仕事のことを思い出した、そう長くない間に逢えるかもしれない
い・・・
そう思ったが、まだ言っちゃいけないと思い黙った。

「もう家に帰ろうか。明日もまだゆっくりできるしな」
そう言って握っていた手をギュツと握りしめて歩きだした。

また離れてしまっただな・・・と実感した。

家に帰り、明日の荷物の整理をしていた。

「大体でいいよ。洗った服とか乾かないから置いておくし」
ソファの上からこっちの様子を見ながらカオルが言った。

「うん。もう終わるー」

「そっぴやさ、ヤスとミライが別れたの知ってた？」

「えっ？いつのこと？」

とうとうその時が！と思った。なんていったってあのヤスだから・

「えーと、俺が来る前の日かな？ヤスから電話きて。

かなりモメたみたい。なんかヤスならそんな感じもしたけど」

ミライが心配になった。よりによってヤスだもんなあ・・・

「あたしが会った時も言ってたんだ。「もう別れたい」って。

だからそう遠くないかなって思ってた。ミライ落ち込んでいるだろね」

「そうだな」結構ミライのほうがハマッてるみたいだもんな。話聞くと」

その言葉でこの前のチャットを思い出した。

「どんな話？」自然と口調が強くなった。

「いや、なんとなく。そんなこと言ってたかなって」

話を誤魔化すように目を合わせないでカオルが言った。

「なんとなくくっつてな？」口元は笑っていたが、目は笑っていない

状態でカオルの頬をつねりながら聞いた。

「い、、いたいです・・・」

「どーせまたみんなでイヤラシイ話してたんでしょ！ついでにあた

し達のことも！」

そう言っつてさらに手に力を入れた。

「ごめんなひやい……」

「そうやっつて今だけ謝っつて、また言っつんでしょ！！」

「いいまひえん……」

それ以上問い詰めると、見たことがバレルので手を離した。
カオルは頬を摩りながら情けない顔をしていた。

「でもある意味自慢も入っつてる訳だし、悪く言っつてる訳じゃないんだけどなー」

「じゃあ、あたしも言っつちやおうつと。もうすぐラビ達来るし。」

カオルがどんなことするか言っつちやおうかな。いいんでしょ？自慢なら？」

「ええ〜 それはちよつとなあ。俺、ヤスにSとか言われたし。」

それは俺の信用にかかわるかもしれないなあ……やっぱ言わないほうが……」

「Sっつて言われることなに言っつたの？」

「あ。いや。なんでもないです。で、ラビ達いつ来るの？」

話を変えて聞いてきた。

「あ！そうだ。カオルに手伝っつてほしいことあつたんだ。でもな〜そんなに口が軽い人だとちよつとな〜」

「なに？って、俺、そんなに口は軽くないってば。
たまたまアッチの話はしてたけど、普通の話はしないって！」

「本当に本当？絶対言わない？」

にじり寄って顔を近づけ目を見て言った。

「絶対言わない！」そう言って顔を近づけ素早くキスをして「本当
！」と言った。

「あのね。ラビがヒデのこと好きだって」

「わ…… そりゃ予想外のことだ……」

「それとなくヒデに聞いてみたりしてくれると嬉しいなって」

「まあ、聞けないことは無いけど」ちょっと自信なさげに言った。

「でもあくまでカオルがなんとなく聞いたって感じだね。お願い」

「うん。わかった…… でももし「そんな気無い」って言った
ら……」

そう言われたらなにも言えなかった。

無理に勧める訳にはいかないから、その時は「そうなんだ」で済
ませようと

言うことで話が終わった。

「でも、ウマくいくといいな」ポツリとカオルが言った。

「そうだね。ラビもヒデも大好きだから、あの二人がそんな仲にな
ってくれたらいいよね。」

ラビ・・・たまにキツイけど」

「うん。そしたら4人で遊びにいたりできるのにな」

「そうだね。あたしがあつちに住むことになってもラビ達が遊びに来てくれるしね」

「えっ！いつ来る？」

なんとなく言った言葉にすぐさま反応されて驚いた。

「いや、すぐにじゃないけど・・・ そうなったらってこと」

「あ。そうなんだ」（なーんだ）と言うようにカオルが言った。

「なんで？今来られるとマズイことでもあるの？」

「そうじゃなくて、一緒に住むこと考えてくれたのかなって」

「ああー。そつちか・・・ なにか隠してるのかと思ってビックリした」

「俺もそつちかよ！ってビックリだ」そう言って笑った。

「もう寝ようか・・・」本当に寝るつもりは無く（ベットに行こう）という意味で言った。

「寝るの？なら本気で寝るけど？」その意味を理解したくせにカオルは
意地悪そうに片方の眉を上げて言った。

座っているカオルのヒザの上に座り、ゆっくりと顔を触りキスをした。

そして自分から舌を入れた。

それに答えるようにカオルも舌を絡めてきた。

腰にまわした手をゆっくりとあげ、シャツの中に手が滑りこんだ。

背中を触る手が少しひんやりとしていた。

手馴れた感じでブラジャーのホックを外し、両肩のヒモを器用に下げシャツの袖からスツッとブラジャーだけを外した。

「馴れてるね・・・」

あまりにスムーズに脱がせるカオルに、ちよつと笑ってそう言った。

「そつでもないよ・・・」

そう言つてまたキスの続きをした。

シャツの上から胸を揉まれ、だんだんとシャツの布の感覚が邪魔になつてきた。

布一枚が厚く、直接手で触れて欲しくて仕方無かつた。

「ね。ベットにいこつ?」

そう言つてもカオルはその言葉を無視してまた口を塞いだ。

シャツの上にあるカオルの手を掴んで、シャツの下に手を引いて行こうとすると、途中で手を止め

「まだ・・・ダメ・・・」と、またシャツの上から胸を触つた。

「また最後に意地悪するの？」「ちょっと顔を離して、ふくれた顔をして言つと。」

「それ生きがいに近い」と笑った。

「そんなに怒るなつて〜」そう言いながらベットまで手を引き電気を消した。

「帰っちゃう前の日くらい、その意地悪どうにかならぬの？」
「意地悪しない俺なんか面白くないでしょ？」

そう言いながらベットに押し倒し、笑った。

「だって俺Sみたいだから？なにげにまゆMじゃん。気がついてなかつた？」

「そんな事ないもん。あたしノーマルだし」

「そうかなあ〜？だって焦らすとその分濡れ・・・」

言葉を言い切る前に枕で頭を叩いた。

「じゃあ認めさせてみようかな〜」

そう言ってシャツを脱がせ胸に唇を寄せた。

その言葉を聞いて体が熱くなったのを感じた。
本当はカオルに焦らされるとその分、欲しくてたまらなくなっている自分を
とっくの昔に知っていた。

背中に軽く爪を立てられながら触られると、うっすらと鳥肌が立った。

くすぐったいような、もっと強くして欲しいような感覚になった。

右のふとももに軽くキスをされ、その唇がだんだんと中心に近づく。
．．．
けれどソコには触れずに唇は左足に動いた。

わざと一番感じる部分になにも触れずに延々と違う部分にキスをしたり

舌を動かすカオルの意地悪にじれったいのにも何も言えずにいた。

「触って欲しい？」

ちよつと余裕のある言い方に顔を横に背けた。

「まだ頑張るんだ？」

そう言つて下着の上からゆっくりと舌先を押し当てた。

温かく湿った感じが下着を通して伝わった。

体がビクツと反応し、

それを見て下着に手をかけたカオルに脱がせやすいように自然と腰が浮いた。

「脱がせてほしい？」

ちよつと勝ち誇つたような言い方をするカオルに「もう!」と怒つた。

「そろそろ認めたら?」そう言つてあたしの手を引き寄せ下着の上から触らせた。

「ほら?自分でわかつてるだろ?俺のせいじゃないよ?これ・・・」
そう言つて下着の横を少し捲りあたしの指を押し入れた。

ものすごく濡れていた。

「動かしてみて・・・自分で・・・」

そう言つてあたしの指の上から自分の指を動かした。

「いや・・・だ・・・つてば・・・アツ・・・」

そう言いながらも声が途切れとぎれになった。

「俺がない時、自分でするだろ?いつもみたいによつてみてよ」
そう言いながら、動かしていた手を静かに止めた。

カオルの手が止まっても、自分の手の動きは止まらなかった。

「ほら。言つたら?まゆは命令されるの好きなんだよ。俺の言つ」とが・・・もう認める?」

そう言つて耳をゆっくり舐めながら笑つた。

「認める・・・だから・・・もう・・・して・・・」
消えるような泣いているような声で言つた。

「だから言ったじゃん。もう他の男とデキないよ？きつとつまんなくて」

カオルの舌はなにもかも知り尽くしているように動いた。

下からすくい上げたり強く吸い付いたりして、してほしいことをすべてわかっていた。

さつきよりも、もう止められないくらいに濡れているのを感じた。

ときどき（ジュル・・・）と聞こえるイヤラシイ音が更に気持ちを高ぶらせた。

ほんの数分もしない間に、簡単にカオルの舌にイカされた。

「まゆ・・・起きて」

5分経ったのか10分経ったのか、もう時間の感覚は無くなっていった。

「そのまま俺の上に来て・・・」

手を引かれそのままカオルの上に体を動かした。

「上になって・・・」

腰を掴まれてそのままゆっくりとカオルが入ってきた。

自分の腰を動かしながら、あたしの腰にあてた手を強く上下に動かした。

動く度にどんどん体は熱くなっていった。

カオルが起き上がり、胸元に強く吸い付いてキスをした。

そんなに強く吸われたらきつと痕が残っちゃう・・・そう感じながらも、

なにもできずにただされるままになった。

カオルの息が大きく弾み、動きがどんどんと激しくなる頃、ただカオルにしがみ付き声をあげるしかなかった。

しがみついた手に力がギョツと入り、もう限界を感じた時、カオルもイッたのを感じた。

頭の前から下に静かに痺れが消えていった・・・

そのままカオルの体の上に倒れこみ、余韻に浸りながら自分の体を重ねた。

触れている肌の部分すべてがカオルの汗と混ざり合っていた。

「どうしよう・・・」そう小さく呟いた。

「なにが？」髪を触り、頭を撫でながらカオルが聞いた。

「どんどん良くなる・・・」

「いいじゃん。悪くなるより」

「こんなに良くなり続けたら、カオルのことばかり考えちゃうじゃない・・・」

そう言うと、ゆっくりと軽いキスをしながら、

「他の男のことなんか考えられないように改造中なんだから、当たり前じゃん」

そう言って笑った。

腕枕は嫌いなはずだったのに、カオルの腕には不思議と体が馴染んだ。

少しだけ眠くなりながら、カオルを見つめ聞いた。

「あたしはどうすれば、カオルが他の子のこと考えられないようにできるの？」

「今のままで十分だよ」

頭を優しく撫でながらカオルは言った。

その返事が聞き終わるかどうかと言つ時には、もう眠りに落ちていた。

今日一日の緊張と、たった今終わった疲れとでそのまま記憶は無くなった。

上司は元カレ

「吉本君。ちょっといいかな？」

電話に追われて忙しくしているあたしを見て、課長が言った。

「あ、はい。5分だけ待ってもらっていいですか？」

そう言っただけで電話中で出られなかった店舗の担当に連絡をした。

「じゃあ、よろしくお願いしまあーす！」

電話を切り、課長のデスクの前に行き

「はい！終わりました！なんですか？まさかこんなに忙しいの見ておきながら

「お茶！」とか言いませんよねえ？」

そう言っただけで横目で見ながら笑った。

「いや。ちょっとあっちの会議室にいいかな？」

そう言われ、そのまま後ろを着いていった。

会議室までの通り道で素早く紙コップに珈琲を2杯注ぎ

部屋に入り座る課長の目の前に「はい！」と置いて座った。

「やっぱり痛いよなあ〜 君が抜けるのは・・・」

そう言いながら置かれた珈琲を一口飲みながら伏し目がちに言った。

「え？なにが痛いんですか？」

「いや。昨日、商品課の部長から君を異動させたいって言われてな」

「はあ・・・」

「君が行きたく無いなら断ってもいいんだぞ？あそこの忙しさは半端じゃないし。」

それにうちだってベテランが抜けるのは大きな痛手だし。どうする？断りづらいなら私のほうから言ってもいいし」

「できれば……異動してみたいのですが……」

その言葉を聞いてちょっとガツカリしながら

「そうかぁ……なら仕方無いな。あっちはすぐにでもと言っただが、

こっちも引継ぎをしてもらわないといけないこともあるし、ちょっとだけ

待ってもらってもいいかな？」

「はい。それは課長にお任せします。すみません……」
なんとなく元気が無くなった課長に思わず謝った。

昼休みに例の公園に行くと健吾がいた。

「健吾。ありがとね。さっき課長から異動の件言われたよ」
そう言いながら甘い珈琲を差し出した。

「そっか。で、いつから来るの？できるだけ早いほうがいいんだけど。」

俺、昨日帰ったの2時だし……」

(2時って……)

「引継ぎあるから2週間後くらいみたい？」

「うおっ……ながっ！」

そう言いながら缶を目の上にあて冷やしていた。

「正式に配属になるまでになにかしておかないといけないことある？
ほら、憶えておかなきゃならないことか？今のうちに少しづつ勉強しておくよ」

「そうだなあ・・・ 生まれれば自然に体で覚えるさ！とりあえず担当の

メーカー別の商品リストをコピーしておくから、時間がある時にも取りに来て。

終わってからでもいいから。どーせ俺、夜の男だし」

「うん。わかった。じゃあ後から顔だすね」

そう言って会社に戻った。

まだ休み時間が10分残っていたので、カオルに電話をしてみた。

「どうした？こんな時間に・・・ふあ〜」

寝ていたのか大きなアクビをしながらカオルが電話にでた。

「ごめん、寝てた？」

「うん・・・ それはもう・・・ すごい勢いで寝てた」

二日ぶりに聞いたカオルの声は絶対目を開けないで半分寝ながら聞いていると思うような声だった。

日曜日の別れはいままでの中で一番完璧な見送りだった。

最後までお互い笑顔で、別れた後も涙は出なかった。

寂しい気持ちはとてもあったが、これから何度もこんな場面が来るのに、毎回泣いていてはカオルが心配すると思い、「これからは絶対泣いたりしない！」と約束した。

「泣かれたら帰りずらいから、そのほうがありがたい」そうカオルも言った。

「次、逢う時までお互い真面目にね！」そう言って別れた。

そんなことを想い出しながら電話の続きを話した。

「あのね。あたし異動になって今度からチヨクチヨク東京に行けそうなの」

「えっ！なにそれ？どんなところに異動したの？」

さっきよりはちょっとだけ起きた声でカオルは聞いた。

「バイヤーなんだけど、一ヶ月の半分は出張なの。だから結構そっちに

行けると思うんだ。東京に出張の時は前もって連絡するね」

「まじで！よかったなー 待ってるから！決まったら電話くれよ」

「うん。さっき正式に言われたから先に連絡だけしておこうと思っ

て。じゃ、また電話するね」

「おう！わかった。またなー」
電話を切るうとするカオルに、

「残り5分だからもう寝たらダメだよ……じゃーね」そう言つと。
「わっ……どこかにカメラついてるかと思つた……」と言つて電話を切つた。

午後からは引継ぎの割り振りを課長と相談しながら時間は進んだ。他の所からあたしの代わりの人が来るようだったが、それは来週になるとのことだった。

誰が見ても解り易いようにと、書類にインデックスをつけたり、あいうえお順に並べ替えなどをして整理をしつつ、いつもの仕事も片付けた。

その日の仕事が終わつてから、健吾の所に顔を出すとき山積みの書類の中に健吾が難しい顔をしてPCの前でなにやら打ち込みをしていた。

「忙しい所ごめんね。昼に言つてた書類取りに来ただけど……」
「ソロ」と顔を出すと、

「あ。そこにある。その紙の下。静かにとらないと上の書類倒れてくるから」
ボールペンの先でその場所を指し、またPCに向かって仕事を続けた。

重い書類の下からなんとかリストが入っている茶封筒を抜き出した。

「ねえ？この書類たちって……整理とかしないの？邪魔じゃない

「？
あまりの汚さにそう言つと、

「したい気持ちは誰よりもあんだよ。でも時間がな〜」
そう言つてネクタイを少し緩めながら言った。

「ちよつとだけやろうか？教えてくれたら整理するけど？」

「その言葉を待つてたんだよ〜 じゃあ、それはメーカー別にファイルして。」

あと新規のメーカーのはタグ作つて新しく分けてな。あとは〜」

ちよつとと言つたのにどんどんと次々注文をだされ、言われたことを忘れないよう

必死で書類を分別した。

気がつくともう時間は8時をまわっていた。

けれど、さっきの机とは思えないほどスッキリとなり、その光景は満足できた。

「さつそく残業させてんのか？」

その声に顔を上げると商品課の向田さんが立っていた。

「いや、手伝つてくれるつて言うからさ〜 少しでも早く仕事を覚えたいほうが

本人の為でもあるし。なんて部下想いなんだろ・・・俺つて」
そう言つて健吾が笑つた。

「吉本さんだっけ？こいつの下つてのが残念だけど、これからよろしくね。」

一緒の出張とかもこれからあるから、その時は飲みに行こうね!」

そう言っただけで向田さんは自分のデスクに戻っていった。

ニヤニヤとしながら向田さんの後姿を見ていた。

「ねえねえ・・・やっぱり向田さんて格好いいよね!。あたし昔から憧れてたの」

そう小声で健吾に言っくと、

「そっかあ?全然格好いいとは思えないけど。そっかあ昔もよく言っただよな」

と呆れた顔をしてこっちを見た。

「まあいいや。じゃあ、大体片付いたから、あたし帰るね。せつかく綺麗にしたんだから、もう汚さないでよ?あたしが来た時に汚かったら許さないからね!じゃ、お先に」

そう言っただけで席を立った。

「あ。ちよつと、今日はもう帰るだけ?」

「え?他になにがあるの?用事あるなら残業なんか付き合っ訳ないじゃない」

「いや、なにもないなら飯いかない?」

「へ?まだ仕事残ってるんでしょ?」

「いや。今日は急ぎの仕事はもう無いから。ちよつと待っててよ」

そう言っただけでバタバタと片付け、PCを閉じ

「向田さん。俺今日は帰りますから、後よろしくー」と言って上着を着た。

「仕事外の残業はダメだぞ！吉本さん嫌なら殴り倒したほうがいいよ？」

調子に乗るとなにするかわからないからー」

書類の中から頭だけ見えている向田さんの声が聞こえた。

「はい！わかりましたー。じゃあお先に失礼しまーす」笑いながら答えると、

「チツ」と舌打ちをしながら健吾が「行くぞ！」と合図をし、部屋を後にした。

書類の中から向田さんの「バイバイ」という手が見えた。

駐車場に向かいながら「酒飲む？」と健吾が聞いてきた。

「うっん。あたし相変わらず飲めないから……」

「じゃ、家に車置いてからでいい？俺の家まで後ろから着いてきてそう言われ、健吾の車の後をついていった。

家は前と変わっていた。当然だけど……

会社から10分程度の健吾のアパートの前に車を止め健吾が来るのを待った。

駐車場に車を止め、そのままあたしの車の助手席に乗り込んだ。

「じゃ、前によく行ったケルンに行こうよ」

「うん。わかった・・・」

そう返事をして車を走らせた。

2年ぶりに入ったその店の様子は、なにも変わっていなかった。

テーブルにつき水を持ってきた女の子に健吾は

「まゆ、前と同じでいいんだろ？じゃあ、これとこれ。あとビールとウーロン茶」

2年前とまったく同じ感じで健吾は慣れた感じでオーダーをした。

「今日はサンキュ。佐島さんなら絶対頼めないことだからな」
そう言って煙草を吸った。

「そうなの？だってペアだからやらないとダメなんですよ？」

「いや、あの人、あの手のこと苦手みたいで間違っから。二度手間なんだよ。」

だから俺がやってたし、あの人、そーゆーセンスなかったんだろな
俺がなにか言うとすぐ顔に出して怒るしさ、だからこの異動は俺と
してはよかったなって」

「そっかあ・・・ あたしとしてはよくないかもね？」

そう言って笑った。

食事をしながら仕事の話の話をいろいろと聞いていると、ふと健吾が黙ってあたしの手を見ていた。

「なに？ソースでもついでる？」
そう言つて左手を見た。

「あ。いや、指輪とかしてるんだなー」

「ああ。これね。可愛いでしょ？」そう言つてグーの手つきで指輪を見せた。

「ふーん。指輪つてよくわかんねーや。彼氏に貰つたの？」

「うん。そう」

健吾はそれ以上指輪のことはなにも言わずに黙つて食事をした。

「まゆさ……いつからその人と付き合つてんの？」

ビールを飲み干し追加を頼みながら聞いた。

「えーと。6月くらいかな？だから……5ヶ月？もうすぐ半年」

そう言つて自分でも（もう半年になるんだ……）と思った。

「じゃあ、俺が戻つてからなんだ？……」

「うん……そーゆーことになるね」

おかわりのビールを飲みながら、指輪を見つめ

「もし先に俺が「もう一度やり直さない？」って言つたらどうした？」

といきなり言つた。

「えっ……なに言つてんの？」

そう言つて気まずい空気を感じながら、冷めたご飯を口に入れた。

「だよな。もう遅いよな」 まあ冗談だって。「冗談」と言い残りのビールを一気に飲んだ。

食事を終え、健吾をアパートの前に送った。

「ごちそうさま。じゃ、異動になったらよろしくね」「降りよつとする健吾にお礼を言った。

「ちょっとあがっていかないか？」

そう言ってこつちを振り返った。

「いいよ。もう遅いし、どーせまた冗談なんでしょ？」

「少しでいいから・・・」真面目な顔をして健吾は笑わなかった。

「ううん。やめとく。公私混同は後から仕事しづらいしね」
そう言っつて健吾が降りるのを見ていた。

「そっか、じゃ・・・またな。おやすみ」

「おやすみ」

そう言っつて急いで車を走らせた。

心臓がドキドキしていた。

信号が赤になり車を止めると、手に少し汗をかいていた。

信号待ちの間、タイミング良くカバンの中の携帯がメールを受信した。

まだ赤なのを確認して携帯を見ると、カオルからだった。

<仕事の内容とか全然わからないけど、頑張れよ。こつち来る日楽しみにしてる。おやすみ>

いまあったことがカオルにバレていたようにドキツとした。
後ろめたい気持ちに少しなった。

パッパ―！

後ろからクラクションを鳴らされて驚いて信号を見ると青になっていた。

ミラー越しに怒ったオジさんの顔が見え、慌てて車を発進して、家に戻った。

家に帰り、お風呂に入りながらさっきのことを考えた。
もしも・・・健吾が戻ってきた時すぐに、

「やり直さないか？」そう言われたら、あたしはなんて返事をしたんだろう？

あの頃の健吾は毎日仕事が忙しく、電話をしてもつかまらなかった。そのうちだんだんと電話をすることが無くなり、あっちからもこなかった。

会社でも忙しくたまに会ってもニコリと笑いかけてくれてはいたが、だからといってそれ以上にも連絡をしてくれなかった健吾のことを次第にあたしは遠く感じていた。

一度、転勤が決まった後に電話がきたが、もう終わってしまったことだと思い、その電話にはでなかった。

結局「さよなら」も言わないまま、健吾は転勤していった。

それから2年間。ほとんど健吾のことを思い出すことは無かった。違う彼氏ができ、それなりに毎日を過ごしていたし。

ただ思い出すのは健吾が好きだったCDを偶然かけた時に何度か思い出したことからいだった。

別に嫌いで別れた訳じゃない分、今日の言葉が頭に残った。

顔を洗い、鏡を見た時。

胸の上にカオルのつけたキスマークが見えた。

少し薄くはなっていたが、ハッキリとわかるその痕を見て

「付き合う訳ないじゃん。カオルがいるのに……」

そう呟き湯船に入った。

なんとなく眠れない感じがして、久しぶりにPCの電源をつけた。たまにはみんなに会いたいと思い、チャットの部屋を探した。

部屋の名前を見つけクリックすると、そこにはミライとハヤとヤスがいた。

（わ！！！！入らなきゃよかった……）

カオルからヤスとミライが別れたことを聞いていたので、その二人の名前を見て驚いた。

<ヤス> 「お。ひさしぶりー」

<ミライ> 「元気だった？もうチャットやめちゃったのかと思っ
た」

<ハヤ> 「よう。かなり久しぶり〜」

<リオ> 「ちょっと仕事が忙しくなってるね。ひさしぶり〜
んな」

しばらくはミライの会社の上司の愚痴をみんなで聞いていた。

(あれ？ミライ・・・ヤスとは別れてないのかな？カオルの勘違
い？)

そう思ったが、さすがに直接本人には聞けなかった。

けれど、なんとなく場の雰囲気に変化があった。

<ハヤ> 「じゃ、また週末な>ミライ」

<ミライ> 「うん。じゃ今度は早めに行くね>ハヤ じゃ、私落
ちるね。リオ、ラビ達来たらうちにも来てね。じゃ、おやすみー」

<リオ> 「あ・・・うん。連絡するね。おやすみ>ミライ」

(ハヤ？早めに行く？なんだそりや・・・)

<ヤス> 「今、ミライとハヤが付き合ってたよ>リオ」

その言葉に驚いた。

<リオ> 「えええ？そうなの？なんで？ヤスもハヤもいいの？」

<ハヤ> 「ああ？別に。別れたなら問題ないし」

<ヤス> 「そぞ。俺も全然問題ないよ〜ん」

ちょっと動揺しながら、

<リオ> 「問題無いって・・・ そんなもんなんだあ・・・」

<ハヤ> 「別に結婚する訳じゃあるまいし、そんなに驚かなくて

いいじゃん」

<ヤス> 「そうそう。真剣に考えてるお前等は人生損してるぞ」
(笑)」

そうなのかなぁ・・・

いろいろ聞きたいこともあったけど、それ以上は何も言わなかった。

<ハヤ> 「じゃ、俺もそろそろ寝るわ。またな。おやすみ」

そう言っただけで早々とハヤは落ちていった。

<ヤス> 「今日、カオルは？」

<リオ> 「もう寝たみたい。仕事忙しいみたいだし」

<ヤス> 「そっか。ならちょっと電話していい？字打つのめんど
うだから」

そう言っただけで画面をそのままにヤスが電話を掛けてきた。

「ビックリした？ミライとハヤのこと」

そう笑いながらヤスの声が電話の向こうから聞こえた。

「うん・・・それってアリ？信じられないね」 あんた達」

「別にいいじゃん。俺はなんとも思っただけだよ？ミライもよかった
んじゃない？」

ハヤなら同じ札幌だし、いつでも会えるしさ」

「そうだけど、、ハヤも気にしてないの？その、、ヤスの前の彼
女って、、」

「ああ。別に体に印がついてる訳でもないしな。回数 of 正の字でもあるなら

別だけど、まあ、、、そんなのあってもハヤは気にしねーだろな」

印と言われて思わず胸の痕を上から触った。

「それってハヤもミライのこと遊びってこと？」

「どうかな？よくわかんねーけど。長く付き合えば後は二人のことだし、

俺には合わなかったってだけのことだしな」

「そうなんだ……」

たしかこの前、ヤスがミライとのセックスをバラしている時にハヤはいなかった。

けれどほんの数週間前まで知り合いの彼女だと知っていても別に問題なく付き合えるもんなんだな〜と思った。

ミライもヤスが目の前にいても、全然気にした素振りもなくハヤと普通の会話とができるんだ……

あたしのカオルのナンパ話なんかお呼びで無いとすら感じた。

「俺はしばらくはのんびりと独りを満喫することにしたんだ〜」

「そのほうがいいかもね？真剣になるほど女が損しそうだしね」

「自由が一番だって。しばらくはセフレだけにしとくさ。付き合うのと

やりたいのとは別モンだからな」

そう言った電話の向こうでライター of 音がした。

「ナンパもいいけど、カオルは誘わないでね」

「カオルがいると成功率があがるんだけど、最近付き合ってくれないから」

寂しくて。リオが一言OKサインしたらカオルも自由に参加できるのに」

「OKだす時はきつと別れてると思うけど？」

「もう・・・堅いんだから。なんなら、カオルがいない時に俺が寂しい君の」

側で朝を迎えてもいいよ？今なら北海道に空きがあるけど？」

「ばっかじゃないの。間に合ってるから
そう言っただけだ。」

「お前等はきつとウマくいくよな。そんな感じがするよ」
「ヤスに言われても全然嬉しくないし・・・」

「いや、本当にさ。なんか似てるなって。付き合ってからもどんどんそんな」

感じするしさ。そうなったら俺がキューピットじゃん！感謝してもらわないと！」

確かにそう言われてみたらキツカケはヤスだったかもしれない。

ヤスが「カオルはお前のタイプだぞ」と言われなければ、それほどカオルに

興味を持ったとも思えない。

それにカオルにそう言ったのもヤスだったし。

「そうだね。そういえばヤスのおかげだね。ありがと感謝してる」
「そのシレッと惚気るのも似てるんだって。あー頭くる」

ヤスとのバカ話でさっきの健吾のことも少し忘れた。

その後、電話を切り回線も切断してベットにもぐった。

少しだけ健吾との仕事に不安があったけれど、さっきは飲んでいたし
なによりあたしがシツカリしていれば、なにも問題は無いと思った。

カオルに逢った時に、後ろめたい気持ちにはなりたくなかった。
自分がされたら嫌なことはカオルにはしたくない。

「ただの酔った席での冗談だよ。きつと・・・」

そう呟いて布団がかぶりスタンドの電気を消して眠った。

レビとサクラ

正式な異動の日。

いつもより少し早く会社に行った。

「それでは、お世話になりました。向こうの部署に行っても頑張ります」

課長に頭を下げ、ダンボールに自分の荷物入れ席を移動した。

「またお昼一緒に食べようね」

そう笑顔で手を振り、慣れ親しんだデスクを離れ、周囲の人に簡単に挨拶をした。

ワンフロアの一番奥にある商品課までヨタヨタと歩きながら、荷物をヨイショ！と持ち直した。

「持ってあげるよ」そう言った人物は顔を見る前にヒョイとダンボールを持った。

「今日からだね。あらためてよろしくね」

向田さんがそう言って前を向きデスクまで荷物を運んでくれた。

「ありがとうございます。すいません・・・あの、これからよろしくお願いします」

頭を深く下げ挨拶とお礼を言った。

(いーの！いーの！)とニコヤカに向田さんは自分の席に消えてい

った。

「デレくとしちゃって。あんなのどこがいいんだか？」
声のするほうを見ると健吾が向田さんのほうを見て言っていた。

「別にデレくとなんかしてないよ。ただ紳士だな〜ってさ。
やっぱり格好いいよな〜 向田さんて」

そう言いながらダンボールの中のモノを自分のデスクに出した。

「あ。これ、お前の名刺な」そういつて健吾がドサツと名刺の束を置いた。

「ええ？こんなに？なにこれ400枚くらいない？」
1ケース100枚は入ってそうなケースを4つ見て驚いた。

「それでもすぐに無くなるよ。一回メーカーに合うのに何枚いると
思っ

んだよ？担当以外にも世話になる人はいるんだからさ。
多く知ってもらえば、その分力になってくれる人はいるんだよ」
そう言っ

て、忙しそうに書類を見ていた。
商品課だけの朝礼の時にみんなの前で挨拶をさせられたが、
みんなほとんどが電話や接客に追われ真剣には聞いていなかったよ
うだった。

朝礼が終わると、すぐに健吾が

「じゃ、とりあえず挨拶まわりに行かないとな。できるだけ愛想良
くな

そう言っ

<松永> 外出 戻り3時
<吉本> 外出 戻り3時

と書いた。

「ほら。行くぞ！戻ったらすぐに来週の分の導入書の作成だからな」

「あ・・はい・・」

慌ててバツクを持って名刺の箱を1つ中に入れ、健吾の後を追った。

3時少し前に会社に戻り、それから健吾に教わりながら書類を作り、定時をつげる社内放送が流れても、商品課は誰も席を立たずに黙々と仕事をしていた。

7時を過ぎた頃、一人二人・・と退社する人がでてきた。

（このままでいけば、あと一時間でなんとか目途が立ちそうだな）
そう思いながら、帰る人に小さく手を振りまた書類に目をむけた。

目の前のデスクに座っている健吾はたまにチラチラとこっちを見ていたが、

そのまま話をすることも無く、黙っていた。

8時少しを過ぎた頃。

「終わった〜」とシャープを置き、首をコキコキ回した。

「終わった？どら？見せてみな」

偉そうに言う健吾に書類を渡すと「ふ〜ん」と言いながら全部チェックし、

「最初なのに間違っていないじゃん。お疲れ」
そう言っつて書類を机にポンと置いた。

「じゃあ、今日ももう急ぎの仕事は無いね？帰ろうかな」
「ああ。だつて俺の分もやってくれたしな。もう無いよ」
と言っつてズルそうな顔をして笑った。

「ちょっと……わからないと思っつて全部押し付けたの？ひどい……」

「その分、遅れていた仕事はかなり片付いたよ。こつちのもそのうちまゆにもやっつてもらおうから。じゃあ、お疲れ。気をつけて帰れよ」

そう言っつてまた自分の席に戻った。

「まだ帰らないの？仕事残つてるの？」

「まあ、やろうと思えばいくらでも。そんなに急いで帰ることもないしな」

「手伝う？」

「いや。いいよ。早く帰っつて彼氏に電話でもしてやれば？」

「そつか。じゃあお先にー」

「ああ。お疲れー」

馴れない仕事と午後から延々とデスクに座つていたので、家に帰るとドツと疲れた。

その日はお風呂にも入らずいつの間にか眠つてしまった。

次の朝、化粧も落とさず寝たので寝起きは無残なものだった。
時計を見るとギリギリで、慌ててシャワーに入り急いで支度をして、

会社に出かけた。

その日は一日、再来週の売り出しに出す商品の
写真撮影の為、いろいろなメーカーからサンプルを借り
延々と撮影に付き合っつて一日が終わった。

ハードインテリア、ソフトインテリア、アパレル、洋雑貨、和雑貨、
アジア雑貨、その他キッチン用品や浴室用品にいたるまで
すべての担当が集まり撮影に参加していた。

「雑貨だと種類が多くて大変だね・・・」

大きな箱を持って歩く担当の人を見ながら、順番がくるのを待ち健
吾に言った。

「まーな。でももうすぐ俺達のところも新商品が入ってきたら、
あの倍くらいは種類が増えるな。ああ・・・考えただけで嫌だ・・・」

「そう言いながら遠い目をしていた。」

昨日より少しだけ早めに終わり、各自撮影現場から直接帰った。

家に着きく帰ったら教えて。電話したいから>とカオルにメールを
送った。

ちょうど仕事の合間だったのかすぐに返事が送られてきた。

<今日は11時には大丈夫。じゃ、その頃な>

時計を見るとまだ9時だった。
昨日ゆっくりお風呂に入れなかった分、時間をかけのんびりとお風呂に入った。

「あ〜〜。疲れた……。思っていたよりもハードかも……。大きな独り言を言いながら、湯船で体を伸ばして凝った肩を揉み解した。

お風呂から上がりTVを見てみると、ラビから週末のことで電話がきた。

仕事が変わるので、もしかしたら迎えに行くのがちょっと遅くなるかも……。と、事前にメールをいれてあったので、ラビ達は気を使ってJRを使って

うちの近くまで来てくれると言ってくれた。

「ごめんね。ちょっとまだ早退とかできそうもないんだ……」

「ううん。全然気にしないで！何時くらいに着けばいい？」

「そうだなあ……。仕事は8時くらいまでかな？でも途中でちょっと抜けることくらいは

できそうだから、家まで送ってまた仕事に戻れはいいし。それくらいはさせてよ。時間は気にしないで」

「うーん。でも……。いろいろ見たいところもあるし、8時頃に行く！」

駅に着いたら電話するね。仕事中でも電話大丈夫？」

「うん。平気。じゃ金曜の夜ね！気をつけてね！」

「おっけー！じゃーねー」

ラビからの電話を切り、時間も11時少し前だったので、そのまま続けてカオルに電話をした。

「もしもし？今、大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ。どう？仕事キツイ？」

「うーん。いままでと全然違うからね。馴れるまではいろいろと・・・」

「そっかあ。なんか愚痴ある？聞いてやるよ？」

そう言われて考えたけど、まだ愚痴は出てこなかった。

「ううん。だつてまだ二日だもん。まだ無いかな？カオルは？あるなら聞いてあげるよ？」

「そっだなあ・・・ サッカーの試合であれ以来ゴールできないことかな」

簡単に仕事内容の話や、今日したことを話した。

「出張つて、独りで来るの？俺ん家泊まる？」

「あー。独りじゃないの。ペアの人がいるから・・・」

「ペアつてどんな人？男？女？」

そう聞かれて、一瞬なんて答えようか迷った。

けど、あえて嘘をつくほうが怪しいと思い、正直に言った。

「男の人。でも昔からの知り合いっていうか・・・同期の人で。

でもカオルのこと言ってるから、東京に行った時は仕事が終われ

ば自由にしていって」

「そっか。その人ってイイ男？」

「イイ男か……うーん……」

昔は健吾より素敵な人なんかいないと思っていた。

それくらい健吾のことが大好きだったのに、

今は毎日顔を合わせてもなんとも思わなかった。

「考えるってことは、結構いい男なんだ？」

「ん〜ん〜。どうだろ？カオルよりもちよつと落ちるかな？」

「うわ。微妙…… 答えるまでのこの間が……」

そう言っ二人で笑った。

「そっぴやさ、ヒデに例の件聞いたよ」

「で、、なんて言った？ヒデ？」

「「ラビのことはいいとは思っけど、俺のことは好きじゃねーだろな」ってさ。」

もう〜危なく俺、言いそうだったけど、知らないふりするの大変だった」

「そうなんだー！じゃあウマくいくかもね？週末ラビが着たら言っしておくね」

「週末行くんだ？」

「うん。伝えておく」

「ウマくいったら、正月4人で温泉でも行こうか？今から予約すれば大丈夫だろ」

「うん！そうだね」

「よし、じゃあ今からどこか探しておくよ。正月は忙しいな」

「忙しいって・・・温泉くらいでしょ？」

「うちの実家も行かなきゃならないじゃん！」

「ええー！！そうなの？」

驚いて思わず立ち上がった。

「それもあって、先にまゆの親に挨拶したんじゃない。絶対うちの親なら」

「あちらの親御さんに挨拶したのか！」って言いそっだしさ」

まだ先の話なのにドキドキしてお腹に冷たいモノが流れた。

「あたしどうしたらいいの？なに着ていけばいい？どうしよう・・・」

「別にそんなに緊張することないよ。ただ・・・」

「ただ・・・？」

「正月だから、兄ちゃんとか妹とかいるかもしれないな。でもまあ、大丈夫だよ」

「超アウェイじゃない！！」

「大丈夫だって。お年玉もらえるかもよ？」

そう冗談を言うカオルとは対照的にどんどんと気持ちが沈んでいった。

「今になって・・・この前のカオルの気持ちがわかる・・・」

「だろ？今回はカレー作るのやめとくよ」

そう言ってカオルは笑っていたが、とてもじゃないけど笑えなかつ

た。

「じゃ、そろそろ寝ないと明日また起きれないぞ。もう寝ようか」
「こんな話されたらどっちみち眠れないよ・・・」
「大丈夫だつて。一度逢つてしまえばあとが楽だろ？じゃ、また電話するからちゃんと寝るよ。あんまり無理して仕事すんなよ？じゃーな」

そう言つて電話は切れた。

ベットに入つても、お正月のことばかり考えてなかなか眠れなかった。

いろいろ頭の中でまだ見ぬカオルの両親を思い浮かべ、シュミレーションを試してみた。

(やっぱりダメだこりゃ・・・)

ため息をつきながら目を瞑つた・・・

ラビ達来る日。

朝から延々と電話や打ち合わせで時間が目まぐるしく過ぎていった。夕方の6時くらいになり、

「今日はどれくらいかかるかな？この後、なにか急ぎの仕事ある？」

それとなく健吾に聞いた。

「うーん。今日はもう無いかな？なに、なんか用事あるの？」

「うん。ちよっと・・・東京から友達が来るの。だから早く帰れるかなーって」

<東京>と聞いて健吾は、一瞬黙り「んっ・・・」と考え、

「そうなんだ。あー・・・これいいかな？」

そう言っつてこの前の写真が入った袋を出した。

「一品につき写真2点選んでくれる？終わったら俺に言っつて」

そう言っつてデスクを離れていった。

(もう無いって言っつたくせに・・・)

渋々袋を開封すると、ものすごい量の写真があった。

目眩がしそっつだった・・・

それでも仕方無いと思っつ、できるだけ早く終わらせようつと必死で写真を分けた。

「それ今日じゃなくてもいいんじゃないの？せつかくの週末に」
声のする方を見ると向田さんが珈琲を飲みなながら覗いていた。

「でも・・・松永さんに言われたので・・・」

危なく「ですよねえー！酷いですよねー！」と文句を言いたくなつたのを押さえた。

そこにちょうど健吾が戻ってきた。

「なあ、マツ・・・これ今日じゃなくてもいいんじゃない？無理に残業させなくてもさー

まゆちゃんだったたまには早く帰りたいだろうし・・・ねー？」

向田さんに「まゆちゃん」と言われて、ちょっと嬉しくなった。

けど、その言葉で向田さんに言いつけたと思われたのではないかと、チラツと健吾の顔を見た。

「早めにチェックしたほうがいいだろ？それに異動の前に言ったじゃない。

「仕事で遅くなるから彼氏大丈夫か？」って。それでOKしたのはお前なんだし。

ま・・・彼氏が大事なら無理にしなくていいよ」

そう言っつて椅子を強くひいて座った。

「なんだよ？彼氏に逢いにいくのを邪魔してんの？お前かっこわるう〜」

そう言っつて笑う向田さんに「早く仕事に戻ったほうがいいですよ！」と強い口調で言い、

自分はPCの画面に向かった。

ちょうどそこに電話がきた。

画面を見たらラビからだった。

「もしもし？ラビ？ごめん、ちょっと遅くなるかも・・・サクラもいるんでしょ？」

「あ。そうなんだー じゃあどつかで時間潰すよ。大丈夫」
「ごめんね。終わったら真っ直ぐご飯食べにいこーラビにもビデのこと」

良い報告あるし、今どこにいるの?」

そう話していたら、健吾がヒヨコと顔を出して

「彼氏じゃないの?」と聞いた。

「ちょっと待ってね・・・」

電話口を押さえて、

「誰も彼氏なんて言ってません。女友達が二人、今日うちに泊まるんです!」

そう言ってイッー!とした顔をして電話に戻ろうとすると、

「あゝ・・・もう帰っていいぞ・・・今日じゃなくていいんだ。それ・・・」

バツの悪そうな顔をして健吾が言った。

「もしもし・・・ラビ?もう帰っていいってさ。今から会社出るね」
そうして場所を書きとめ、電話を切った。

その様子を後ろで見ていた向田さんは健吾を見ながらニヤニヤし

「健吾君・・・かつこ悪すぎて見てられんなあ・・・」
「と言いながら席に戻っていった。」

「じゃ。お先に失礼します。松永主任!!!!」

そう言っつてわざとオーバーに頭を下げて会社を後にした。

(もう！なによあと態度！あつたまきた！) ブツブツと文句を言いながら、

ラビ達の所に急いで車を飛ばした。

駅前の喫茶店でラビとサクラは待っていた。

「ごめんねー 遅くなっちゃって」

「ううん。言ってた時間より早かったし、なんでもないよー」

そう言つて久しぶりに逢うラビとサクラに挨拶をした。

それから3人で近くのイタリアレストランに行き、ご飯を食べた。

9時過ぎに家に着き、その後時間も忘れて3人でいつまでもお喋りに没頭した。

「そうそう。ラビ！ヒデのことなんだけどね・・・」

カオルがヒデに聞いたことを伝えると、ラビは顔を真っ赤にして「どうしようー！」と喜んでいた。

それを見てサクラと二人で冷やかして笑い、いつヒデに言つのと急かしてラビの反応を見てまた笑った。

ピンポン！

突然インターホンが鳴り「誰だろ？」と玄関に向かった。

「マサだったりして・・・」と言うラビに「それはない！」と笑い

ながらドアの
小窓を見ると、そこに健吾がいた。

「あ……………」

「誰？誰？」と後ろをついてきたラビに聞かれたが、うまく言えなくて

「会社の人……………」と言ってドアを開けた。

ドアを開けるとさつきと同じバツの悪そうな顔をした健吾が

「さつきはごめん。あのこれ、、みんなで食べて。あのまま月曜
になったら

気まずいかな〜って…………今、外に向田さんもいるんだ。で、
その、、

ケーキでも買っていけばって言われて。コレ……………」

箱を受け取り、ドアの隙間から外を見ると向田さんが手を振っていた。

向田さんにニコやかに笑顔で手を振りながら頭を下げ、健吾には

「別に…………いいけど。ありがと」とブスツとした顔をした。

後ろからラビが顔を出し健吾に向かって「こんばんわー」と挨拶をした。

「あ。どーも」と健吾もラビに挨拶をし、それを聞いたサクラが後ろから顔を出した。

「どーぞ！よかったらあがってくださいーい」とサクラが健吾に言う
と、

「いや、これ置きにきただけなんで、もう帰りますから」と言った。

「いいじゃないですかー！どーぞどーぞ！」と言うサクラにちよつ
と困った顔をして

「車の中にも人がいるんで・・・また今度」と健吾はやんわりと断
った。

「じゃあ車の中の人もどーぞ！せっかくこっちに遊びにきたのに、
女ばかりってのもねー」そう言っつてラビに同意を求めるとラビも

「そうそう！リオの同僚なんですよ？いいじゃない！ね？リオ？」
健吾の前で<リオ>と呼ばれ、さすがに焦った。

「あ、じゃあちよつと先輩に言っつてみます」

みんなであたしを無視して話が進み、健吾は向田さん呼びにいっ
た。

ドアを閉めてラビとサクラに

「あたしを<リオ>っつて呼ばないで！お願い！まゆっつて呼んで！

会社の人にはチャットの友達っつて言っつてないの！」と手を合わせ
て頼んだ。

「あ。そっか。わかった！でもあの人、見た目かっこいいね？
ちよつとカオルにどことなく似てない？ねー？サクラ？」

「うん。私もそう思っつた。体型とか目の感じとかねー」

「もしかして・・・リオ狙っつてる？」

「だからくまゆくで！お願い！それに狙ってないし！」

そう言ってる間に、玄関が開き健吾と向田さんが顔を出した。

「どーも。こんばんはー まゆちゃんさっきぶり〜」と
ニコニコと向田さんが声をかけてきた。

「あ。どーぞ。あまり綺麗じゃないですけど、あがってください
そう言って健吾と向田さんを家の中に通した。

「東京からわざわざ遊びに着たんだ？遠かったでしょ？」
向田さんがラビ達に話かけていた。

それをキッチンでお茶を入れながら聞いていた。

「あの・・・なんか手伝う？」健吾が後ろからきてキッチンに並んだ。

「ううん。いいよ。ケーキありがと。座ってて
さすがにもう怒った顔はできずにそう言った。

みなんでお茶を飲みながら話をしてるうちに健吾がラビに、
「そっぴや・・・さっきまゆのことくりオくって言ってなかった？
お前源氏名なんかあるの？」

そう言いながら不思議そうな顔をしてこっちを見た。

ラビが慌てて

「え？私さっきからまゆって呼んでたよ？健吾さんの聞き間違いだよ
よ」と言ってくれた。

「そうだっけ？なんとなくそう聞こえたんだけどなあ……」
腑に落ちない顔をしながら健吾は首をかしげていた。

（さすがにくまゆ>とくりお>は聞き間違わないよなあ……）と
思ったが

それ以上はなにも言わなかった。

向田さんがベットの近くに座り、キョロキョロと部屋の中を見ていた。

向田さんの肩越しにカオルと二人で写った写真たてが
目に飛び込み慌てて、それを伏せようとすばやく動いた。

けど、そんな急な動きがかえって目立ち、先に写真たてを手に取られた。

「へえ〜　これがまゆちゃんの彼氏なんだ？ふ〜ん。なかなかイ
男じゃない」

そう言って笑う向田さんにヘラヘラと頼りない笑顔で返すしかなかった。

「見せて。写真」と健吾が向田さんに手を出した。

「あ。いや、いいよ見なくて！」

「いいじゃん。見たって？」と健吾に言われ、それ以上にも言えずに

写真を見る健吾を横目で見ていた。

「なんかさ……」

みんなが話を止め健吾を見た。

「俺に似てない？この人？」と言うと、みんな一斉に
「だよな？そう思った」「俺も」「だから私が言ったでしょ？」
その場にいるみんなに次々に言われた。

「そうかな？似てるって思ったこと無かったけど・・・」

「でも性格は似てそうもないかもね」。カオルってポヤーンと
してるイメージだしね」とラビが笑った。

「へえ・・・そうなんだ？ラビちゃんもカオルって人と仲いいんだ
？」

そう健吾がラビに向かって聞いた。

「うーん。私はリ・まゆが着た時だけ遊びにいく程度だけどね。
でも仲いいんですよ。この二人」

ラビはニヤニヤしながらこっちを見た。

「そうなんだ。へえ」そう言いながら健吾は写真を見ていた。

「そんなに仲いいなら諦めたら？健吾くん」と向田さんが健吾に
言う

「そんなんじゃないですよ」と言いクッションの上にポンと写真た
てを置いた。

「昔、お前等付き合ってたろ？」いきなり向田さんが言った。
ビクビクして向田さんを見ると健吾も驚いて見ていた。

「ええー！そうなのー！」とサクラがこっちを見た。

「なんだ。知ってたんすか・・・」と健吾が言うと向田さんが、

「やっぱりな。 何度か二人で歩いているの見たことあるんだ。でも隠してるのかと思って言わなかったんだ」
「ま、昔のことですけどね」

そう言つて健吾はお茶を飲みながらケーキを食べていた。

なんとなくラビとサクラの視線が気になったが、そつちを見ないでどことなく視線を外した。

「まゆちゃん彼と結婚するの？」 向田さんが更に話を突っ込んできた。

(この人・・・優しい顔して結構言つなあ・・・)

「あ。いや、まだそこまでは・・・」

「ふーん。 そうなんだ。 でも遠距離つて寂しくない？」

「うーん。 まあ、、、、そんな時もあるけど、でも・・・」

「その分逢つた時が嬉しいんだつて！この前二人で言つてたよ？」

ラビが話しに割り込んで答えた。

「そうなんだ。 じゃあ東京に出張の度にこれから逢える訳だ。 いいねえ」

辛い出張の間に大好きな彼に逢えるつてのは「

(もうこの話は終わってくれよ・・・)

そう向田さんに言われ、作り笑顔で「はあ・・・」と返事をした。

「でもまたマツに意地悪されるかもよ」そう言いながら健吾をチラリと見た。

「別に意地悪なんかしないよ。逢いたきや勝手に逢えばいいし。ただ仕事に支障が無ければ俺は別に問題無いっすよ」
そう言っつて煙草を吸った。

場の空気がちよつと重くなつたのを感じて、サクラが向田さんに「彼女いないんですか?」「どんな子が好き?」とかヤンワリとした話題を振った。
なにげに向田さんの彼女の有無とタイプの所は耳を大きくして聞いていた。

(よし。彼女はいないか・・・タイプは「別に無いかな」って・・・微妙)

そして健吾にも同じ質問をした。

「今はいないよ。毎日バカみたいに仕事ばっかだし」
そう言っつて健吾も笑いながらラビやサクラと話をしていた。

1時間ほどして、
「じゃ、そろそろ帰ろうか?お邪魔しました」
そう言っつて向田さんと健吾は帰っていった。

ドアが閉まると・・・

「元彼と一緒に仕事してるんだ?それって・・・どうなの?」
サクラがニヤけて聞いた。

「別に？なにもないよ？昔のことだし」

「へえ〜 このことカオルは知ってるの？」

「うっ…… さすがに言えなかった……」

「うん。言わないほうがいいと思う。余計な心配かけないほうがいいよ。」

だって、あの健吾って人まだちょっと未練ありそうだし……」
ラビがそう言いながら、ちよつと心配そうな顔をした。

「大丈夫だつてば。もうなんとも思つてないから。」

それに、カオルこの前来た時、うちの実家に挨拶に行ってくれたの。あたしもお正月にカオルの実家行くし。そっちのほうがいい心配だから」

「ええー！ そうなの？ そんなとこまで進んでたんだー」

それからスツカリ話は健吾のことからカオルの話になった。

その後、ラビの話やサクラの彼氏の話……

延々と朝までそんなことで笑つて話をしていた。

ようやく眠りについたのは朝の5時をまわっていた。

土曜日も起きたのは夕方近くで、みんな化粧もせず近くの日帰り温泉に

行き、帰りにスツピンのままラーメンと食べ、またその日の夜はいつまでもおしゃべりをして一日が終わった。

日曜日。

ラビとサクラはあと2日ほど休みがあるので、稚内や富良野といった観光名所に行く為に、二人を駅まで送った。

一緒に行きたい所だったけれど、今は仕事が休めそうもないので

「次は絶対一緒に行こうね！」と約束して見送った。

「じゃあ、まゆ！東京に来た時は連絡してね」

すっかり「まゆ」と呼ぶのに馴れた二人は元気に列車に乗って行った。

家に帰り、部屋の掃除をしながらカオルの写った写真を見て、

（健吾に似てるかなあ……全然似てないのに……）

そう呟きながら、また掃除を続けた。

なにげなく目に入った空のケーキの箱を見て、

（あたしの好きだったケーキ……まだ覚えてくれていたんだな）
と思った。

健吾とは良い友達になりたかったのに、なぜかなれないような気がした。

いまさら好きとか、そんな気持ちにはなれないよな……

そう思いながらケーキの箱を小さくたたみゴミ箱に捨てた。

チェリー

11月に入り、年内の仕事の予定表を渡された。

それを見ると、2週間後に東京に5日間の出張、戻ってすぐに札幌・旭川・帯広に日帰り出張。

12月に入るとその日帰り出張は一日おきになり、真ん中辺りから静岡に長期出張があり年末の休みギリギリまで行くことになった。

そのスケジュールを見るだけで肩が凝った。

ただ一点、良いことといえば他の業者の休みが完全に明けるまでは仕事にならないのでお正月の休みは結構長かった。

「これ・・・なに？このなっがい出張は？」と紙を見ながら健吾に聞いた。

「ああ。静岡で新規の店舗が開店するから、そのオープニングの手伝い。

たぶん15日くらいから行って、店内のディスプレイとかしてクリスマスにオープンするから、開店して2、3日は手伝って・・・

で。そのまま正月休みってとこかな」

「ふん・・・わかったあ」

「どこか問題ある？」そう聞かれて、「ううん」と答えた。

「後、2週間後の東京だけど・・・あー。えーと。

もし彼氏に逢いに行くならいいぞ。それほど終わるのは遅くないし。

でも、朝、遅刻は困るからどんなに遅くても夜のうちに帰ってくる
こと」

そう言っただけの返事を聞かずにカタカタとPCのキーボードを
打ち込んだ。

「はあ〜い」

なんてことない顔をして返事をしたが、内心はカオルに逢えると思
うと、とても嬉しかった。

その日はどんなに健吾に仕事を振られても、文句も言わずにこな
していった。

その日も仕事が終わったのは8時過ぎだった。

健吾はまだ残って仕事をしていたが、あたしの仕事は終わったので、
「じゃ、お先に〜」と会社を後にした。

11時頃に、珍しくPCをつけチャットを覗いた。
久しぶりに覗いたわりには、結構な人数がいた。

あれ以来見ていなかったマサまでいた。

ちよつと「うわ・・・」と思っただけ、個人的に話すことも無い
だろうと思っただけ、

そのまま適当に挨拶をしてかわした。

<リオ> 「おひさ〜>a111」

<ラビ> 「この前はありがとねー>まゆ」

<マサ> 「ひさしぶり>リオ」

<ヒデ> 「仕事忙しいんだって?>リオ」

<ヤス> 「よ。生きてたか」

そんなみんなの挨拶を見ながら「懐かしいな」と思っていた。

<マサ> 「リオって本名まゆって言うの？>ラビ」

<ラビ> 「そうそう。この前焦ってたよね」(笑)

<リオ> 「源氏名って言われてね」(笑)>ラビ

その話をみんなに教えて笑った。

<ヤス> 「でもその男、リオの家を知ってるくらい仲いいんだ？」

ヤス・・・相変わらず視点が違うな・・・と感じた。

ラビがみんなの前で元彼だと言っんじゃないかと一瞬思ったが、ラビはなにも言わなかった。

(さすがだぜ・・・ラビ！)そう呟きながら画面を見ていた。

すると電話が鳴り、画面を見るとラビだった。

「もしもし、どしたの？」

「あー。あのね報告しておこうと思って。ヒデとね付き合ってるの。
・えへへ」

そう言って嬉しそうな声が聞こえた。

「わー！本当？よかったねー！やったじゃん！」

「うん。ありがと。まゆとカオルのおかげだよ」そう言ってラビは笑った。

そこにカオルが入ってきた。

<カオル> 「ひさしぶり〜」

その文字にみんな挨拶をしていた。

画面を横目で見ながらラビと話を続けた。

<カオル> 「あれ？まゆとラビいるんだろ？なんで無視？」

その言葉を見て、ラビが

<ラビ> 「ごめん。まゆと電話中>カオル おひさ」

と出した。

<ヒデ> 「もうリオはまゆでよくない？頭こんがらがる」

<カオル> 「そうだな。俺もいまさらリオとか言うの恥ずかしい」

<ヤス> 「俺、どっちでもいい。俺のこと興味無い女なんか」

ヤスの言葉に思わず吹き出した。

「カオルがお正月に温泉行こうかって、4人で」

「えー！行きた〜い！でも、部屋ってどうなるの？」

「あ・・・やっぱヒデと一緒にはまだまずい？」

「いや、そんなこと無いけど・・・」

「ラビの好きなようにするよ。別にカオルと一緒にじゃなくてもいいし」

本当は一緒によかったが、ラビのことを思ってそう言った。

「えっ……うん。そんなことない。私もせつかくだから……」
そう言っただけで恥ずかしそうに笑った。

「了解」そう言っただけでお互い笑った。
そうして電話を切り、チャットに戻った。

<リオ> 「じゃあ今度のチャットから「まゆ」でログインするよ

<ヤス> 「だから俺はどっちでもいいって」

<ヒデ> 「別にお前に聞いてないから」

<マサ> 「まゆちゃんね。OK」

<カオル> 「しかし、産まれた子が女の子ならリオっていまから考えるのってすごいよな。そんなもんなの？女って？」

<ヤス> 「なに？子供の名前？子供いたの？」

<リオ> 「いないから……」

<ヒデ> 「いいんじゃない？矢吹リオ いいじゃん」

その言葉を見て、ドキッとした。

<カオル> 「まあ。語呂はあってるなあ」

<ラビ> 「うん。可愛いね。男の子ならなにがいいの？>まゆ

<リオ> 「あー。まだ考えてないけど、3文字がいいかなあ」

<ヤス> 「うちの犬、健太だ。どうだ？健太って？」

<ヒデ> 「犬と同じは嫌だろ・・・」

<マサ> 「ラビちゃんはどんな名前がいいの？子供の名前は？」

<ラビ> 「うーん。私はまだ考えたこと無いな」

<マサ> 「ラビちゃんの子供ならきつと可愛いだろな」

わ・・・ちよつと気持ち悪いなあ・・・マサ

そんなことを思いながら画面を見つめた。

きつと少なくともここにいる4人は同じことを思ってそうだと感じた。

しばらくして、どーにも浮いていたマサが落ちた途端、ヒデが

<ヒデ> 「ラビちゃんて・・・マサってラビ狙い？」と出した。

<カオル> 「まあ、あいつは女なら誰にでもそんな感じじゃん」

<ヤス> 「レナが静かになったら次はマサか・・・」

<リオ> 「早く彼女でもできたらいいのにね・・・あの人も」

<ラビ> 「本当だよな。今でもたまたま電話くるんだもん。嫌だな

」

<ヒデ> 「それマジで？なんて？」

<ラビ> 「ご飯行こうって・・・嫌だから断ってるけどね」

<ヒデ> 「絶対行くなよ！なんだよアイツ・・・」

<ヤス> 「え？なんでヒデが怒る訳？」

その言葉を見て、ヤスが二人のことを知らないんだなと思った。でも、ヤスにバレるとロクなことが無いから、なにも言わなかった。

<ヒデ> 「いや、普通に気持ち悪いじゃん。そんだけ」

<カオル> 「ラビも殴っておけば？もう変なこと言われないかもよ？」

<リオ> 「それはあたしのことですか？」

<カオル> 「他に誰がいて？>まゆ」

<ヤス> 「あれは傷害罪で訴えられるくらい痛そうだった・・・」

<リオ> 「うるさい！>ヤス」

それからしばらくは、あたしの平手打ちの話で盛り上がり、1時少し前にヤスを落ちていった。それを確認してからヒデがカオルに、

<ヒデ> 「この前カオルが俺にラビのこと聞いたのって
リオに言われたからだろ?」

<カオル> 「へ?なんのこと?」

<ラビ> 「ヒデに私のことどう思ってた?>カオル」

<カオル> 「ああ。なに?ウマくいったの?二人は?」

<ヒデ> 「おかげさまで〜」

<ラビ> 「えへへ。ありがとね」

<リオ> 「よかったね。お似合いだと思うよ?」

<カオル> 「そっか〜 よかったな」

<リオ> 「でも・・・男ばかりの時に暴露されないように気をつ
けないとね」

<ヒデ> 「えっ・・・リオ、知ってたの?」

<カオル> 「ヒデまじでヤバいぞ。この前、思いっきり顔つねら
れた・・・」

<ラビ> 「なに?なんのこと?」

<ヒデ> 「ひいー リオならやりそうだ・・・」

<リオ> 「男だけのチャットだと下ネタの材料にされるから気を

つけたほうが

いいよ>ラビ

<ラビ> 「うっそ！最悪〜」

<ヒデ> 「まだ話してないってば！>ラビ」

<カオル> 「その話は今度うちに来た時にでも>ヒデ」

<ヒデ> 「そうしよう>カオル」

<ラビ> 「なにがそうしようなのよ！二人して！」

<リオ> 「あ。そくだ！再来週東京に出張>カオル」

<カオル> 「嘘！まじで？何曜日？」

<リオ> 「たぶん月〜金だと思う。土日はゆっくりして帰るつもり」

<カオル> 「わかった〜 平日逢えそう？」

<リオ> 「うーん。たぶん大丈夫かな？連絡するね」

<カオル> 「おっけ。待ってるよ」

<ラビ> 「ねえ？二人とも電話でそーゆーことは伝えないの？」

<リオ> 「あ。ごめん。二人で話ちゃって」

<ラビ> 「ううん。そうじゃなくて、電話とかしないの?」

<ヒデ> 「俺もそう思ってた。もっと遠距離って電話賃がかかるかと」

<カオル> 「俺、信用あるから」

<リオ> 「いや。そんなに無いけど……でも電話って相手の都合とか

わからないし、平日はカオルも忙しいしね」

<ラビ> 「そうなんだ」 私なんかこんなに近いのに毎日電話してるなあ」

<ヒデ> 「だよな。電話賃倍になってると思うな、来月」

どうやら二人は今のところかなり仲がいいようだった。

なんとなく画面を見て微笑ましくなった。

それから間もなく、時間も遅いのでみんなそれぞれ退室した。

PCの電源を落としてからカオルに

<明日も仕事頑張ってるね。おやすみ>とメールを送った。

<おう!まゆもな。あと、ちょっとは信用するように>と返信がきた。

そのメールを見てベットの途中でちよつと笑い、そのまま眠った。

忙しい毎日で、曜日の感覚が薄れていた。
この2週間、毎日残業ばかりで月曜からの出張の用意をなにひとつ
できないまま週末をむかえた。

金曜の帰りに健吾に

「月曜日は直接空港に行く？それとも俺の車で行く？」と聞かれた。

「できれば・・・そのまま土日はアッチに残りたいから自分の車で・

」

そう言うところ「あっそ」と軽い返事が返ってきた。

なんとなく気まずいまま会社を後にした。

(いつになったら、この気まずさは無くなるんだろう・・・)
そう思いながら家に帰り、出張の用意をした。

週末の休みはこの一週間の疲れをとろうと、死んだように眠った。
土曜日、ベットから出たのはお昼もとうに過ぎた3時頃だった。
それもインターホンがうるさいくらい鳴り、数回無視したが、
悪戯のように何度も押され、渋々起きた。

小窓から覗くと、健吾がいた。

「はい・・・どうしたの？」

メガネをかけ寝癖を手で押さえながらドアを開けた。

「信じられないな・・・まだ寝てたのかよ・・・」

Tシャツとルームパンツのあたしを見て、呆れた顔をして言った。

「だって・・・疲れてたんだもん・・・入る？」
まったく危機感が無いままに健吾を部屋に入れた。

ロールカーテンを下ろし、寝室で着替えリビングに出てくると、
健吾はコーヒーマーカーに水を入れ、珈琲をおとしてくれた。

「起きてから珈琲飲むまで、冬眠から覚めたカメみたいに動き悪い
もんな・・・」

そう言いながら、馴れた手つきで手早く珈琲を入れていた。

「で。どうしたの？」浴室の戸を開けたままで顔を洗い、健吾に聞
いた。

「お前・・・もつと女の子らしくすれよ・・・」

「え？なに？なんか言った？」タオルで顔を拭きながら浴室を出た。
健吾が浴室にある男性用の整髪料や髭剃りをチラツと見ながら、

「いや。なにしてるかな？て。近くまで来たからちよつと寄ってみ
た」

「なにしてるも・・・なにも。健吾が起こさなかつたらまだ寝てたよ
・・・」

そう言いながら珈琲をカップに入れ、砂糖の入れ物と冷蔵庫から牛
乳を

出して健吾の前に置いた。

あたしはブラックだけど健吾は死ぬほど甘いのを飲む。

2年経っても、その動きは忘れないで当たり前のように用意した自

分がちよつと驚いた。
健吾もそう感じたようだった。

「来週、仕事が終わったらあつちに残るのか？」

「うん。そのつもり。ちゃんと月曜には遅れないで戻るから」

「そっか・・・」

珈琲を飲む音以外になにもしない部屋の中が窮屈でリモコンのスイッチを押してCDを入れた。

流れてきた曲に聞覚えが無かった。

「スピッツなんて聞くんだった？」

そう言われて、その歌がスピッツの歌だと気がついた。

「うん・・・うん」

（これカオルのだ・・・忘れていったんだ・・・）

よくよく考えてみたらカオルの携帯の着信音はスピッツだったよう
な気がした。

なんの歌かは知らないけど・・・

「俺もこのCD持つてる。いいよな・・・これ」

「あ。うん・・・」

（ヤバい・・・まったくわかんない！題名だつてかなり怪しい・・・）

「この中に入っているくチエリー」>聴くと、お前をなんとなく想いだすよ」

「そうなんだ・・・」(チェリーてなんだ？さくらんぼ？)

「そうなんだ・・・て。もっと感動できない？あの歌詞からして？」

「えっ・・・そんなこと言われても・・・なんて言っていないのか困るじゃない」

「まあ、そうだな」そう言っつて健吾は笑った。

こっちはさっぱり笑えない。さくらんぼで想いだされても、なんのことやら・・・

CDケースから歌詞カードを出して<チェリー>を探してみた。

(わ！「君を忘れない」とか「愛してるの響きで強くなれる」とか書いてる！！)

どうよ？それ？あたしなんて言えばいいの？)

「まゆさ・・・」

歌詞カードを見て、動揺している所に突然名前を呼ばれビックリして健吾を見た。

「はい？」

「カオルって人のこと好き？」

「へ？」

「まだ別れる気は無いのかってこと」

「そうだなあ・・・まだ無いかなあ？」

「そっか。遠距離って辛い？」

「うーん・・・たまに辛い。でも仕方ないもん」

「そっか……」

そう言つて煙草に火をつけ、ゆっくりと煙を吐いた。

「なにか辛いことあったら俺に言えよ……」

彼氏には及ばないけど近くにいてるってことでは俺のほづが力になれるかもしれないし……」

「うん……でも今のところあまり辛いことも無いかな？仕事も楽しいし」

後は、うん。別に無い」

「そっか……」

タイミングが良いのか悪いのかくチェリーが流れた。なんとなくサビの部分だけはCMで流れていたのか、カオルの着信音なのか聞覚えがあった。

「健吾……」

「ん？」

「疲れてない？」

「疲れて無い訳ねーだろ？ここんとこの忙しさお前も知ってるじゃん」

「いや、そうだけど。仕事だけのことじゃなくて、その他のこと……」

昔からどことなく寂しかったりすると健吾は今日のような顔をした。それをなんとなく感じてそう言った。

「疲れてるっていうよりも誰かに甘えたい気分かな。なに？甘えさ

せてくれんの？」
そう言って笑った。

「いや。無理・・・ あたしそんなに器用じゃないし」

「そうだな。知ってる・・・」

「甘える気も無いくせに」

「まーそんなとこだな。じゃ、俺行くわ。明日の用意とかまだ途中だし、

買出しのついでだったんだ。じゃ、明日遅れるなよ。チケット俺が
持つてるから」

「うん。わかった。遅れないで行くよ。気をつけてね」

そう言って玄関先まで見送った。

手を振って帰る健吾の後姿はやっぱり疲れているような感じがした。

部屋に戻り、もう一度だけ<チェリー>をかけた。

(「愛してる」とは言ったことなかったなあ・・・ 「好き」と
は言ったけど・・・)

きつといますぐにでも健吾に「もう一度やり直そう」と言えば、す
ぐに健吾は

あたしのことを受け入れてくれるんだろうなと思った。

けど、カオルの存在が大きくて今はそんなこと考えられなかった。

「もう終わったことなのになあ・・・」

そう言って立ち上がり、まだ終わってない荷物の整理をした。

月曜の朝。

初めての出張とあって珍しく時間に余裕をもって空港に行った。

荷物は思ったより大きくなってしまい、また海外にでも行くようなトランクをゴロゴロと

ひきながらロビーに行った。

新聞を見ながら座っている健吾を見つけ、

「早いね。何時についたの？」と隣に座った。

「お前・・・どこ行くの？なにそのトランク？死体でも入ってるのかよ」

「なにもっていけばいいのか悩んでたら、こんなになっちゃった・・・」

「まあ、旅行じゃないから帰りは土産ってほどのモノも無いし、いいけどさあ・・・」

しばらくして時間になり、飛行機に搭乗した。

禁煙席にかなり不満顔の健吾だったが、飛び立ってすぐに寝てしまった。

フライトアテンダントが飲み物を持ってきても、健吾は起きる様子も無く、

あたしは珈琲を貰い、窓から外を見ていた。

羽田に着くと、メーカーの人が迎えに来てくれていた。

名刺を渡し、軽く挨拶をして車に乗り込んだ。

昼からの打ち合わせに時間はちょうどいいくらいで、ホテルに行くのはその後でということ、そのまま真っ直ぐ打ち合わせに行った。

夕方まで仕事伸び、ホテルに到着したのは5時すぎだった。

「もう今日はとくになにもないぞ？行くなら行ってきたら？」

エレベーターの中で健吾が言った。

「健吾、食事は？」

「あとから適当に食つよ」

そう言われたが、なんとなく健吾をそのまま独りにするのは気が引けた。

独りの食事はなにを食べても美味しくないから・・・

「じゃあ、ご飯食べてから行こうかな？まだ仕事終わってないと思うし。付き合つてよ！」

「そうなのか？じゃ、着替えてから行こうか。後から部屋に迎えに行くよ」

そう言って隣の部屋に消えていった。

部屋に入りカオルに電話をした。

「もしもし？今ホテルに着いたの。ちょっと食事してからでもいいかな？」

「うん。いいよ。俺まだ終わらないし。迎えに行く？何時ならいい？」

「うーんと・・・ 7時過ぎなら戻ってると思う」

「じゃあ、ホテルに行くよ。後からな」

ホテルの名前を教えて電話を切った。

ふと、こんな変な同情がかえって健吾に期待をさせるんじゃないかと思った。

気があるように思われても仕方ないことをしているような気分になったが、

さっきの健吾の顔を見て、

「じゃ。行くね」とはいえなかった。

荷物をトランクから出し、スーツをクローゼットにかけてから着替えた。

ドアをノックする音がして健吾が入ってきた。

「鍵、閉めたほうがいいよ。誰が入ってくるかわかんないし」

「あ。うん。わかった・・・ じゃ、行こうか？」

そう言っ二人で近くのレストランに入り、ご飯を食べた。

健吾は食事よりもアルコールばかりがすすみ、店を出る頃には結構酔っていた。

「大丈夫？明日お酒の臭い残ったりしたら格好悪いよ？」

「全然酔ってないって。それよりちゃんと帰ってこいよ？遅刻なんかされたら

それこそ格好悪いし、信用無くなるからな」

「うん。そんなに遅くならないよ」

そう言っただけで健吾の部屋の前で別れようとするよ、

「そんなに遅くならないなら行かなくてもいいじゃん」とドアにもたれながら言った。

「え？そうだけど・・・ ちょっと顔見てくるくらいいいじゃない」

「顔ねえ・・・ そんな訳無いじゃん。どーせ一発やるんだろ？」

その言い方にちょっとカチンときた。

けど、それ以上にも言わずに自分の部屋の鍵を開け中に入ろうとした。

「もう寝たら？じゃーね」

そう言っただけで自分の部屋のドアを閉めようとした時、健吾の手が邪魔をしてドアは閉まらなかった。

「ちょっと、手、離してよ！」

思い切り力を入れてドアを開けられ、健吾が部屋に入ってきた。

後ろ手に鍵を閉められ、そのカチツという音に背中がヒヤリとした。

「健吾、ちょっと待ってよ・・・ 酔ってるんでしょ？ね？」

「酔ってないって」

そう言っただけでちょっとフラフラした足取りで近づきそのまま抱きつかれた。

その腕をなんとか振り払おうとしたけど、健吾の力のほうが遥かに

強かった。

「ちょっ・ちょっと。離してっばー！」

なんとか離れようと必死でもがいたが、健吾は離してくれなかった。

「ヤダツ！これ以上そんなことされたら、もう一緒に仕事できない！」

その言葉を聞いて健吾の力が弱まり、パツと離れた。

「ごめん。俺やっぱ酔ってるわ・・・おやすみ」

そう言っつて部屋を出て行った。

心臓がものすごい速さでドキドキし、健吾の部屋の方の壁からドアが閉まった音がした。

その音を聞いた瞬間にヘナヘナとその場に座りこみ、呆然と今の出来事に驚いていた。

「ビツクリした・・・」

やや放心状態のままボクとしている所に突然携帯が鳴った。

「わっ！！！」

驚いて携帯を見ると、カオルからだった。

「もしもし・・・」

「あ、俺。いま下に着いたよ。部屋まで行く？」

「ううん！すぐ行く！ちょっと待ってて！」

さつき健吾に抱きしめられたこの場所にカオルには来てほしくなかった。

急いでバツクを持ち、部屋の鍵を閉めた。

健吾の部屋のドアを見つめ、そのまま走ってエレベーターに乗った。扉が閉まり、一人になり急に力が抜け力無くその場にしゃがみこんだ……

まだドキドキは止まなかった。

エレベーターが開くと扉の前にカオルがいた。

「わあ!!」

カオルの顔を見て、思わず驚き声が出た。

「なに?なんでそんなに驚くの?」

「あ。いや、別に。いいのに外で待つててくれれば」

「いや、どんな部屋かな?ってさ。ま、下りてきちゃったならいいか。いこ!」

そう言つてクルリと後ろを向き歩いていった。

車に乗り少し走ったあたりで

「どこか行く?もう飯食ったんだろ?俺まだだからどうしようかな」

とカオルは考えていた。

「ごめんね。カオルも食事まだだったんだね……一緒に来た人も

食事がまだで・・・そのまま一人にするの悪いかなあって・・・」

「いいよ！いいよ！俺はなんでもいいし。いつものことだから」

（カオルだつて一人だったのに・・・もしかしたら待ってたかもしれないのに・・・）

「じゃあ家行こうか？あたしなんか作るよ！」

「まじで？いいの？」

「うん！なんでもいいよ？何食べたい？」

「じゃ、買い物していこうか！」

家の近くのスーパーで買い物をして家に行った。

カオルがお風呂に入ったり、着替えたりしている間に簡単に料理を作った。

「じゃ、いただきますーす」そう言って食べるカオルの顔を黙って見ている。

「なに？」

「ううん。美味しそうに食べるな〜って」

「そう？あまり美味しくないけど？」

「そ、じゃあもう食べなくていいよ」

皿を引く張ると「嘘だつて」と言いながらニコニコして食べた。

食事を終え、

「何時に送ってあげればいい？もう帰る？」と聞くカオルに、

「なんだか帰りたくないな」と言っつてソファに座つた。

「ならばツくれちゃえば？かくまってやるよ」

フツツと力無く笑つと横に座り顔を覗き込んだ。

「仕事でなんかあつたのか？それとも会社の人と喧嘩した？」
そう言つて頭を撫でるカオルに寄りかかり黙つていた。

「週末まで逢えないかもしれないけどいい？」さすがに明日は出づらうと思つた。

「忙しいの？なら仕方無いんじゃない？」

「うん……ごめんね」

「気にすんなよ。遊びで来てる訳じゃないんだし」

そう言つて頭をポンポンと軽く叩いた。

「じゃ、もう帰ろつかな」そう言つて立ち上がると、

「え？もう帰るの？まだ10時前だよ？」と時計を見た。

「さつき」もう帰る？」つて聞いたじゃない？」

「いやそうだけど、本当に帰るとは思つてなかつたし……」

「今日は顔だけ見に来たの」そう言つてニッコリ笑つた。

なんとなくさつきの健吾の言葉が頭に残り、今日はそんな気分にはなれなかつた。

ホテルまで送ってもらい、

「じゃ、週末には行くから。またね」と車を降りた。

「うん。もし時間あったら連絡して、すぐ迎えに来るから。じゃ、またね」

そう言っただけでカオルは車を出した。

車が角を曲がって見えなくなるまで、その場に立って見送った。

エレベーターを下り、部屋の鍵を開けながら健吾の部屋のドアを見た。

静かな廊下に鍵を開ける音だけが響いた。

部屋に入り鍵を閉め、そのまま服を脱ぎ捨てシャワーを浴びた。

シャワーから出てベッドに座り、明日の朝にどんな顔をして健吾と顔を

合わせたらいいのか考えた。

早く週末がきてほしい……

そう考えながら、ベッドに潜った。

健吾とカオルが会った日

翌日、目を覚ましたのは目覚ましのアラームでは無く着信を知らせる音楽だった。

「もしもし……」

「あ。まだ寝てた？俺」

危なく「カオル？」と言う所だったが、声は健吾だった。

「うん……今なんじ？」目を瞑ったまま聞いた。

「6時ちよつと過ぎ」

「まだ早くない？でもまあいいや、これから寝たら起きれないし……」

そう言つてベットから体を起こした。

不意を突かれて起こされたので、今日話すのが気まずいと思つていたのに

すんなりと会話をすることができた。

「あのさ……俺昨日、自分で部屋に戻った？それとも連れてきてくれた？」

「え……それも覚えてないのおく嘘でしょ！じゃあ……あたしの部屋でのことも？」

さすがにそれは憶えているだろうと思つた。

「まゆの部屋？俺入ったの？」
開いた口が塞がらなかった・・・

「まあいいや・・・じゃあ7時半に迎えに行くね。じゃ、後で・・・」
「
そういつて電話を切った。

記憶が無いほど泥酔してるとは思えなかったけれど、本人が覚えていないなら

それは仕方が無いか・・・
もしも本当に憶えてないなら、それはそれで怖いとも思った。

(健吾と飲むのは・・・もうやめよう・・・)

時間になり部屋のドアをノックすると、
中からいつもと変わりの無い顔した健吾が顔を出した。

「もう用意できるから、入ってまってて」
「あ、、、いい！廊下で待ってるから！」

部屋の中に入るのは遠慮して外で待つことにした。
猿じゃあるまいし、あたしにだって学習能力くらいある。

朝食をとるのにレストランに行き、向かい合って食事をしながら、
チラチラと健吾の顔を見た。

「なに？」

「いや・・・本当に覚えてないのかなあ・・・て」

「なにを？」

「いや。いい・・・」

そう言つて珈琲を飲みながら視線を合わせないようにしてトーストを食べた。

「なんだよ？ハッキリ言えよ！朝から気分悪いなあ・・・」

「気分悪いのはこっちだよ！」

「だからなんだって言ってるじゃん！」

「昨日、人の部屋に入ってきていきなり抱きついたの！都合良く憶えてないようだけど！！」

ちよつと声のトーンが高かったのか、後ろのサラリーマンがチラリとこっちを見た。

「えっ！・・・」

周りの視線を気にしながらキョロキョロした後に、

「まじで・・・俺、そのあとになにかした？」

(こいつ・・・本当に覚えてないんだ・・・)

「無理矢理エツチされた・・・」

「えええー！」

いきなり立ち上がり健吾の珈琲がテーブルにこぼれた。

慌ててウェイトレスのお姉さんが「大丈夫ですか？」と走ってきた。

その慌てた顔を見ながら、涼しい顔をして自分の分の珈琲を飲んだ。明らかに動揺している健吾を尻目に珈琲のおかわりをしながら、

「でも、すぐごくよかった・・・」

小さくウインクをして言った。そして心の中で舌を出した。

「よかった・・・て・・・俺、本当に覚えてないんだってえ～

ええ～？」

情けない声を出し一生懸命思い出そうとしている姿を見て、笑いを我慢しながら「もう時間だよ？」と席を立った。

難しい顔をして横を歩く健吾の耳元で小さく

「今夜もしちゃう？」更に追い討ちをかけた。

そのくらいの意地悪でも足りないくらいだと思った。

「あの、まゆ、ごめん。俺、覚えてなくて、昨日は彼氏のとこ行かなかったの？」

「行っただよ？でもちゃんと戻ってきたでしょ？」

「ああ・・・その・・・彼氏にバレなかった？」

「なにが？」

「その、俺と・・・した後で・・・」

「ばーか。健吾とそんなことする訳ないでしょ」

そう種明かしてサッサとロビーに歩いていった。

「お前・・・その冗談はひどくないか？」

慌てたような安心したような顔をして早足で追いついてきた。

「でも。抱きつかれたのは本当！今度あんなことしたら酷いから！
そう言って真面目な顔をした。

「そうなんだ・・・ごめん。悪かった」

「次なにかしたら、今の冗談を本社にFAXするからね」

そう言って待っていたメーカーさんに挨拶をして、車に乗り込んだ。

その日も一日、打ち合わせや商品のチェックでとても忙しかった。

いつになく健吾の口数がちよつとだけ少なかったが、
それも反省してるんだと思い、特に気にしなかった。

夕方に、打ち合わせが終わり担当の人が車をまわしてくれている間に健吾が

「今日も行くんだろ？彼氏のところ？」と聞いてきた。

「いかないよ。週末までいかないかなって・・・」

「なんで？喧嘩でもしたの？」

「ううん。そんなことないよ」上手く説明ができなかった。

「俺に気がかってんの？」

「うーん。ちょっとつかってる。だって暇でしょ？健吾一人なら」

「そりゃそうだけど、でも彼氏だって一人だろ？」

「そうだよね・・・一人なんだよねえ・・・」

カオルが一人で食事をしている場面が頭に浮かんだ。

「呼べば？ホテルに？」

「壁にコップあてる気でしょ？イヤラシ〜」そう言って笑った。

「しねーよ！そんなこと！」バカじゃねーのという顔をして笑った。

「じゃあ！カオルも呼んで一緒にご飯食べようか？ならみんな一人じゃないし！」

「俺はいいよ・・・二人で食べば？」

「いいじゃん！カオルには元彼つて言っただけだし。」

結構気が合うと思うんだけどな〜 サッカー大好きだし」

サッカーの話で食いついてきたのか、チラリとこつちを見た。

「その人・・・どこファン？」

「さあ？そこまでは知らな〜い。本人に聞けば？」

「まあ、あつちがいいなら俺はいいけど。まゆの好きにすれば？」
そう言つて車に乗り込んだ。

車の中からカオルに電話をすると、仕事が終わつたら行くよ！と元気に電話切つた。

「来るつてさ。なに食べようか？」

「お前、普通・・・元彼に今の彼氏紹介するか？ありえねーよな」
「と」
呆れた顔をした。

「自分が良いつて言つたんじゃない？それにあつちは知らないんだから内緒ね！」

「はいはい。わかりました」

ホテルの部屋の前で健吾と別れ、カオルが着たら迎えに行くね！と伝え

自分の部屋で少し眠つた。

携帯の音で目を覚ますと、もう7時を過ぎていた。

「俺。いま下に着いたよ。部屋いったほうがいい？」

「うん。同僚の人にも伝えておくね」

化粧を軽く直してから健吾の部屋をノックした。
ちようどそこにカオルがエレベーターから出てきた。

「よっ！いいの？会社の人嫌がらないかな」

カオルが話かけてきた時、ドアが開き健吾が出てきた。

「あ。どうも、お誘いいただきちゃってすみません。矢吹と言いま
す」

笑顔で健吾に挨拶をするカオルに健吾も挨拶をした。

「あ、いや。こちらこそわざわざ来ていただいて、松永です」

「じゃ、行こうか！どこがいい？カオルどこか知ってる？」

そう言いながらエレベーターの前に行くと、健吾の顔を見ながら
カオルがポツリと呟いた。

「なんか似てますね。俺と・・・顔が・・・」

「うん・・・この前写真見て俺もそう思った」

「あ。やっぱり？なんだろう、もしかして親のどっちかが一緒とか
・・・」

「それは無いでしょ・・・それは・・・」

健吾が笑うとカオルも一緒になって笑っていた。
なんとなく二人は気が合うような感じがした。

居酒屋で食事がてらに飲むことになり、
最初から二人はペースをあげて飲んでいた。

サッカーの話で異常なくらい盛り上がり、こっちは話がサッパリわからず、
いい加減暇になってきた。

たまに違う話を振っても、すぐに話を戻されてまったく相手にしてくれないし……

「矢吹さん今日はホテルに泊まっちゃえば？会社近いんでしょ？」
健吾がいいだけ酔っ払いながら言っていた。

「えー。でも着替え無いからな。会社は近いですよ。歩いてきたし」

「じゃあ俺のYシャツとネクタイ貸すよ！まゆ、いまのうちどっかで下着買ってこいよ！」

調子に乗った健吾の言葉に内心（この野郎……）と思った。

「マジでいいんですか？ならそうしようかな。まゆいい？この先に店あるから。」

10時までやってるんだよ」

カオルまで調子に乗って言い出した。

そのまま無視して座っていきよいかと思っただが、どーせ暇だし言われたまま

デパートにカオルの下着を買いにいった。

（なんだよ……これ…… あたしだけのけ者じゃん……）

お店で下着とYシャツ、靴下にネクタイを買ってまた居酒屋に戻った。

遠目から見ても昔からの知り合いのように二人は盛り上がっていた。

「ただいま。無難なネクタイにしたけど、文句言わないでね」

「お疲れさん。悪かったな。さんきゅ」とカオルは膨れたあたしの頭を撫でて言った。

それを見て健吾が笑顔で、

「仲いいんですね。でも矢吹さんみたいな人でよかったですよ」と言いだした。

なにか変なことでも言い出すんじゃないかと心配だったが、健吾はそれ以上にも言わなかった。

「たしか、友達の紹介って言ってましたよね？どっちの友達ですか？」

健吾の言葉に慌ててカオルを見ると、こっちなんかまるつきり見ないでカオルは

「え？友達？違いますよ。チャットで知り合ったの。インターネット」
とスルリと言った。

「えええー！出会い系？」と健吾は驚いてあたしを見た。

「違いますよ。チャットとかしたことないですか？ネットはネットでも

出会い系じゃないですよ。今は普通でしょ？それって・・・」と

ジヨツキを飲み干した。

「そうなんだ・・・でも相手の顔知らないんでしょ？それでよく会ったな」

「もしもすつげえーの来たらどうしたの？」

「いやいや、会う前にちゃんとお互い確認してたし。それは問題無いですよ」

完全に酔っ払ってカオルが軽快に言った。

「へえ・・・人から聞いたことはあつたけど、まさか目の前の二人がねえ・・・」

「松永さんもしてみたら？最初は面白くてハマるよ」

結構女の子もいるし、オフ会とかったのも面白いし。どうよ？今度」

「ふん・・・なるほどねえ・・・」

そう言いながらこつちを見る健吾の視線が痛かった。

「でもまあ、お互い良かったならいいかもしれないな。俺はちょっと」

無理だけど・・・」

「俺だって最初はそう思ってやってましたよ。でも一年以上もほとんど毎日」

字で会つてるとだんだんと、打ち解けてきますよ。

損得無い関係なんて、今の普通の生活じゃそう無いでしょ？」

「まあ・・・そうかもねえ。相手の仕事とか年齢とか顔とかが・・・やっぱり見てから打ち解けるもんだしねえ・・・」

「そうそう。それが一切無くて、男か女かも無しですよ？」

別に気も使わなくていいし、慣れてしまえば居心地いいですよ。

顔も名前も知らない分、性格重視で話すから気が合うヤツとか探しやすいし。

合わなきゃ話さなくていいし。」

「そんなもんなんだあ・・・俺も帰ったらちよつとやってみようかな？」

否定的だった健吾もカオルの熱弁に心打たれたのか、そんなことを言い出した。

あの部屋に健吾は入ってくるのは勘弁と思ったが、なにも言えずに黙っていた。

その後、まだカオルの「俺のチャット論」は続き、健吾はそれを真剣に聞いていた。

横でちよつと飽きてきたあたしは、アイスクリームを食べながらなんとなくカオルの話聞いていた。

居酒屋を出て3人でホテルに向かい、あたしの部屋でまた二人はビールを飲みながら延々と語っていた。

「あの・・・お風呂入りただけど・・・」

二人の話の切れ目を狙ってそろそろ飲み会が終わらないかと言ってみたが、

「あ。どーぞ。覗かないからごゆっくり」と二人に言われ「あつそ」と

シャワールームに行った。

(なんだかなあ・・・) そう思いながらシャワーを浴び部屋に出ると、
まだ延々と話をしていて、あたしが出たことにも気がついてない様子だった。

しばらく二人の話を聞いていたが、だんだんと眠くなり椅子に座ったまま

ウトウトしていた。

部屋が静かになったのを感じたのは夜中の2時過ぎだった。

二人掛けのソファァーに目をやるとそこに二人の姿は無く、慌てて部屋を見渡すとベットに二人とも倒れるように眠っていた。

二人ともスーツのまま眠っているのを見て、健吾は替えのスーツがあるとして、カオルは無いのを思い出し、仕方無くベルトを外してなんとかパンツを引っ張り脱がせ、それをハンガーにかけてから、テーブルにあった健吾の鍵を持って隣の部屋に行った。

(カオルを健吾に取られちゃったな・・・)

ベットに入るとすぐに眠気が襲ってきて知らない間に眠っていた。

6時半に目覚ましで起きて、隣の部屋に行ってみると、まだ二人は気持ち良さそうに眠っていた。
ルームサービスで簡単な朝食を頼み、顔を洗って化粧をした。

音に目が覚めたのか、しばらくするとモゾモゾと二人とも起きだし、一つのベットに
眠っていたことに気まずい顔をしていた。

パンツが脱げているのに気がついたカオルが驚いて健吾を見た。

「いや、なにもしてない！本当に！」と言う健吾を見て、呆れた顔をして、「シワになるからあたしが脱がせたの！」と言うとホッとした顔をした。

朝食をとり、支度をするのに健吾が部屋に戻っていった。

「昨日どこで寝たの？」ネクタイを締めながらカオルが聞いてきた。

「隣の部屋。寝れる訳無いじゃない・・・さすがにそこには」

「だよなあ・・・」と言って笑った。

着替えをすませ、TVの時計を見ながら

「そろそろ行くね。また時間あったら電話して」と額にキスをしてカオルが部屋を出た。

健吾の部屋の前でノックをして中を覗きながら、

「じゃ、行きますねー また飲みましようね」と挨拶していた。

「今日はそちらの家に行かせますから。仕事終わったら迎えに来てください」

「あ。わかりました。じゃ、また夜にでも・・・」

カオルをロビーまで送り部屋に戻った。

まだ時間があったのでTVを見て時間を潰し、健吾が迎えにきて部屋を出た。

「ちょっと出会いはビックリしたけど、いいヤツじゃん。」
そう言いながらエレベーターに乗った。

「出会い系じゃないからね。言っておくけど！」

「違いがあんまり分らないけど、、、まあ一応そーゆーことにしようよ」

そうニヤつきながら健吾が言った。

なんとなく弱みを掴まれた気分のまま仕事に向った。

立場は昨日とは逆転した一日だった……

その日の夜、カオルに迎えにきてもらいカオルの家に行った。

ホテルを出る時、ロビーまで健吾が下りてきて

「じゃ、明日の朝までに帰してくれれば問題無いですから
そう言っって見送られた。

「いい人じゃん。あの人。また一緒に飲むチャンスあるよな？」

そんな時は教えてよ。フラムとアーセナルの話できる人ってそういないしな」

カオルは健吾が気に入ったようだった。

「うん。そう伝えておくね。本当は今日もあたしじゃなくて、健吾と一緒に
食事したかったんじゃない？」

「あー。食事してからでもよかったかー！残念！」

「じゃあ戻る？たぶん暇だと思っよ？」
なんとなくつまらない顔をして言った。

「嘘だよ。昨日つまらなかつたら？ふくれてたもんなあ」

「そんなことないよ。でも男同士でも盛り上がったのに、
邪魔しちゃ悪いかなってさ」

「そんなとこ良い子だって松永さん言ってたよ。」

「アイツはちゃんと彼氏のこと考えて絶対彼氏の顔潰すことしない
子だ」

「ってさ。褒めてたよ」

「ふーん。そうなんだ・・・」

「まゆさ・・・あの人と付き合ってたろ？」

いきなり言われてビックリしてカオルの顔を見た。

そんなに早い動きをした時点でもうバレバレだと思った。

「やっぱなく、あの人のまゆに対しての言い方でそう思ったし、

なんとたつて俺達似てるもんな、顔が・・・」

そう言っただけで笑った。

「いや、顔は関係無い。あー・・・ やっぱり会わないほうがよか
った？」

「いや。嬉しかったよ。昔の彼氏に紹介してくれるってことは
もう関係無いってことだろ？」

なんとなくあの人が、まだまゆのこと好きっぽいけど。

少なくともまゆはなんとも思っていないって思ったし。
俺に嘘つきの嫌だったんでしょ？元彼と仕事してるって」

「うーん・・・ そんな訳じゃないんだけど・・・」

もつと嫌な顔をされると思った。

けど、それを知っても健吾と仲良くしてくれるカオルがちょっと大人に感じた。

「彼が2年付き合った人？」

「もういいじゃない。元彼の話なんか」

これ以上聞かれると、なにかしらボロが出そうで話を切った。

「話したくないなら聞かないけど・・・」

隠すとまだ好きなのかなって誤解しちゃうかもな俺

そう言っつてこつちをチラツと見て笑った。

「・・・ そう。あの人を2年間付き合った人。あとは？なにか聞きたい？」

聞き直っつてそう言った。

「後かぁ・・・ そうだなあ。なんで別れたの？」

「んー。それはあたしも謎なところがあるんだけど、たぶんあつちが仕事忙しくて、

それでなんとなく連絡とらなくなったからかなあ？転職しちゃったしね」

「じゃあまゆはまだ好きだったんだ？彼が連絡してくれたら付き合ってた？」

「どうかなあ・・・ わかんないな。そればかりは」

「そっか。まあ、終わったことだもんな。考えてもわかんないよな。そう言っただけで黙って運転をした。」

「明日の朝帰る？それとも夜中にする？」冷蔵庫にビールを入れながらカオルが聞いた。

「カオルのいいほうでいいよ。仕事に間に合えば問題無いし」

「そっか。じゃあ明日一緒に出ようか？」そう言っただけでビールを開けて飲んだ。

「うん。わかった」

「たまにはゆっくりしていきなよ」

「うん。そうしようかな・・・」

「二階でゆっくり話でもしようか？疲れてるだろ？」

そう言っただけでビールを片手に二階にあがっていった。

二階にあがりベツトに座りながら、仕事の話をしていると、

「で。続きなんだけどさ……」「ビールの缶をベツトの下に置いてカオルが聞いてきた。

「あいつ上手だった？」

「え？なにが？」

「俺より上手だった？」そう言つてキスをしてきた。

「もう忘れちゃったよ……そんなこと」

「本当にいゝ？ちよつとは憶えてんじゃないの？」そう言つて笑つた……

ように見えたけど目が笑つてなかった。

「目……ちよつと怖いんだけど……やっぱ知らないほうがよかつた？」

「いや。それはいいけど。なんか頭くる……」「そう言つて胸に顔を埋めて言った。

「あたしのこの前の怒つた気持ち少しはわかる？」

「すっごいわかる……悔しいけどどーにもならない感じが……」

そのまま黙つて胸に顔を埋めるカオルの頭を撫でていた。健吾との2年間は後悔はしていない。

それなりに嫌なこともあったけれど、楽しかったことも沢山あったし。

「カオルは・・・あたしが誰とも付き合わない綺麗な体で出会ったほうがよかった？」

「そんなことないよ・・・いろんな経験したから今のまゆがいると思ってる」

「ありがと・・・あたしもカオルのことそう思ってる。ちょっといままでの彼女にヤキモチ妬くこともあるけど、でも今一緒にいれるのは自分だけだと思ってる」

「ん・・・たぶんあの人と付き合っていた時よりもまゆの体は変わってると思うし。」

「それもすっごくイヤらしく・・・」

撫でていた頭をグーで思い切り叩いた。

「もう！せっかくいいこと言ってるのに！なんでそうなの？」

「だって本当のことじゃん？次会った時にその話でもしようかな？」
そう言っただけで胸に顔を埋め笑った。

「そんなこと言えないくせに」そう言って二人で笑った。

「きつと今頃、松永さん眠れてないよな・・・」
カオルが静かに言った。

「どうして？」

「好きな女が違う男に抱かれてると思ったたら眠れる訳ないじゃん」

「そんなことないよ。だって今朝、迎えにこいって言ったの健吾じゃない」

「そう言わないと格好つかないだろ？」

少しだけ健吾のことを考えた。

でも今頃そんなこと言われても、どうすることもできない。

「そんなこと無いと思うけどなあ・・・」

カオルは顔を埋めたまま、

「どつちでもいいよ。なんとなく俺はそう感じただけ。今日はこのまま寝ていい？」

そう言って目を瞑った。

子供のように眠るカオルを愛しく思いながら一緒に目を瞑った。

金曜の朝、健吾は空港に向う為に荷物を準備していた。

あたしは月曜の時点でチケットの日にちを変更していたので、荷造りを手伝いながら、戻ってからの仕事の打ち合わせをした。

「いつ戻る？」

「たぶん日曜の夕方かな？戻ったら連絡するね」

「あー。そうだな、今日一度会社に行くから、なにかあったら俺が

ら連絡するよ」

「うん。わかった」

「ま、精々仲良くしてくれよ。後、またこっちに出張の時、矢吹さんさえよかったら、また飲もうって伝えて。バレないようにするからさ」

そう言っつてトランクを閉めた。

「もうバレてたよ・・・この前家に行った時言われたもん・・・」

「嘘！なんで？俺なにも言っつてないよ？」

「健吾の口ぶりですごう思っつたつてさ」

「そうなんだ・・・怒っつてたりした？」

「ううん。ちょっとへこんでたけど、大丈夫みたい。あたしも気が楽になっつたし」

「そっか。まあ、俺もどんなヤツと付き合っつてるのかなって思っつたし、

会えてよかつたよ。じゃ、行くかな！」

一緒にチェックアウトをして、健吾は空港に向つた。

あたしはタクシーでカオルの家に行き、合鍵で部屋に入りカオルが帰るのを待つた。

時間はまだ昼を過ぎたばかりだった。

洗濯や掃除を終え、夕飯を作りカオルの帰っつてくるまで少し眠つた。

7時すぎに帰ったカオルと一緒に食事をして、ゆったりと二人の時間を楽しんだ。

「そっぴゃさ。俺、今週一回も部屋に顔だしてないなあ・・・」
そう言われて、自分も2週間近くチャット部屋を放りっぱなしにしていたことを思い出した。

電源を入れているカオルの隣に座りながら久しぶりの画面を見ると、いつものメンバーがいた。

そして見たことも無いお初の姿も・・・

「まゆ・・・これ・・・松永さんじゃ・・・」

そう言われて見たメンバーの中に

「k e n g o」という名前があった。

「嘘・・・でしょ？・・・俺にはありえない」とか言ってたよ
「？」

みんなが挨拶をする中、二人でケンゴという文字に釘づけになった。

<ラビ> 「まゆいるんでしょ？>カオル」

<カオル> 「ああ。いるよ。あさって帰るけどな」

<ラビ> 「まゆの会社の健吾さんだってk e n g oって>まゆ」

「わあ！！やっぱりそうじゃん！まゆ、松永さんだ！これ！」

「カオル部屋の名前言ったの？」

「ああ・・・だって聞かれたし、けど酔ってるから忘れてると思ってた・・・」

「なんで言うかなあ」 もっ！！

「だって、、まさか本当に来るとはなあ」 でもまあいいじゃん！」

なにがいいんだか・・・

そう思いながら画面を見ていた。

みんな初めてということと、あたしの会社の人だということ、健吾を中心にワイワイと楽しく話しが進んでいた。

カオルも一緒になりながらこの前のサッカー話の続きをして楽しんでいた。

なんとなく複雑な気持ちのままそれを見ていた。

ラビやサクラはこの前会ったこともあり、向田さんの話にまでなっていた。

<ケンゴ> 「昔から向田さんのこと好きだったんだよ、まゆ>ラビ・サクラ」

<ラビ> 「あゝなんかわかるうゝ まゆ、すごい緊張してたもん」

<サクラ> 「そうそう。いつもと違ったよね。すごい見えたし(笑)」

<ケンゴ> 「でしょ？会社でもそうだよ。向田さんには優しいの」

「……………向田って誰？」

画面の文字を見てカオルがこっちを見ないでいった。

「あ……会社の先輩。ただそれだけ。本当にそれだけ！」

「へえ……………」

「ちょっと、替わって！」そう言ってキーボードを奪うように場所を変わった。

<カオル> 「ちょっとそんなこと言わなくていいよ！ぼっかじゃないの！ケンゴー！」

<ケンゴ> 「ほらな？俺にはこうだから、まいるよな」

打てば打つほど立場が悪くなるような気がした。

「ちよつと…………名前そのままだと俺が言ったみたいじゃん」

「あ……でも、あたしだってわかったみたい……………」

「まあ、いきなり「ばつかじやない」は誰かってわかるよな、確かに」

そう言って笑いを押し殺していた。

「もう……いや……どーぞ」

そう言っておとなく席を譲った。

その後もみんなは遅くまで楽しく話をしていた。

あたしは画面を見ないで、TVを見ていた。

これ以上見ると、なんだかもっと悪いものを見てしまいそうだった。

時折カオルは声を出して笑うほど、夢中になりながらチャットを楽しんでいた。

結構な時間が経ち、そろそろ眠くなってきた頃……

「ねえ……今って誰残ってるの？」

「うーん……聞かないほうがいいかも……」

慌てて画面を見ようとすると、画面の前に立ちはだかって

「いや。見ないほうがいい！大丈夫！まゆのことは言ってないから！」

と画面を見せないように体で隠した。

「いいから！見せてよ！」そう言ってカオルを退けようとしても、「ダメ！ダメ！」とその場から動かなかった。

体の隙間からチラリと画面を見ると、ヤスとヒデとケンゴがいた。並んだ文字には延々と下ネタで埋まっていた。

「もう見ちゃったよ・・・隙間から・・・」

「でもさすがに松永さんいるからまゆのことは言っていないってば」

「ふうん・・・じゃあ誰の話？」

「それは、、、ちよつと、、、」

口ごもるカオルを座らせ、膝の上に座って過去ログを上に戻し見ると、

話の内容はどうやらラビのことだった。

「あんだ達・・・最低だね・・・」

「でも松永さん、すっかり打ち解けてるよ？超楽しんでる」

「ん・・・そうらしいね」

「これってさ・・・いつか健吾が元彼ってみんなにバレちゃうんじゃない？」

さすがにそれはちよつと勘弁だと思った。

昔のことをカオルに知られるのはちよつとな・・・と思った。

「んー。でもいいじゃん？俺がいいなら問題無いんじゃない？」

「全然問題あるから！！嫌だよ、そんなことバレたら健吾も調子に乗って

いろいろ言っじゃない？」

「なに？言われたら困ることあんの？」

「なにつて・・・こんな下ネタの中で、昔のことバラされるのって嫌だよ」

「ああ、そーゆーことね。それは無いんじゃない？俺がバラすこととはあっても？」

「それもどうなんだよ・・・」

「まあまあ。大丈夫だつて。自分からそんなこと言わないって、そう気軽に言っつて、また画面に向つていた。」

「あたしもう寝ようつと・・・じゃーね」

「俺も、もうちょっとしたら寝るから、おやすみ」

階段をあがる途中でカオルは、

「松永さんが、向田さんて人と二人で出かけたらすぐ教えてくれるつて〜」

とあたしに向つて言っていた。

その声にも何も答えずに布団の中に入った。

（くっそ・・・変なスパイが仲間になっちゃった・・・一度くらい向田さんと

食事くらい行きたかったのに・・・）

そう思いながら、眠った。

大人の男との二人だけの秘密

仕事に行こうと外に出ると、冷たい風にマフラーをグツと掴み車に乗りこんだ。

車の時計についているカレンダーは12月12日になっていた。

「もうすぐ今年も終わりなんだぁ・・・」

そう思いながら、ヒーターが暖まるのを待っていた。

ここ数日、朝から健吾の車で何時間もかけ日帰り出張に行つては、次の日は会社に缶詰、また次の日は日帰り出張・・・そんな日々が続いていた。

おかげで家に帰るとなにもする気になれずに、お風呂に入るのがやっとだった。

知らない間に体重が3キロも落ちていた。

目の下のクマも、そう簡単には取れなくなっていた。

「おはよぉ・・・」朝とは思えないほど疲れきった顔でデスクに座った。

「お前・・・大丈夫か？顔色悪いぞ」覗き込むように健吾に言われた。

「う？・・・うん。なんとか生きてる・・・今日を乗り切れば連休だしね、

でも来週は初めての長期出張か・・・生きて帰れるかなあ・・・

」

自然と口から弱音が出た。

「まあ、馴れだな。たぶんあと3ヶ月もすれば馴れるよ。俺なんかへっちゃらだも。」

おまけに毎晩、遅くまでチャットしてるのにこの元気！見習えよ！
そう言っつて涼しい顔をして鼻歌を歌っていた。

健吾はすっかりチャットにはまり、あの日以来かなりの出現率らしい。

あたしは馴れない仕事での疲れと、やはりいつも一緒にいる人がいるチャットに今ひとつ乗り気になれずに、カオルの部屋以降は一度も顔を出していなかった。

「お前もうちャットしないの？みんな「来ないね」って言っつたぞ？」

「ちよつと、会社でそんな話しないでよ！健吾も言わないでよ？他の人に！」

「そんなに隠さなくてもいいじゃん。別に」

「言っつこと随分と違うね？あの時と……」

ジト〜とした顔で見た。

「いや、カオルの言っつたこと分かつたわ。面白いつてアレ」

いつの間にか自然と「矢吹さん」から「カオル」になっているのを聞いて、

かなりハマっているんだと感じた。

「カオルも結構いるの？」

「そうだな。毎日じゃないけど結構いるな。あいつ面白いな、車とサッカーの話じゃかなり語るけど」

「そうなんだ・・・」

話を半分くらい耳に流しながら仕事をした。今日中になんとか終わらせないと、明日の休みも潰れてしまいそうな量に内心焦りながら仕事を進めた。

「で、お前正月カオルの実家に挨拶に行くんだって？」

「・・・うん・・・」

「それってもう決まりってことなんじゃないの？」

「・・・うん・・・」

「人の話聞ってる？」

「・・・うん・・・」

「あ！向田さんが呼んでるぞ！」

パツと顔をあげ向田さんのデスクを見ると、ただ頭だけが見えていた。

「嘘つかないですよ。もう！」とまた書類に目を戻すと、

「聞こえてんだ・・・向田さんの名前だけは反応良いのな」
そう言っただけで自分も仕事を始めた。

その日、健吾は外出先からそのまま直帰することになり会社を出る時に

「じゃ、月曜は遅れないで空港に8時半な！今回は長いから荷物ちやんとチェックすれよ？途中で休みとか無いからな」

そう言っただけに出張に必要な書類を山のように抱えて会社を後にした。

夜の10時をまわった頃、やっと仕事が終わった。

(ふう〜・・・ これで心おきなく出張に行ける・・・)

帰る支度をして出来上がった書類を商品2課のデスクに置き、エレベーターに乗ろうとした。

「あれ？まゆちゃん今終わったの？俺も今帰るところ」

声のするほうを見ると向田さんがいた。

「あ・・・ そうだったんですか？誰かまだいるとは思ってましたけど、

書類の山で見えなかったんで・・・」

いつも帰りが遅い向田さんと一緒になることは一度も無かったので、たまには遅くまでの残業もいいもんだなと思った。

一緒にエレベーターに乗り、ボタンを1Fに押した。

「月曜から一緒に出張だね。あつちでは毎日同じ現場だから、一緒にご飯とか行こうね」

「はい。よろしく願います」笑顔で返事をした。

前に立つ向田さんの背中を見ながら少しだけ緊張して下を向いていた。

やっぱり二人きりになると何を話していいのか分からず、

（早く着かないかな）と自分の足元を見ていた。

あまりに憧れが強すぎて、嬉しいけれど心臓がバクバクしていた。すぐ目の前から向田さんの香水の匂いがフワツ・・・とするだけでクラクラしそうだった。

「まゆちゃんご飯食べた？」

「いえ？これから帰って適当になにか食べます。

めんどろだからカップ麺とかかな？

なんかこう毎日遅いと食欲もどーでもよくなりますよね」

「じゃあ、これからちよつと飯食いにいこうか？オゴるよ。近くに美味しい

焼き肉屋あるんだけど一人じゃ行きにくいし、一緒に行ってくれない？」

（わ！向田さんに誘われた！）

「あ・・・はいっ！いいですよ」なんの迷いもなく口から出た。

「じゃ、車どうしようかなあ」まゆちゃんも飲むでしょ？」

「いえ、、、あたしは飲まないです。帰り送りますよ？」

「ちょっとだけ付き合っつてよ。一人で飲むのもマヌケだし。じゃ、車置いていこうか」

そう言っつて素早く走っつてきた空車を停めた。

(まあいいか・・・明日車は取りにくれば・・・)

タクシーに乗り、向田さんがいっつた焼き肉屋に到着した。席に座ると馴れた感じで注文をしビールが2杯運ばれてきた。

「じゃ、まず乾杯!」そう言っつてジョッキを合わせた。

「あー!ウマっ!仕事の後はやっつぱビールだね」一口飲んでニッコリと笑つた。

思わず笑顔に見とれてた。やっぱり5年間も憧れ続けただけはある。

あまりに見すぎて(ん?)という顔をされ、

「あ・・・はい!そうですね」と慌てて一口飲んだが、苦くて美味しいとはとっつてい思えなかつた。

「まゆちゃんお酒飲めないの?」

「あ・・・はい・・・普段は飲まないですね」

「お酒嫌いなんだ?飲むと暴れるとか?」

「いえ!そんなこと無いです!ただ・・・ちょっと眠くなるっつていっつか・・・」

「そうなんだ?じゃあもつと飲ませて今日は担いで帰ろっつかな」

そう言っつて笑いながら美味しそっつにビールを飲んだ。

そんな冗談一つにもかなり緊張した。

(担いで帰るって……こっちがお願いしたいくらいだ……)
肉を焼きながら「これ、もういいよ」と皿に入れてくれる度に、
口をつけた箸で取り分けてくれた肉を見て

(わー！間接キスだあー！)と頭の中で絶叫をしながら顔に出さず
に食べた。

あまりの緊張に肉の味はほとんどわからなかった。

半分以上なにを話したか緊張しすぎて分らないまま、店を出た。
頑張つてジヨツキを半分くらいまで飲んだせいもあったけど……

「せっかくだからもう一件いつてみる？カクテルの美味しいところあるんだ。

それなら飲めるんじゃない？」

「あ……はい」

「じゃ、行こうか？」フワフワした足取りで後ろから着いていった。

(こんなこと、、人生に二度は無い！)

こんな所があつたんだ？というような地下の一番奥にその店はあつた。

中に入ると静かなジャズが流れていて、客層もちよつと落ち着いた感じだった。

「素敵な店ですね。いつも来るんですか？」

暗い照明の中、そう聞くと

「まーね。もう、うるさい所じゃ飲めないよ。俺くらいのオジさんだと」

そう言って笑った目じりに細いシワが浮かんだ。けれど、そのシワがかえって素敵に見えた。

「全然オジさんなんかじゃないですよ。向田さん30歳過ぎてどンドン素敵になってるな」って思っていましたよ?」

「そう?上手いこと言うね。陰で必死になってやっってる若作りも無駄じゃないってことかな」そう言って笑った。

「男は30歳からって言うじゃないですか?あたしアレは本当だなって思いますよ。」

20代じゃ無理なこともスマートにできるし、落ち着いた感じとか自然と滲みでる
っていうか、見ても素敵だな」って」

「20代の子がみんなそう思ってくれと、俺もちょっとはモテるのよね?」

「十分モテてますよー!あたしの周りの子だってみんな素敵って言うてますよ?」

向田さんが知らないだけですってば」

実際、向田さんのことを「素敵」という子が多いのは本当だった。けれど、あまり一緒に仕事をすることも無い他の部署からでは声をかけることもできないし、ましてや商品課は忙しいから

会社の飲み会にも顔を出さないことは、いつものことだった。そんな感じだから向井さんとの接点なんか、どこにも無かったし、いつもクールな印象があり、冗談のひとつも言えないオーラがあった。

「俺さ、いつも会社で寿退社する子に「好きでした」って言われるんだよなあ・・・」

「でした」じゃもう遅いのにな。それも寿に言われても仕方無いよねえ。

学生の卒業式じゃないんだから、もつと先に言ってくれないとまあ送別会の席だから、あっちも気を使ってるのかな？いつまでも結婚しない俺に」

「それは向田さんが高嶺の花だってみんな知ってるからですよ。あたしだって向田さんのことずっと好きでしたもん」

思わず話の流れに口が滑ってしまった。

それも「でした」になってるし・・・

「えー そうだったの？全然知らなかったよ。てゆうか「でした」なんだね。

「やっぱりまゆちゃんも」とケラケラと笑った。

「あ・・・すいません」

「まあいいさ。それも縁だからね。俺って鈍感なのかなあ・・・」

そう言っただけで考えていた。

その横顔を見て、やっぱりこの人って格好いいな〜と思った。

「で。その後どうなの？彼氏は」

「え？まあ・・・そのまま普通に・・・特に問題無いですよ？」
「この前の東京ではちゃんと会えた？マツに意地悪されなかった？」

「えっ・・・ええ。大丈夫でした。でもあつちのメーカーさんも忙しくて、

一緒に食事したのは最終日くらいだったんで、健吾が一人で寂しいかと

思っただけ、彼氏も一緒に食事しましたよ。結構気があつたみたいで、

今じゃ仲いいみたいです」

「うっそ！逢わせただけ？結構すごいことするね」 まゆちゃんて
そう言っただけ驚いたような顔でこっちを見た。

「え？そうですか？だってどっちも独りぼっちで食事ってなんだか
可哀相な気がして」

「どっちにもキツイんじゃない？それって」

「そうですかねえ？でも最初は健吾に内緒にしてって言ったんですよ。元彼だつてこと。

でもなんとなく口調でわかったつて言っていました。彼が・・・
あたし的にはもう嘘つかなくていいから、気楽にはなつたんですけどね」

「あら・・・バレちゃったんだ？彼氏落ち込んでなかった？」

「ええ。当日はちょっと・・・ね。でも、もう大丈夫みたいですけど・・・」

そう言っただけ、向田さんの顔を見てそうじゃないのかな？と少しだけ心配になった。

「男は独占欲は強いから・・・その後彼氏変わった？」
「いえ？別に特別変わったような気はしませんけど・・・」
「そうなんだ。デキた男だねその彼氏」

その後、向田さんの話が面白くて二人で笑いながらいつまでも静かな店で話をしていた。

勧めてくれたカクテルがあまりお酒臭くないので、知らない間に3杯飲んでいった。

「結構飲めるじゃない。カクテルって結構お酒強いのに」

「そうなんですか？あまりお酒の味しないからジュースみたいに飲めちゃいますね。さっきのもう一杯頼もうかなあ」

そう言っつてメニューを見ながら探していた。

「立ったら歩けなかつたりしてね？」

笑って（これだよ）と指でメニューを指し教えてくれた。

「でもこっちのほうが美味しいかもよ？ちょっとキツイかなあ？」

「じゃあそれでいいです」

なんとなく酔っていたのか、なんでも飲めるような気がしてそれを頼んだ。

目の前に頼んだカクテルがきた。

見たこともないほど綺麗な赤のカクテルに

「わー綺麗ですね」と言い、一気にゴクツと飲んだ。

喉が焼けるように熱く、いままで飲んだのとは比べ物にならないく

らい

強いんだと初めて知った。ゴホゴホと咳をしてグラスを置いた。

「あ…… やっぱり強かった？ウオツカベースだから……
あゝあ……」

「だ……大丈夫です……」マスターがすぐに水をくれ、それを半分ほど飲んだ。

一瞬、目の前がクラツとした。

けれど、味に馴れると、そのカクテルはとても美味しかった。

「もうやめたら？」と言われたが、結局そのまま全部飲んでしまった。

「そろそろ帰ろうか？こんなとこ彼氏に見つかったら怒られちゃうな」

そう言っただけで向田さんが立ち上がり、一緒に立った……
つもりだったが、うまく立てなかった。

「あゝあ。やっぱり…… 大丈夫？歩けない？」

「あ……いや、大丈夫です」

そう言ったが、足に力が入らずフラフラしていた。

向田さんはヒョイと腕を肩にまわし、支えてくれた。

腰にまわした手の暖かさが妙に生々しく感じた。

時間が何時なのかサッパリわからなかったが、

どう見ても走っている車の数からして、かなり遅いことだけは確かだと思った。

タクシーがくる間、向田さんの首に腕を回し抱きつくような格好で風にあたりながら立っていた。内心こんなチャンスはもう二度とないだろうと思っていた。

空車のタクシーを止め乗り込み、頭ではちゃんとしているつもりでも、体がいうことをきいていなかった。

向田さんが運転手に住所を言っているのを薄っすら聞いたのを最後に記憶が無くなった……

次の日、目を覚ました時、あまりの頭の痛さに「うっ……」と唸りまた枕に頭を落とした。

目もなかなか開かないまま、なんとなく部屋の空気がいつもと違うことに肌で感じた。

肌……？

目を瞑ったまま、恐る恐る体を触るとちゃんと服は着ていた。ただいつもの自分のシートとは違い、ツルツルした感じがシルクだとすぐわかった。

ガバッと起き上がると、頭が割れるように痛かった。

「痛あゝ……………」

「あ。目……覚めた？おはよう」

その声に驚き隣を見ると……

向田さんがこつちを見ながらすぐ横に寝ていた。

しばらく状況が掴めないまま黙って向田さんを見ていた。

「あの…………… あたし……………なんでここにいるんでしょうねえ……………」

底抜けに弱々しい声で聞いた。

「なんででしょうねえ？」

そう言っただけで向田さんが笑った。

一生懸命思い出そうと考えると、なんとかタクシーに乗った所まではギリギリ思い出した。

けど、その後はなにも憶えていなかった。

「タクシー……………までは……………なんとか……………」

向田さんはいつものニコニコした顔で、

「その後ね、いくら起こしても起きないから、さすがにまゆちゃん家の
3Fまでは連れていくことできないと思って俺の家に来たの。」

俺があと10歳若かったら、きつといまごろ服は着てないと思うよ？

かなり迷ったけど、無抵抗の子になにかするのもなくってさ」

「あ……ありがとうございます……」

「今日のことは内緒にしてあげるから心配しないで。彼氏にバレたら絶対なにもなかったとは信じてもらえないでしょ？
これ以上落ち込ませたら可哀相だもんね」

そう言っつてベットを抜けだしどこかに歩いていった。

ちよつと安心した。

相手が向田さんでよかったと心底思った。

珈琲の入ったカップを持って向田さんが歩いてきた。

「じゃ、あまり意味の無いモーニング珈琲どうぞ」

「重ね重ねすいません……」

カップを受け取り頭を下げた。

なにも言っつていないのに、砂糖もミルクも入っていないブラックだった。

「きつと無抵抗でもまゆちゃんに彼氏がいなかったら、なにかあったと思うけど、」

俺、平和主義だから」

そう言っつて笑う向田さんがとても大人に見えた。

洗面所で顔を洗い、簡単に身支度をして玄関に行った。

「あの、本当にすみませんでした」そういつてもう一度頭を下げると、

「いいの！いいの！」と向田さんは玄関まで見送ってくれた。

靴を履きドアを開けようとした時、

「まゆちゃん。これは二人だけの秘密ってことで・・・」

「あ。はい・・・わかりました」

（二人だけの秘密）そう言われて、向田さんとの間に二人だけの隠し事が

できたことに少しだけ嬉しくなった。

「じゃあこれ口止め料と宿泊代ね」

そう言っただけで静かに顔を近づけてキスをした。

本当はものすごく驚いたが、憧れの向田さんのキスを断ることはしなかった。

いままでできっと一番、素敵なキスだと思った。

このまま唇が離れてしまうことがなければいいのにと思っほど・・・ほんの少しの間のキスなのに体が痺れ、

自然と手が背中にまわり、ゆっくりと入ってきた舌に自然と自分の舌を絡めていた。

その間、一度もカオルのことは頭に浮かばなかった・・・

唇が離れ、ゆっくりと目を開けると

「そんな顔されちゃ、また部屋に連れていっちゃうよ?」

笑う向田さんに慌てて背中に回した手をはなした。

「じゃ、じゃあ、行きます」

「うん。じゃ、また月曜日に」

そう言ってドアを閉めて向田さんの家を後にした。
いつまでも唇に向田さんの感触が残っていた。

月曜日。

向田さんに会うのをちょっとドキドキしながら空港に行った。

この前と同じ場所に健吾がいて、その隣に向田さんがいた。

一瞬、体中に汗が出たような感じがした。

「お。今日も死体が入ったようなデカイトランクだなあ」そう健吾が笑った。

「おはよー」そう言って二人に笑いかけて椅子に座った。

「ゆっくり休めたかい?昨日の休みは」と向田さんが話しかけてきて

「はい。一日中ほとんど寝てました。おかげでクマもとれました」
そう言って笑った。

「そついやさ？俺、土曜に会社行ったらまゆの車も向田さんの車もあつただけど・・・金曜なにかあつたの？」

「ああ。金曜は終わったのが一緒だったから、焼き肉行つたんだよ。お酒に付き合つてもらつたから、車置いていつたんだ。

でも帰つたのは早かつたよね？まゆちゃん」

スラスラと向田さんの言つた言葉に「うん！うん！」と頷いた。

「へへ 俺も行けばよかつたな」残念。オゴリだつたんでしょ？」
そうブツブツ言いながら健吾は新聞を読み始めた。

チラリと目が合った向田さんがウインクしたのを見て、ドキツとした。

なんだか調子狂つちやうなあ〜 そう思いながら搭乗手続きをしに行つた。

飛行機に乗り込み隣に座つた健吾が、

「カオルがさ、最近忙しいみたいだから無理すんなよってさ。電話とかしないの？お前等？」

「あ・・・それは前から。カオルも連絡まめじゃないし。メールはしてるよ？」

「ふーん。でさ、今回実家に挨拶行つて結婚の報告でもすんの？」

「え？そんなことしないよ。ただ挨拶だけ」

「へえ・・・ そうなんだ？」

それだけ言つて健吾はシートを倒し「着いたら起こして」と言い寝た。

頭の中にお正月の予定が浮かんだ。

金曜日のことでちょっとだけカオルに逢うのが心苦しい感じがした。

なんとなく・・・

気持ちが少しだけ向田さんに傾きかけているんじゃないかと自分でも心配になった。

あのたった数分だけのキスは思った以上に効き目が強かった。

離れている間にカオルに「浮気する気じゃないの？」と冗談で笑っていたのに、

これじゃ今度あったときはそんなこと言う資格は無いな・・・

羽田に到着して、そのまま静岡に移動する為に新幹線に乗った。

偶然にも座席の通路を挟んで隣が向田さんだった。

たったそれだけのことにドキドキしていた。

(あたし・・・簡単すぎるなあ・・・)

たまに目が合いニコツと微笑まれるだけで、目が泳いで仕方無かった。

それを隣で見ていた健吾が

「ホテルのパソコンからカオルに言っちゃおうぞ？」とニヤニヤしていた。

「そんなところからまでチャットしなくていいじゃん！」

「いや、どーせ夜は暇だろな〜って。長期出張の時ってみんな疲れてるから

誰も外出しないしさ、きつと暇だぞ〜？」

「そうなんだ？みんなで遊んだりしないの？」

「んなことするかよ？遊びに来てる訳でもないのに」

目的地に着き軽い段取りの説明を聞き、すぐ仕事にかかった。

たった9日間でなにもない棚だけのガラ〜ンとしたフロアを店舗に完成させるのは

無理なんじゃないかと思った。

外にはどんどん大きなダンボールが届き、現地の馴れていないスタッフと

一緒にそれを運び、展示する場所を作った。

自分が買いつけをした品が届いて、それを展示するというのを初めて体験した。

なんだか嬉しいような恥ずかしいような気分になった。

現地スタッフの子が

「これ可愛いですねー 買っちゃおうかな〜」と手にしたフリーカバーが

偶然あたしが買いつけした物だった。

それを見た他の子達も商品の周りに集まってきた。

「本当だー！私も買おうかなあ？吉本さん、これ取り置きしていいですか？」

「あ…… どうかなあ…… ちょっと待ってて」

健吾を見つけ説明をした。

「ああ。いいんじゃない？オープンしてから買ってね」と女の子達に言っていた。

なんだか分らないが、ちょっと感動した。

他の人が自分の仕事を褒めてくれたような気がしてジーンとした。

「ちょっと感動してたりする？」と健吾が話しかけてきた。

「うん・・・ なんかする・・・ ヤバい・・・泣きそう・・・」

「泣くなよ！忙しいのに！！早く仕事しないと終わらないぞ！」

そう言いながら涙目になってるあたしを見て大笑いをした。

その声を聞きつけて、側を歩いていた向田さんが

「なにになに？どうしたの？」と寄ってきた。

「こいつ、スタッフが自分の買いつけた商品を買いたいって言って取り置きしたのに感動して泣いてやんの。おもしろ〜」

「そうなんだ？よかったね、初めての時は嬉しいよなあ・・・」

俺もそうだったよ。一発目から好感触ならまゆちゃんセンスあるんだよ。

これからも頑張りな。よしよし！」そう言って頭を撫でられた。

その瞬間、目からポロポロと涙が溢れ健吾が

「まじで泣くなつてー！忙しいんだからー」と笑い、

買うと言ってくれたスタッフの子も

「泣かないでくださいよー」と笑った。

頭を撫でていた向田さんが軽く抱きしめるような形で

「もう泣かないで？ね？さ！仕事しよ」と背中を叩いた。

この前の朝のトワレの香りがした。

「は・・・い・・・」

その話を健吾が面白おかしくバイヤー仲間に言い、みんなに散々笑われた。

7時を過ぎて、

「今日はここまでー！ホテルに行くぞー！」と声がして集合した。

ホテルに着き、30分後にロビーに集まり、みんなで食事に行くことになった。

鍵を貰い、各自自分の部屋に行った。

同じフロアに全員の部屋があり、どこが誰の部屋だかわからなかった。

とりあえず自分の部屋の番号を探し、中に入り荷物の整理をして着替えた。

・ たった30分じゃ、シャワーも入れないよ・・・汗かいてるのに・・・

ぶつぶつ文句を言いながら、部屋の中を見渡した。

それほど良い部屋でもなかった。

時間になり部屋を出ると、向えの部屋から向田さんが出てきた。

「あ。向えの部屋ってまゆちゃんだったんだ？よかったね近くてー」

いつものノンビリした口調で言いながら鍵をかけていた。

「暇だったら遊びに来てね。地獄の長期出張はなにもすることないし」

「あ……はい……」

その後エレベーターに乗り、ロビーに着くまでの間、死ぬほど長く感じた。

なにを話していいのかわからず、ただ黙っていた。

「大丈夫だよ。あのことは言わないから。効き目が薄くなったらまた、

口止め料もらっちゃうかもな。なんて」そう言って笑ったが、それに対してなんて答えていいかわからず、ヘラヘラとした笑顔でかえした。

みんなで集まり、近くの居酒屋で食事になった。

食事というよりは、ほぼ飲み会に近いノリだった。

ウーロン茶を飲んでいた、あたしだけがノリきれずに普通の顔をしてその場にいたような気がした。

その日、食事から戻ると時間はまだ9時だった。

お風呂に入り、カオルにメールをした。

<今、静岡。思ったより仕事キツイ……でもなんとか頑張るね>

「送信……と！」

まもなく返信がきた。

<あんまり無理すんなよ。ちょっとは近くなつたな、北海道より>

まあ・・・確かにちょっとは近いか・・・通り過ぎちゃったけど・・・

明日の朝は8時に集合だった。

なんだかノリは部活の合宿のような気分だった。

本当になにもすることが無いんだな。そう思いながら部屋でゴロゴロしていた。

これなら会社にいる時のほうが、もっと時間を有効に使えそうだけど、

たぶん初日ということで、今日は早く仕事を切り上げたんだろうと思っただ。

なんとなくTVを見ながら時間を潰した。

廊下でガヤガヤと人の声が聞こえ、

誰かがどこかに遊びに行くのかと思ひ、なんなら連れていってもらおうかと顔を出してみた。

ちょうど向田さんとペアの人がドアの前でなにやら打ち合わせをしているだけだった。

「どうかした？まゆちゃん」向田さんに声をかけられ、

「あ。いや、声が出たから、どこかに遊びに行くのかなって・・・

・・・

いや、なんでもないんです。どーも・・・」そう言って静かにフ

ェイドアウトした。

ドアを閉めるとクスクスと笑う声が聞こえた。

(遊びに行く訳ないよなあ〜…………… 格好悪う〜……………)

しばらくしてドアをノックする音がした。

「はい」「ドアを開けると向田さんがいた。

「わ! どうしたんですか?」

「暇なんですよ? ちょっと外でも行かない? 俺も暇だし」

ここでまた一緒に出かけていいものか一瞬悩んだ。

けど、さっきの姿を見られた今「忙しいので」とも言えず、

「は……………はい」とそのまま外に出た。

「どこ行くんですか?」

「そうだな〜 さっき飲んだし、また途中で気を失われても困るしな〜」

そう言って笑いながら向田さんは歩いていった。

この前のことを想い出されて、恥ずかしくて消えてしまいたくなかった。

ちょっと拓けたような人の多い通りに出た。

「じゃ、あそこで遊んでいこうか?」

と、ゲームセンターを指差し、中に入っていた。

(ゲーセンで・・・ まあ、いいか)

中に入ると結構人が多く、混んでいた。

向田さんを探し、キヨロキヨロしていると

「はい。これね」とカップに入ったメダルをくれた。

二人でメダルゲームに座り、最初こそ緊張をしながらやっていたが、思いのほか大当たりをし、喜んで夢中になって遊んでいた。

横でニコニコと笑いながらも、向田さんは全然勝てずに

「ほんと、ゲームとかギャンブルってセンス無いんだよなあ・・・」
と言っていた。

そこで1時間ほど遊び、気がつくとも閉店の音楽が流れてきた。

「もう終わりだね。じゃ行こうか?」そう言って歩きだした向田さんが

ふと足を止め、

「まゆちゃん、これしてみない?」とプリクラを指差した。

「プリクラですか?」

「うん。やってみたかったんだよね」そう言って手を引いて中に入った。

(え〜と・・・)と言いながら枠や背景を選択して

「よし。じゃ、これで!」と向田さんらしいなと思うシンプルな枠
を選び

シャッターが降りる時に、軽く肩に手をまわされ写真を撮った。

出来上がったプリクラを見て、

「なんか俺の顔、変だなあ……もうちょっといい写りにならな
いかなあ……」と

ブツブツ言いながら、その一枚を自分の携帯に貼った。

「え……携帯になんか貼っちゃっていいんですか！誰か見たら誤
解しますよ！」

「誤解したいヤツにはさせたらいいじゃない……うん。まゆち
ゃんは写りいいねえ」

向田さんはいつもちょっとドキリとすることをサラリと言う。

その言葉に動揺しながらも、携帯を見ている向田さんを見ていた。

「まゆちゃんは携帯には貼れないね。彼氏が見たらそれこそ誤解す
るね」

そう言っただ笑った。

バックから手帳を出して、その裏に一枚貼った。

「じゃ、あたしはここで」そう言って向田さんを見て笑った。

「そこもマズいような気がするけどね」そう言って残りの写真を半
分くれた。

「じゃあ帰りましょうか！また明日も忙しいですね」

「あら？もう帰るんだ？」と不思議そうな顔をされた。

「え・・・だって、もう12時過ぎてますよ？これからどこ行くんですか」

「いや、もっと遊びたいのかなって」

「うーん・・・でも、出張は長いから、小出しに遊びましょうよ！最初に全部遊んでしまつと、後から行く所無くなっちゃいますよ？」

「まあ、それもそうだね。じゃ、今日は帰ろうか？」

そう言つてホテルに向つて歩きだした。

ホテルに着きロビーを歩いてみると、前から健吾が歩いてきた。二人の姿を見て、

「えっ・・・なんで二人でいるの？どこか行つてきたの？」と聞かれた。

「ちよつと暇だったから遊んできたんだ。マツも行きかかった？」ケロリとして向田さんが健吾に聞いていた。

「あ・・・いや・・・そんな訳じゃないけど、珍しい組み合わせだと思つて・・・」

ちよつと疑つたような顔をしてこつちを見た。

「ゲームセンター行つてきたの。面白かったよ」

「へえ〜 なんだか仲いいですね？金曜以来・・・」と向田さんの顔を見ていった。

「まーね。じゃ、もう寝ようかな〜 そんなjanaマツ！まゆちゃん
は？」

行くならエレベーターきてるよ」「そう言って歩いていった。

健吾になにか感づかれたような気がしたが、
そのまま「じゃーね」と言いエレベーターに乗った。

「マツ、ちょっと疑ってたね」と向田さんが笑った。

「ええ・・・ まあ・・・」

そのままエレベーターを下り、部屋の前でお互い鍵を開けて

「じゃ、おやすみなさい」と言って部屋に入ろうとした。

「まゆちゃん。暇なら部屋に遊びにきてもいいからね。俺、口は堅
いから」

そう言っつていつものニコニコした顔をしてドアを閉めた。

<口は堅いから>の意味をいろいろ考えながら、そのまま部屋に入
った。

なにかにつけ大人な雰囲気をする向田さんのことが気になって仕方
なかった。

早くこの出張が終わってくれないと、どんどん向田さんのことが
気になってしまうような不安な気持ちがあった。

それと同時に向田さんの考えていることがわからなくて、

(あの人・・・ あたしのことどう思ってるんだろう・・・)

そんなことをさっき撮ったプリクラを見ながら延々と考えていた。

自分では「変な顔」と言っていた向田さんの写りは私にとっては、いつもの

憧れの人に見えるくらい素敵な笑顔だった。

唇にこのまえの感触を思い出し、肩にはさっき触れた手の感触が残っていた。

バックアップ

出張も2日目以降は終わるのが遅く、ほとんど毎日が11時を過ぎていた。

「これが終盤になればなるほど、遅くなるんだぞ？ありえなーよなあ〜」
健吾がブツブツ言いながら、ダルそうな顔をして商品展示をしていた。

「そうなんだあ．．．．．さすが地獄の長期出張ってだけあるね。でも結構楽しいよ？」

「なにが楽しいんだか．．．早く帰りてえよ．．．俺は」

正直、毎日キツかったけれど楽しかったのは本当だった。

昔からディスプレイも好きだったので、どんどん商品が並び店らしくなる姿は

一日、一日嬉しくなった。

「お前さ．．．向田さんとなにかあった？」

プライスのシールを確認しながら聞く健吾に一瞬ドキッとした。

「え？．．．なにかってなにが？何も無いよ。ある訳無いじゃない．．．」

「嘘つくと慌てるんだよなあ．．．なんか目泳ぐし．．．」

「泳いでないよ！なににも無いんだもん。本当に！」

どうしてうちの親はもっと嘘をついても平然とする子供を産んでくれなかったんだろう・・・
そんなことを一瞬思った。

「ふ〜ん・・・ まあ、俺と付き合う前から憧れてた人だもん
なあ〜

でも歳いくつ違う？向田さんて36歳だっけ？・・・12歳も
上じゃん！」

「11歳です。あたし25歳になったし」

「あ。そっか。でも離れすぎてない？」

「そう？でも見えないじゃない。向田さんて見た目若いし」

そう言っただけで相変わらず目を泳がせながら仕事を続けた。

「まあ・・・確かに若くは見えるけど、それでも30代前半でとこ
かなあ〜

「だいたい30歳過ぎて結婚の噂も無いなんて絶対どこか問題ある
って！」

「悪いこと言わないからカオルにバレる前にあんまりハマるなよ」

そう言っただけで仕事の手を止めこっちを見た。

「しつこい！だからなににも無いってばー！」

そう言っただけで逃げるように健吾の側から離れた。

広い店内では向田さんと日中顔を合わせることはあまり無かった。担当の場所が一番離れていたので、遠くに姿は見えるが話をするとはほとんど無い。

遠くで仕事をしている向田さんの背中が見えた。

(うーん……) 自分の不器用さが身にしみて感じた。

本当の所は気持ちがかなり揺れていた。

優しくされれば、されるほど向田さんのことが気になっていた。けれど、カオルのことを考えるとものすごく反省した。

もしも今、自分と同じことをカオルが影でしていると思うと……複雑な気持ちになった。

(カオルが嫌がることは絶対しないって言ったのに……)

そう頭で思うのに、向田さんを見ると心が騒いだ。

その日、会社の常務が仕事の進み具合を見に北海道から来ることになった。仕事は8時で切り上げられた。

みんなで常務と一緒に食事に行き、ちょっと緊張した食事会になった。

だいたい多くの人は普通食事が終わると、ちょっとだけ飲みに行ったりしたが、さすがに常務がいるとなると、その日はみんなその場で解散になった。

ホテルに向ってワイワイと歩いていると、向田さんが隣を歩き、
「今日は早く終わったね。どこか遊びに行く？この前の続きで」
顔を正面に向けたまま声をかけてきた。

「あー……」

返事をする前に健吾が割り込んできた。

「どこか行くんですか？俺もいいです？」

「ああ。いいよ。マツどこか行きたい所ある？」
「ニコニコ」と向田さんは健吾に言った。

「そうですねえ……どこ行きたい？」

あたしのほうを見た健吾の顔はしっかりと怒っていた。

「じゃあマツもいることだし、軽く飲みに行こうか？」

少し離れた後ろで健吾が

「お前なあ……しっかりしろよ？」
「そう言っただけで向田さんに並び歩いた。」

静かなバーに入り、向田さんと健吾はウイスキーを頼んでいた。
メニューを見ていたあたしに向田さんが

「まゆちゃんはこれでいいんじゃない？」
「とこの前飲んだ軽めのカクテルを指差した。」

一瞬この前のことが健吾にバレると思いきつとした。

健吾の視線に向田さんが気がつき、

「この前の焼き肉の後に、ちょっとだけカクテルの店に行ったんだよ。」

そこでまゆちゃんがこれ飲んで美味しいって言ってたからさ別に隠す様子も無く向田さんが健吾に言った。

「へえ〜」健吾はそう言って二人の顔をチラチラ見た。

しばらく仕事の話をしながら会話が進んだ。

1時間も過ぎた頃、カクテルが無くなり、これ以上飲むと明日、頭が痛くなると困ると思いきやオレンジジュースを頼んだ。

その姿を見て、

「それが正解だね」と向田さんが笑った。

その二人の会話を聞きながら健吾が

「向田さん。もしかしてまゆのこと好きなんですか？」といきなり言った。

「ちょっと、なに言い出すの!」なにげに慌てた。

「え?どうして」普通の顔をして向田さんが健吾に聞いた。

「なんか最近、ずーとまゆに優しくしてるじゃないですか？」

「コイツ昔から向田さんのこと憧れていたから、そんなに優しくしたら勘違いしますよ?」

そんな気ないなら、誘ったりしないほうがコイツの為だと思いますけど?」

そう真面目な顔をして言った。

「勘違い?」

そう言つて健吾を見た。

「歳だつてかなり離れてるし、どーせそんな気無いんでしょう? 向田さんは」

「歳ねえ・・・俺は全然気にしないけど?」

その答えに嬉しいような、困つたような気分になつた。

「気にしないつて・・・」ちよつと呆れた顔をして向田さんに健吾が言った。

「この前、まゆちゃんが「30歳過ぎてどんどん素敵になる」つて言つてくれたしな」

ね?まゆちゃん」

そう言つてこつちを見てニツコリした。

その笑顔に素直に「はい」と言いたかったが、健吾の視線が痛くてただ笑顔でかえした。

「じゃあ・・・そんな気あるとか?」健吾が聞いた。
その答えをあたしもう少しだけ聞きたかった。

「そつだなあゝ無いなら誘わないだろうな」

「向田さ〜ん。なに言つてんですか?こいつ彼氏いるのに」健吾が

呆れた顔で

ちよつと笑いながら（嘘でしょ？）という顔をして向田さんを見た。

あたしはというと……

たぶん……確実に……顔がニヤけていたと思う……

「でも遠くにいるんでしょ？遠距離が壊れる時はほとんど近くに好きなきな

人ができて……つてのが定番じゃないのかな？」

「定番で……今、向田さんやってることはどうかと思いますよ」

「そうかあ？別に問題ないんじゃないかあ？大人同士だもん」
そう言つて健吾の言うことを軽く流した。

重い空気の中、なんて言つていいのかわからず
ただオレンジジュースをちびちびと飲んでいた。

「そろそろ行こうか。明日もハードだぞ！」そう言つて向田さんは
レシートを持つて精算をしようとレジに歩いていった。

健吾はそんな向田さんの態度が気に入らなかつたのか、レジにいる
向田さんの

上着にお金をねじ入れ、先に外に出ていった。

ホテルに帰るまでの間、隣で歩く向田さんを横目で見ながら黙つて
歩いた。

向田さんは普通の顔をして歩いてた。

「マツは若いなあ〜　なんか勢いがあるよなあ〜」前を向いたまま向田さんが言った。

「向田さんは勢いが無いんですか？」そう言って少し笑った。

「無い訳じゃないけどなあ〜　でも俺ってきつと格好つけるんだと思っただよな。」

がむしゃらに女の人を追って振られるのが怖いんだよ。きつと」

「それはあたしも怖いですよ・・・
でもやっぱり健吾が言ったように、あたしちよつと勘違いしちゃいそうです。」

入社以来、憧れてましたから・・・　そんな人に急に優しくされると

やっぱり期待しちゃいます・・・」

それだけ言っつて、それ以上なにも言えずに黙った歩いた。

「そうかあ・・・　そんなに昔から憧れていてくれていたんだ。」

「ごめんね。俺、鈍感で・・・」

「いいえ。でもただ見ていただけなんで、気がつく訳ないです。
声もかけられないくらいの人だと思っただけで・・・」

「だって10歳以上も下の子が俺のこと好きだなんて普通思わないでしょ」

そんなことを話しているうちにホテルに着いた。
部屋の前で

「じゃ、おやすみなさい」と言つと

「おやすみ。また明日ね。後、さっき言ったのは本当だよ。期待してくれても

全然問題ないから」

そう笑顔で言つて向田さんはドアを閉めた。

余裕のある言い方に大人の男だと感じた。

あたし次第で自分が動くよ?といわれているようで、どうしていいか分からなくなつた。

喜んでいる自分と、動揺している自分がいた。

カオルのことを考えた・・・
胸がギョツと痛んだ・・・

こんな時にカオルに電話をするのは申し訳無いと思つたけれど、ちよつとでも声を聞いておかないと、カオルが頭から消えてしまひそうになつた。

呼び出し音の向こうのカオルに「ごめんね」と思いながら電話にでてくれるのを待った。

「おう。どうした? さっきまで健吾と一緒にだつたんだつて?」

いきなりそんなことを言われて驚いた。

「え！なんで知ってるの？電話きたの」

「まゆもやればいいのに、健吾今チャットしてるよ」

「ええー？今あ？ホテルのパソコンルームからしてるんだ・・・」

「夜は暇らしいね。健吾毎日してるみたいだよ」

「疲れてそんな気力無いなあ・・・あたしは」

そう言つて弱く笑つた。

久しぶりに聞いたカオルの声に後ろめたい気持ちと嬉しい気持ちが交差した。

「向田さんて人も行つたんだって？」

カオルの口から「向田」という言葉を聞いて、ドキツとした。

「あ・・・うん・・・ 3人でね。少しだけ飲んだ」

「健吾がさ、向田さんに気をつけろつて言つてたよ。なに？

憧れの人と一緒に出張で嬉しい？」そう悪戯っぽく言うカオルに

「何も無いよ！本当に！」と慌てて言つた。

「別にそんなこと思つてないけど・・・なんで慌てるの？」

「あ・・・いや。別に・・・」自分から墓穴を掘つたような気分になつた。

「声なんか疲れてるな。元気無いぞ？」

「ううん。そんなことないよ。チャットの途中でごめんね。じゃ、

また電話する」

「あんまり無理すんなよ。じゃ、正月待ってるから……。」
そう言っつてカオルは電話を切った。

(待ってるから……) その声だけが頭に残った。

部屋を出てフロントに行き、パソコンルームの場所を聞き行っつてみた。

そこを覗くと健吾のほかには誰もいなかった。

「疲れてないの？ そんなに毎晩」そう言っつて隣に座った。

「向田さんは？」こつちを見ないで画面を見たまま健吾が行った。

「部屋じゃない？ さっき別れたけど」

「その後、何食わぬ顔でカオルに電話か。お前もやるよな」

呆れたような、少し馬鹿にしたような顔をして画面を見ていた。カオルが画面上であたしから電話がきたと教えただと思っつた。

「健吾はわからないんだよ……あたしがどれだけ向田さんに憧れていたか……」

その人に声かけられたらちよつとくらいは気持ちも動くじゃない……
そう言いながら、どうしていいかわからず泣きそうになつた。

その顔を見て、

「どうすんのよ？」と画面から顔をはずした。

何も言わずに黙っていた。

「さっきの向田さんの言い方やバいぞ？」

お前、カオルとあっさり別れることできるのかよ？」

「ズルいよね・・・向田さんにもいい顔して、カオルにもいい顔して・・・」

「まあな・・・」そう言っただけで健吾はまた黙って画面を見ていた。

しばらくお互い何も言わずに黙っていた。

たまに健吾はチヨコチヨコとキーボードを打ちなにかしら返事をしていた。

「向田さんとまゆかぁ・・・全然考えていなかった組み合わせだよなぁ・・・」
健吾がポツリと言った。

相変わらず何も答えることをしないで、ただカオルと向田さんのことを考えていた。

「俺・・・あの人がってホモだと思ってた」

真面目な顔をして言う健吾に思わず重い空気を忘れて吹きだした。

「いやだつてさ・・・ まあルックスは確かに良いとは思っけどさ、もう36歳じゃん。」

普通、いい男は結婚してると思うんだよなぁ・・・別に思い当た

ることも無いけどさ。

女の噂も聞かないし、そこんとこ聞いた？「なにか問題あるんですか？」「って？」

「聞ける訳ないじゃん・・・」まだ少し笑いながら答えた。

「けど、今の仕事なら仕方無いかあ・・・ 出会い無いもんなあ・・・

向田さん商品課長いし・・・」そう言いながら健吾もなにか考
えていた。

「なんかさあ・・・ 調子狂っちゃうよね・・・ あーも大人の雰囲気
気でこられると・・・」

「どう、こられて言うてんの？」

「あくまであたしが部屋に行くなら入れるけど、自分からは来ない
とこに

なんとなく大人って感じがする・・・焦ってないっていうか・・・
・余裕っていうか」

「まあ、そこが11歳の差なんじゃないの？」そう言うて笑った。

「でも・・・やっぱりカオルのこと裏切ることとはできないな・・・
」

ちよつと裏切ってしまったたくせに、やっぱりそう思った。

「表向きはそうだけど・・・でも実際さ、距離とかってどう思っ
てる？」

今のままなら、毎日顔を合わず向田さんが有利だなって俺も思う

ぞ

「さっきの向田さんの言ったことって、、かなり正論だよね・・・」

(遠距離が壊れる時は側に好きな人ができた時じゃない?)

やっぱりいつも好きな人にはすぐ側にいて欲しいと思うのがきつと普通で、当たり前のことなんだと思う。

「一番痛いところ突いてくるよなあ」

「でもまあ・・・今はただ一緒に遊びにいたりするから妙に気になるだけで、

またむこうに戻れば、向田さんは忙しいしあたしなんか相手にしてる暇なんて無いよ。

お正月にカオルに逢えばそんなことも忘れるよ。大丈夫！」

そう言って笑った。

「だから・・・お前の大丈夫は大丈夫じゃないって言ったろ？
本当はすっげえ悩んでるくせに」

「大丈夫だってば！あたしさえ変な行動しなきゃ向田さんだつて
なにもする訳ないし。ちょっと疲れてるから気まぐれじゃない？
ほら、旅の恥はかき捨てって言うし？ちよつと・・・違うか・・・」

「全然違うと思うけど・・・」

「まあ、いいや。じゃ、あたしもう寝るね。健吾も早く寝たほうがいいよ。」

それじゃね〜」そう言つて席を立ち部屋を出た。

部屋の鍵を開けながら、なんとなく後ろのドアが気になった。

（ダメだ！惑わされちゃ！）そう思いながら部屋に入り鍵を閉めた。明日の用意をしながら、なにげなく手帳を見た。

裏に貼つてあるプリクラを見て、やっぱり気持ちが悪かついた。

このままお正月にカオルにスッキリとした気持ちで逢うことなんかにできないのではと思った。

もつと器用になれば楽なのに・・・

カオルに逢つている時はカオルのこと、仕事の時は向田さんのこと。

そう気持ちの切り替えが簡単にスイッチのようにできればいいのに・・・

時計を見るともう1時だった。

明日もきつと遅くなるだろう・・・

そう考えてベットに入った。すぐ数メートル先に気になる人が寝ていると

いうことを考えながら。

.....

「オープニングまで残り5日だから、あと3日の間に形を作って、残りの2日は手直しにする予定だから。あと5日！気合入れてな

！」

バイヤーの中心でもある中山さんの朝礼が終わり、各自持ち場に散った。

あくびをしながら健吾が眠そうな顔をしていた。

「だから言ったじゃない。何時までしてたの？」

「3時くらいかなあ」涙を拭きながら健吾が答えた。

「あー。昨日は土曜日なあ・・・誰がいたの？そんな遅くまで」

「ヤスとカオルと俺。ヒデはラビの家にいたけど、そこそこで落ちた」

「ふーん・・・」

「向田さんの話してた。みんなで・・・」

その言葉に慌てて健吾の顔を見た。

「どんな話？なに話してたの？」自然と早口になった。

「ん？いや、カオルが向田さんのこと聞いてたから、ちょっとそんな話になった。

歳とか、どんな感じ？とか、まゆと仲いいの？とか・・・

でも、俺のホモ説みんな納得してたぞ？男が言うんだからやっぱりそうかもよ？」

「またその話？ばっかじゃないの」

「でも聞いてみるって。だって変だと思わないか？」

体を乗り出してニヤつきながら健吾が言った。

「おーもーわーなーい！早く仕事しなよ！もうその話はいいから！」

「そうかなあ・・・」首をかしげて仕事に戻っていった。

（もしそうなら・・・ さすがにキツイなあ・・・）そう思いながら、手を動かした。

ちょうどタイミング良く、荷物を持ちながら向田さんが隣を通っていった。

「あと3日でなんとかかなりそう？」

「そうですね。あたしの所は明日にはなんとかなると思います。ただ・・・健吾のところがきつとダメですね。だから手伝って3日ってとこじゃないかと。ギリギリですね」

「なんとかかなりそうだね。俺のともいい感じだよ。後から見に来るといいよ。」

じゃーね「そう言っつていつものニコニコ顔で去っていった。

昨日のドアでの言葉を引きずることない態度に、さすがだなあ・・・と思った。

それから5日間、ほぼ徹夜のような状態で時間は過ぎ、

やっとのことで無事オープンニングの日をむかえ、商品課としての仕事はほとんど終わった。

それと同時に、この長かった出張が終わることに寂しい気持ちがあった。

健吾は大喜びをしていたが、あたしは心底喜ぶことができなかった。せつかく毎日、向田さんの近くにいられたのに、また元の遠い存在になっってしまうことが残念だった。

きつと戻ってしまえば書類の山の中の頭しか見られないと思うと、まだ帰りたくない気分になった。

そうもいかないよなあ…… そう思いながらホテルに戻った。

残り1日。明日は昼まで店に顔を出しその後北海道に戻ることになっていた。

その日、商品課の仕事は6時までで、早めにホテルに戻った。

それでも自分から向田さんの部屋のドアをノックすることはできなかった。

ギリギリのところでやはりカオルの存在があった。

(良い夢を見たと思って諦めよう……)
そう思いながら、翌日の帰る支度をした。

コンコン……

ドアのノックの音に手を止め鍵を開けた。

「もう明日の支度は終わった？」そう言って向田さんが立っていた。

一瞬だけ息が止まった。

「あ……はいっ！もうほとんど終わりました」

「そう。じゃあちょっと出ようか？出張も明日で終わりだし。最終日の夜くらい遊びに行こうよ」

断るべきだと思った。

けど、口から出た言葉は「はい」だった。ホテルを出て、歩く向田さんの横を黙って着いていった。

「じゃあ今日はどこに行こうか？クリスマスだしね。やっぱりまゆちゃんくらの子はイベント好きでしょ？仕事のイブなんて昨日は残念だったね」

「でも、仕事ですから。自分で希望したのもあったし。覚悟してたんで

それは問題無いです。全然クリスマスって感じしなかったし」
テレビと街でかかるクリスマスソングにかろうじてクリスマスなんだと知る程度で
毎日忙しくそんなことは、さほど気にならなかった。

「あと4時間はクリスマス圏内だね。もうイブにしかみんな騒がないけど、

基本的には今日なのにねえ・・・いつからこうなったんだろう？」

ブツブツと言いながら向田さんは歩いていた。

「ちょっとここ寄っていいんか？」

そう言っただけの中に入ってしまった向田さんを見ながら、店の外観を見ると

ジュエリーショップだった。

店内にはほんの少しだが何組かのカップルがアクセサリーを見ていた。

向田さんもショーケースを軽く眺め、店員に「これいい?」と言って手にとった。

「まゆちゃん。ちょっと」

そう呼ばれて側に歩いていった。

スツと首に小さなトップのついたネックレスをかけた。

それを少し下がりながら見て、「ちょっと違うなあ……」と言い、また違うネックレスをかけた。

「あの……向田さん?これ……」そう言いかけると、

「ん?まあいいから。ちょっと待って」と探すのに真剣になっていた。

3つ目に首にかけたのを見て

「ん。これだな。これください」そう言ってまた首から外し店員に渡した。

「あの……向田さん……」

「俺、結構センスいいでしょ?昔からアクセサリーだけは自信あるんだよ」

そう言って小さな紙袋に入ったネックレスを「はい」と渡してくれた。

「あ。困ります。って……いままでボーとしてたのに言うのはなんですが、

こんなことしてもらう理由ないし。それに、」

(それに・・・ そんな向田さんのことを想いだすような物渡さないでください)

そう思ったけど、口には出せなかった。

「いいから受け取ってよ。クリスマスのプレゼントなんだから」

「でも・・・あたしにも用意してないし」

「今日付き合ってくれたでしょ？それで十分だよ。じゃ、軽くどこか入ろうか」

そう言って歩き出した。

早足で追いつき、

「でも、それだけの理由でこんな高価な物受け取れません」
チラツと見た値段は気安く貰うにはありえない値段だった。

「結構、まゆちゃんて頑固だねえ。俺が持ってもどうにもならないでしょ？」

それ、毎日つけてね。その為に仕事でもつけてられるようなシンブルなのに

したんだから。似合ってたよ」

「でも・・・」言葉が出てこなかった。

そのまま向田さんの横に並び歩きながら、一生懸命言葉を考えた。

「あ。ここいいんじゃない？」

そう言って一件の洒落た感じの店を指差し、中に入っていくた。

席につき、メニューを見てワインと数点のオードブルを頼んだ。
店の人との話具合でワインにも詳しいんだなと思うくらいスラスラと
スマートにオーダーをする向田さんを黙ってみていた。

赤ワインをグラスにつき

「じゃ、乾杯」とグラスを差し出され、慌てて自分のグラスを前に
出した。

一口飲むと甘く飲みやすいワインに気を使ってくれたんだと感じた。

「飲みやすいでしょ？これなら大丈夫だと思うんだ」そう言って笑
った。

心の中で（言わなきゃ・・・言わなきゃ・・・）と何度も繰り返し
た。

「あの、向田さん！」

ここで言わないと、きっともう言うチャンスは無い！
そう心に決めた。

「ん？なに？」相変わらずのニッコリした顔で聞かれた。

「あの、やっぱりダメなんです。あたし不器用なんです。向田さん
に優しくされて、

たしかに有頂天になってたけど、彼のこと裏切ってるような気が
して・・・

もうこんな風に誘ったりしないください。

「こんなの向田さんにも失礼だし、彼氏にも顔合わせられないです。
「ごめんなさい！」

そう言つて勢いよく頭を下げた。

ゴツツ・・・

鈍い音がした。

勢いあまつてテーブルに頭をぶつけた。

「プツ・・・」

向田さんが吹きだして笑つた声が前から聞こえた・・・

あまりの格好悪さにすぐに顔をあげることができなかつた。

オデコに手をやりながら顔をあげると、向田さんは笑いをこらえながら

こつちを見ていた。

「本当に面白いよね・・・まゆちゃん」

そう言つて堪えていた笑いをなんとか我慢していた。

「すみません・・・」

顔が真っ赤になっていると感じた。

「きつと悩んでたりするのかなって思ってたよ」

口元がまだ少しだけ笑いながら自分のグラスにワインを注いだ。

「そんな子なんだろうなって。そうじゃなきゃ、もっと簡単に落ちてると思ってた。」

だから、俺もちょっと本気になってみようかってさ」

「いや、だから・・・ そうなられてしまうと、困るんです」

「すぐじゃなくていいよ・・・ 俺のことはバックアップとってくれれば」

言ってる意味がよくわからなかった。

「バックアップってなんですか？」

その言葉にまたクスクス笑いながら、

「彼氏と別れたら、俺のとおいでおいで」

そう言っただけのもニッコリした顔をした。

「そんなことダメです！」

「前に言ったでしょ？俺は平和主義だからって。無理矢理別れさせることは」

しないよ。まゆちゃんが彼氏ともうダメだって思ったたら・・・

そう思った時に、俺の所にくればいい。ね、簡単なことでしょ？」

（ね？）って・・・。

そんなウマい話ありえない……

「どうしてですか？そんなこと言われたら、今以上に向田さんのこと気になります。」

そんな言い方しないでください。「じゃあもう誘わない」「くらい言ってください」

「いや？帰っても誘うよ。けどあくまでプラトニックにね。ハッキリとするまでは」

「そんなぁ……」情けない声でそう言った。

「え？プラトニックじゃないほうがご希望？」

「いや、そうじゃなくて……あたし上手く断る自信無いです。言ったじゃないですか、ずっとと憧れていたって……その人の誘いを平然と

断ることができるなら、こんなに悩みません」

「あー。そっちのほうか」人の話の肝心な部分をスルーして笑った。

「まあ、とりあえず少し飲みなよ。さつきから死にそうな顔してるよ？」

もっと気楽に。「そう言ってグラスを指差した。

眉間にしわを寄せながら言われた通りにワインを飲んだ。

味もなにも分らなかつた。せつかくものすごい決心をして諦めようとしたのに、

こんなこと言われてしまい、もっと迷ってしまった。

「ちょっと聞いてもいいですか？」少し落ち着いてから言った。

「いいですよ？なんでも」

「あの、向田さんでどうして結婚しないんですか？独身主義とか・
」

「そんなことないよ。俺だってしたいよ。でもなかなかチャンスがねえ」

一度、結婚しようとしたことあったんだよ。えーと、30くらいかな？

でも、彼女が転職してね。遠距離になっちゃったんだよ。

バリバリ仕事する人でね。相手も同じ歳だったんだけど・・・

まあ、それでも1年くらいしたら結婚しようと思ってたら浮気されちゃった。

それも半年経たないうちに・・・」

そう言っただけとした顔をして笑った。

場がもたなくて、とりあえず一緒に笑ってみた。

もしかしたら失礼だったかもしれないけど・・・

「だから、俺は遠距離は壊れやすいと思ってるんだ。

俺と彼女、すごく上手くいってたし親もそう思ってた。友達だつて・・・

離れる前は大泣きしていた彼女がアッサリと「好きな人ができた」って

言った時、脳みそが一気に半分くらい死んだような気がしたよ。

でも、なんとなく納得した。辛い時や疲れた時に側にいない恋人なんか

なんの意味も無いんだよ。まゆちゃんもそう思ったこと無い？」

「うーん……一度相手のことが不安になった時、側にいてくれたら」

「すぐにでも仲直りできるのになって思ったことはありません」

「それはアツサリ克服できたんだ？」

「まあ……その時はそうですね。でも距離にはやっぱり考えるとこありました。もっと近かったらなって……」

「でしょ？中には上手くいく人たちもいるけど、ほんの少しだと思っただ。」

「今だつてもし彼氏が近くにいたら、きつとまゆちゃんは」

「俺のことキチンと断ると思うよ？いくら昔から好きでいてくれたとしても」

「見透かされてる……きつと気持ちが揺れていることも向田さんには」
「すべてお見通しなんだ。」

「けど、なんとか頑張ってるまゆちゃんに、すぐに別れるとは言えないでしょ？」

「頑張れるだけ頑張りなよ。それでもうダメだと思った時に俺がいれると思えば、」

「気が楽になると思うよ？ちょっと歳が離れたバックアップだけ」

「そう言つて少し笑つたが、目は真っ直ぐこつちを見ていた。」

「このまま「はい。わかりました」と言つていいものか……考えたけど、答えがでなかった。」

「けど・・・もしかしたら向田さんだっけってすぐに好きな子できるかも

しれないじゃないですか。そんなの分りませんよ？」

「なかなかそうならないんだよねえ・・・俺、あんまり自分から好きになること無いから。

第一仕事ばかりだし出会い無いし。だから、別に気にしないでいいよ。

安心しておいで。のんびり待ってるから」

何を言っても上手く丸めこまれてるような気がした。

「いや、でも、気にならないんですか？もし、その、あたしのことを

好きになってくれたとして、彼氏に逢ったりするのとか、別にいいんですか？」

「だってスタートラインがそうだもの。理想は彼氏がない状態で、商品課に移動してきてくれたら、きつともっと早くにそうなってたんじゃないかな？」

やっぱり何を言っても言い返せない。

どんなボールを投げても見事にキャッチされてしまって、隙が無いと思った。

「でも・・・どうしてあたしなんですか？」

一番聞きたかったことが口がから出た。

「うーん・・・ いつもマツと言いつ合つてると」見て、面白い子だなって最初は思ってた。

けど一番はやっぱり何年も憧れてくれてたってことかなあ・・・ そんなこと言われたこと無かったからさ。やっぱりドキツとしたよ。

嬉しかったしね。そんな風に見てくれた子がいたなんて。

なんとなく最初に飲みに行った時のまゆちゃんの言い方が

「好きでした」「じゃなくて」「今、好きです」「って感じがしたんだ。相手も遠距離だし、これはまだ間に合うかなってさ。

昔からいい子だなって思ってたしね」

あんなにも憧れていた人が今、目の前でそんなことを言ってくれてるのを

夢じゃないかと思った。小さく足をつねったら、痛かった・・・

「でも、向田さんが思ってるほどあたしはそんなにいい子じゃないです。

実際彼氏のこと裏切ってるようなことしてるし、ほら、今だって」

「そうかなあ？裏切るならもうとっくに俺の部屋に来てるでしょ。

何気に俺、毎日まゆちゃんのこと待ってたんだけどなあ。結局、

一回も来て

くれなかったけどな。毎回「いつでもおいで」「ってしつこく言ってたんだけどな」

「少し考えさせてください・・・」「そう言って少しだけワインと飲んだ。

口では敵わないと思った。

カオルのことを言えば「そっか。わかったよ」と軽く言ってくれる
と思っていたのは
大間違いだった。

「またー そんな暗い顔しないでよ？せつかくのクリスマスなのに」
そう言っただけでグラスにワインを注いでくれた。

きっとこれは本当の浮気よりも、重大な罪を犯しているのかもしれない。

帰り道、相変わらず向田さんはいつものクールな感じで歩いた。
その横顔を見て、

（この人ってどうしてそんなに涼しい顔をしていられるのだろう）
と思っていた。

あたしなら、きっと付き合ってる人に悪いからと断られたら、それ
以上は誘わない。

でもこの人は「頑張っておいで」とそれも笑顔で言えるのはどうし
てなんだろう。

「向田さん…… 今でも浮気した彼女のことは恨んでますか？」

もしかしたら曲がった彼女への復讐？そんなことを考えた。

「いや？全然。結婚してたら今ごろ一緒にお酒も飲めていなかった
でしょ？」

「そうですね……」

「なんで？俺がされたことを彼氏にしてやろうとかって企んでるとか思っちゃった？」

「いや、そんなこと思わないですけど……」（思ってたけど）

だめだこりゃ……

ホテルに着いて、ドアを開け「じゃ、おやすみなさい」と挨拶をした。

「うん。じゃ、また明日ね。おやすみ」

ドアを閉めようとした時、もう一度声をかけられドアから顔を覗かせた。

「なんですか？」

「俺の部屋……来る？」

今……部屋に行くということとは……

もう取り返しがつかないことになってしまいそうで、怖くなって首を横に振った。

「やっぱね。そうだと思った。

けど、、、そんな子だから俺本気になってみようかなって思えたんだ」

嬉しいような……

でも、カオルに顔向けできないような……
複雑な顔をして向田さんを見つめていた。

「あまり深く考えないで」

「できるだけそうします・・・」

「うん。どっちみち俺のとこにくると思うから。じゃ、おやすみ」

そう言って向田さんはドアを閉めた。

ドアを閉め・・・

「きつと宗教にハマっていく人ってこんな感じなんだろうか・・・」
そう呟いてバツクを置いた。

凶のおみくじ

長い出張が終わり、正月休みが目前となっていた。

残り一日は最後にみんなで挨拶があるということだったので、出勤になり

軽く上司の話が終わると他の部署の人たちは早々に帰っていった。

でも商品課だけは、みんな年明けの仕事をもう初めていた。

商品課は他の部署より、残業も多く出張が多いので

長期の休みの時は、少し長く休むんだと健吾が教えてくれた。

「で。お前いつ東京行くの？」

「うん・・・一応明日から4日までって思ってる・・・チケットそれで取った」

「そっか。でも休み6日までだろ？なんで4日？」そう言って健吾はまた書類に目をやった。

「よく言うよ・・・自分の担当のメーカーと打ち合わせが5日の日しか無いのに、

スキー行くの誰ですかね？仕方無いから変わりに帰ってくるんじゃない！」

「あ！そうだった。そう怒るなって、すぐまた東京に出張あるじゃない。」

優しいパートナーでラッキーだと思ってるって！カオルによろしくな！」

そう言って笑ってごまかした。

内心、ちょっと気が重かった。

できることならこの前の向田さんとのクリスマスの日のことを相談に乗って

もらいたいような気になった。

けれど、同じ部署でいつも顔をあわせてる健吾にそんなことを知られるのは

向田さんも嫌なんじゃないかと思い、何も言わずにいた。

ちょうど健吾が席を離れた時、向田さんが後ろに来て

「まゆちゃん。お正月は東京でしょ？これ、渡しておくね」となにか紙を渡された。

「はい……？」そう言っ紙を開くと携帯のアドレスが書いてあった。

「戻りはギリギリ？」

「あ……一応、一件早く仕事始めのメーカーさんがいるので、

打ち合わせがあるんです。だから少し早く戻ります。4日の夜に

……」

「そっか。じゃ、5日に逢えるかな？電話でもいいしメールでもいいから

連絡して。あと、まゆちゃんのアドレスも送ってくれる？待ってるね」

そう言っ自分の席に戻っていった。

心の中で（アイター！）と叫んだ。

どっちつかずの自分が嫌になった。

その日の夜、メールを送るべきか散々悩んだ。けど、たぶん5日には連絡をしなくてはならないんだと思い、短い文章でメールを送った。

<まゆです。アドレス送っておきます。>

1時間後に返信がきた。

<アドレスありがとう。5日は食事に行こうか？お腹空かしておいてね。>

じゃ、彼氏と仲良くね。 直樹 >

(わ！いつの間にか名前が<直樹>になってる……) 携帯を持ったまま後ろに倒れた。

明日……ちゃんとカオルに普通の顔で逢えるのだろうか…… 不安なまま眠った。

いつもの東京行きとは全然違う、思い気分で羽田に着いた。もう休みになってるカオルが到着ロビーの前に見えた。笑顔で手を振っているカオルに、ちゃんと普通の笑顔になっているか心配だった。

「しばらくぶり！どう？仕事慣れた？」そういつて荷物を持ってくれた。

「うん……結構ね」

「そっか、今日ラビ達来るんだ。早くいこー！」

「え？そっなの？」

「うん。温泉予約いっぱいでき、取れなかったのよぉ」

すっかり温泉のことなど忘れていた。

あの日からそんなに長い時間は経っていないのに・・・

家に着き、荷物を二階に運び整理しているとカオルが上がってきた。

「疲れただろ？ラビ達来るまで少し寝ていいぞ。なんか少し痩せたし・・・」

そう言って心配そうな顔をした。

その顔を見た瞬間、いままでのことが一気に頭の中に広がり涙が出た。

「わわ・・・な・・・なに！！どうした？ちよっ！なんで泣いてんの？

俺なに言った？なんか悪いこと言った？」

慌ててカオルが側に来た。

（ううん・・・）と首を振ることしかできなかった。

「まゆ・・・お前きつと疲れてんだよ？健吾も言ってたも。

すっげえ頑張ってるって。ちよっと寝な。

そんな顔でラビに逢ったらビックリされるよ」

慌てながらベットに横にされ布団をかけてくれた。

「なんなら側にいようか？」

その言葉にどンドン涙が出て止まらなかった。

「いや、わかった！泣かないで！側にいるから。な？少し寝なよ」
そう言っただけで心配そうな顔をしてこっちを見ていた。

そのまま目を瞑って、眠りについた。

思えば・・・ここ数日ともに眠っていないような気がした。

眠りは浅く、ちょっとした物音で目を覚ましていた。

冷蔵庫がブルンと音をさせるたびに目がさめ、また眠りに落ちるまでかなり時間がかかっていた。

いつの間にか眠ってしまったのか、下に人の声が聞こえて目が覚めた。
た。

ラビとヒデの声でした。

「今、まゆ寝てるんだ。仕事キツイみたいでなんか痩せちゃってさ。

俺に逢ってボロボロ泣き出すし・・・やっぱ疲れてるんだなあ。

・・・

そんなカオルの声が聞こえ、また泣きそうになった。

階段をあがってくる音が聞こえ、今、起きたフリをした。

「化粧直してから行くね。もう起きてるから。大丈夫」

「そっか。じゃ下で待ってるから」

そう言っただけでカオルが降りていった。

軽く化粧を直し、下に降りていった。

「ごめん、出迎えもしないで寝てて〜」そう言っただけでラビの顔を見た。

「ちょっと・・・大丈夫？まゆ何キロ痩せた？」ラビが体を触りながら言った。

「あー・・・5キロくらい？出張ダイエット・・・」

「癌じゃねーよな？」ヒデが笑った。

「たぶん・・・？」そう言って一緒に笑った・・・

けど、そんなに驚かれるほど
痩せていたとは自分でも気がつかなかった。

いつもはなにかしら食事を作るのに、今日はテイクアウトでいる
ると

ラビとヒデが買ってきてくれた。

たぶんカオルが電話をしてくれたんだと思った。

みんなで最近の話や、カオルの実家に行く話をして笑っていた。
そこにヒデが向田さんの話を振ってきた。

「そっぴやさ、なんか憧れの先輩いるんだって？健吾が言ってたよ
」

「そうそう！でも大人の男って感じで、憧れるのなんかわかる」
ラビも一緒にになってその話に乗っ出した。

心臓を誰かに鷲掴みされたように痛んだ。

「う・・・うん。そうだね。でも実際大人だし、」なにを言っ
ても噛みそうだった。

「懂れてるってどれくらい懂れてたの？ここ最近のこと？」
カオルも特に疑うことも無く、話に入ってきた。

「あ……入社した時から……」どんだん声が小さくなった。

「うっそ！5年も懂れてんの？」驚いてカオルが言った。

「うちの会社にはそんなのいないな。オバちゃんしかいないもん
そう言つてヒデがみんなを笑わせてその話は終わった。

ちょうどビールが無くなり、
カオルが買いにいくと言つたが、結構酔つていたので、
ラビと二人で外に出かけた。

二人でコンビニまで歩きながらラビが口を開いた。

「まゆ本当に大丈夫？そんなにキツイなら仕事辞めたら？もうカオルの

所に来たらいいじゃない。親のところに挨拶に行くんだし、まだ
ダメ？」

「まだ早いよ……一年も経つてないし……」

本当はそんな理由じゃないかもしれない……

「そっか。だよな。こっちに来るってことは結婚も視野に入れな
いとダメだしね。」

「そう簡単には決められないよねー」

「ラビ・・・ヒデに内緒にしてくれる？」
もう苦しくてラビに聞いてほしかった。

「なに？なんの話？」

近くの公園のベンチに座り、ここ数日の話をした。
なんとなく全部話したら少しだけ楽になった。

「まゆ・・・どうしたいの？カオルと向田さんどっちが好き？」
そう聞かれて、なにも答えられなかった。

「でも・・・向田さんの責め方って効くね・・・そりゃ迷うわ・・・」
「ラビが難しい顔をして言った。」

「まゆが真面目だったこともあるけどね。私ならゴツソリそのまま
向田さんと

密会しちゃうかもなー。だって大人でなんか魅力あるもん。
別になにかしちゃう訳じゃないし、お金も持ってそうだしー
素敵なお兄さんができたと思って、軽く考えてみたら？」

「でも・・・カオルが優しくしてくれると辛いんだよね・・・
裏切ってる感じがして・・・」

「別に裏切ってないじゃん！まあ・・・キスは挨拶よ。うん。
これからのことなんかわからないんだしさ。
もしこのままカオルがいいならその時は
きつと笑顔で「よかったね」って言ってくれよ。向田さんも！
さっ！もう戻らないと怪しまれちゃうよ？」

ニヤツと笑い背中をバシツと叩き

「なんだかんだ言っても羨ましいな〜 もう！」と言って歩き出した。

もつと軽くかぁ・・・

あまり納得できない気持ちで家に戻った。

夜中の1時過ぎにラビ達は帰っていった。

「じゃ、また連絡するね〜」そう言っただけラビは元気に車に乗り、窓をちよつとだけ開けて小声で話しかけてきた。

「こつちにいる間はちゃんとカオルのことだけ考えてあげなよ」そう言っただけ窓を閉め笑顔で手を振って帰っていった。

部屋に戻り、簡単に掃除をした。

空き缶をゴミ袋に入れながらテーブルを片付けているとソツを後ろからカオルが抱きしめてきた。

「大丈夫か？今日はそのままでもいいよ。風呂入って寝たほうがいい。なんかこう・・・抱いた感じも小さくなったぞ？」そう言っってもう一度ギュツと抱きしめた。

そのままカオルのほうを向いて胸に顔をつけ抱きついた。またジワ〜と目が熱くなった。

その涙がシャツを通して感じたのか

「ほら。早く風呂入っちゃえよ。まったく世話が焼けるなあ・・・」そう言っただけ風呂場のほうに歩いていきドアを開けて「さ。どーぞ」と言った。

お風呂からあがると二階の電気だけがついていた。
そのままタオルを巻いて二階にあがった。

「そこにパジャマあるよ」

CDを選びながらカオルが後ろを向いていた。
その後姿を見て、そっと抱きついた。

「なに〜誘ってんの？まいったな〜 疲れてるくせに〜」
そのままの状態で笑いながらCDを見ていた。

「痩せちゃったから、また胸が無くなっちゃったな・・・」
そう言っただけ抱きついたまま笑った。

「そうだな〜 背中にあたる感じじゃやっぱ小さくなったな」
そう言っただけこっちを向いて優しくキスをした。

頭の中にシーソーが浮かんだ。
向田さんに傾いていたシーソーが静かに動いた。
そしてカオルのほうに傾いていったような気がした・・・

その夜、抱かれながら心の中で無意識に謝っていた。
(ごめんね・・・) 何度もそう頭の中で呟いた。

そんなに泣くほど迷っていたのに、抱かれている時はいつものように感じた。

もったないかしら体はいつもと違うんじゃないかと思っていたのに・

終わってからカオルは

「いつもより激しかったような・・・」

男が疲れるとやりたくなるって聞いた

ことあったけど、女もなのかなあ・・・？」

そう言いながら肩にキスをした。

ものすごく眠気が襲ってきて

そのままカオルの腕に抱かれて眠った・・・

不思議と向田さんに悪いとは感じなかった。

（やっぱり・・・あたしはカオルのことが好きなんだ。きっとそうなんだ・・・）

自分に言い聞かせるように何度も心の中で呟き目を瞑った。

次の日、いつまでも起きないあたしにカオルが笑いながら

「お嬢さん・・・このままここで年越しするんですかあ？」と起こした。

「い・・・ま・・・何時・・・？」布団の中でモゾモゾするあたしに呆れながら

「もう昼過ぎていますよ？まったく・・・休みの日を想像したら10年の恋も

覚めちゃうなあ・・・」

「ごめん・・・しばらく寝てないような感じだったから。久しぶりに眠れた」

「早く支度して。正月の用意するのに買い物いこ」

「うん。すぐする。ちょっと待ってて」

そう言っただけで顔を洗った。

街に出ると結構な混みようだった。

カオルに手を引かれ忙しそうにしている人並みをぬい歩いた。適当にお正月っぽいものを買ひ込み、家に戻った。

「神社とか行く？初詣。夜のほうがいい？それとも朝？」

「やっぱり夜でしょ。12時過ぎたら行こうか？」

「ん。いいよ。有名どころがいい？それとも近所？」

「んー。そうだなあ・・・近所でいいかな。あんまり人がいっぱい嫌いだし。どこでも一緒でしょ？」

そう言っただけで年明けのことを話ながら、TVを見ていた。

定番のTVを見ながら、ふとした瞬間に向田さんのことを思い出した。

（今ごろ一人なのかなあ・・・それとも誰かと一緒なのかなあ・・・）

どーせなら誰か一緒にいてくれたほうがいいな。一人だと思つと心苦しいし・・・）

そんなことをちょっとだけ考えた。

年越しのカウントダウンを見て

「なんでこう、3、2、1とか見たらワクワクすんだろな？」
とカオルが笑った。

「今年もよろしくな。たくさん良いことあるといいな。俺達」

そう言っただけで年が明けた。

「うん。そうだね。あるといいね」

そう言いながら、心の中で（あるのかな？・・・）と思った。

神社に行き、カオルが

「これ仕事がつましくいってお守りだってさ」と二つ買い、一つをくれた。

「ありがとう。じゃあ、おみくじ引いてみる？」

そう言っただけで巫女さんにお金を渡してお互いおみくじを引いた。
あたしのはく吉だった。まあ・・・そんなもんだなと思った。
横で（うっわ・・・）と声を出したカオルを見た。

「俺・・・凶だった。生まれて初めてこんな引いた・・・」

ガツカリした顔をしながらおみくじの内容を真剣な顔で読んでいた。

「嘘お！凶なんて本当にあるんだ？見せて！見せて！なんて書いてるの？」

嬉しそうに言うあたしに、

「お前・・・なんでそんなに嬉しそうなの？もっと可哀相とか言えよ」

苦い顔をして見せてくれた。

「なにになに・・・」

<<総合運>自分の行動に責任を持てばそれなりな一年になるでしょう。

ただ軽はずみは行動はしないほうがよいでしょう>
そんなの当たり前じゃない・・・ なんだこれ？」

「そんなこと言ったら神様に聞こえるぞ！」と小さい声で言った。

「神様つて・・・」とカオルの言ったことが可笑しくて延々と笑っていた。

お互いの今年の運勢を見比べた。

「恋愛運なんて書いてる？」自分のを見ながらカオルが聞いた。

「えーとね。イケてないおみくじを引く彼はやめましょうだって」

「真面目に！」

「えーと・・・」「素直な気持ちに従えば吉。自然と答えはでるでしょう」「だって」

(だから当たり前だったっの・・・とまた思った。このまま時が過ぎれば

それなりの答えはでると思った。でもその時間の経過が苦しいのに・・・)

「カオルは？」覗き込んでカオルのおみくじを見た。

「んーと」「判断を正確に。一時的な嘘は最愛のモノを失う」
だって。なんだか凶だと思つとすべてダメになりそんな気がする
なあ・・・」

「なんだか難しくてよくわかんないな・・・ 気の持ちようじゃない？」

そう言つて側の木の枝にそれを縛り付けた。

「俺、持って帰ろうかなあ・・・ こんなの珍しいし」そう言つて
カオルは
凶のおみくじを財布に入れた。

帰り道（持つて帰つちやダメなんじゃない？今年ずーと凶だよ？）と
からかいながら家に戻つた。

朝までTVをつけたまま、ソファーに座つて話をしていた。
なんとなく言葉の端々にカオルが向田さんのことを聞いた。

「出張の間つてなにしてたの？」なにげなく聞かれた言葉に心臓が
痛くなつた。

「え？別に・・・ 疲れてるから早く寝てたり・・・」

「そつなの？健吾は元気だつたけど？」

「最初はハマるからじゃない？チャットつて？」

なんとかそつちの話に持つていこうと考えた。

「健吾が前に言つてた「向田さんに気をつけろ」ってなんだつたん

だろな？

なにか思い当たるの？」「そう言っただけ黙ってこっちを見た。

「い・・・や・・・？なにも？別に何も無い。うん。無い・・・」

「そつか。ならいいや。でも懂れてるって言ってもホモなんですよ？それでも懂れてるの？物好きだなあ・・・まゆつて・・・」

そう言っただけ眠そうな顔をしてあたしの膝の上に頭を乗せた。

(信じてるし・・・)

そのまま目を瞑って眠りそうなカオルの頭を撫でていた。

「あさつてうち行く？」目を瞑ったままカオルが聞いた。

忘れていた訳じゃないけど、やっぱり緊張した。

「あ・・・うん。いいよ。その日で」

きつとカオルの実家に挨拶をすれば、もっと自分の気持ちがちゃんと固まる。

「そつか。ちょっと遠いから、早めに出ないとなあ」

「うん。わかった」

カオルの髪を撫でながら答えた。

カオルはそのまま「少しだけ寝ていい？」

そう言っただけすぐに気持ちの良さそうな寝息をたてた・・・

眠るカオルを見つめながら、

(この人がいるのに、あたし何やってんだろう・・・)

何も疑うことが無いような無防備な顔を見て罪悪感だけが残った。

2日の朝、目覚ましをかけて7時に起きた。

朝からシャワーに入り濡れた髪で部屋に出ると、

「そこまで気合入れることないよ？適当でいいのに」と言いながら、タオルで髪を拭いてくれた。

まだ帰省が始まっていないのか、それとも渋滞しない道なのか
思っていたよりも道路は空いていた。

2時間ほど走り、カオルの実家に着いた。

玄関を見て、更に緊張した。

「大丈夫だつて。そんなに緊張しなくても！」

そう言つてカオルが玄関を開け入つていった。

奥からお母さんらしき人が歩いてきた。

ちよつと怖そうな感じが印象に残った。

リビングに行くとお父さん、お兄さん、たぶんお兄さんの奥さん、
妹が

テーブルにつき座っていた。

(完璧アウェイだ・・・ 負けそう・・・)
そう思いながら、もう一度頭を下げた。

「えーとね。吉本まゆさん」そうカオルに紹介されて、

「吉本です。始めまして・・・」そういってお辞儀をした。
もう何回頭を下げたんだろう・・・ 水を飲む鳥のオモチャが頭に
浮かんだ。

「あ。座って」そう言ってカオルは平気な顔で座った。

「あ・・・はい」言われた通りに急いで座った。

「吉本さん、お仕事は？」お母さんにいきなり聞かれた。

「はい。あの商品の買いつけの仕事をしています。雑貨とかインテリ
アの」
緊張して手に汗をかいているのを感じた。

「そうなの・・・ なんだか難しそうな仕事ねえ・・・」そう言って
(私にはわからないわ?)といった顔をした。

ちよっと説明しづらい仕事だよなあと自分でも思った。
そのお母さんの顔が妙に記憶に残った。
その後も年齢や家族構成、いつから付き合ってるの？
独り暮らしなの？と立て続けに聞かれた。

「お兄ちゃん結婚するの？」いきなり妹らしき、ちよっと派手めな

子が

横から口をはさんだ。きつと年からして、あたしより下に見えた。

「うーん。まあ、そうなればいいかなってさ。

こいつの仕事が一段落したら本腰いれて考えるよ。

ちよつと遠いからなかなか逢えなくて話も進まないけどな」

そう言っておせちを摘まんでいた。

なんとなくそんな感じはしていたけど、本当に口に出されると妙に緊張した。それもみんなの前で……

「遠いつてどこに住んでるの？吉本さん」妹が笑顔で聞いてきた。

「あ……あの北海道です」

言つてよかつたんだろうか……

家族全員が一斉にあたしを見た。

（ヤバい！カオルと付き合ってたきっかけの打ち合わせをするの忘れた！）

そう頭の中で叫んだ。

「北海道？そんな遠くの人となんで付き合うことになったの。お兄ちゃん？」

「あ……共通の友人の……その……」
カオルより先に口を挟んだ。

その慌てようを見てカオルが

「俺の知り合いが、まゆの会社にいるんだ。で、その人の紹介でな。今でもその人たまにまゆと東京に出張でよく来るから逢ってる」

健吾を共通の友達に仕立てた嘘を言った。
今となつてはまんざら嘘でもないけれど。

「へえ……でもそんなに遠くの人だと、いろいろ大変ね。
こつちに来るといつても親御さんはなにか言わないの？」
またお母さんが顔色を変えないで言った。

「あ……いや、仕事で忙しくてあまり家には帰っていないので……」

「あら？じゃあ今回のことも言っていないの？お正月なのに？」

「はい……」なんだか怒られているような気になった。

「いいじゃん。まゆの実家はなんかあつたらすぐ帰れるくらい近い
んだから。な？」

車で15分だったっけ？すぐ着いたよな？あの時
そう言つてカオルが間に入ってくれた。

「薫、貴方そちらの家に行ったの？いつ？」お母さんがちよつと怒
りながら言った。

「あー。いつだったっけ？10月くらいかな？だよな？」

（うん……）と軽く頭を下げたが怖くてお母さんを見れなかつ
た。

「貴方、そう何回も北海道に行つてるの？そんなに遠くに、
いくら彼女がいるからって……」眉間のシワが確実に不満を

表していた。

「そんなに何回も行ってないよ。休み無くてさ」
お母さんに淡々とカオルが言った。

「じゃあ・・・吉本さんはそんなにこっちに来ているの？」

まるで軽い取調べのようにお母さんに聞かれた。

「あ・・・あたしも仕事が忙しくてそんなには・・・」

でも仕事の関係で東京に出張ってこれからも多いので、

だからなんだと言うことを言ってしまったような気がした。

てゆうか、そんなに怒ることも無いような気がしたのも確かだった。

「そんなに仕事が忙しいのに、ちゃんと薫と付き合っていけるの？」

「あ・・・はい。そのつもりですが」弱々しく言った。

「じゃあちゃんと結婚も考えているんでしょ？あなた達。」

そんな仕事かどーとかじゃなくて、もっと真剣に考えないとダメじゃない」

なにが気に入らないのかお母さんは怒っていた。

「あー。うるせえ・・・だから帰ってきたくなかったんだってえ
！。

いいじゃん。俺達がいいって言ってんだから。なにかにつけ結婚
！結婚！て

そんなの時期がきたらちゃんと考えるって。まだいいじゃん」

カオルが面倒くさそうに言った。

その言葉を聞いてお母さんはそのまま台所に消えていった。ものすごく気まずかった。

(やっぱり来なきゃよかった……)

お母さんとは逆にお父さんもお兄さんも優しくかった。妹も「北海道ってどんなところ？」と気さくに話し掛けてくれて、それなりに話をすることはできた。

が……やっぱりお母さんだけはなんとなく、あたしのことを気に入って無いと感じた。

カオルは久しぶりに逢ったのか、お兄さんとなにかしら楽しそうに話をしていた。

2時間くらいしてからカオルが帰るようなことを言った。

「じゃ、そろそろ行くから。また何かあったら来るわ。たぶん仕事忙しいから

そうそう来れないけど、急用あったら電話して」

「薫、ちょっと待ちなさい」とお母さんがまた真顔で言い始めた。

「吉本さん。薫とこれからも付き合うなら仕事辞めてキッチンと薫の側に

来て、結婚考えてくれないかしら？そんな中途半端にお互い行き来して、

子供でもできてから結婚なんて世間体が悪いと思うの」

(うわ、なんか怖い…… ドラマみたいなこと言ってるし……)

・・・)

「だからあ・・・それは俺達で決めるから。母さんは口出しすんなって」

「口出しますよ！チャラチャラして！親に紹介するくらいの人ならきちんとしなさい。結婚したらこっちに帰ってくる約束は守ってもらいますよ」

(えええー！なにそれ？なにそれ？なに言ってるの？)

驚いてカオルを見た。

その視線に気がつきカオルはあたしから目をそらした。

「じゃ、またな。行こう！まゆ」そう言っカオルは歩き出した。

「あ。あの、お邪魔しました」

そう言って最後にみんなの前で頭を下げた。

玄関にみんな送りに着てくれてまた挨拶をしてドアを閉めた。

お母さんはその中にいなかった・・・

車が走り出し30分ほどお互いなにも言わずにいた。

「あの・・・ちょっと聞いていい？」カオルのほうを見て言った。

「あんまりよくない・・・」そう言っ前を向いていた。

「さっきのお母さんの話って・・・なに？」

「うーん・・・うちの兄ちゃんさ、嫁さんとこに婿入りなんだよねえ・・・」

だから・・・将来的に俺が家に戻るっていうか・・・そんな感じ」

ものすごい生々しい話を聞いてしまったような気がした。もっと軽く考えていた。

気軽にカオルの元に来て、一緒に楽しく暮らす・・・もしも今後、カオルと上手くいったらそう考えていた。

「それって・・・もう決まってるんだ・・・」

「まあ・・・そうなるんじゃないかなあ・・・で。でもすごい先のことだ

その、今すぐって訳じゃないし。今はまだ仕事だつてあるし。そんなことは考えてないんだけど、将来結婚したら・・・で。できるだけこの生々しい話を軽めに聞こえるように頑張っていた。

「ふーん・・・」これ以上にも言わないほうがいいと思った。

まだカオルと結婚がどうのということとは、特別話し合ったことは無いし・・・でも、東京で一緒に住むということを気軽に考えてはいけないと思った。

さっきのあの生々しい光景が目には焼きついていた。

「なんかひいてない？」チラリとこつちを見てカオルが言った。

「え……どんびき……」

「だよなあ……」そう言って苦笑いをした。

それからその話はしなかった。

今、その話をするとどんどんひいてしまう自分がいた。

カオルもなにも言わなかった。

やっぱり……まだ家に行くのは早すぎたんじゃないかと思った。

次の日。

初売りで賑わう街に出た。

なんとなくお互い、昨日のことでちょっと気まずくなっていた。

なんだかく好き>とかく一緒にいたい>だけじゃ乗り越えられないものがあるんだなあ……と感じた。

それでも、まだそんな先のことを考えても仕方ないと思い、カオルに気を使って普通の顔をした。

その日の夜。

ベットの中でカオルのお母さんの怒った顔を思い出した。

黙っているあたしのほうに体を向けて、カオルが言った。

「もし、こっちに来てもすぐには実家に戻らないから。しばらくはここで暮らそう？」

そのうちお互い結婚しようって時に改めて考えようよ」

「すぐには考えられないよ……もっといろんなことあるし……」

「いろんなことってなに？」スタンドの電気をつけてカオルが聞いた。

「いや、だって・・・カオル仕事どうするの？」

「ああ。うちのオヤジの会社について思ってる。今と同じような仕事だし」

そんなこと一言も言っていなかったのに・・・

「まゆ、仕事辞めない？辛いみたいだしさ。今の俺の給料でやっていけると思うんだ・・・家でんびりしたらいいじゃん。しばらくは二人で楽しくさ・・・」

「辛いけど、やっと仕事の楽しさわかってきたのに・・・そんなには辞めたくないな・・・」

それは本当だった。

「仕事、仕事ってさ・・・今のところに移ってからちょっと変わったよな」

なんとも言えない間が流れた・・・それと同時にものすごく不安になった。

「だって・・・いきなりそんなこと言われても・・・あたしがこっちに来るのって、この辺の人と付き合っただけで同棲しようっていうのと訳が違うじゃない。

誰も知らない土地で、カオルしかいなくて・・・

「仕事もやつと覚えてきたのに、すぐに辞めるとかできないよ・・・」

「そんなに仕事って大事？俺とどっちが大事？」ちよつと怒ったように言われた。

「そんなの比べる次元が違うよ・・・どっちも大切だもん・・・」

「俺のこと本当に好きなら、選べると思うよ」

お互い黙ったまま時間が過ぎていった。

カオルがベットから起きて下に行った。

そのまま一人でベットの中でまだ考えていた。

しばらくしても戻ってこないカオルに階段を降りて見に行くと一人でポツンとソファーに座ってビールを飲んでいた。その姿がとても小さく見えた。

「ごめん。まだちゃんと答えられなくて・・・」

そう言っ隣に座った。

「ん。俺もごめん。俺ばかりの都合言っちゃったな・・・」

「ううん・・・」

「最近さ、仕事に追われて毎日が過ぎるって感じですか・・・
たまにまゆと逢って、その時だけちよつと現実から離れられるっていうか、

そんな感じになってたんだよな。

だから、いつも側にいてくれたらいいな……。でも最近まゆも忙しいだろ？最初の頃の感じとかと少し違ってきてると思うってた。ネットもしないだろ？全然……」

「それは、そうだね。毎日忙しく時間が過ぎてるし、健吾がいるってのも

やっぱり引つかるの。ヤリずらいつて言うか……

あんなに最初は楽しかったのに、別に今じゃしなくていいかなとか……」

「まゆも離れるの嫌だって言ってたじゃん。一緒にいればそんなこと無いし」

きつとカオルはまだ軽く考えていると思った。

こっちに来て一緒に住むということは、もつとすごく大きなことだし。

二人で「一緒に住んじゃう？」と軽く冗談めいてふざけて言っていた時とはちよつと違う。

カオルの後ろにある家族の存在を目の当たりにして、
どんだん周りから固められているような気がして不安が大きくなつた。

けど、きつとこのままカオルと付き合っていけば、そう遠くないうちに

こっちに来なければならぬだろうなあ……

けど、それでいいのかなあ……

あたし後悔とかしないのかな……

次々といろんな問題ばかりが出てきて頭が痛くなった。

自分がどうしたいのか分からなくなった。

「すぐにはやっぱり答えはでないな……今日はもう寝よう?」

カオルの手を掴んで二階にあがった。

早く言えばこの話題から少し逃げたかった。

ベットに入って二人とも黙っていた。

いままで考えていなかった現実が目の前にあって、ふざけてばかりいた

日々が嘘のように感じた。

「このまま……まゆが戻ってしまったら、ちゃんと次に逢う時普通に逢えるかな?」

カオルがポツリと言った。

「逢えると……思う。ただちょっと今はなにも考えられ無いだけ」

「そっか……なんだろな。この重たい空気?」

「わかんない…… たぶんお母さんの怒った顔のせい」そう言っ
て笑った。

その言葉を聞いてカオルも一緒になって笑った。

「まじでキツイよな…… きつと兄さんが思ってもいなかった婿
入りなんかしたから、

俺まで北海道にでも行くと思ったのなあ……

初めて会ってあんなに喧嘩ごしじゃなくてもいいのにな」

「あたし殴られると思った・・・」クスクスと笑いながら、お母さんの話をした。

二人で笑いながらも・・・どこか重たい空気はすぐには消えなかった。

現実が大きすぎて・・・

最後の夜だと言うのに、お互いにも言わずにそのまま眠った。そんなことは始めてだった。

いつも逢えばどちらからとも無く自然と体を合わせることが当たり前のように

あたし達はいつもそうしていた。

現実 is 厳しいのかな・・・そう思った。

次の日、朝目覚ましをかけカオルが寝ている間に朝食の用意をした。最後の日くらいちゃんと彼女らしいことをしてあげたかった。

なかなか起きないカオルを起こしに二階に上がり、

「もう起きてくれないとご飯冷めちゃうな」と耳元で大きな声で言った。

「もう帰る日かぁ・・・ちょっと早くない？」と言ってそのまま布団の中に
あたしを引っ張り込んだ。

「ごめんね。文句は健吾に言って。早く帰るのはアイツのせいだから」

「あゝぁ・・・今度はいつ逢えるんだろなぁ・・・」
そう言いながら少し伸びたヒゲを頬にくつつけて動かした。

(痛い)と言いながら、二人でふざけあっていた……こんな風に生活できることだけを考えていたんだろうな……

「まゆ。将来のこと真剣に考えてみない？その、結婚はすぐにじゃなくて

とりあえず側に来て、一緒に住んでみようよ」

「うん……朝から頭が回らないなあ……」と笑って誤魔化した。

正直、もうその話はしばらく聞きたくなかった。

もつと結婚という言葉を聞く時は素直に嬉しそうに

「はい」と返事をするものだと思っていた。

でも、今の状況から言って素直に「はい」とは言えなかった。

「真面目に言ってるのに、そんな返事あるかよ？」

そう言っただけまたヒゲをくっ付けた。

なんて言っていていいかわからなかった。

きつとカオルの実家に行かずにその言葉を先に言われたら、

もしかして「うん」と言っただけかもしれない。

けど、ここでいま素直に返事をする事ができなかった。

「さ、ご飯冷めちゃうって言ったじゃない。早く起きて」

無理に笑顔を作り手を引っ張ってカオルをベットから起こした。

ご飯を食べるカオルを見ながら、なんとも言えない気分になってい

た。

離れる寂しさとは違う、モヤモヤとした気持ちになった。

普通、そんなことを言われたら嬉しくてたまらないのかもしれないのに、

（わ！言われちゃったよ！まいったな〜）と言ったほうがいい気持ちの自分に

申し訳なくなった。

憧れていた結婚ということは、歳を重ねて現実味がましてくるとこども生々しいものなんだと思った。

後片付けをして二階に荷物の整理をしに行った。

一緒に二階に来てその姿を黙ってカオルは見ていた。視線がちよつと痛かった。

「返事は急がないよ。今はすぐには返事できないんだろ？」

でも、俺はちゃんと真面目に考えてるから」

「うん・・・」

「家のこと言わなかったのは、その、なんていうか言えなかったんだ・・・」

普通嫌がるだろ？いま時同居なんて。でも、独り暮らしの時点でそれが約束っていうか・・・」

「それってさ、絶対なのかな？」

「だからすぐじゃないよ。もしこっちに来たら、しばらくはいいし」

あー見えて、母さん病弱でさ。だから誰か側にいないと・・・」

そのくしばらくっつてどれくらいなんだろう・・・
聞きたいような、聞くとそこから抜けられなくなるような、そんな
気分で

「うん・・・」と言った。

「あまり深く考えないで」そう言って黙ってこっちを見ていた。

「さすがにこれは深く考えるでしょ・・・」
そう言ってトランクを持ち上げた。

「だからこっちに来てすぐ結婚とは言わないから。しばらく気楽
にしよう？」

で、その後のことはまた考えよう？仕事もそんなに真剣になるな
よ。

もっとさあ・・・こう・・・一緒にいること楽しもう？」

「でも・・・気楽に「じゃ！一緒に住んでみようかな」なんて言
える

距離じゃないよ。やっぱり覚悟が必要だもん・・・

勢いで動いて失敗したくないの。戸籍に傷はつけたくないじゃん
？」

そう言って無理に笑った。

「傷はつけないよ。大丈夫だから」額にキスをしながら言った。

少しだけ笑って頷いた。けどそんな保障がどこにも無いのに、
軽く言うカオルのことを内心信じていいのか、また不安になった。

空港に向う車の中、やっとこの重い空気から逃げられると思った。しばらくこの話はしないで、前のように楽しいことだけ考えたかった。

カオルのことは好きだけど、全部を背負う勇気がまだ自分には無い。

「今日はこれから仕事するの?」

帰省ラッシュの人混みで手を繋ぎながらカオルが聞いた。

「うん。一度会社に行かないとね。メールきてると思うし。」

でも健吾の担当なんだよ? あつたまくるよね」

「次に逢う時まで、いま以上に痩せてたら速攻仕事辞めさせるからな?」

そう言つてカオルが怒つたふりをした。

「ん。頑張る。仕事も食べることも」

「0.1グラムでも辞めてもらつからな」そう言つて笑つた。

「逆に10キロくらい太つてくるよ」と言つと「それはちょっと・

・」と言つて

苦笑いした。

時間になり、

「じゃ、また近いうちに仕事でこっちに来ることあるみたいだから連絡するね。それまで元気だね」

「うん。後、たまにネットしてよ。画面の中に入れてくれるだけでちょっと安心するから」そう言つて人の目を気にせず抱きしめた。

「わかった。これからそうする」そう言って背中にまわした手におもいきり力を入れてギュッと抱きしめた。

そのままイイ雰囲気を抱き合っていることが恥ずかしくて悪戯をした。

「うっ・・・」と言ってカオルが笑って離れた。

「じゃーね」「うん。またな」そう言って手を振って別れた。

ほんの少しだけ寂しい気持ちになったけど、いつもとは違った。

席に座ってからため息をついて目を閉じた。

今年は本当に良い年になるのかなあ・・・

おみくじの運勢を思い出しながら、ぼんやりそんなことを考えた。

カオルのことは好きだけど・・・将来あのお母さんと一緒に暮らすのかあ・・・

おまけに体が弱いつて、寝たきりとかになるのかなあ・・・

そうだったら、あたしが全部しなきゃならないのかなあ・・・

カオルのことより、あのお母さんの顔が浮んだ。

北海道に戻ると駐車場の車に笑ってしまっただけ雪が積もっていた。スノーブラシで屋根の雪を降ろしながら、

（同じ日本かよあ・・・）と呟きながら冷えた体で車に乗ったヒーターが暖まる間、到着を知らせるメールをカオルに送った。

アイスバーンになった道路を慎重に運転しながら会社に向った。数人の人がもうデスクにいて、

何人かの人に「あけましておめでとうございます」と挨拶をし、健吾のパソコンをオンにしてメールを確認した。

やっと自分の居場所に戻ったようで、妙にホツとした。

何件かの如何わしいスパムメールを見て、
（あいつ・・・仕事中にどこ見てんだ？）と思いながら、
仕事のメールを開きプリンターで印刷をした。

明日の打ち合わせに必要な書類を用意し、少しだけ年明け用の仕事に手をつけ、
切りの良い所でコーヒーを取りにいった。

そこに同じ商品課の中山さんと顔を合わせた。

「あれ？もう仕事？まだ2日あるじゃん？」と言いながら珈琲を注いでくれた。

「あ・・・松永さんのとこの仕事があつて。松永さん用事があるのであたしが代わりに明日行くんです。その資料取りに・・・」
そう言いながら紙コップを受け取った。

「そついや、さつき向田もいたなあ？あいつも仕事人間だな」
砂糖を入れながら中山さんが独り言のように呟いた。

「そうなんですかあ・・・」ドキツとしながら平然な顔をして笑った。

「そつだ！向田の携帯見たよ」なに？どんな関係なのさ？」
横目でニヤリとして言われた。

「出張の時、ゲーセン行っただけですよ。なにもないですつて」
そう言つて足早にその場所を離れた。

すっかり向田さんのことを忘れていた。

初日こそ、頭の中にあっただけあの一件でスッキリ消えていた。

席に戻り、だいたい目途がついた所で手を止めた。

下手したら明日も打ち合わせの後に仕事をしてしまいそうだった。

スッキリ仕事中毒だな……。覚え始めは何事もハマる性格らしい。

「さ。もう帰ろうつと……。せつかくの休みだし大掃除もしてないや……」

明日の資料を封筒に入れて、エレベーターに向った。

まだ正月休みでフロアはシーンとしていた。

「2」・「3」・「4」とボタンの電気が動き「5」に止まって扉が開いた。

中には難しそうな顔をして書類を見ている向田さんがいた。

「あ……」

「あ……おかえり。でもなんで会社に？」

「あ。明日の書類を取りに……」

「そうなんだ？明日何時まで？」

「たぶん午前中で終わります」

「そうかあ……。じゃあ俺も明日と明後日は休もうかなあ……」

終わったらうちに来てよ。あけましておめでと。じゃ、お疲れ」

そう言ってニコニコして去っていった。

手を振ったままのかたちで手が止まり、その場に黙って立っていた。どうして向田さんに言われると、何も言えなくなってしまうんだろ
う。

エレベーターの扉が閉まり、電気は「5」のままで止まっていた。

揺れる心

翌日の打ち合わせは思ったよりも時間がかからずに終わった。

「ふう……。思ったよりもスムーズにいったな」

どちらかというと苦手なメーカーさんだったこともあり、本当は休みを返上してでも

健吾にやらせたかった所だけど、運良く苦手な担当さんもお休みだったので

お互い2番手同士の打ち合わせは簡単に終わった。

時計を見ると11時少し前だったこともあり、まだ少しだけ正月気分の街を車で走った。

(向田さんの家に行くのどうしよう……。)

行ってちゃんと「もう二人で逢うことはしません」ときちんとお話ししないと

ダメなのに、言えないような気持ちもあった。

どちらしにてもまだ時間が早いし、たまにゆっくり買い物でもしようとして

デパートに車を停めた。

いろいろ買い物をして、ここ最近の暗い気分が少しだけ晴れた。

もう帰ろうかと出口を探していると、

ふと見たバーバリーのショップにネクタイが並んでいるのが見えた。

（そういえば・・・向田さんにクリスマスのお返ししてないなあ・・・）

そんなことを思って、フタリと中に入ってみた。

「いらつしやいませプレゼントですか？」

「はあ・・・」

「お歳はおいくつですか？その方は」

「えーと36歳です」

「じゃあこんな感じでどうでしょう？」

そう差し出された物は茶色の小さい柄が散りばめられていて、
なんだかオジサン臭くとても地味に見えた。

（違つてば。そうじゃないんだよな）

横のクリーム色のチェック柄を手にとり眺めていた。

「そちらも素敵ですが、ちょっと色が派手かと・・・」

「いいえ。いいんです。これをお願いします」

そう言つてそのネクタイを渡した。

世間で36歳はもう地味なネクタイをする歳なんだなと感じたが、
でも向田さんにはこのネクタイが似合うと思った。

ちよつと腑に落ちない顔をして店員がそれを受け取り包装をしてくれた。

(でもなあ・・・いつ渡そうかなあ・・・家に行くのはなあ・・・)

そう考えながら店を出るとちょうどタイミング良く
向田さんからのメールを受信した。

<もう終わった？悪いんだけど煙草買ってきてくれるかな？ごめんね。

車は俺の後ろに停めるといいよ>

(わっ・・・パシリかよ！)

煙草を買い、頼まれたから持っていかないとなあ・・・

そう思いながら向田さんの家に

向い言われた通りの場所に車を停めてマンションに入った。

「あ。ごめんね。おつかいなんか頼んで。入って」とドアを開けて
顔を出した。

「いえ。あ、これどうぞ。あたしは、ここで失礼します」

「どうして？お茶くらい飲んでいきなよ。せっかくその為に休み取
ったんだから」

そう言われてしまうと、その場で帰るのは失礼な気がして、
ほんの少しのつもりでお邪魔することにした。

「じゃ、ちょっとだけお邪魔します・・・

あ、これ煙草。2個で良かったですか？」

「うん。ありがと。何個でもいいよ」と棚に置いた。
そこにはカートンの箱があった。

「煙草あつたんですか？あれ・・・」そう指差すと、

「そうでも言わないと来ない気だったでしょ？帰ろうと思ってなかつた？」

「なんだか行動とか考えてること、全部見透かされてる感じですねえ」

「うん。なんとなくわかるんだ。まゆちゃん特にわかりやすいしね。とりあえず座ってよ」そう言っつてキッチンに消えていった。

カップを2つ持って歩いてきた向田さんに、

「あのコレ、遅くなりましたけどクリスマスプレゼントです」とさっきのネクタイを渡した。

「これ東京で買ったの？」

「いえ、さっき買いました。ちょっと買い物いったんで」

「そう。なら受け取ろうかな。彼氏と一緒に選んだならやめとこうと思っただけど、

開けていい？」

「はい・・・」

(彼氏)と言われると、ちょっと胸が痛んだ。

「俺の好きなブランド知ってたんだ？」

「あ……はい。いつもそのだなんて思ってたんで。変ですか？
それ」

「ううん！すごくいいね。ありがと。後、煙草の銘柄も言っていないけど、

きつとまゆちゃんは覚えてるって思ってたんだ」

ストーカーのように向田さんのことを知ってると思われたようで恥ずかしくなった。

いつも飲むお茶も、販売機で買う珈琲も、好きなガムも、
なんとなく知っていた。たぶんそれくらいいつも自然に見ていた。

「今日はどこ行くの？」

「あ……どこって……」

「明日も休みだしね。それともDVDでも借りてこようか？
たまにゆっくりそんなことしてみたいなー。でも一人じゃ借り
にくいのも

面倒臭くってね。一緒に見てくれない？まゆちゃんの好きなので
いいから」

「うーん……でも……」

「彼氏から電話がくるとか？俺はいいよ。別に隣で話ても」

そう言いながら上着を着ていた。

「あ、いや、それは無いですけど」

「じゃあいいじゃない。帰りにどこかで買い物してなにか作ろうか？俺、料理上手なんだよ？ご馳走するよ！さ、いこ」

向田さんはニコニコとニットキャップをかぶり玄関に歩いていった。慌てて向田さんを追いかけて玄関に行った。

車の場所を入れ替え、向田さんの車で近くのビデオショップに行った。

「好きなを選んで」と言われ、棚を見てどれにしようか選んだ。

(一緒に見るなら恋愛モノはダメだよなあ〜きつとラブシーンでどんな顔をしていいか困っちゃうしい・・・)

散々迷いながらいろいろ選んでいたが、結局選びきれずに譲ることにした。

「あの、向田さんが選んでください。あたしなんでも見ますから。どんなのが好きなのかわからないし・・・」

「そうだなあ・・・」

そういつて適当に2本選びカウンターに消えていった。

居なくなつたのを確認してから本体の抜けたケースを見ると、バリバリな恋愛モノだった！

それもかなりハードそうで挿絵の写真があきらかにベットシーンだった。

（うつわぁ・・・）そう思いながらケースを置いた。

それから近くのスーパーに行き並んでカートを押しながら買い物をした。

普段着の向田さんはやはり歳よりかなり若く見え、全然歳の差は感じなかった。

あれこれと言いながら買い物をしているうちに、ふと

（これがいつもならなあ・・・）そんなことを一瞬思った。

「あれゝまゆじゃない！どうしたの？こんな所で」

その声に振りかえると直子がいて瞬時に血の気が引いた。

隣に歩いてきて、あたしの隣にいた向田さんを見た。

一瞬帽子のせいで誰かわからなかったようだが、

じつくり顔を見てその人が誰かを認識したようだった。

「わっ・・・」と言った後に慌てて頭を下げていた。

それ以上話すこと無く、

「じゃ・・・また会社でね」と小声で言い一緒にいた彼氏と走っていった。

「これで仕事はじめにはもう噂になっちゃうね」

「マズいんじゃないですか・・・それって」

「別に〜うちの会社は社内恋愛多いでしょ。問題無いんじゃない？」
そう言いながらカートを押して歩いていった。
なにがどう良いのかわからないまま後ろをついていった。

家に着き、一緒にキッチンに並び料理をする向田さんを見てみると、とても手際が良く、あたしより上手なのではないかと思った。

「一人が長いとなんでもできるようになったちゃってね」
そう言っって手際よく料理を作っっていった。

（これは、もはや「なんでも」って域を跳び越していると思うし・
）

包丁の使い方から味付けまで何からなにまで下手に
手伝っつと邪魔じゃないかと思うくらいの上手さだった。

「じゃ、先に食べちゃおうか？あとからゆっくりDVD見ようよ」
そう言っつてワインを持ってきて二人分グラスに注いだ。

「あ。でも車なので、あたしはいいです」
「どーせそんなに飲まないでしょ？大丈夫だよ」

なんだかやっぱりこの人になにか言われると、それに従わないとい
けない
気がしていわれた通りにグラスを口に運んだ。

どの料理もプロ並みだと思った。

この人はなんでもできるなあ……
失敗することなんか無いんじゃないかとさえ思った。

洗い物を一緒に終え、「じゃここに来て」そう言われて座った。

軽いおつまみとさつきと違うワインをテーブルに置いてDVDのリモコンを押した。

軽く一杯しか飲んでいないのに、どことなく酔ってるような気がした。

それが緊張なのか酔いなのかわからなかった。

「もう今日は運転できないんじゃない？」

「いえ、大丈夫です」

「でも、俺は無理かなあ……」TVを見たままワインを飲んだ。

「あ、いえ、送ってもらわなくても大丈夫ですから」

「いや、車……俺が動かさないとまゆちゃんの車でないよ？」

でも、今日はもう無理かな。酔ってるから。ベロベロに

「全然、普通じゃないですか！それに数メートルだし！」

「いいじゃない？どーせ俺達、一晩過ごした仲なんだから」

「だって、なにも無かったじゃないですか！」

この前のことを思い出すだけで顔が赤くなった。

「そう？本当はなにかあったんだよ？俺、服脱がせるのも、着せるのも上手なんだ」

「ええっ！　そうなんですか？」

「嘘だよ。さすがにあそこまでキチンと着せることはできないよ」

そう言っただけで大笑いをした。

からかわれて、どんな顔をしていいかわからなかった。

「まあ、映画終わってから車動かすよ。安心して」

向田さんの選んだ映画は思いのほか面白かった。

でも、内容が二人の男性の間でどちらにいいこうか悩む女性の話で、見ていて（なんだかなあ・・・）と思った。

激しいラブシーンが画面の中に延々と続き、さすがに最初は
そ知らぬ顔をして見ていたが、あまりに長く部屋に響く女優の声に
まいったなあ・・・と思っていた。

「なんだかAVに近いな、ここまで長いと」そう言いながらも
向田さんは結構楽しそうに見ていた。

なんと答えていいかわからず「そうですね」とだけ答えた。

（向田さんも、そんなの見るのかなあ？　なんかちよつと意外かも）

澄ました顔をして画面を見る向田さんをチラチラと見ていたが、
別に鼻の下を伸ばす訳でも無く、ニヤニヤとする訳では無く・・・
なんとなく初めてカオルと泊まったホテルでのAVのTVのことを
思い出し、慌てた顔が浮かび少しだけ笑いそうになった。

映画も終わり、時計を見ると11時になっていた。

（そろそろ帰ろうかなあ・・・車のキー借りて動かそうかなあ・・・）

「今、帰ろうと思ってたでしょ？」

「そろそろ遅いですからね」

「もうちょっと話さない？」そう言ってグラスを渡された。

「話すのはいいけど、もうお酒はいいです。帰れなくなるから」
そう言ってグラスをテーブルに置いた。

「東京どうだった？楽しかったかい？」

手放して楽しかったと言えるような休みでは無かったと思った。
忘れていたことを思い出し、ちょっと暗い気分になった。

「少しでも俺のこと思い出してくれたことあった？」

「そうですね・・・やっぱり彼の顔見て悪くなって思いました」

「少しでも考えたってことは、ちょっとは気になってくれたんだ？」

真っ直ぐに目を見られ、そのままにも言えなかった。

別に責められている訳でもないのに、居たたまれない気分になった。

「あんまり楽しくなかったみたいだね」そう言って煙草に火をつけた。

「そうですね・・・いろいろあったから。いつものようには
楽しめなかったような気がします」

向田さんの煙草の箱をいじりながら、ちよつと笑った。

「そのくいろいろってところは聞いてもいい？それとも聞かないほうがいい？」

「聞いてほしいような、聞いてほしくないような……でも上手く言えないです。なんだか……」

指でパタパタと倒していた箱が勢いよくテーブルの下に飛んでいった。

「いいよ。上手く言えるまで聞いてあげるから」そう言って箱を拾い手渡してくれた。

「いいえ。なんだか彼の悪口になってしまいそうなのでやめておきます」

「そっか。じゃあもう聞かないよ」

煙草を灰皿にギュツと押し付けて消した。

そう言ってくれたのは、ありがたかった。

たぶん愚痴に近いことを言ってしまいそうだったし、その話に対して優しくされると、向田さんに逃げたくなりそうだった。

「じゃ、そろそろ帰ります。今日はごちそうさまでした」

「そっか。じゃ、行こうか。車動かすよ」

ダウンを着こんで玄関に歩いていく向田さんの後姿を見ながら、

ほんの少しだけ、このままここにいたかった自分がいた。

玄関で靴を履き、ドアに手をかけた向田さんが振り返り

「本当に帰りたい？そんな顔してないけど？」と顔を覗き込んだ。

「本当によくわかるんですね・・・」

「今日ここに泊まったら、もう二度と彼氏には逢ってほしくないなでも、まだそこまで気持ちは固まっていないんでしょ？」

今日は帰ったほうがいいね・・・ってそう言っただけでしよ？俺の口から」

「なんだか向田さんには敵いませんね・・・」

「俺はジワジワいくよ」そう言っただけで笑った。

車を動かしてもらい、自分の車に乗りエンジンをかけた。ピンとした寒さが体を冷やした。

自分の車を止め直し出てくる向田さんを待ち窓を開けて挨拶をした。

「それじゃ、あさって会社で」

「ゆつくり休むんだよ。明日も暇ならおいで。家にいるから」

「いいえ、やめときます。なんだか胃が痛くなりそうだから」

「じゃ、気をつけて」そう言っただけで手を振った。

窓を閉め、軽く頭を下げ車を出した。

一人になり、自分で自分の首をどんどん締めていると感じた。

どちらかをきちんと選ばなければ・・・

どちらも自分には勿体ないほど素敵な人なのに。

不安と焦りが入り混じった気分で体がジンジンした。

家に帰り、力の抜けた体をソファ―に落とした。
いくら考えても答えはでなかった。

ベットの横のカオルの写真を見ながら、さっきのことを考えていた。
きつと向田さんが

「今日は泊まっていきなさい」とあの玄関で言われたら、
あたしは今ごろ向田さんの家のにいたかもしれない。

あたしは軽い女なんだなと思った。

昨日、カオルに良い顔をし、今日は向田さんに良い顔をする。
そんな自分が嫌いになった。

誰かに「この人にしなさい」と決めて欲しいとすら思った。
自分の考えの無さにため息しか出ない……

この一ヶ月あまりの間に思ってもいなかったことが多くありすぎた。
どうして、もっとタイミングのいい感覚で物事が進まないのだろう。

もつと前にさかのぼるのならば、
カオルに逢う前に向田さんとこんな風になっていたなら、きつとあ
たしは

それほどチャットをしなかったかもしれない。
もしやっていたとしても……カオルに会うことは無かっただろう
な。

そんな架空の話を考える暇なんか無いのに、

そんなことを考えてその場に黙って座っていた。

携帯が鳴り、画面の文字に「向田 直樹」の文字が光った。

「もしもし？」

「あ。俺だけど。無事に家に着いたかい？」

「はい。大丈夫です。今日はありがとうございました」

「いえ。こちらこそ付き合ってもらってありがとうね」

「あの・・・向田さん」

「なに？」

「あ・・・いえ・・・なんでもないです。その、おやすみなさい」

「うん。おやすみ。後・・・明日、暇ならおいで、待ってるから。
じゃーね」

余計なことを言わずそれだけ言って向田さんの電話は切れた。

（本当にジワジワくるな・・・この人・・・）

その日、いくら目を瞑ってもなかなか眠りに落ちることは無かった。
いつまでも頭の中にカオルと向田さんが浮び、

どちらとも決められないまま夜がふけていった。

約束したのに、さすがに今日はパソコンの電源は入れられなかった。
もう年末からずーとメールのチェックすらしていない。

あれほど毎日、TVをつけなくてもパソコンはつけていたのに・・・
暗闇からパソコンを黙ってみていた。
初めの頃が懐かしくなった・・・

最後の夜

頭の痛くなつた正月休みが終わり、またいつものリズムで仕事が始まった。

毎日が仕事に追われ、家に帰る時間は早くて夜の10時。

書類の締め切り日になると深夜0時になることさえあつた。

それでも、また仕事中心すぎる毎日がバレルと、

カオルがいい顔をしないと、家に帰りパソコンをオンにし、

取り合えずチャットの部屋にログインし、それからお風呂に入ったりと、週に1〜2回一応は気を使った。

けれどカオルも忙しいのか、それほど頻繁にはネットをしていなかった。

あたしなんか、これほど忙しいのだから当然向田さんの

忙しさは比べ物にならないくらいだった。

それでも顔色ひとつ変えずに淡々と仕事をこなしている姿に感心した。

社内にはなんとなく向田さんとあたしの噂が広まっていた。

直子にいろいろ聞かれ、偶然会つたと誤魔化したか、

そんな嘘は見破られ大げさな噂がジワジワと広がっていった。

向田さんの携帯の裏のプリクラも剥がすことなく、

そのままの状態にそれを見た人達は噂というよりも確定という感じに思っている人もいるようだった。

けれど、そんな噂の広がり具合とは逆に向田さんは仕事が忙しく、

あのお正月休み以来、二人きりで逢う機会は無かった。

たまにすれ違う時に、

「仕事が落ち着いたら連絡するね。その時は時間あけてね」と言っていたが、なかなかそんな時間は無いようだった。

その分カオルのことを考える時間は増えた。

けれどやはり時間が経ってもあの話は考えれば考えるほどひいていた。

まだすぐのことでは無いと分かっていたが、なかなか決心ができませんにいた。

1月の終わりに東京へ出張があった。

今回は月々水の3日間で、初日にメーカーさんと食事があり、カオルに逢えるのは火曜の夜だけの予定だった。

一日しか無いのだからと健吾が気を使っていた。

「俺は次の出張の時にゆっくり逢うから、今回は一人で行ってこいよ」

なんとなくカオルと二人きりで逢うことにちょっと戸惑った。

事前にチャットで出張だからと伝えた時に、その場に健吾もいてカオルも健吾に気を使った。

「じゃあ、またみんな一緒に食事しようよ!」

カオルの出す文字に健吾は一応返事をしていた。

当日、カオルも楽しみにしてたから一緒に行こうと誘い、健吾も一緒に食事に行くことになった。あたしとしてはありがたかった。

その当日、7時過ぎにカオルがホテルに来た。

この前のホテルとは違う所だったので、その日カオルは車だった。

「じゃあ、今日はまゆに運転してもらって、明日送ってもいいかな？」

「それがいいんじゃないか？いま捕まると罰金高いしな」

そんなことを言いながら、二人は飲んでいた。

またちょっと仲間はずれた話の中、特に会話に参加することも無くモソモソと横で食事をしながら、会話を聞いていた。

（もう少し時間を置いてから逢いたかったな）

なんだかいつも逢っていないのが普通になってくると、4週間後にまた会うというのは、とても早く感じられた。

その気持ちの変化に自分でも少し困惑した。

あれほどいつも一緒にいたいと思っていた気持ちは少しずつ変わりがつあった。

健吾と別れカオルの家に着き、いつものように話をしていた。

「一ヶ月ぶりくらいだけど、今回は痩せてなかったな」

「うん。忙しい分、ジャンクフードだからかなあ……」

「そのうち腹だけできるかもなあ……」

「カオルも仕事忙しいんでしょ？大丈夫？」

「ん。なんとか生きてるよ」

そう言ったカオルの顔が妙に疲れているような感じがした。

ここ最近、それほどお互いメールもしていなく、

カオルも結構遅くに帰っているようで、気を使ってチャットにログインしても

まともに話をするのは週末くらいだった。

なんとなくそんなカオルを見て可哀相な気分になった。

やっぱり疲れてる時や辛い時に側にいてあげられない恋人なんてなんの意味も無いのかな……

その日、携帯の目覚ましをセットしながら

眠そうな顔をしているカオルに、

「疲れた顔してるね……もう寝ようか」そう言って電気を消した。

「うっそ！久しぶりに逢ってそれは無いと思うよ」

「だって、目が死んだ魚のようになってるもん。ちゃんと寝てる？」

「寝てるって！今日くらいちょっと遅くなっても問題無い！」

そう言って横になっているあたしの上に乗る、

「まゆはしたくないの？もう飽きちゃった？」と聞いた。

「そんなことないよ？でも疲れてるなら・・・と思って」
「疲れてるからしたくならない？」そう言ってキスをした。

そう言われれば、そんな感じもした。
体はものすごく疲れているのに、それとは逆にいつもよりも感じるような気がした。

自然と自分からも体が動きカオルに
「もつと・・・きて・・・」とねだる声がでた。

そんなあたしを見てゆっくりと動きながら、
「ね？側にいたらいつもできるよ」と小さく耳元でカオルは言った。
こんな時にそんなことを言われたら、なんでも頷いてしまいたいそうになった。

「いま・・・そんなこと言わないで・・・」
そう言ってカオルの口を唇で塞いだ。

少し体を離し反応を見ながら動きを早めたり止めたりと
いつものように焦らすにいいだけ焦らしてカオルは楽しんでいた。
カーテンが最後まで閉まっていけない窓から月明かりが入り、
目が慣れてくると、その顔の表情までハッキリ見えた。

「意地悪そうな顔がハッキリ見える・・・」
薄く目を開けるとそんな少しだけ口元が笑った表情のカオルが見えた。

「いや？気持ち良さそうな顔してるなあ〜と思ってさ。
他のやつに抱かれてもそんな顔すんのかなあ・・・」

「さあ？自分の顔は見えないもん」

カオルの腕枕で眠りにつく頃、窓を見上げながらカオルは「まだ決心はつかない？」と聞いた。

それを考える時間が無かった訳じゃないのに、まだなにも答えはでていなく、寝たフリをして、なにも答えなかった。

「やっぱ嫌か……」ため息にも諦めにも聞こえる声で言った。

一緒にいたいような、でも本当にOKをしているのか考えながら黙ってカオルの胸に顔をつけた。

「会社の子がさ……」

きつと起きているのを知ってカオルが話を続けた。

「彼女いるの知ってるけど、遠くにいるなら暇な時遊びませんか？
って

言ってくる子がいてさ。別にその子に特別興味があるわけじゃないけど、

休みの日とか暇だし、どうすればいいと思う？」

その子と遊ぶにしてもなにも言わないでいてほしかったと寂しい気持ちになった。

きつといつまでも返事をしないあたしにカオルは怒ってるんだ。

「カオルはどうしたいの？」

「俺はまゆに側にいてほしい。けど、それがダメならわからない。だから決めて」

「そんなこと言わなくていいよ・・・」

「怒らないんだ？」

「普通は言わないでしょ・・・そんなこと・・・」

それだけ言って黙った。自分は向田さんに気持ちが揺れたりしていたくせに、やっぱりカオルがそんなことを言うと少し腹がたつた。

だからと言って、ダメだと言った所で今、自分がすぐこっちに来ることが
できるのかと聞かれれば返事ができない。

お互いにも言わずに黙っていた。壁にかけた時計の秒針の音だけが部屋に響いた。それまでそんな音があったことも知らなかった。

そのうちカオルの寝息が聞こえた。体を起こして隣に座り、黙って顔を見ると、やっぱり少し疲れた顔に見えた。

（もうダメなのかな・・・）

起こさないように服を着て、目覚ましをいつもの時間に合わせカオルの家を出た。

送らなくて良い分、少しでも眠ってほしかった。

このまま一緒にいたら泣いてしまいそうで、カオルの側にいることが辛かった。

泣くくらいならば、

「そんな子と遊んじゃダメ！あたしすぐこっちに来るから！」
顔のひとつも抓れば、この話しは笑い話になるのに……

車の通りがある所まで、ぼんやりと歩いた。

前にこの道を歩いた時には、こんな気持ちで歩くななんて思ってもいなかった。

二人で手を繋いで笑いながら歩いていたのに……

人通りの無い道路を歩きながら、少しだけ目がジワツとした。

空車を見つけてホテルまで帰り、

部屋に入った瞬間に、いままで我慢していた涙が溢れた……

その涙がカオルにたいして怒っているからなのか、

いつまでも決められない自分に腹がたつてなのか、わからなかった。

きっと良いことと悪いことは公平なのかもしれない。

いままで良いことが多すぎたんだ。

窓の外が少し明るくなり、
時計を見ると5時を指していた。

（今日は帰るだけだから・・・まあ・・・いいか）

バスタブにお湯を溜め、いっぱいになるまで流れ落ちる湯を
黙って見つめていた。

ホテルのバスタブを見て最初にカオルに逢った日のことを思い出し、
また涙が溢れた。

これで終わりかもしれないと思うと、何を見ても涙がでた。

それほどカオルのことを好きなのに、どうして決めきれないんだろ
うと

思うといつまでも涙が止まらなかった。

タオルを冷やし、お湯につかりながら目を冷やしたけれど、
それでも溢れてくる涙にタオルがすぐに温かくなった。

1時間ほどお風呂に入り、部屋に出た。

のぼせているような感じがして、そのまま裸でベットの上に横になり
ボーとしながら部屋の中を見ていた。

6時を過ぎた頃、隣の健吾の部屋でドアを開け閉めする音がした。

（もうそんな時間か・・・）

ぐずぐずと体を動かし支度を始めた。

1時間くらいしてドアをノックする音に気がつき開けると健吾がいた。

「なんか音したからさ。もう帰ってきたんだ？ て、なにその目！ 真っ赤だけど泣いてたのか？ 喧嘩したのか？」

健吾の顔を見て、また泣きそうになった。

「うん。寝不足なだけ。何時に出る？ 早めに空港行くとか。あっちでご飯食べよう。もう用意できてるから」

そう言っつて部屋に戻りトランクをひき廊下に出た。

「あ……うん。ちょっと待って……」

今すぐにでも東京を離れたかった。
健吾はなにも言わずにたまたまにチラッとこっちを見たが、それ以上のことはなにも言わず黙っていた。

空港に向うタクシーの中で携帯が鳴った。

画面に「矢吹 薫」の文字を見た。

黙って携帯を見ているあたしに、健吾が「出ないのか？」と聞いた。

「ん。いいの……」そういつて電源を落とした。

「そっか……」気まずそうな顔をして健吾もそれ以上言わなかった。

すぐに健吾の携帯が鳴り、そっちを見ないで黙って外を見ていた。

「あの、出てもいい？」

「健吾の携帯だからお好きに・・・」

また黙って外を見ていた。きっと相手はカオルだ。

「もしもし？・・・ああ・・・うん・・・そう・・・」

言葉をハッキリ言わずに、ただ返事だけで会話をしている健吾が気をつかっていると申し訳なくなった。

「もしもし？あれ・・・もしもし？」

声が聞こえないのか、健吾が何度も「もしもし」を繰り返したのを聞いて

運転手が声をかけてきた。

「この辺は電波悪いんだよね」 移動してるのもあるし「

「あ。はい。わかりました」と電話を閉じ黙っていた。

空港に着き窓口のお姉さんに

「一便早い飛行機に空席があるなら変更したいのですが？」と聞くと平日ということもあり、余裕で変更してくれた。

それでも1時間ほど時間があり、空港内のレストランに健吾と入っ

た。
まったくといっていいほど食欲が無く、珈琲を飲むと胃が痛くなり
そう
それで
ミルクティーを頼み黙ってそれを飲んでいた。
目の前でモーニングセットを頼んで食べながら健吾が話し掛けてき
た。

「あのさ。どうしたの？やっぱ喧嘩？さっきカオルも慌ててたけど、
どうしたのよ。お前勝手に帰ってきたんだって？」

「ん？別に……たいしたことない」

それだけ言って黙って窓の外の飛行機を見ていた。

「そんな訳ないだろ！そんなに目真っ赤にして」

「言えば、カオルが悪く聞こえそうだし……
でも本当に悪いのはあたしだから。」

カオルは悪くないの。全部あたしが悪いの」

そう言って黙って外を見た。

健吾の顔を見たら間違い無く泣きそうだった。

「俺の時もそうやって自分が悪いとか思ってたんだろ。
それで最後に電話した時でなかったんだろ？あれは俺が悪かった
んだぞ？」

今回だってカオルにも悪いところあるんじゃないの？
そうやっていつも自分、自分で言うけどさ。ちゃんと話せよ。
カオルと」

健吾の視線を感じながら黙っていた。

「こんな所でそれ以上アレコレ聞いたら、あたし号泣するよ？
今はもうなにも言わないで・・・」

「あー・・・うん。わかった。あっち着いてからにする」

さすがに朝の空港で号泣されると、どうにもならないと思ったのか
それから千歳に着くまで健吾はなにも聞かなかった。
席につき目の前の雑誌をパラパラと見ながら飛び立つのを待った。
飛行機が飛び立った時、なんともいえない気分になり、
そのまま顔を覆って涙を隠した。

「具合悪いですか？」

優しく聞いてきたフライトアテンダントに
小さい声で「いえ、大丈夫です」と答え寝たふりをした。
たぶん隠し切れなかった鼻の赤さで泣いているのがバレたような気がした。

千歳に着き、到着ロビーの水槽を黙って見ていた。

もう今日はなにを見てもダメだな・・・

きっと家に帰ってもカオルを連想するモノを見る度に泣けてくるだ
ろう。

でも、それも仕方が無い・・・全部自分が悪いんだ・・・

健吾の車に乗りお互い黙っていた。

「あのさ、健吾・・・今日はごめんね。なんか気まずかったでしょ？
もう落ち着いたから。大丈夫」

「気まずいなんてもんじゃなかったぞ〜お前！」

「泣きそうな時に優しい言葉かけられると、もっと泣けてくるじゃない。」

「そんな感じだったから・・・」

「でさ。喧嘩しただけだろ？まあ・・・それがどんな喧嘩かは聞かないけど、

滅多に逢えないのに、あんな帰り方したらマズいだろ」

寒いのに窓を開け煙草を吸いながら健吾が言った。

健吾の上着のポケットから煙草を出して一本抜き、火をつけた。
久しぶりの煙草はおいしいなと感じた。

「お前煙草止めたんじゃないの？もったいねえ〜禁煙してたのに」

「カオルがさ・・・嫌がるかなって思ったんだ。でももういいかな
って」

「もういいかな・・・って。どういう意味だよ」

「そーゆー意味。もう終わり・・・」

「え？別れたのかよ！！嘘だろ？昨日あんなに普通だったじゃん」

「どつちみちダメだったんだよ。遠距離なんて・・・」

そう言つて煙が目染みたフリをして目に手をあてた。

「ちょ・・・マジで？なんでよ？お前が悪いって
もしかして向田さんのことで、別れたの？」

「違うよ。向田さんとはお正月以来逢つてないもん。
前に言つたじゃない。気まぐれでしょって。もう誘われないし・・・
それが原因じゃないよ。いろいろあるんだって」

煙を吐き出し自分のほうの窓も少し開けた。

「正月つて・・・正月にも逢つてたのかよ・・・
まあ、それが原因じゃないなら、なにが原因なんだよ？
さつき切れちゃったけど、カオルなんか慌ててたぞ？
お前黙つて帰ってきたんだろ？あと、ちよつと寒い、窓閉めて」

「健吾があたしなら、カオルのところにすぐ行く？」
窓を閉めながら聞いた。

「カオルのどこかあ・・・ まあ、ちよつと考えるけどなあゝ
でも、男と女じゃ立場が違うだろ？お前が行くぶんには
いいと思うぞ？カオルだってそんなに給料が安い訳じゃないし。
お前一人くらい養えるだろうしさ。俺がつて言うなら仕事も無い
のに
すぐは行けないけどな」

「健吾もカオルと同じこと言うね・・・」

「だってそうだろ？もう俺達の歳なら十分結婚してもおかしくないし。」

「子供いたって普通じゃん。カオルもまゆの事が良いって言うてるなら、」

「結婚しちゃえばいいじゃん。好きなんだろ？」

「やっぱりあたしが悪いんだなあ・・・」

「まあ、すぐには決められないってのもわかるけどさ。」

「つか、それでカオルの家から無断で帰ってきたのかよ。」

「そりゃビックリするだろ？起きたらいないで。」

「電話出ないのもどうなのよ？それお前が悪いぞ？」

「うん・・・」

健吾にカオルが「来ないなら会社の女の子と遊ぶ」って言ったからそれがキツカケで帰ってきたとは言えなかった。

きっと健吾のことだから、そんなことを言ったと知ったらカオルに怒って文句を言うだろう。そんな所だけはうるさいし・・・

それを言っただけでカオルと健吾の仲が悪くなるのは嫌だった。

それに実家のこととか、同居とか他にも問題があることも言えない。それはカオルの家のことで、たやすく人に言っただけではいけないと思った。

「今日の夜にでもちゃんと電話して謝れよ。」

「ちよっと時間くれって言えばいいじゃん」

「うん・・・」

そう答えたけれど、本当はもう電話をする気は無かった。きつとお互い今は辛いかもしれないけれど、こうするほうがカオルにも良いことだと思った。

会社の女の子のことを「興味無い」とか言っていたけれど、きつとカオルなら、その子にも優しくできるんだろうと思った。その子もきつとカオルのことを好きになる。そんな人だから……

まだ頭の中に他の子に優しくするカオルを思い浮かべると苦しくな
った。

またボロボロと涙がこぼれ、隣でこつちを見ていた健吾が

「そんなに泣くほど好きならなんで喧嘩したのよぉ？
ったく、ゝ、気まずいにもホドがあるぞ！」と苦笑いをしながら
言った。

「ご……めん……」そう言ったがたぶん聞き取れない声
だった。

「俺からもちよつと助言してやるよ。仕事好きなんだろう？

だからまだ行きたくないんだろ？今辞められたら困るって言うて
やるから。」

な？だからちゃんと謝れよ？あの調子じゃカオルも謝ってくると
思っけどな」

そんなことだけじゃないのに、健吾が気をつかってそう言うてくれ
た。
その優しさにも涙がでた。

お昼少し前に会社の近くに着いた。

「どうする？今日はこのまま直帰でもいいぞ？俺はちょっと会社行くけど。」

家まで送るか？」

「うん・・・今日は帰っていいかな？急ぎの仕事は明日やるから」

「ああ。いいよ。どーせそんな顔でいつたら俺が疑われるしな

なにかあつたら電話するから」

そう言つて家まで送ってくれた。

「じゃ、電話すれよ。今、昼休みじゃねーの？すぐすれ！」

バックの中の携帯は電源を切つたままだった。

昼休みが終わつた頃に電源を入れようと思つた。

しばらくは昼休みの間と夜は電源を切るう・・・

そう思いながら切れた携帯を見た。

家に戻り、トランクから洗濯物を出し洗濯をし、そのまま掃除をした。

なにかしていないといろいろ考えそうだったので、まるで大掃除のように

あちこちと体を動かした。

時計を見るともう夕方なつていて、

忘れていた携帯の電源を入れてみた。

メッセージが2件入っていた。

「俺だけど・・・電話して。昨日はごめん。じゃ、電話待ってる。いつでもいいから。仕事中でも出られるから・・・」

カオルの声で入っていた。

またグツと涙が出そうになった。続けて2件目が流れた。

「俺、健吾。お前俺の書類持っていったろ？悪いんだけど持ってきて。て。

たぶん遅くまでいるから。つか電源入れるよ。まだ電話してねーの？

「ばっかじゃねーのお前」

涙が引つ込んだ・・・

バックを見たら言っていた書類が入っていた。急いで着替えて会社に行き健吾に書類を渡した。

「携帯の電源いれたんだ？電話したか？」
書類を受け取りながら健吾が聞いた。

なにも言わずにデスクに座り、出張の書類を出し仕事をした。

「あのなあ・・・ここで泣かれたら本当に俺が誤解されんだけど？」

そう言われてもなにも言わずに仕事をした。

「まったく・・・すぐ泣くくせに強情だよな・・・相変わらず」
そう言って健吾も仕事に戻った。

6時過ぎになり、その日は切りのいい所で仕事を止め家に帰った。

ベットの枕もとの写真を見ても、いつもカオルが寝ていた枕を見ても
気持ちは落ち込む一方だった。

窓に下げていたドライフラワーにしたバラの花を見ても力が抜けた。
指に馴染んだ指輪を外すと、指に痕がついていた。

ちよつと大きめの箱にそれらを全部入れ、目に触れない所にまとめ
て閉まった。

それでもキッチンを見ても、浴室を見てもすぐにカオルを
忘れることはできなかった。

きつと時間が経てば気持ちも落ち着く・・・
そう自分に言い聞かせて、できるだけカオルのことを考えないよう
にした。

ここ最近は何に比べたら少しは眠れていたのに、
その日はなかなか眠れなかった。

携帯の目覚ましは電源を切っているので、目覚し時計を出してきて
セットした。

ベットに入っても目は冴えていた。

(あゝ・・・眠れない！)

冷蔵庫を開けるとカオルがいつも飲むビールが入っていた。

(この前全部飲まなかったやつだ・・・次について思ったけど、もう
次は無いな・・・)

そう思い、一本手にとりプルを開けて飲んだ。

「うっわぁ・・・にっがあ〜」

喉がキユ〜となったが、そのまま飲み続けた。

酔えば眠れる・・・そう思い全部を一気に飲んだ。

そのままベットに入り、口の中の苦さに「うえ〜」と言いながら目を閉じた。

時間はまだ10時だったが、起きているより眠っていたほうが辛くない。

軽い現実逃避をする為に無理に目を閉じた。

そのうちアルコールが程よく体にまわり知らない間に眠れた。

この日ばかりはアルコールに感謝した・・・

すべてを裏切った日

東京から戻り、3日ほど経った。

今だになにかの拍子に泣きそうになることは多々あったが、その度にグツと我慢をして涙を押しやっただ。

「お前電話してないだろ？」

昼間、珍しく公園に行った時、健吾が歩いてきた。

「もう同じ課だし、ここで一緒にいても誰も疑わないね」
そう言っただ話を誤魔化して笑った。

「カオルから電話きたぞ」

そう言われて黙って前を向いた。

「話聞いた・・・カオルに勝手すぎるって言ったら、ちょっと反省してた。」

今回はアイツが悪いと思った。急ぎすぎだよ。

もっとこれから一緒にいるなら相手の都合も考えるべきだな」

健吾にどこまでのことをカオルが言ったのかわからないので、言葉を選びながら答えた。

「もういいんだって。このほうがカオルにもいいんだから」

「カオル電話待ってるって。いつ電話しても電源切れてるって・・・
ちゃんと話したいってさ」

「もうしない。やっぱり彼女は近くにいるべきなんだよ・・・
あんなに疲れた顔してるって思ってたなかった。

カオルのこと、なにも知らなかったんだよ。自分だけ辛いみたい
なこと言ってる」

「カオルのことばかりじゃなくて、お前は本当にいいの？
お前だって疲れた顔してるぞ。毎日目腫れてるし」

「辛いのは今だけだよ。健吾の時もそうだったもん。

時間が経てばだんだん平気になるもんだし・・・

健吾の時だって同じくらい悩んだんだよ？知らなかったでしょ？
」

健吾は自分のことを言われてバツの悪い顔をしていた。

でもそれは確かにそうだった（捨てられちゃったな・・・）と思って
泣いたことを思い出した。

けど・・・その辛さは今回のほうが何倍も大きかった。

「俺の時は・・・まゆが待っていてくれるんじゃないかなとか思
ってた。

お前そんなところあるなあ・・・て。まあ、、、そうじゃなかったけ
どな」

健吾はそう言って笑った。

「あたしもうちャットしない。URLも消すことにする。

きつと目の前にいたらカオルも気を使うし。あたしも楽しくない

し。

ちょうど飽きちゃったって思ってから。ラビや他の女の子には
またメールでもするからって伝えておいて

「お前本気？」

「カオルならすぐ彼女見つかるよ。あたしが素敵だっと思ってたんだ
もん

あ・・・健吾はいまだにいないか・・・ ちょっとアテにならな
いか？」

「悪かったな・・・ 俺だっつてその気になればすぐできるんだぞ？
今は仕事が遅いから出会いが無いだけで・・・」

「うん。そう思うよ・・・ 健吾イイ男だもん。いないほうが不思議
だね」

「俺にしとく？今度は大丈夫だぞ」

「よく「カオルに電話すれ」とか言っつてそんなこと言えるねえ・・・
男の友情はアテにならないね」横目で見ながら笑った。

「でもなあ・・・ 本当にこれでいいのかなあ・・・」

「うん。いいの」

そう言っつて会社に戻った。

昼休みが終わり、席についた健吾は一日中チラチラと見ていた。かえってその視線があるから、わざと格好をつけて平気なふりをした。

やっぱりまだ三日じゃ、なにも変わらない・・・
早く今の思いが消えるくらい時間が流れればいい・・・

家に帰り一人でまた考えると、いつまでも会社に残っているほうが気楽だった。

たまに「なんでこんな量の仕事があるんだろ・・・」そう思っているのに、
今はその量に感謝した。

「もう11時だぞ。まだ終わらないのか？」
そう言って健吾が上着を着て帰り支度をしていた。

「うん・・・もうちょっと。先に帰っていいよ」

「そんなに急ぎなんか無かったろ？もう帰れって」

「うん・・・」

そう言われて上着を着て一緒に会社を出た。

「大丈夫か？」

「ん？なにが？」

「一人でいるの嫌でいままで仕事してんだろ」

「そんなこと無いよ？さーて、明日はゆっくり寝ようって」

無理をしながら笑顔で手を振って車を走らせた。
健吾と別れた瞬間、また少し顔が暗くなっていると自分でも感じていた。

家に戻り、そのままベットに倒れこんだ。

どーせ別れることになるなら、大嫌いになって顔も見たくなくて別ればよかった……

いつまでも思い出の品を捨てられないような別れ方はするもんじゃ無いなあ……

自然といつも置いてあった写真の場所に目がいく……

カオルがいつも寝ていたほうの枕を触りながら、自然と目が潤んでいくのが分かった。

自分の今の気持ち分からない……

こんなに会いたくて仕方無いのに……

ひとりぼっちの部屋がとても広く感じた。

(直子……彼氏と一緒になあ……)

そんなことを考え携帯の電源を入れた。

電話を試みたが、呼び出し音が響くだけで留守電になってしまった。

やはり明日が土曜日なら当然だなと思った。
また電源を切ろうとした時、着信があった。

画面に久しぶりにく向田 直樹の文字が光った。
頭の中にニコニコした向田さんの顔が浮んだ。

(今、会つと弱音を吐きそうだ……)

出ようか出ないか瞬時に考えたが、少しだけ声を聞きたいと思った。

「もしもし？」

「まゆちゃん？ずーと電源切つてどうしたの？何回もかけたんだけど」

「あ……今、電源入れたんで……すみません」

「そっか。なにかあったの？電源切るなんて」

「いえ。別に……」

向田さんはなんとなくその間を感じ取つたかようだった。

「明日休みだから、今日これから飲みに行かない？」

「今からですか？だってもう11時過ぎてますよ？
もう遅いし、今日はちよつと……」

「やっぱりなんかあつたでしょ？」

「いえ、そんなことないです」

「じゃ、今から迎えに行くよ。用意しておいて、じゃね」

そう言っただけで電話が切れた。

今、向田さんに会っていいのかなあ・・・

きつと向田さんの顔を見れば、カオルのことが少しでも頭から消えると思った。

そんな逃げの道具に使うのは悪いと思いつつも、いまの苦しい気持ちから少しでも開放されなくなった。

30分もしないうちにインターホンが鳴り、向田さんが迎えに来た。

「どこ行くんですか？車じゃマズくないですか？飲むなら」

「じゃあ、うちに車停めてからにしようか」

「帰りはタクシーで帰ればいいですもんね。そうしましょう」

そう言っただけで向田さんの家の駐車場まで行った。

遅くまでやっている向田さんの友達が経営している無国籍料理の店に行こうと言われた。

店に入ると、「よ。直樹、生きてたんだ？」

愛想のいいちょっと小太りのマスターが厨房から出てきた。

「こんばんは。はじめまして」と挨拶をした。

「あの、おいくつ？若く見えるけど……」マスターが驚いた顔を

して、あたしを見て聞いてきた。

「え？25ですけど……」そう言うとマスターが向田さんの背中を叩き

「お前、犯罪みたいなことしてるな！12歳も違つってどうよ？お前とうとうロリコンに走ったか……」と脅えた芝居をした。

「嘘！そんなに違つたっけ？」

「はい。そうですけど……」

そう言うと、マスターに更に背中をバンバン叩かれ

「お前が中学の時に生まれてんだぞ？犯罪だなあ……」
と言って厨房に消えたいった。

その二人のやりとりが可笑しくて笑った。

向田さんも背中を痛がりながら笑っていた。

「マスターはおいくつなんですか？」

「俺と同級生だよ？」

「ええー！見えない…… もっと上かと思った……」

30代後半とか40代がすべて同じに見えるのもあったが、

同級生と聞いて驚いた。

「まあ・・・見えないと言えば見えないかあ・・・あの腹がなあ」
「
そう言っただけで向田さんは厨房を見て笑った。

「そう考えると向田さん、やっぱり若く見えますね。なんでだろ？童顔なのかな？髪型かな？」

「どうかな？これでも若作りしてるからね。いろいろと」

「そういえば・・・今日はどうしたんですか？急に」

「いや、ずーと忙しかったから随分まゆちゃんを誘ってなかったしね。」

「やっと連休取れそうだったから電話したんだけど、出なくてさ」

携帯を切っていることを突っ込まれると思った。

きつとまた誘導尋問のように話をさせられそうな気がしたが、向田さんはその話にはそれ以上触れなかった。

しばらくすると、マスターがいろいろと料理を持ってきてくれた。

「今日誕生日だろ？最近、女もいなくて暇なんだな〜とか思ったけど、」

「こんな若い彼女がいたなんてなあ・・・ヤルなあ〜お前も！これはサービスな」

そう言っただけで見たことの無い形のケーキをサービスしてくれた。

「え・・・向田さん、今日誕生日なんですか？」

「ん？正確には・・・あ、もう今日だね。うん。0時過ぎたし。いつも誕生日にはここに来てるんだよ。俺も暇だねえ・・・あ。結構美味しい。」

形は気持ち悪いけど・・・」そう言ってケーキを少しだけ先に食べた。

「そうなんですかあ・・・じゃあまた12歳差になっちゃいましたね。」

せつかく11歳だったのに」

「最高縮まっても11歳かあ・・・ ちょっと歳を感じちゃうなあ」

少しだけガツカリした顔をしてフォークを口に咥えていた。

「誕生日に一人でいたくなかったんだ？」そう言ってクスクス笑った。

ちょっと照れたように

「まーね。でもいまさら「誕生日だから一緒に祝ってくれない？」って

歳じゃないでしょ？でも、さすがに休日前だとねえ・・・

一人が身に染みちやってね」

「あたしも一人でいたくなかったから、ちょうどよかったです。誕生日おめでとつございます」

「ありがとね。でも、なぜ一人でいたくなかったの？」

「あ、いえ。せつかくの週末だからなくて。友達に電話してもいなかったし。」

つまらないから、もう寝ようかなって思っていました」

「電話してくれたらよかったのに。25歳の週末の過ごし方じゃないね」

そう言っつて二人で笑った。

1時を過ぎ、お客が減るとマスターがエプロンを外して席に来た。

「さて。若い子とイチャついてるオヤジでもからかうか！」

そう言っつてグラスを持って一緒に席に座った。

「仕事すれよー 一応俺だつて客なんだから」

「もう今日はこれ以上客はこないよ。もう1時だぞ？」

それより冷やかしのほうが面白いだろ？で、名前はなんていうの？」

そう言っつてこつちを見てマスターが笑った。

「吉本です」

「吉本なにちゃん？俺は加賀猛ね。タケシさんでいいから」

「馬鹿かお前・・・なにがタケシさんだよ。気持ち悪い・・・それに「なにちゃん？」とかオヤジ臭いんだよ。言い方が・・・」

いつものクールな感じと違う向田さんの言い方が可笑しくて笑っていた。

普段はもつと親しみやすい人なんだと感じた。

それから向田さんとタケシさんはお互い悪口を言い合っていた。そんな二人の会話を聞いて、なんだか久しぶりに笑ったような気がした。

3時になり店が閉まりタケシさんにお礼を言って店を出た。

「またおいで。直樹は来なくていいから」
そう言って手を振り外に出て送ってくれた。

「じゃ、タクシーが来る所まで歩こうか？」
そう言っただけで向田さんが先を歩いた。

2月の北海道は一番寒い時期で、踏みしめる雪もキュッキュツと音が鳴った。

ポケットに手を入れて少し後ろをついていった。

「東京から戻ってから、指輪してないんだね・・・」
彼氏からのプレゼントじゃないの？」前を向きながら言われた。

キュッキュツという音だけが響いていた。

なにも言わずに黙ったまま歩いた。

今なにか言つと、全部を聞いてもらいたくなる・・・

タクシーの中でもお互い一言も口を開かなかった。

向田さんが自分の家の近くで

「あ。ここで一人降ります」と運転手に告げマンションのすぐ前に車が停まった。

「じゃ、これ」と運転手にお金を渡し、

「着いたら電話して、おやすみ」と言いドアが閉まった。

走りだす車に笑顔で手を振り「またね」と言ったような口の動きが見えた。

なにも聞かない向田さんがやっぱり大人に感じた。

(もう・・・カオルが・・・って考えなくていいんだな・・・)

そう思いながら、寂しいような、もう悩まなくていいような複雑な気持ちになった。

また部屋に戻り、きっと同じように朝まで悩むんだと思うと胸が締め付けられた。

一人で部屋に戻るのが怖くなった・・・

「ここで停めてください。降ります!」

そう言っただけで向田さんの家から5分もしないところで車を降りた。

キュッキュツと音がする雪を踏みしめて今来た道を引き返し、そのまま向田さんの家のインターホンを押した。

ドアが開き、向田さんを見て何を言おうか考えたけれど言葉が出なく、

黙って顔を見ているしか無かった。

向田さんは何も言わずにドアの中に入れてくれた。

「あの……」

そう言った途端、涙が溢れポロポロとこぼれた。

そんなあたしを見て、静かに抱きしめながら

「十分頑張ったと思うよ」

そう言って頭を撫でた。

「全然……頑張ってる……です……あたし逃げた……ん……です」

「もういいから。なんにも聞かないから」

そのまま玄関で向田さんに抱きついたらままだ泣きをした。

泣き止むまで向田さんは何も言わずに抱きしめていてくれた。

少し落ち着いた頃、部屋のソファでまだ少し泣いているあたしに冷たいタオルを渡してくれた。

タオルを顔にあてながら、まだ鼻がグズグズしていた。

「あ……お化粧とれちゃって」

「すみません……」

「もう落ち着いた？」

「はい・・・」まだ喉がヒクツと言った。

隣に座って黙って肩を抱き頭を撫でてくれた。
また目から涙がこぼれた。

「泣いてるまゆちゃんより、笑ってるほうが好きかな・・・」
そう言っつてゆっくりとキスをした。

「もう泣かないで・・・」
そう言っつて顔を触っていた手で涙を拭いた。

「ここに来たっつてことは、俺は期待していいのかな？」

真っ赤な目をしたまま向田さんを見つめた。

（向田さんといれば、もう悲しい気持ちにならなくていいんだ・
・
きつとカオルのことも忘れられる・・・）

静かに小さく頷いた。

そんな仕草を見て向田さんは軽く触れるようなキスをして
「本当にいいの？」ともう一度聞いた。

その言葉に自分からキスをした。
もう一人でいたくなかった・・・

「わかったよ・・・」
そう言つてまた唇を重ねた。

向田さんのキスは忘れていたあの日を思い出すくらい優しいキスだった。

唇を重ねているだけなのに、時々小さく吐息が漏れるほど素敵なキスに

呼吸が速くなる自分がいた。

背中に回っていた手が着ていたブラウスのボタンを弾くように外し
ていき、

一つずつ外される度に恥ずかしさが増していった。

最後のボタンを外された時、自分の手が向田さんの手を握った。

「恥ずかしい？」唇を離し、そう聞かれた。

小さく頷き、握った手をギュッと掴んだ。

本当は今日こんなことになるなんて想像もしていなかったから、
この展開に戸惑う自分がいた。

「でも、やめない」

ボタンが外れたブラウスをフワッと脱がせソファーに覆いかぶさる
ように倒された。

「やつ、あの、」

「もう、忘れな……。俺がいるから……」

カオルの疲れた顔が瞬間的に頭に浮かび、こころでそれが忘れられるなら……

静かに向田さんの首に手を回し唇を重ねた。

「たまに薄着してる時、体のライン見てた……」
足元にブラウスが滑り落ち、首筋をゆっくりと舌が這った。

「全然そんな視線気づかなかった……」

「まゆちゃんは俺のこと過信してるよ。俺だって男だもん」

ベットに横になり、背中にシルクのシーツの冷たさが広がった。
ちよつとあたしより体温が高く感じる向田さんの体が重なった。

舌先が胸元にいきやつぱり恥ずかしくなった。

ちよつと体に力が入ったのを感じたのか、それまで優しく這うだけ
だった舌が

強く胸に吸い付き小さく噛まれた。

呼吸が少し速くなった……

小さくでる声を聞かれるのが恥ずかしくて手の甲を口にあてた。
その手をソツと外し

「いいよ声だして・・・」

そう言つて下着の中に滑るように手を入れた。

濡れているのを指で確認して、ゆっくり動かしながら

耳元で「感じやすいんだね？」そう言つて笑つた。

その言葉に恥ずかしくなり体が熱くなった。

指を動かされる度に声が漏れ、それを聞かれてると思うと

どンドン体が熱くなった。それでも押さえられるだけ声を押さえた。

「そんなに恥ずかしくないで・・・」

そう言いながら指の動きを早めた。

下着の中からいやらしい音がした・・・

「や・・・あつ・・・ああ・・・」

簡単に指だけでイッてしまい、それを見ていつもの顔でニッコリと
笑い

「指だけでこんなに感じてくれるんだ？」

そう言つて下着を脱がせ、ゆっくりと向田さんが入ってきた。

外が明るくなってきたのか、薄い唇も口を開けるとあどけなく見える
ちよつと大きい2本の前歯も薄明かりの中見えた。

眉間にシワをよせ息を荒くする向田さんはいつもとは違って見えた。

そんな顔を見ているだけでもイキそうだった。

「もうダメ？」そう悪戯っぽく言つてさっきより腰を激しく動かし

肩を掴んだ手に力が入った。

アゴを伝う汗が顔に数滴落ち、向田さんの眉間のシワが深くなった。抱きついた手に力が入りもう声を聞かれてもどうでもよくなった。

夢中で体にしがみついたあたしの体を起こし座るようなかたちで自分の体の上へのせ、背中を指でなぞった。

背筋がビクツとして鳥肌がたった……

胸元に流れる汗を舌でぬぐうように舐め、首筋を軽く噛まれる度にいままで感じたことが無い刺激が体を走った。

力が抜けた喉元に汗が流れるのを感じ、どこまでも落ちていくような快感が体を突き抜けた……

小さく声が漏れ、向田さんも終わりをつけた……

力が入っていた手をゆっくりと背中にあわし、唇を挟むようにキスをした。

そのキスにこたえるように、ゆっくりと唇を舐め最後に時間をかけてキスをしてくれた。

「やっと来てくれたね……」

その笑顔はいつもの向田さんだった……

「最後は俺の所に来るって言ってたじゃないですか……」

そう言って汗ばんだ体に顔をつけた。

「強がりだよ…… 本当はそんな自信なかったよ」

照れたように笑う向田さんに少しだけ微笑み、また胸に顔をつけ体温を感じた。

その暖かさは忘れていた安心感を引き戻すには十分な暖かさだった。

「それでも言わないと格好つかないよ。なかなか動いてくれなかったからね。」

あと、二人でいる時くらい敬語はもうやめない？向田さんじゃなくくて

直樹って名前あるんだから」

「敬語はどうにかなっても・・・いきなり呼び捨ては無理かな？」

「どうして？これからも向田さんて呼ばれるの？俺」

「そのうち慣れてくるまで・・・ちよつと待ってください。」

向田さんが思ってる以上にあたしには憧れの人だったから・・・
そんなに簡単に呼び捨てはできない・・・です」

敬語もすぐには直せなかった。

「俺ね・・・8：2で来ないと思ってた・・・」

「どっちが8でどっちが2ですか？」

「来ないほうが8」そう言って笑った。

いつも自信満々だった向田さんが実は内心そうじゃなかったと聞いて

(この人も普通の人だったんだ・・・) そう思い、ちよつと笑った。
「まゆちゃんシャワー入る？汗かいたでしょ？」そう言われて簡単に軽くシャワーに入った。
リビングに行くともうスッキリと外は明るく朝になっていた。

「はい。今度こそ本物のモーニング珈琲」そう言っただけ珈琲をくれた。
「ありがと・・・」そう言っただけ笑顔で受け取った。

向田さんがシャワーを浴びている間に珈琲を飲みながらソファに座り、
まだ少しだけ熱い体を冷やした。

もうカオルには戻れない・・・
カオルを裏切った・・・心の中で小さくなにかが壊れた気がした。
でも、それも全部自分で決めたことだ。
これでよかったんだと思った。一人じゃない分、寂しさは無かった。

(薄情なもんだな・・・あたしって・・・)

シャワーを出た向田さんに珈琲をついで渡した。

「ありがと。でもまゆちゃんも物好きだね。どー見ても彼やマツの
ほうが

いいって言うと思うよ？普通の子は

「そうかなあ・・・？」

「それでもない？」

「そうだったらここにいない・・・」

朝をむかえ、少し眠くなってきた。

そのまま「少し眠ろうか？」とベットに入り、

向田さんの胸に抱かれ眠りに落ちるまでに時間はいらなかった。

腕枕をした手を頭に寄せ、眠るまで頭を撫でてくれた。

目を瞑るとその手がカオルじゃないかと一瞬思ってしまったくらい

同じリズムで向田さんはあたしの頭を撫でていた。

けど、微かに香る布団に染み付いたトワレの香りで

これは向田さんなんだと感じた。

昨日泣いていたのも、辛かった思いもすべて忘れて眠りに落ちていった・・・

本当の気持ち

月曜日、新しい携帯をデスクに置いたのを見て健吾が

「お？携帯変えたの？」と聞いてきた。

「うん。電源切ったままだと仕事にも支障があるでしょ？」
そう言っただけのままペンを走らせた。

「ふん……最新だ……番号変わってないんだろ？」

ペンを置き、携帯を手にとり

「赤外線受信して」そう言っただけで健吾に向けた。

「う……うん」そう言っただけでお互いのデスクの間で携帯の番号とアドレスの交換をした。

「これ……その……教えないの？」

カオルにという意味はすぐにわかった。
黙って健吾を見て頷いた。

「そっか。じゃあ俺も言わないほうがいいよ……」

「昼飯オゴれよ。俺の演技のギャラは高いからな」

そう言っただけで（なに食おうかな）とわざと高いものを口にして笑った。

朝のうちに何件かの得意先にパソコンからメールで新しい番号を送った。

前の携帯は電源を入れること無く家に置いてあるままだった。電源を入れるとなにかメッセージが入ってそれで怖いのに、解約しきれない自分がいた。

もうカオルとの線は途切れてしまったのだと自分に言い聞かせていても、

心の底で本当にそうなることが怖かった。

自分でしている行動と考えが一致していないのは分かっていたが、解除してしまうと、最後の繋がりが本当に無くなってしまうことが嫌でいつまでも部屋の中にポツンと電源が切れた携帯が置いてあった。

そのまま電源の入れない状態で一ヶ月が過ぎた・・・

「来月の東京なんだけどさ・・・」健吾がちょっと気を使ったように言った。

「どうかした？」

「いや・・・俺、カオルに会うけどお前どうする？」

「あたしはいいよ。健吾行っておいで？別に気を使わなくていいから」

そう言って仕事を続けた。

内心、スケジュール表を見てあれ以来の東京出張の文字にちょっとだけ胸が痛くなった。

本当は会いたい気持ちでいっぱいだった。

そのスケジュールを見て向田さんも

「この日・・・どうするの？」と一緒にいる時になにげなく聞かれた。

「ホテルにいますよ？」

「そっか。気をつけていっておいで」それだけ言って、後はなにもその話には触れなかった。

あの日以降、週末とたまに早く終わった日はいつも隣には向田さんがいた。

まだ少しだけ敬語が抜け切れていなかったが、だんだんと慣れてきてはいた。

格好をつけてクールなフリをしていたと言う向田さんだが、やっぱり普段は大人の男という感じがするくらいスマートな受け答えだった。

週末のたびにどこかしら二人で出かけていると、自然と会社の人に見られることが多くなり、その噂はすぐに健吾の耳にも入ったようだった。

あたしには、

「おい。マジで付き合ってるの？ねー？」と聞くくせに向田さんにはなんとなく聞けないようだった。

「さあね？」と笑ってハッキリしないあたしに、

「教えてくれてもよくね？」とブツブツ文句を言っていた。

会社ではちょっと席が離れてるのもあり、会話をすることはほとんど無く、付き合っていることを社内では確認できないような感じだった。

何事も無かったように毎日が過ぎた。

仕事も忙しい中、遣り甲斐があり向田さんともとてもうまくいっていた。

その頃にはあたしの中のカオルは少し消えかかっていた。

けど、それは嫌いになったと言うのじゃなく、もう会えない人・・・そんな感じがした。

4月になり、雪が全部解けかかるほど暖かい日。東京の出張の日がきた。

出張の前日、遅くまで残業をしていたのに珍しく仕事帰りの向田さんが来た。

「明日、何時？」

「えーと。7時に健吾の車で出る予定です」

「そっか。じゃあバッテリー逢うと気まずいから、もう少ししたら帰ろっかな」

そう言いながらTVを見ていた。

「直樹さんがいいなら、別にあたしはいいですよ？泊まっつていても」

「向田さん」から「直樹さん」に呼び方が少しだけ変わっていた。でもまだ「さん」を取ることはできず、敬語も下手な外人のようにたどたどしかった。

「じゃあ泊まるのかな？」

「うん」

その夜、なにか言いたげな向田さんに、

「さつきから変な顔してどうしたんですか？」と聞くと、

「いや？別に？」と笑っていた。

その顔が東京の出張のことを聞きたがっていた。

いつもなら残業がある時はこんな風に家に突然訪ねてきたりしないのに、

きつと心配させているんだろうなと感じた。

「あたし信用無いんですね」

「いや？ただちよつとまゆちゃんに流されやすいからな」

「そんなこと無いですよ。なら明日健吾に監視してって

言えればいいじゃないですか」

「そんな格好悪いことできないって」

そう言っつて苦笑いした。

「心配しなくてもちゃんとホテルに居ますよ」

笑顔で言うあたしの顔をチラッと見て、向田さんは少し考えたような顔をした。

「まゆちゃんさ……。本当はカレのこと忘れられないんじゃない？」

「えっ……。どうして？」

「時々、すごく淋しそうな顔するからね。俺じゃ役不足？」

「そんなこと！向田さんの勝手な想像ですよ。全然そんなこと無いです」

「そっか……。じゃあその言葉信じるよ」

一瞬、ドキツとした。

何かの拍子に今でもフツ……。とカオルを思い出す。

(こんな時、カオルなら……)

向田さんの仕草を見て、何度となくカオルを思い浮かべてしまう瞬間を

向田さんはきつと感じていたんだ。

「信じるよ」

その言葉の重みを感じながら、頭の中のカオルを少しずつ消そうと決心した。

もうこの人を悲しませちゃいけない。

あんなに苦しかった毎日から救い出してくれたのはこの人だから……

何も聞かずに受け入れてくれたこの人とこれからのことを考えよう。こんなあたしを好きになっってくれたんだから。

「大丈夫です。戻りは3日後ですから、その日直樹さんの家で待っています。」

掃除しておきますか？」

「うーん・・・まかせるよ。そんなに汚れてないと思うけど。じゃ、ご飯よろしくね。楽しみにして帰るよ。」

「はい！わかりました」

やっと少しだけ安心した顔になった向田さんを見て微笑んだ。

次の日、健吾が車で迎えにきた。

いつもは車から携帯で「着いたから出てきて」と電話が入るのに、その日は違った。

「ちょ、トイレ貸して！行くの忘れた！」

トイレに入っている健吾に

「まだ少し時間あるけど・・・珈琲でも飲む？」と聞くと、
「うん。頼むよ」と声が返ってきた。

トイレは玄関の横にあり、リビングまでには別にドアがあった。だから部屋の中はそこからは見えなかった。

まだTシャツ姿でリビングにいる向田さんは「いいの?」と聞いた。

「いいですよ?直樹さんが気まずいなら、このまま見つかる前にすぐ行きますけど。どうします?」そう言ってニヤツと笑うと、

「マツ・・・どんなリアクションするのかちょっと楽しみ」と言っていて笑った。

「いやあ・・・ヤバかった。この歳で漏らすのはちょっと・・・」そう言って健吾がドアを開け部屋に入ってきた。

「おはよー!マツ!」

向田さんが健吾に言うとそのまま固まって向田さんを見ていた。

「う、うっそおー!あの噂って本当だったんだ・・・て、うわー」

「口・・・開いてるよ。はい。珈琲」

甘そうな珈琲を手渡した。

「マジでえく?いつから?えー うっそおー これドッキリ?」
何度もそう言いながら家を出るまで健吾は二人の顔を見ながら言うていた。

「じゃ、行って来ます。鍵よろしくね」そう言って向田さんに手を振ると

「ああ。気をつけてね。マツ、よろしくな」と健吾に言った。

「あ．．はい。じゃ、って．．．この部屋で向田さんに送られるとすつげえ違和感あるなあ．．．まあ、いいや。じゃ、行ってきまゝす」

そう言つて二人で車に乗り込んだ。

車で走り出してから、健吾が

「朝からありえないものを見てしまった気がする．．．．．」と呟いていた。

「そう？だつて知りたがつてたじゃない。謎が解けてよかったね」

「謎つて．．．まあ、謎だつたけどさ。俺は無いと思つてたんだよなあ」

いつから？最近？やっぱ火の無いところに煙はたたないんだなあ」

きつと健吾の口からカオルに伝わると思った。

それが知れたら、携帯を解約しよう。

ズルいようだが、

「あんな軽い女、別れて正解だつた」とカオルに思つてほしかった。二度と思ひ出すことが無いくらい嫌いになつてほしかった。

もう涙が出ることは無いが、

それでも思い出の品を捨てきれない自分がいた。

きつと心のどこかでまだカオルが好きでいてくれるんじゃないかと思つ自分がいた。

こんなに裏切っておきながら・・・
もう終わったことなのに・・・

東京に着くと空港の周りには桜が咲いていた。
一足先に春なんだと感じた。

「来年は一緒に花見しような！」初めて逢った時にカオルが言った
言葉がフツと頭に浮んだ。

東京にいる・・・

そう思うだけで気持ちが暗くなった。

仕事の打ち合わせをして、夕方少し前にホテルに入った。

一番最初に泊まったホテルだった。

たしかカオルの会社の近くだな・・・そう思いながらチェックイン
した。

部屋で荷物の整理をしていると健吾が部屋にきた。

「なあ・・・本当に会わなくていいのか？まあ・・・もう向田さんが
いるなら

会ってもどうかと思うけどよあ・・・会いたくないのか？」

「いいよ。行っておいで。あたしは後から適当にそこら辺でご飯食
べるし。」

あんだ達と食事しても話わからないもん。サッカー馬鹿の話なん

か。

気にしないで行ってきて。また帰ってきてから抱きつきに来ない
でよー！」

そう言って笑って送り出した。

本当は少しだけでも顔を見たいと思う自分もいた……

「そっか、じゃ……明日8時な」そう言って健吾は部屋を出て
行った。

時計を見ると6時半だった。

なんとなくまだお腹は減っていない、一人でボくと部屋にいるのが
寂しくて

普段着に着替え、ホテルの外を歩いてみた。

(この辺がカオルの会社の近くなんだなあ……)

なんとなく懐かしいような気持ちになった。

少し暗くなってきたオフィス街は人もまばらだったが、

一度しか見たことのないカオルの会社は記憶には無かった。

見た時は暗かったし、それもレストランからの角度でどんなビルな
のかも

やはり記憶には無かった。

それを見つけた所でどうにもならないよな……そう思いながら歩
いた。

角を曲がり、そこに見えた風景にどことなく見たことがあるような
気持ちになった。

一度だけ一緒に行ったレストランがそこにあった。

入り口の前まで歩き、なんとなく中を見ると窓際の席に見覚えのある人がいた。

目が合いそれが祐子さんだと気づいた。

ちよつと動揺しながらも会釈をして、そのまま通り過ぎようとしたが、

祐さんは手招きをして（こっち！こっち！）と口がパクパクしていた。

そのまま無視する訳にもいかず、中に入っていった。

「ちよつとまゆちゃん！どうなってるの！」

「あ……えーと。出張でこの先のホテルに泊まってるんです。で、

食事でもと思って、ちよつと歩いていたら、祐さんがいて……

」

「いや、そんなこと聞いてないわよ！矢吹君のことよ！」

「あ……その……ダメになっちゃいました」

祐さんはまだこれから残業があるから、ここで食事をしていたと言った。

どーせ一緒の席に座るならと、あたしもついでに食事をすることにした。

「矢吹くん……暗いわよ？ここ最近」

「そうなんですか……」その言葉にこっちも暗くなった。

「なにがあつたのか私には教えてくれる？彼の上司としてじゃなくて、

まゆちゃんの友達として。その、ちょっと歳は離れてるけど・・・私ね、まゆちゃんとは気が合うと思つてたの。私だけかな？」

「いいえ。あたしも思つてました。祐子さんのこと大好きです。

でも、たぶんもう逢うこと無くなって思つてました。今日は会えてよかつたです」

「望月が矢吹君の肩ばかり持つのよ・・・でも私なんだか納得いなくてね。

矢吹君がどこまで望月に、この話をしたのか知らないけど、結構へこんでる時に二人で飲みについて、なにかしら聞いたつぽいんだけど・・・

もうダメなの？お似合いだと思つただけだな」

「もし・・・この話を聞いても、祐子さんはカオルに対して変に問い詰めたり、なにか言つたりしないですか？」

「そんな風に見える？」ちょっと怒つたフリをして言った。

「いえ。そうは思いません。けど、カオルが責められたりするの・・・

あたし未だに悪いのは自分だと思つてます。だから・・・」

「いいわよ。約束する。望月にも矢吹君にも絶対言わない。言つたら望月と結婚する！」

「じゃあ安心だ。祐子さんは簡単に結婚する人じゃないもん」

そう言つて二人で笑つた。

そして今までのことを祐子さんに話した。

祐子さんは話の腰を折る事無く最後まで黙つて聞いてくれた。話が終わり祐子さんが口を開いた。

「私はまゆちゃんの気持ちわかるよ。結婚したら好きとか一緒にいたい

なんて気持ちはたかだか2年よ。それからは我慢の連続なんだから。

そんな姑を先に見ちゃつて、ショック受けてるところに女の話じゃねえ・・・

北海道から東京になんて、それだけでもすごい決心いるのに、意地悪ばーさんと同居じゃね、そりや答えも出ないわよ。

遠距離だけの問題じゃないわよ？それ近くにしても問題よ」

「まあ・・・そうなんですけど。カオルはそれが当たり前つて思つてるし、

でもハッキリとそれが不満つて言えなかつた自分も悪いんですよ。仕事も面白くなつてきて、あんまり気にかけてあげられなかつたし」

「そんなの私なんかいつものことよ？」

「でも、このほうがよかつたんです。カオルも彼女できれば

あたしのことなんかすぐ忘れますよ。今日はなんとなく懐かしいな・・・

そんな気持ちで歩いていたんです。裏切つておいて馬鹿みたいですね」

「急ぎすぎたのね・・・矢吹君。まあ・・・まだ若いから仕方無いかな?」

そう言つて祐子さんが笑つた。

「カオルなら素敵なお友達ができますよ。優しいし、素敵なお友達だし」

「まゆちゃん・・・しばらく矢吹君のこと忘れられないわね。そんな言い方してるようじゃ」

「そんなこと無いですよ。今は彼氏のことちゃんと考えてます」

そう答えたが、きつとそれは本当のことだと思つた。

向田さんのことは好きだけど・・・
きつとカオルとは別の気持ちで好きなんじゃないかと思う・・・
どう言えばいいかわからないけど・・・

「そう。なら安心した。その彼氏っていい男?何年も憧れてたくらいなら、

写真とか無いの?最近いい男なんて拝んでないわ・・・私」

そう言われて一緒に撮つた写真を見せた。

ヒュ〜と口笛を吹き、隣のテーブルの人に睨まれ「すいませ〜ん」と言いながら謝っていた。

「これは憧れるかもね〜。この人いくつ?30前後つてとこね。まゆちゃんてスツキリした顔が好きなのね」

「37歳です。ちょっと歳は離れてるけど、その分優しいですよ」

そう言って笑った。

「うっそ！望月と3つ違い？いやだ〜 そんなの〜」

そんな祐子さんを見て笑うと、祐子さんも大笑いしていた。

「いいじゃない。男と女なんか縁なのよ。日本だけで何人の人間がいると思う？」

外国も足したらすごい数よ？その中で付き合える人数なんか死ぬまでにちよつとじゃない。それも歳とるとメツキリとその縁が減るし。

好きって抱いてくれるだけ幸せよ？その中で一人を選ぶなんて海の中に落とした指輪を探すくらいの可能性じゃない！」

「あたし祐子さんのその訳のわからないとこ好きですよ。自分を曲げないとか。見習います」

「私を見習つとこの彼氏も逃がすことになるわよ？」
そう言ってケラケラ笑った。

時計を見るともう8時を過ぎていた。

「祐子さん、これから残業ですよね？すみません。長々と話ちゃって」

「うん。じゃあ仕事しようかな〜 まゆちゃんたまにこっち来るの？」

「はい。月に1回くらいかな？今回は2ヶ月ぶりだけど」

「じゃ、また来た時、一緒にご飯食べない？矢吹君には内緒にするからどう？」

「いいですよ。いつもあたしのパートナーがカオルに逢ってるから、暇だと思っし。」

「じゃあ携帯の番号とアドレス教えておきます」

「じゃ、これ私のね」そう言ってお互い番号を交換した。外に出て、祐子さんは「じゃ、また近いうちに食事しようね」と言っただ。

「はい。今日はありがとうございました。カオルのこと、全部話したの」

祐子さんくらいです。ちょっと気持ちが軽くなりました」

「本当なら矢吹君と上手くいってほしかったけど、仕方無いわね。」

でも、新しい女友達ができたと思って、これからもよろしくね！」そう言っって手を振って会社に入っっていった。

なんとなく、あの話で壊れてしまったカオルとのことを「わかるわよ」と言っってくれた祐子さんに感謝した。

ホテルに帰り、TVを見ながらボくとしてしていると、

9時を過ぎた頃、向田さんから電話がきた。

「まだ仕事ですか？」

「うん。もうちょっとね。まゆちゃんがない間に終わらせておくよ」

「あんまり無理しないでくださいね」

「ああ。マツは一緒？」

「いいえ、遊びに行きました。あたしは信用無だからイイ子にしてホテルにいます」

「別に疑ってかけた訳じゃないんだ、なにしてるかなってさ」

「いいんです。心配してくれるうちが華だから」

「じゃ、帰ってくるの待ってるから。おやすみ」

「あの・・・直樹さん」

「ん？」

「ごめんね・・・。心配かけて。でも大丈夫だから。直樹さんを裏切ることしないから・・・」

少しだけ間が空いた後、優しい声が聞こえた。

「ん。俺を裏切ると怖いよ。なんてね。早く逢いたいよ・・・まゆ」

初めて名前を呼び捨てにされ、少しだけ顔が赤くなった。

「じゃ、おやすみなさい」

「ああ。じゃあね。おやすみ」

祐子さんの言葉と、向田さんの声で気持ちが悪くなった。帰ったら祐子さんのことを向田さんに話そう。

祐子さんになら、いつか向田さんを紹介したいと思った。

10時を過ぎた頃、なにもすることが無いし、こんな時じゃないと早く眠れないと思い、早々にベットに入った。目を瞑り数分で眠りについた・・・

コンコンッ・・・

ノックの音で目が覚め携帯を見ると、夜中の1時だった。

また健吾が酔っ払って部屋に来たのかと思い、ドアの前で

「健吾でしょ？開けないよ！早く自分の部屋に戻って寝なさい！

ったく・・・明日酒臭かったらマスクしてもらうからね！」

そう言っつてベットに戻ろうとした。

「まゆ？あの・・・俺だけど。カオル・・・」

その声に体が固まりしばらくその場に黙って立っていた。

カオルも何も言わずにその場にいると感じた。

静かにドアを開けるとカオルが立っていた。

お互い顔を見ながら黙っていた。

気まずさと久しぶりに顔を合わせたことで、どうしていいかわからなかった。

けど・・・久しぶりに見たカオルに気持ちが大きく揺らぐのが分かった。

「あの・・・ちょっとだけ。5分でいいんだ。話できるかな？」

その顔を見て、断ることはできなかった。

「うん。わかった。ちょっと待って」

一度ドアを閉め、ドキドキしたまま部屋を簡単に片付けた。

ドアを開け、

「入って・・・」というと、

「ごめんな。こんな遅くに・・・」そう言ってカオルは部屋に入った。

頭の中は真っ白になっていた・・・

奇跡を信じて……

お互い座ったまま何も話さず黙っていた。どちらも相手が何かを言うのを待っているように、視線を下げていた。

「あのさ……」そう言ったカオルに
「はい！」と慌てて大きな声が出た。

「そんなに大きな声で返事しないでいいよ……」

「あ、うん」

「健吾は？」緊張して声がうわずった。

「もう寝たんじゃないかな？」

「そっか……また酔っ払ってた？」

「うん……また酔っ払ってた」

また沈黙が流れた。健吾は向田さんのことを言ったのだろうか……そんなことが頭を過ぎった。

「携帯……変えたんだ……だから繋がらなかったの？」

カオルはそう言いながら枕もとの携帯を見た。

「うん……」

「俺の留守電聞いてくれた？」

「電話して、てやつでしょ。ごめん電話しなくて」

「いや、それじゃない。その後の……もしかして聞いてないの？」

「だってなんだか決心が鈍ると思って、電源入れるの怖くて……でも仕事でも使うから、それで新しい携帯買ったの……」

「うっそ。ありえねえ……」

「なに入れたの？」

「なんだか、いまさらって感じのこと」

「そうなんだ……」

また沈黙が流れた。

「あの……今日健吾からなにか聞いた？」

「なにかって？特には」

「いや、別に……ならいい……」

「まゆの彼氏のこと？」

(聞いているじゃん!) そう思いながら黙っていた。

けど、そのことでカオルが怒って文句のひとつでも言ってくれればもっと気が楽になると思った。

「カオルが言ってた子はどうなった？上手くいってる？」

別に皮肉じゃなく、言われたから言う訳じゃなく、本当にどうなのかなと思って聞いた。

「そのことで留守電に入れたんだ……」

「どんなこと？」

「あれさ、嘘だったんだよ。俺、馬鹿だよなあ……」

さっき健吾に言ったら「お前アホか！」って言われた。本当にアホだよな。

あんな嘘のせいでこんなことになっちゃって」

「嘘？」一瞬なにを言ってるのか分らなかった。

「そんな子いなかったんだよ・・・」

俺、向田って人が出張の時、まゆを誘ってたって健吾からきいて・・・
本当は正月にそのことで話したかったけど、聞けなくてさ・・・」

本当にいまさらだ・・・

あの時、そんなこと言わないでいてくれたら、きつと帰らなかった
かもしれない。

あのまま眠っていたら、そのまま・・・

そう考えたけれど、どっちにしる理由はそれだけじゃなかった。

カオルの実家のことも、将来同居ってことも、こっちに来ることも、
それに・・・疲れたカオルの側にいてあげられないことも・・・

「それだけじゃないの。だから、そんなに気にしないで」

そう言っただけで下を向いたカオルの顔を側に行っただけで覗き込んだ。

「他になにがあったの？」

その顔を見て、涙が出そうになった。

「いまさらだよ・・・もうそんなこと言っても、あたし十分すぎる
ほど」

カオルのこと裏切ってるんだもん。向田さんのこと聞いて嫌いにな
ったでしょ？

こんなにすぐ彼氏作って、軽いつたらないよね」

そう言っつてわざと明るく笑った。

「俺のこと嫌いになっつた？だから？」

「そんなこと、無い。大好きだった。でも、やっぱり決心がつか
なかつたの。」

カオルの実家行つて、お母さん怖くて・・・だから自信がどんどん
無くなつて、

将来一緒になんか住む自信無くて・・・でも、もう決まってるつてカ
オル言つし、

嫌だつて言つたら嫌われるし、、、」

涙が溢れて言葉が詰まつた。

いまさらだ・・・今こんな文句言つたつてもうどうしようも無い
のに・・・

でも、カオルのことが嫌いと思つたことは一度も無かつた。

もつと他のことが大きくて、自分のことだけを考えたからなのに・・・

「なんでもつと早く言つてくれなかつたんだよ・・・
なんで一人で考えるんだよ・・・家のこと言わなかつた俺も悪いけ
ど、

もつとなんとかできたかもしれないだろ？母さん説得とかできたじ
ゃん。」

そんなこと言われても嫌いになんてならないよ」

「だつ・・・て・・・」もう言葉が出なかつた。

そのまま部屋にはあたしが泣いている声しか響いていなかつた。
カオルはただ黙つていた。

きつとあたし達は変に相手のことを思うフリをして、自分が格好悪くなるのを避けたから、こんなことになったんだ。

「俺さ・・・健吾から「まゆを取られるぞ」って言われて、、仕事のこととか分かっていただけ、アイツから離せばナント力なるかなって・・・」

それで無理言つてコツチにこさせようとしていたんだ。最初から5年も懂れているって
言われて、嫌な予感していたし・・・」

カオルは何も気にしていないと思っていたのに、こんなに心配をさせていたことを
聞かされて、自分だけが悩んでいるような顔をしていたことを反省した。

疲れた顔をしていた本当の理由はあたしのこともかもしれない・・・
大事なことを聞けずに、嫌なことから顔を背けた罰だ。

「もうダメなのか？俺達」

もう今となつては向田さんを裏切ることとはできない・・・
カオルに戻ることはもうできない。

返事を待つカオルにそう言わなければならないのに、その一言でも
う会えないと

思うとなかなか口が開かない。

戻りたいけど、、辛いときにすべてを受け入れてくれた向田さんを
このままにする訳にはいかない。

「ごめんなさい……」

「そうなんだ……」

しばらく沈黙が続いた。

涙を拭いて最後まで笑い顔で別れようと思った。
沈黙が長かったぶん、やっと涙が止まった。

「まゆ……」

「ん？」

「もう一度だけ抱いていい？」

「無理！」

「あまりに返事が早くてビックリした……」
そう言っただけカオルは笑った。

「あたしもこんな雰囲気ですんなこと言うからビックリした……」
同じく小さく笑った。

「じゃあ、一度だけ抱きしめていい？」

その顔を見て、黙ってカオルの側にいきゅっくりと抱きついた。

自分の中で

（これが最後になるなら、最後にカオルに抱きしめられる感覚を忘れないでおこう……）

そう思いながらギュッと抱きついた。

カオルも優しく抱きしめてくれた。

そのまましばらくお互い黙っていた。

頭の中で（さよなら・・・）と呟いた。

溢れそうになる涙をグッと我慢しながら。

「カオル・・・ごめんね。大好きだった」

「ん・・・俺も。好きだった・・・今も好き・・・」

お互い初めて相手のことを「好き」と言葉で伝えたのが最後の日だなんて・・・

やっぱり涙がこぼれた。

「もっと俺がしっかりしてたら、よかったな」

そう言ったカオルの声がちよつと泣いているように感じた。

黙って首をふった。声を出すことはできなかった。

「まゆ・・・」そう言って体を離し「キスしていい？一回だけ」
そう言って返事をする前にキスをした。

やっぱりカオルの頬が濡れているような気がした。
でもあたしの涙かもしれない・・・

唇が触るくらいの軽いキスをした後、もう一度抱きしめ、

「あゝあ・・・あれが最後なら、もう一回くらいしておけばよかったな」

明るく笑わせようとして言った。

「キスできたから、上手くいけば一回くらいできると思ってるでしょ？ダメだよ！」

そう言っつてその冗談に乗っつてあげた。

「わかった？残念！」

大きく深呼吸してから体を離れた。

カオルを見てできるだけだけ頑張っつて笑った。

「ありがと。最後にちゃんと話できてよかった。カオルならすぐ彼女できるよ。」

あたしよりちよつと落ちると思っつけど

「うん。そうだな。俺モテるからな。まゆよりイイ女見つけるわ。いっばいいいそうだし」

「うん。見つかるよ・・・すぐに・・・」

「でも・・・別れたら連絡して。もう一回くらいしたいから」

「ばっかじゃないの？」

お互い笑いながら、いつまでも話をしていた。

なんとなく帰るタイミングを逃したカオルに、

「じゃ。またね・・・っつて言いたいけど、それは無いから・・・」

「元気でね。今日はありがと」「そう言った。

「うん。じゃあまたな・・・じゃないか。元気でな。
今日は悪かったな、遅くに・・・じゃ行くわ」

「うん・・・」

そう言ってドアを出るカオルを見送った。

本当はロビーまで行きたかったけど、泣きそうだからそこで見送った。

パタン・・・とドアが閉まった途端、涙が次々と流れた。

向田さんのことは好きなのに、なんでこんなに涙が出るのだろう・・・

こんなに辛い別れをしたのは初めてだった。

いつまでたっても涙が止まることは無かった。

自分が決めきれずに、カオルにまで辛い思いをさせてことを心底後悔した。

きつと・・・本当は向田さんよりカオルを好きだと自分で気づいていた・・・

あたしは自分に突きつけられた現実が重すぎて向田さんに逃げたんだ。

確かに憧れていた人だけど、心から自分を見せられるのはカオルだけだと分かっていた。

けど、今、カオルを追いかけに行くことが、どうしてもできなかつた。

昔の彼女に裏切られたと言っていた向田さんを、あたしまで裏切る

ことはできない・・・

そして、カオルが思うようにすべてを捨てて飛び込む勇気がまだ無い。

そんな自分ではこれから何度となくカオルを悲しませてしまう。

それならば・・・

カオルには幸せになって欲しい。

こんな逃げてばかりの自分よりも、もつと相応しい人と。

結局、その日眠れないまま朝を迎えた。

一度寝てしまうと目が腫れると思い、そのまま支度をした。

おかげで次の日の仕事は散々だった。

それでも健吾はなにも言わずにフロアーに徹していてくれるのを見て、

きつとカオルと話をしたことを知ってるんだと思った。

散々な東京出張を追え、北海道に戻った。

一度荷物を置いてから会社に行きたいと言って家まで送ってもらった。

家に入るとテーブルの上に向田さんの手紙があった・・・

「おかえり。材料は買っておくから、真つ直ぐ家に行ってください。
帰るのを楽しみにしています 直樹」

きつと東京に行った日に書いてくれたんだな・・・

現実に戻ってきたような気がした。

トランクを簡単にしまい、着替えて部屋を出ようとした時、ふと昔の携帯が目に入った。

電源を入れてカオルの最後のメッセージを聞いた。

「まゆ？カオルだけど・・・あの・・・会社の子の話は嘘です。ごめん。好きなのはまゆだけだから。連絡待ってる・・・」

（もっと早く聞いていたら少しは変わったのかな・・・）

そう思いながら携帯の画面を黙って見た。

メールが一件きていた。

開くとそれもカオルからだった。

日付があ最後の最後に逢った日の、たぶん別れてすぐくらいの時間だった。

<大好きです。別れたら連絡ください。もう一回やりたいから（ハ
^ ^ル）>

そのメールを見て、ちよつと笑った。
最後の顔文字が憎らしくて……

これから家を出たら、この携帯は解約しよう……
そう思いながら最後に一通だけカオルに返信をした。

<何千、何万というネットをしている人の中でカオルに会えたことは奇跡に

近いと思うから…… またいつか会えるような気がします。

その時、お互いフリーなら一回くらい付き合っね。いままでありがとう>

よくよく考えれば、物凄い奇跡に近いことだとあらためて感じた。
一番初めにチャットをしたあの日、あの時間、あのサイト……
いろんな偶然の中でカオルに会えた。

なんとなく…… また会えるような気がした。

それは出張で健吾がカオルに会うからついていく…… そんなことじやなく、

まったく予期せぬ偶然の中会えるような……

携帯をバックにしまい、会社に行く前に携帯ショップに寄った。

これで本当に終わりなんだな……

「解約したいのですが・・・」そう言って順番を待った。自分の番になり、カウンターに座り携帯を出した。

「はい。こちらですね」そう受付のお姉さんが携帯を持った瞬間にメールを受信した。

「今、メールきましたけど・・・ご覧になりますよね」

「あ・・・すみません」そう言って携帯を受け取り画面を開いた。

カオルからのメールだった。

相変わらずタイトルを書かないメールを開いてみた。

<俺はミラクルを起こす男だよ？きつと会えると思うから、それまで女を磨くように。今度会ったら絶対逃がさない。なんとって俺達は奇跡の出会いだから！>

あと数分遅かったら受信できなかったそのメールを見て

(本当にミラクルな男だな・・・)

そう笑いながら携帯を閉じ、お姉さんに渡した。解約を終え外に出て大きく深呼吸をした。

限りなく奇跡に近いその約束を期待してみようかな・・・
それが現実になったら・・・
その時は・・・

きつともう逃げないだろうな・・・

<FIN>

えびろおぐ

「ネット恋愛」を最後まで読んでいただいた方・・・
ありがとうございます。

思っていた以上のアクセス数に毎日ビックリでした。

以前、デンプンでアップしていた時よりも、ちょっとだけ
コメントを変えてみたりして、自分で久しぶりに書いていて
とても新鮮でした。

この「ネット恋愛」は当初、全45話くらいの予定だったのですが、
思ったよりも長くなってしまったので一旦ここで終わりにして
この話から続く続編があります。

「もつと側にいて」とワンセットに読んでいただけると、
最後には「あ・・・なるほどね」と納得していただけるかな～なんて
思っています。

今後はもう一本、以前の作品をアップした後に、
続編をアップする予定です。

前に読んだことがある人にも新鮮で「あ。ちょっと変わった〜」って
思ってもらえるくらいの内容にしようかなと。

長々とお付き合いいただいて、ありがとうございました。

携帯で見えていただいた方達には大変読みづらい感じだったかもしれませんが、
ごめんなさい。

毎日、アクセスが上がる度に「よし！頑張ろう」って気になりました。

勝手な私の趣味にお付き合いいただいて、申し訳ありません。

あまり更新していませんが、ブログのほうにもコメントなんか残してくれたら、大急ぎで返信なんかしちゃいます。

それはもう・・・大喜びで。

それでは、これからもよろしく願います。

佐藤梨緒 2008/07/31

えびろおぐ(後書き)

お付き合いいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6196e/>

ネット恋愛

2010年10月11日03時09分発行